
テイルズオブエクシリア ~異端の迷い人~

木葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブエクシリア ～異端の迷い人～

【NNコード】

N0784X

【作者名】

木葉

【あらすじ】

普通の高校生の西風海斗は、ある日事故に遭ってしまう。次に目覚ました時、彼は何故かリーゼ・マクシアに居た。彼の存在は、リーゼ・マクシアにとつて異端なのか？ それとも

更新は不定期になる可能性があります。

主人公設定1

『西風 海斗』

(にしかざ かいと)

年齢：17

身長：170

一人称：俺

武器：両刃直剣

この二次創作小説の主人公。とある公立の高校生だつたが、事故に遭い何故かリーゼ・マクシアに飛ばされる。

困つてゐる人を見るとほつとけない程のお人好しで、よく厄介事に巻き込まれる。運動神経は可もなく不可もなく普通。

戦い方は剣士タイプ。速さはジユードより少し遅い。

特性は『連撃』。技を繰り出した後に追加で攻撃する。

固有サポートは『見切り』。相手の動きの予測や弱点を突く。

主人公設定1（後書き）

術技は別のページでまとめる予定です。

術技説明 ↗ 基本編 ↗ (前書き)

主人公が初期段階から使用する術技です。

術技説明 ～基本編～

『武身技』

- ・瞬突

手に持つた剣の柄で敵を突く。

- ・魔神剣

剣を振り抜き地を這う衝撃波を飛ばす。

- ・瞬迅剣

素早く突進しながら行つ突き攻撃。

- ・虎牙破斬

飛び上がりながら斬り上げ、落下しながら斬り落とす。

- ・真空破斬

高速で振り抜き鎌鼬で斬り裂く。

『昇華技』

- ・瞬牙突

瞬突から昇華。

瞬突で突いた後、刃で突き刺す。

- ・魔神剣・双牙

魔神剣から昇華。

2発同時に魔神剣を飛ばす。

- ・瞬迅回帰

瞬迅剣から昇華。

瞬迅剣で突いた後、後ろに飛び退きながら斬り上げる。

- ・虎牙連斬

虎牙破斬から昇華。

斬り上げてから空中で斬りと蹴りを行い最後に斬り落とす。

- ・龍爪旋空破

真空破斬から昇華。

鎌鼬によって出来た真空の空間に敵を閉じ込めて、さらに真空の刃で斬りつける。

術技説明 ↗ 基本編 ↗ (後書き)
(

基本の技は大体こんな感じです。

第1話 知らない街（前書き）

テイルズオブエクシリアの一次創作に挑戦してみました。
一応原作に沿っていくつもりですが、セリフが抜けていたり原作
に無い事があつたりするので、そこはご了承ください。

第1話 知らない街

「うわあああツツ！？ ひかれた！？ 絶対死んだあつ！？ つて、あれ？」

確かにひかれた筈なのに、起き上がった俺の身体には傷一つ付いていない。

むしろ健康体そのものだ。

なら、ひかれたのは夢だろうか？ と言つ疑問は一瞬で頭から消え去つた。

何故なら、

「うー、ビー？」

さっきまで昼だった筈なのに、今はもう暗くなっているし、街灯は見た事の無いデザインだ。

……ええっと、大丈夫だよな？ 俺。

「名前は西風海斗。17歳。成績は中の上。趣味は読書……うん、記憶は完璧だ」

で、確かに下校途中に変な石を拾つて、それが光つたと思ったたら……

……トライックにひかれたんだよなあ……。

ブルーになりつつも、別に記憶障害になつた訳ではない事が分かつてから、俺はもう一度辺りを見回した。

見た事のない、結構綺麗な街並みだけ、近所にこんな場所は無かつた筈だ。

「おいお前！ 何をしているの？」

「え？」

そんな時、いきなり声を掛けたのは、赤い鎧を着た兵士（？）だった。

……何コレ？　ああ、これがあの有名なコスプレって奴か。ちゃんと剣みたいなものもあるし、結構凝つてんな。

「怪しい服装だな。何者だ？」

怪しい格好の奴に怪しつて言われた！？

「俺のビジが怪しこんだよ？　ちやんと制服着てるだら？」

まあ、公立校では珍しくブレザーだけじゃ。それでもこんな鎧を着た奴よりかは怪しくない筈だ。

と思つてみると、兵士が剣を抜いてきた。

「抵抗しなければ痛い目に遭わずに済むぞ？」

めひやくひやだ！？

しかも何が、こいつが持つてる剣、マジモンっぽいんだがビ？
ひつやあれだ……本当に逃げなことマジで捕まるひじー。

「あ、ああ……分かつたよ、抵抗しない。だから剣を取めてくれよ

数秒間があつてから、兵士が剣を鞘に入れようとした。良かつた、分かつてくれたよつだ。バカめ。

「隙ありつ！」

「何つ！？」

俺は半分鞘に入っていた剣の柄を蹴り上げた。兵士が手を離した瞬間、鞘ごと剣を盗った。

そして、

「じゃあな、一度と会いたくねえけど」

一皿散に逃げ出した。

とにかく、この街みたいな所から出なこと。こんな物騒な所に長居していると、マジで殺られかねないからな。

* * * * *

しばらく走つて十字路のよつな場所に出て、後退りながら後ろを確認する。

「ふう……撒いたかな……。それにしても、俺が何やつたってんだ？」

いきなり剣 確認したら本物だった 抜きやがつて。殺す気か？

しかも走つて思つたけど、どうやらこれは俺の住む街 いや、日本ですらないみたいだ。看板とかいろいろあつたけど、何一つとして日本語で書かれてる物が無かつた。

……ならこれは本当にどこなんだ？

「わッ、と……」「

「あ、すこません」

考えながら歩いていたからか、人とぶつかってしまった。
ぶつかった人を見てみると……な、何て露出度の高い格好で！？
しかもスタイルが良い、綺麗な女性だつた。
……こんな人も世の中には居るんだなあ。

「どうした？ 私の顔に何か付いてるのか？」

「へー？ ああ、いや……そういう訳じゃ……」

身長もあまり変わらない女性が、首を傾げてきた。
何だか現実に居るような人な感じがしないな。

「ふむ、外にはこんな服装もあつたのか？」

「ううん、僕もこの服装を見るのは初めてだよ」

女性の傍らに居た背が低い少年が首を横に振つた。
今さらながら、この2人も見ない服装をしている。むりに女性の方は、腰に剣のような物があつた。

とは言え、さつきの兵士のように問答無用で抜いてくる様子は無い。
い。一安心だ。

多分、普通に話を聞いてくれるだろう。

「あの」

「ジユード、早く海停に行くぞ？ もたもたしている暇は無いのだ
からな」

「あ、そうだね」

ジユードと呼ばれた少年が頭を少し下げて、女性と一緒に歩いてしまつた。

……どうしよう、せっかくの常識人を逃がしてしまつた。

「居たぞ！ あそこだ！」

呆けていると、後ろからそんな声が聞こえてきた。兵士が追い掛けたらしい。さらに、前の通路からも兵士が来ていた。
くつ……どうする。左は建物があるだけで逃げられそうにない。
なら

俺は消去法で、そして偶然にも先ほど2人が姿を消した方の通路へ走り出した。

第1話 知らない街（後書き）

とりあえずこんな感じで進めていきます。

第2話 港の出逢い

2人を追い掛けた訳じゃないが、辿り着いた先は港で、そこに先ほどの2人も居た。

「そこの3人、止まれ！」

そして、2人にほとんど追いついのと同時に、後ろからそんな声が聞こえた。

3人つて……俺と、まさかこの2人だらうか？

「ん？ お前は先ほどの……。お前も追われていたのか？」

「……ども

やつぱり、この2人も追われていたらしい。

「タリム医学校の、ジユード先生？」

「エデさんー？」

そして、追い掛けてきた兵士の一人と、ジユードと呼ばれた黒服の少年は顔見知りらしい。

医学校で先生つて……凄いな！？

「まさか、先生が要逮捕人だつたなんて」

「エデさん、何が起きてるの？」

「ジユード・マティス、逮捕状が出ている。その女と、その怪しい服装の男もだ」

また怪しいつて言われた！？

「…お前らの方が数十倍怪しつての…」

「軍特法によつて応戦許可も出でている。抵抗はしないでください」「そんな……確かに迷惑掛けるような事はしたかもしれないけど、重罪だなんて！」

「この2人、何したんだろ？　話は見えないけど、何かヤバげな事やらかしたのか？」

と言うか、俺に至つては何も悪い事なんかしてないんだけど……。強いて言うなら剣を盗つた事だろ？　でもあれは正当防衛で許される範囲内だよな、な？

「ジユード、私はここで捕まる訳にはいかない。抵抗させてもらひう」

女性が剣を抜くと、エーテと呼ばれた人が頷いた。

「応戦意思を確認。攻撃する」

兵士が身構え、1人の兵士の杖のような物が赤く光り、炎の球が飛び出した。女性とジユードが避けると、何かの売店みたいな所に命中した。

その途端、集まつっていた野次馬が四散して行つた。
てかあの炎は何!?　某ゲームの初級単体魔法ですか!?
と、その時、船の方から汽笛が鳴り響いた。

「ジユード、世話になつたな」

そう言い残して、女性は船に走つて行つた。ジユードの方は、女性を見送るだけだ。仲間じやなかつたのか、この2人。

「いいのか？ あの人行つちまつぜ？」

「僕は……」

「ジューード先生、抵抗すれば罪が重くなるだけですよ？」

ジューードが悩んでいる間に、既に兵士が間近に迫っていた。ヤバい、俺も逃げないと。と思つた瞬間、コートを着た背の高い男性が兵士を殴り飛ばしていった。

また訳分からぬ状況になつたなあ……。

「連れが行つちまつけどいいのか？」

「でも……」

「あー、んな悩んでる場合かよー 追われてるのに止まるのは、捕まえてください」と言つてゐるようなもんだぞー。」

ハッキリしない態度にいつい怒鳴つてしまつた。だつて、早くしないと逃げられなくなりそつだし。

「そーそー、そここの少年の言つ通りだ。君は既にフランク犯罪者。捕まつたら極刑だぜ？」

「そんな……！？」

「ほら、悩んでる時間ねえぞ。また兵士が来た」

俺は言つと船に向かつて走り出した。こうなつたら船に乗らう。後の事はそれから。まだ頑張れば乗れる距離だ。

ジューードと男性も走り出したみたいで、背後から声が聞こえた。

「つて、わっ！？」

「お二人さん、舌噛みたくなかったら喋るなよ」

男性は俺とジューードを抱えて、高く積まれた積み荷を足場に、船

に向かつて飛翔した。

「だぶつ！？」「ハハ……ぱつーー？」

「いつててて……」

船に着地した瞬間投げ出されて、転がつて壁に激突してしまった。後頭部が痛い。

「お、おい……あんた達……」

「いやあ、軍が重罪人を追つてゐらじくても、でも、こんなイイ男と女子供が重罪人に見える？」

不審がっていた船員達に、男性がそう言つてしまかしていた。俺とジユードは、同時に男性に近づいた。

「アルヴィンだ。君はジユードって言つたな？」

「あ、うん。」
「リマはミラ」

ジユードは女性を見ながらさつと言つた。あの露出度の高い女性は
ミラと叫びついしこ。

「で、おたくは？」

「俺？」

「そ、見慣れない服装のおたくだ」

知らない奴に名乗りたくないけど、何だか助けられたみたいだし、いろいろ聞くにはやつぱり名乗った方が良いか。

「俺は西風海斗だ」

「ニシカザ？ 変な名前だな」

「いや、名前は海斗の方だ。西風は名字、「見慣れない服装だけど、どこの出身なの？」

「どうして、東京」

「トウキョウ？　どこだそれ？」

「あれ？　通じてないのか？」

「いや、だから、日本の東京だよ」

「うーん、聞いた事無いけど……」

「うむ、私も聞いた事は無いな」

いつの間にかミラも話に加わっていた。
つか、俺はそんな辺境の地に居るのか？

「じゃあ……ここなんだ？」

「おじあんた達、ちよつといいか？」

やつと聞けると思つたのに、今度は船員に話し掛けられてしまつた。

「途中で乗船してきたんだ。身元の確認をさせてくれ

船長に拘束されてから數十分後。やつと解放されて甲板に出る事が出来た。

「うん、太陽の光が眩しい……って太陽無いし！？」

「あの船長、いつまで尋問する気だつたんだ？」

「身分が分からなかつたんだ。仕方なからう？」

「そりゃおたくがだる。後少年だ」「俺はちゃんと身分証あつたっての」「理解されなきや意味ねえよ」

そう、俺の身分証は何故か理解してもらえたかった。まあ、東京とか日本とか理解されなかつた時点でおかしいと思つたけど。

「ア・ジユールなんて、外国だよ……」

甲板に戻ると、一番最初に解放されたジユードが黄雀ていた。

「それにしても、医学生だったとはね」

アルヴィンがそう言いながら空を仰いだ。

「ほり、イル・ファンの夜域が終わるぜ？」

刹那、空が夜から昼間の青色に変わつた。
な、何のマジック！？

「アルヴィンは、何で助けてくれたの？」

「あ、確かに。普通はあんな所で助けないよな」

「それはな、金になりそうだからだ」

「何故私達を助ける事が金になる？」

「比較的ヤバい感じの奴らってのは、大抵金を持つてるからな」

どんな理屈だそれは？

「僕……そんなにお金持つてないよ？」

「生憎、私もだ」

「右に回じ」

財布には300円しか入ってない。

そもそも、ここで日本の貨幣が使えるのか謎だしな。

「アルヴィンって、何の仕事してるの？ 軍みたいだけど、何か違う気がするし」

「お、いい線いつてる。傭兵だよ、オレは」

「傭兵って、『報酬に応じた仕事する』職業？」

よくゲームとかでもあるよな、そういう職業。

「そうそう、『金は貰うけど人助けする仕事』」

何故だろう。めちゃくちゃ胡散臭く聞こえるのは。

「ほう、いい心掛けだな。金は払えんが」

「まあ、無理なら金目の物でもいいぜ？」

渋々といった様子で言ったアルヴィンだったけど、俺達は首を振つた。

「無いよ……あんな状況だつたし

「ニ・アケリアでなら、何か払えるかもしけんがな……

「俺も無いかな」

学生に金田の物なんてある訳無いじゃないか。

「はあ……ボランティアかよ……仕方ねえ……」

アルヴィンは落ち込んだように、海を眺めた。

「あ、聞きたい事があるんだけど」

話が一段落した所で、手を上げながら言った。

「こいつて、どこ？ 何で国？」

「どいつて……今はラ・シュガルとア・ジユールの間。 つて所か」「は？」

聞いた事が無い国名に驚いた。いや、もしかしたら俺が知らないだけで、そんな国もあるのかもしれないけど。

「そう言えば、さつきカイトが言つてたトウキョウとか二ホンとか。やつぱりリーゼ・マクシアには無いよ」

「……リーゼ、何？」

「リーゼ・マクシア。この世界の名称も知らないのか？」

3人から、凄い不審な視線を浴びた。

「ちょ、ちょっと待て」

もしかしたら常識的な事なのかもしれない。俺は携帯を取り出して検索ツールを立ち上げた。

「つて、圈外かよ！」

調べらんないじゃん！？」

「ねえ、それ何？」

「見た事の無い物だな」

「ああ、オレも見た事ないな」

「え？」

今度は3人が聞いてくる番だった。

「携帯電話。知らないのか？」

問い合わせると、全員が頷いた。
これまでの事をまとめると、

「これはリーゼ・マクシアと言つ世界。日本は存在しない。
携帯電話も存在せず。

国はラ・シユガルとア・ジユールの2国。

つまり……薄々感づいてはいたけど、まさか……

「……異世界？」

そう考えれば辻褄は合つ。

あのトラックにひかれた時、何らかの原因でこの世界に来たんだ。
信じられないけど。

「異世界とは……どういう事だ？」

「分からぬ。だって俺は、日本つて国の東京に居た筈なんだ。リ
ーゼ・マクシアなんか知らないよ

「おいおい、マジか？」

「……でも、カイトの服装とか、持ってる携帯電話、身分証を見た

限りじや辻褄は合つよ。信じられないけど

「……でも、カイトの服装とか、持ってる携帯電話、身分証を見た

まさか、異世界に来れるなんて。ゲームとかの世界じゃないか。

「つまり、カイトはこことは違う世界の住人で、何らかの原因でここに来た異世界人。と言つ訳だな？」

「多分、そうなるね」

ミラがまとめて、ジユードが頷いた。

「つと、話は後だな。そもそもイラー＝海停に着くみたいだぜ？」

アルヴィンがそう言つた先には、陸地が見えてきていた。

第2話 港の出逢い（後書き）

いろいろとセリフが抜けてたり違つたりしますが、温かい目で見守つてください。

感想も隨時募集中です。

第3話 依頼と共鳴（前書き）

セリフが…何か違つかもしれないです。
すみません…。

第3話 依頼と共鳴

「外国って言つても、あんまり変わらないんだね」

船から降りた第一声は、ジユードのそれだ。俺には何が変わらないのか分からぬけど、この世界の人人が言つんだ。きっとあまり変わらないんだろうな。

「ア・ジユールつてもこいらへんはな」

「そりなんだ。あ、地図がある。見てくるね」

そう言つて、ジユードは地図を見に行つた。

「何だか、無理してゐみたいだな。ジユード」

「空元氣つてやつだな」

「ふむ、見た目程幼くはなによつだな」

「めちゃくちや他人事みたいに言つてゐるけど、おたくが巻き込んだんじやないか?」

「ジユードが決めた事だからな。私は再三帰れと言つたんだ」

「自分で決めたからミラに当たれない。だから空元氣か……」

自分の行動に後悔しないなら別にいいと思つけどな、俺はみんなでジユードの所に行くと、ミラも地図を見始めた。

「二・アケリアは北か……。アルヴィン、傭兵と言つ事は戦闘には自信があるんだな?」

「そりやあな」

「なら、私に剣を教えてくれないか? 今までは、魔物にすら勝てるか分からぬからな」

「魔物！？」

出てきた単語に、再び驚いてしまった。

「ま、魔物なんか居るのか？」

「え、うん。街の外には大抵は居るよ」

マジか？ サツキの街で不用意に外に出ないで良かつたなあ。

「剣ねえ……むしろオレを雇つてほしいぐらになんだが」

「金は無いぞ？」

「なら、稼ぎながら教えるのはどうだ？」

アルヴィンの説明をまとめると、困つてる人を助けて金を稼ぎつつ、かつ剣の稽古をするらしい。

なるほど。それならリリカの剣も上達するし、アルヴィンも稼げて一石二鳥つて訳か。

そんな訳で、さっそく困つてる人を探してみると、本当に居た。

「海停の近くに魔物が住みついてしまって、危険が広まる前に退治してもらえませんか？」

と言つ話を受け、さっそく依頼をする事になつた。

「ま、その前に、ある程度振れるようになはしくへか」

「つむ、よろしく頼む」

「あのや、アルヴィン。俺にも剣教えてくれないか？」

「え？」

何故かアルヴィンとジューードに驚かれた。

「魔物が普通に居る世界なんだろ？ だつたら、剣を扱えた方が何かと得だろ？」

「得かどうかは分からぬ一けど、じゃあ3人でやるとしますか？」

こうして、剣の基礎をアルヴィンに教えてもらえたのだった。
とりあえず、ミラは剣の振り方だけで、俺は基礎から簡単な技を教わった。

「ま、こんなもんか」

「それじゃ、早速行こうよ」

特訓が終わると、待っていたジユードが促して、俺達はようやく魔物退治に行くのだった。

イラート間道に出てすぐに、みんなが言う魔物の姿を発見した。
少し、というかかなり怖いけど、みんなが武器を出していったから、
俺も剣を抜く。それとほとんど同時に、ポケットに入っていた拾つた石が光り出した。

「わわっ、何これ！？」

「リリアルオープが光ってる？」

俺のと同じように、ジユード、ミラ、アルヴィンの持っていた石
リリアルオープと並んでいた。が光っていた。

「みんなリリアルオープ持つてたのか」

「カイトまで持っているとはな」

ひかれる前に拾った石が、まさかこの世界のアイテムだと……
俺もびっくりだ。

「それなら、^{リンク}共鳴戦闘いつてみるか！」

「リンク？」

問い合わせたのは、俺ではなくジユードだった。

俺だけじゃなくて、ジユードとミラも知らないらしい。

「リリアルオープには仲間の意識を共有する力がある。それを利用すれば^{リンクアーツ}共鳴術^{リンクアーツ}技が発動するって訳だ」

「具体的にどうすれば？」

「ま、百聞は一見に如かずってな。リリアルオープに意識を集中しろ！」

アルヴィンの掛け声で全員がリリアルオープに集中すると、さら
に光が増した。

それが合図となり、戦闘が始まった。

陣形としては、ミラとアルヴィンが特攻を仕掛け、ジユードがそれをサポートしていた。俺は言わずもがな足手まといだよ、悪いからつ！

仕方ないだろ、怖いんだから！

「そもそも^{リンクアーツ}共鳴術^{リンクアーツ}技いけんじやね？」

アルヴィンがそう言つて、ジユードとミラが頷いた。

「行くよ、ミラ！」

「ああ、任せろー！」

ジユードが魔神拳、ミラがウインドランス 術名はなまさつき教え
てもらつた を放ち、タイミングが合つた所で、共鳴リンクアーツ術技が発動
する！

「「切り裂け真空！ 絶風刃！！」」

2人が拳と剣を振り上げ、クロスに重なつた風の刃が、魔物を一
撃で切り裂いていった。

何と言つか、

「めちゃくちゃカッコいいな！ アルヴィン、俺達も出来るのか？」
「共鳴リンク出来るからな。とりあえず、オレはおたくに会わせるぜ？」
「分かつた！」

俺は足手まといにならない程度に前に出て、剣で魔物を斬りつけ
る。

先程の特訓で教わつた魔神剣を放ち、魔物が怯んだ。

「今だ、アルヴィン！」
「おっしゃ！」
「走れ衝撃！ 魔神連牙斬！！」

1発ずつ魔神剣を放ち、トドメに2人で大きな衝撃波を飛ばして、
魔物を消し飛ばした。

出来たけど……さすが共鳴リンク。まさか技名まで重なるとは、少しビ
ックリだ。

ジユードヒリハ、俺とアルヴィンの2組の共鳴術技リンクアーツによって、近
くに居た魔物は全て片付いた。

「凄いな、共鳴！」

「いい感じだな」

「うん、1人じゃないって感じがして嬉しいね」

「良い事言つねえ、ジユード君」

戦いが一段落着いて、武器をしまう。

戦闘中に1人じゃないのが分かるだけでも、こんなに良いものだとは……。ジユードの言葉には賛成だな。

「そーいや、こりら辺になんとかいう村があつたな。行ってみるか？」

魔物と戦いながらしばらく道を進み、一段落着いた所でアルヴィンが突然そんな事を言った。

「頼まれた仕事、まだ終わってないよ？」

「優等生、そんなんじや肩凝るぜ？」

「でも、アルヴィンに払う報酬の為にやつてる仕事だろ？ 投げ出すとアルヴィンが困るんじゃないか？」

俺が言つと、アルヴィンが首を振った。

「依頼つてのは自分のペースでやりやあいいの。そもそも、オレの報酬と2人の剣の指導が目的なんだし、良い仕事があるならそっち優先でいいんだよ」

「そういうものなの？」

「そういうもんだ。ま、雇い主はそっちだ。行くも戻るもおたくら次第つてな」

めひやくひやアバウトだな。まあ、傭兵つてそういうもんのか
もな。

とりあえず、今受けている依頼をこなす事に決定し、魔物が居る
らしいイラート間道を散策した。

「ねえ、あれじゃないかな？ 依頼された魔物つて」

イラート間道の西の方を散策していると、ジユードがそんな事を
言った。

「確かに、ここいらでは見ない魔物のようだな」

「んじや、パパッと片付けるか」

「ああ、サクッと行こうぜ」

みんなが武器を出した瞬間、魔物が襲いかかってきた。

亀のような魔物と……何だあれ、鹿？ まあ、ちょっと強そうな
魔物だな。

「瞬迅剣！」

亀の魔物に高速の突きを放つ。が、

ガキンッ！

「つー？ こいつ、堅いなやつぱり！」

「ガードはオレが崩すぜ！」

アルヴィンが銃で撃ち、亀の堅い甲羅を打ち破る。

「サンキュー、アルヴィン」

俺はガードの崩れた龜に、先ほどと同じように瞬迅剣を放つ。そして思い付いた。

「瞬迅、回帰！」

高速で突きを放ち、後ろに飛びながら斬り上げる一段攻撃。ちなみに、瞬迅剣もアルヴィンから教えてもらっていた。

「へえ、瞬迅剣を改良するなんてな。しかも戦闘中に」

「いや、ただの思い付きだよ」

「ふむ、カイト。今の技で共鳴術^{リンクアーツ}技だ」

「え？」

「遅れるなよ！」

「ちよ、待つてよー？　//リカと強引過ぎー。

「「爆ぜろー 紅蓮回帰ーー！」」

ミラがファイアボールを放つと、俺はそれに続くように瞬迅回帰を放ち、最後に炎の球を投げつけ、魔物を爆破した。

今のは魔物で最後だつたらしく、みんな武器をしまつっていた。

「よし、決まった！」

「意外に戦い慣れているのだな」

「なかなかいいんじゃないのか？」

戦いは慣れてないんだけどな……何か、動きが感覚的に分かると言いますか……。

「じゃあ、報告に行こつか

魔物も倒したし、ジユードの一言で、俺達はイラート海停に向かつた。

「そう言えば、何でカイトはリリアルオーブを持ってたの？」
「ん、これが？」

帰る途中、ジユードに尋ねられた俺は、ポケットからリリアルオーブと呼ばれた石を取り出した。

「道に落ちてたのを拾ったんだ

……その後ひかれたんだよな。

「カイトの世界にもリリアルオーブは存在していたのか？」
「いや、無かつた筈だけど」

今考えてみれば、何で落ちてたんだろう？ リーゼ・マクシアの物が。

「と言つかお前ら、あんまり異世界とか人に言つなんよ？」
「ん、どうしてだ？」

アルヴィンの言葉に、ミラが首を傾げた。

「オレ達はその異世界の証拠となる物を見たから一応は信じられたが、第三者からしてみれば頭おかしいと思われても仕方ないぜ？」
「あ……確かに。普通異世界なんか言われても信じないもんね」

アルヴィンとジューードの話は確かに頷ける。わざわざ説明するのも面倒だしな。

「そんな訳だから、あんまりカイトが異世界から来たとか言わないよつにな？ もちろん、カイトも戻すよつにしろよ？」

「ああ、分かったよ」

そう頷くと同時に、俺達はイリート海停に着いた。

海停で依頼人に報告を終えて一段落着いた矢先に、突然ミラが倒れた。

「ミラ！ どうしたの？」

「大丈夫かよ？」

すぐにジューードが駆け寄り、額に手を当てた。

「熱は……無いね。どんな感じ？」

「……力が入らない」

ミラがそう答えた瞬間、
ぐつううう……。

と、何か鳴った。何の音？ 腹？

「ねえ……ちゃんと？」飯食べてる？」

「つむ、食べた事は無いな」

「……一度も？」

ジユードの問いに、ミラが頷いた。

「一度もって……何、断食してんのか？」

「いや、今までシルフとウンティーネの力があつたから必要無かつたのだ……」

「は？」

「何言つてさの？」

どうやら訳が分かつてないのは俺だけじゃなくてアルヴィンもうしろ。

「栄養を精靈の力で取つてたつて事だよ。でも、これからはちゃんと食べないとダメだよ？」

「そうか……これが空腹という感覚か」

注意するジユードだけど、何故か嬉しそうなミラである。

空腹が嬉しいって……何で？

とにかく、ここで話していくも仕方ないので、海停の宿屋に向かう事になった。

「悪いね、まだ料理人が来てないんだ」

海停の宿屋に行き、料理を食べられるかを聞いてみてその一言だ。ミラが肩を落としたのは見なくて分かる。

……何と言つたか、間が悪いな。

「あの、厨房はお借りできますか？」

「構わないよ。そこの娘がそんな状態だからね。好きに使っていいよ」

「ありがとうございます」

「お

ジユードが飯を作る事になつたみたいだけど、俺も手伝つか。魔物退治は迷惑掛けたし。

「俺も手伝つよ」

「ありがとう、じゃあ、アルヴィンとミラは少し待つてね」

「おう、なるべく早く頼むわ」

「お腹と背中がくつ付くか……なるほど……今なら意味が分かるな

……」

ミラの呟きを聞いた俺とジユードは、本当に早くしないこと思い、急いで厨房に行つた。

数十分後。

出来た料理を2人が待つテーブルに運び、ようやく食事にありつける事が出来た。

それにして驚いたけど、俺の世界とのリーゼ・マクシアの食文化はあまり変わりが無いようだつた。

普通にジャガイモとか人参とかあるし、でもサイダー飯は無いな。あれはさすがにムリ。

「お、美味しいな」

「それだ！」

食事を進めていて、アルヴィンの呟いた言葉ミラが叫んだ。

「食事というのはなかなか楽しい。人は、もつとこういうものを大切にすれば良いのだ」

嬉しそうにそう言い、またガツガツ食べ始めた。

何か、人じやない言い方をするな。

そして、飯を食べ終えたミラは、そのままテーブルに突っ伏して寝てしまった。

「それにしても、ミラって何だか不思議だよな。何者なんだ?」

「おたくが言うのか……まあ、オレも気になつてはいたけどな」

「ミラ……マクスウェルらしいよ

「マクスウェル!? マジかよ……」

は? 何ソレ? と言つ前に、アルヴィンがめちゃくちゃ驚いていた。

「僕も少し話を聞いただけなんだけどね

「そもそも、マクスウェルって何だ?」

「マクスウェルってのは地水火風の大精靈を従えてる 言わば精

靈の主だ」

「……精靈?」

よくファンタジーに出てきそうな単語だ。よくあるのはあれだ、イフリート?

「精靈って言つのは、この世界じや常識なんだけどね

話を聞くと、この世界には精靈が住んでいるらしい。街灯とか火とか、その他諸々を精靈の力 精靈術と言つモノを利用しているらしい。

魔物退治の時に見た、ミラのウインドランスとかファイアボールも精靈術。ジユードの治癒功と言う技も、精靈術の応用らしい。それらを使うことは、ゲート靈力野と言つ所から出るマナを使ひはじい。異世界から来た俺には無さそつだな、ゲート靈力野。

「で、精靈の凄いのが大精靈。それを従えてるのがミラって訳か」「うん、僕はこの目で視たからね。四大精靈をミラが使役してのを」

「そりや、普通じゃない訳だな」

何か……凄い人と一緒に居たんだなあ。言つてみれば芸能人と居る。みたいな感覚だろうか。

凄いなあ。と思うのと同時に、付いてつても大丈夫なんだろうかと、逆に心配になつてしまつた。

「ま、何はともあれ今日はもう休もうぜ? おたぐらも疲れたろ?」

俺がいろいろ悩んでる間に話が進んでいて、とりあえず今日はみんな休む事になつた。

第3話 依頼と共鳴（後書き）

～今回の共鳴術技～

・紅蓮回帰

瞬迅剣 + ファイアボール

カイトとミラの共鳴術技。瞬迅剣で突き、後ろに斬り上がってから炎の玉を投げ飛ばす。

第4話 旅の始まり（前書き）

今回は少し、といつよりかなり短いです。
尺をミスりました（笑）

第4話 旅の始まり

異世界 リーゼ・マクシアへ来てから翌日、慣れない旅先のベッドはとても寝心地が悪かった。

……すんません嘘です。めっちゃ寝心地良かつたです。むしろもう毎日でも良いぐらい。

部屋には既に誰も居なくて、俺は急いで身支度をしてロビーに下りた。

「おはよう、みんな」

「来たか、カイト」

何やら話していた3人だけど、俺の姿を見て話を切り上げていた。

「早速だか2人共、これから事で話がある」

とミラが俺とジユードに向かって言った。

ジユードは少し俯いていたけど、何でだろうか？

「私はこれからニ・アケリアに帰るうと思つてゐる」

「ニ・アケリア？ それって、ミラが住んでる所？」

「うむ、正確には祀られているがな」

祀られるのか！？ タスガ……えっと……精霊の主、だけ。

「そこに帰れば四大を再召喚出来るかもしけん
「マジでマクスウェルなのな……」

アルヴィンはまだ信じられてないのか、そう呟いてた。

「そこで、ジユード、カイト、私と一緒にニ・アケリアに行かないか？」

「え？」

ミラの予想外の提案に、俺とジユードは同時に声を上げていた。

「今のジユードの状況は見から出た餽とうものだが、私の責任でもあるのも、また事実。カイトも特異な身の上だ。ニ・アケリアの者たちに私が口添えをしよう。きっと君達の面倒をみてくれるはずだ」

「意外に考へてんのな」

「お前にまるで他人事と言われたのでな。少し反省してみた」

反省して引き取つてくれるって……懐大きすぎだな。

「……分かった。僕も一緒に行くよ」

「うむ、お前はどうする?」

ジユードの答えに頷いたミラが、俺に尋ねてきた。

「もちろん行くよ。むしろ断る理由が無い」

「そうか、なら決まりだな」

「じゃーいひいろ準備しろよ？ 旅先は危険でいっぱいだからな」

俺達の話がまとまつた所で、アルヴィンがそつと口出した。

「アルヴィンも来るのか？」

「つたり前だろ？ ニ・アケリアに行けば報酬貰えるしな。何より、

お前ら2人に剣教える約束だしな

「「ああ、なるほど」」

何故かミラも納得していた。あんたが言つたんじゃなかつたのか?
? そんなツッコミはさて置き、アルヴィンの言つた通りに準備をしてから出発する事になつた。

「確かにここから北なんだよね? どれくらいで着くの?」

「シルフの力で飛んだなら、半日も掛からない距離だな」

「……いや、たと喻えが分からない」

そもそもシルフの力って何だ?

「とにかく北に行けばいいだろ? 途中に休む所がありやあいいがな……」

「ガンガン行こうぜ! つて事だな」

某作戦名を使つてしまつたけど……問題無いよな、多分。
そんな訳で、俺達はイラート海停を出発するのだった。

「しかしまあ、まさかマクスウェル様と旅する事になるとはなあ。
未だに信じらんねーんだけど」

間道を進んでいる時、突然アルヴィンがそう呟いた。

「本當だと思つよ。最初に会つた時、ミラは四大精靈を従えてたか

「」

「四大精霊つて……？」

「火のイフリート、水のウンディーネ、風のシルフ、地のノーム。これが四大元素を司る大精霊なんだ。僕もあの時初めて見たけど、間違いないよ」

名前だけ聞いても、そんなに凄そうには聞こえないけど、多分凄いんだろうなあ。その四大精霊つて。

ちょっと見てみたい。

「お前達、話してないで先に進もうとは思わないのか？」

3人で雑談していたら、前を歩いていたミラが不機嫌そうに言った。

何というか、四大精霊を従える程の凄い人には見えないんだよな。俺には。

「む……カイト、何を笑っている？」

「いや、ミラつて結構普通なんだな、と思つてな」

「？」

心底分からぬと笑つた表情を浮かべられたけど、俺は気にしないで足を進めた。

第5話 果樹園の村（前書き）

更新遅れて申し訳無い（汗）

第5話 果樹園の村

イラート間道を進んでいると、やがて一つの村が見えてきた。

「なんか……甘い匂いがするな」

「うん、果物が沢山あるみたいだね」

村に入つてすぐに鼻に付いたのが、美味しそうな甘い匂いだ。ジユードの言つとおり、村のいたる所に果物らしき物がある。

「酒の匂いもするな。果樹園でもやつてるんじゃないかな？」

アルヴィンがそう感想をもらすと、村の住人であろう、老婆が俺たちに気付いて近寄つて来た。

「こんな村にお客さんとは珍しいの」

「お婆さん、村の人？」

「村長をやつります」

なんともまあ、優しそうな村長さんだった。

……いきなり斬り掛かつてくるよつは何千倍もマシだな。

「ニ・アケリアへ行く道は、じつちであつているか?」

リリがそう尋ねると、村長さんは何故か首を傾げた。
まさか、道間違つてたのか?

「ニ・アケリアですか……懐かしい名ですな……」

「懐かしい?」

まさか、ニ・アケリア既に無くなつた街。この村の名前なのか！？

「忘れられた村の名前じゃからの。私も前に、キジル海灘の先にあるとしか聞いた事がないものでして……」

「そんな辺境の土地なのか……ニ・アケリアって……。なあ、今日はこの村で休んでかない？」

体力的に、今からその……キジル海灘だっけ？ そこに行くのはしんどい。

戦闘は足引つ張つてぱつかりだけだせ……。

「オレも賛成。休まないと足が死ぬつての」

「じゃあ、今日はここで休むことにしようよ。ね、ミラフ？」

「私も歩き疲れたからな。そつじよう」

満場一致で、今夜はここ、ハ・ミルで休む事になった。
話を聞いていた村長さんが、この村には無いから私の家を使ってください。とかなり親切な事を言つてくれたので、俺達はそれに甘んじる事にした。

その途中。

「いい匂いの正体はナップルの実だったのか。甘酸っぱくて美味しいんだよね」

ジュードが木に生つた果実を見ながらさう言つた。

「じゅる……そうなのか？」

「ちょうど今が食べ頃つて感じだな」

「じゅるる……ちやんと美味しいんだわつな……」「確かに、美味そだよな……つて//リハルさんー? パタレが! パタレが凄い事に!…?」

話を聞いていたら、//リハの口からパタレが凄い量出ていた。

「うわ……本当だ。大丈夫、//リハ?」「じゅるる……なぜか……じゅるる……止まらない……」「食に目覚めたみたい……だね」

いや、目覚めたとかそんなレベルなのか、これは? ビリヤフた
べりこんな量のパタレが……?

「盗み食いはすんなよ? 追われる理由が増えちまつからな

今にもナップルに食いつきそうな//リハに、アルヴィンが小声で忠告するのだった。

* * * * *

村長さんの家で一晩過ごして翌日。

朝早くから俺は、素振りをしていた。

昨日の俺は、戦いではほとんど役に立っていなかった。攻撃のほとんどは共鳴^{リンクアーツ}術技だつたし。

そう言えば、同じ学生の箸のジユードはなんであんなにも戦い慣れてんだろうか？ もしかして、この世界の学生は、魔物と戦うのが常識なんだろ？

「ねえ、ミラ、聞いてもいい？」

「ううと考えてこると、後ろからジユードの声がした。ビリやり近づけ」ミラが囁く。

「黒匣シンって何？」ビリ・イル・ファンにあつた兵器を壊さうとするの？」

「……あれば人が手にしてはいけないモノだからだ」

少し間があつてから、ミラが答えた。
ついで、これ、完全に盗み聞きだよな……。

「どうして？」

「説明する必要性を感じないな」

「うわあ……ぱり切り捨てたな、ミラ。」

「……信用されてないんだね」

「もうではない。……そうだな、例えば赤子が刃物を手に遊んでいたら、どうする？」

「え……取り上げるんじゃないかな？」

質問の意味が分からないと呟いたように、ジユードは首を傾げながらそう答えると、ミラは「どうして？」とさらに問い合わせていた。俺も、ミラの考えが分からなかつた。黒匣シンとぱり刃器が何なのか知らないからな、俺は。

「カイトか？ こんな所で何やつてんだ？」

「！？」

いきなり背後から話しかけられて振り向くと、そこに居たのはアルヴィンだった。

アルヴィンは俺に近付いてくると、話していた2人に気付いた。

「なるほど、盗み聞きつてヤツか？」

「いや、悪氣があつた訳じゃねーよ……」

「聞いちまつたら悪氣があるうとなかろうと同じだつて」

確かに……」もつともだ。

聞いた内容は忘れる事にしよう。どうせ聞いても分からない内容だつたしな。

そうしていると、何だか村の入口の方が騒がしくなつてきている事に気が付いた。

赤い鎧に身を包んだ兵士と、村人が対峙していた。

「ありや あ軍の兵士だな」

「軍？」

「とにかく、2人と合流するぞ」

アルヴィンが言つて、2人の下に走り出した。俺も急いで後を追う。

「これ以上のんびりしてる訳にはいかなくなつたな」「やつぱり、僕達を追いかけて来たんだよね？」「国外捜査には早すぎる気もするけどな」「何かやばい雰囲気だけど？」

「つむ、早く」の村から出るとこひづ

頷いて、俺達は走り出した。

村の西側にある道からキジル海灘に行く事が出来るらしいけど、俺達が向かった時には、既に兵士が道を塞いでいた。

「どうする？ 正面突破行くか？」

「そうだな。仲間を呼ばれる前に片付けよっ

ええっ！？ 「冗談で言つたのに本気にされたよ！？」

「短い作戦会議だこと……」

ミラが立ち上がった所で、俺は背後から誰か来ないか確認するために後ろを向いた。

誰も居ないと思つていたそこには、ぬいぐるみを両腕に抱えた少女が居た。

「あ、あの……なに、してるん、ですか？」

「あそこに居る邪魔な兵士をどうするか考えていたところだ

「ちょ、ミラ、子供に向言つてんだ！？」

直球にも程がある！

でも、少女は何食わぬ表情で、兵士たちに視線を向けて言つた。

「の人たちが、邪魔なんですね？」

何だるづ……一瞬この子が黒く見えたよ……。

少女がぬいぐるみに視線を送ると、ボヨン。目を開じていた筈のぬいぐるみが目を開け、さらに動いて宙を飛び始めた。

「スゴイな、リーゼ・マクシア……。まさかぬいぐるみまでもが動く出するとは。」

そのぬいぐるみは、空を飛んで兵士達の方へ。当然驚いている。つてあれ？　ぬいぐるみが動くのは常識じゃないのか？

「なんであるぬいぐるみ、動いてるの？」

「この世界じゃ普通じゃないのか？」

「んな訳ねえだろ」

ジューードとアルヴィンが驚いてるから、常識では無かつたらしい。

……ならあれは何？

「ルルでなこをじておる？」

みんなで戸惑つてこると、団体の「カイおつせんがやつてきた。

「これ娘っ子。小屋から出てはならんといの！」

おっさんガ少女にやつてしまふと、少女は何故か俺の後ろに姿を隠した。

「お、おい……」

「ちい、ラ・シユガルもんめ。勝手な真似を」

俺の後ろに隠れた少女を一瞥してから、おっさんは兵士の方へと行つた。

その隙に、少女は広場の方に走つてしまつた。俺はその後ろ姿をずっと眺めていた。

何で俺の後ろに隠れたんだろう？ あのあつさんが原因か？ 考えていると、おっさんも少女と同じ道を走って行った。

「カイト！ 置いてくぞ！」

「！？ ああ、今行く！」

いつの間にか兵士が倒されていて、みんなが先に行っていた。俺はもう一度少女が逃げて行つた道を振り返つてから、みんなの後を追つた。

第5話 果樹園の村（後書き）

次回はあの尻尾を付けた人が出るとか出ないとか？
共鳴術技もいくつか出す予定です。

第6話 精霊を祀る村（前書き）

戦いつて難しい……いや、たんに下手過ぎるだけですけどね。台詞が無かつたり変だつたりするのは、どうか生温かくスルーしてください……。

第6話 精霊を祀る村

ハ・ミルから出た俺達は、ラ・シユガルの兵に感ずかれないよう
に、すぐにキジル海灘かいばくへと向かつた。

キジル海灘に入ると景色は一転。今まで山の中の景色だったの
に、一気に海みたいな景色に変わっていた。

「……」を越えれば二・アケリアか。連中も追つて来てないみたいだ
し、もう急ぐ必要は無くなつたんじゃないか?」

後ろを見ながら言ったアルヴィンに、俺は頷いた。

戦闘で足を引っ張つてる俺が言うのもなんだけど……あのペース
でここを抜けるのはしんどい……。実際、何度か置いて行かれそう
になつたし……。ジユードが気が付いてくれるまで、俺は半べソ搔
きながら一心不乱に剣を振り回していた。

うん……これは本格的に戦い方を身につけた方がいいかもしねな
い。いつ元の世界に帰れるか分からないし、いつもジユード達が居
る訳でもない。自分の身ぐらい自分で守れなければ、俺はきっと簡
単に死んでしまうだろうから。

「村の人達……大丈夫かな？　せつかくよくしてくれてたのに」

浮かない表情で呟いたジユードの言葉にハッとした。

そうだよな……見ず知らずの俺達を泊めてくれたつてのに、俺達
はその恩を仇で返すような行動をとつたからな。

だけど、そう考えていたのは俺とジユードだけだったらしく、ア
ルヴィンはラ・シユガル兵が居たから仕方が無い。ミラはそれが村
人たちの決めた事だと言った。

「確かに2人の言い分は分かるんだけどな……」

「そうだよ。僕らを守ってくれたのかも知れないし、そんな言い方しなくても……」

「……それなら、2人はハ・ミルに戻るといい」

少し間があつてから、ミラから出た言葉は、そんなものだった。

「少しの間だったが世話になつたな」と言って、俺達を残して歩き出した。

「どうしてやうなの！？』

俺はミラの態度に絶句していたけど、ジューードは怒ったように声を張り上げていた。

だけど、振り返るミラは、いつもの様子だった。

「もつと感傷的になつてほしいのか？ それは難しいな。ほら、君達もよく言つだらう？『感傷に浸つてる暇は無い』とな」

「……それは、使命があるから？」

「そうだ」

ジューードの問い掛けに、ミラは短く答えて頷いた。

「やるべき事の為には、感傷的になっちゃ駄目なの？」

「人は感傷的になつてもやるべき事をなせるものなのか？」

「わからないよ、そんなの……やってみないと……」

ジューードが俯いてそう答えると、「なりやつてみるとこ」と、

ミラがそう言った。

「いったいどういう事だらう？」

「君のなすべき事をそのままやつてみればいい。それで、答えが出るかもしれないからな」

「僕の、なすべき事……」

「おまえ、どうしてここにいた？」

俺のなすべき事は……やっぱり『元の世界に帰る事』だよな。

卷之三

「一歩も前に進まぬまま、いつの間にか、彼は死んでしまった。」

「そ、うか」

俺がそう言うと、ミラは先に行つた。

「なすべき事、か……アルヴィンは何かあるのか？」
「おっと……そこでオレに振るのな」

この間にかジューードと肩を組んでいたアルヴィンが少し驚いた
ように言った。

「あるのか?」「ナイシヨだ」「何、それ……」「だつて、オレが『ある』って言つたら、優等生がまた迷つひやつだろ?」

もう既に迷つてゐる氣がするんだけど？

「まあ、俺が言える立場じゃないけどね。見つけるのはやつくりで
もいいんじゃないかな？ まずは二・アケリアだ」

まだ悩むように俯いていたジューードは、小さく頷いた。

* * * * *

先に進んだミラを追い掛け合流して、さらに進んでいくと、やがて開けた場所に出た。奥の方には大きな滝が見えた。

「そういうや、ニ・アケリアってどんな場所なんだ？」

「あ、それ僕も気になる。いい所なの？」

「私は気に入っているよ。瞑想すると力が研ぎ澄まされる気がする。そんな所だ」

瞑想……？　この人、まさか普段からそんな事してるのか？

「ちょっと休憩しよーぜ？　岩場ばつか足痛え」

急にアルヴィンがそう言い出した。

「到着してから休めばいいだろ？？」

「そう言つなつて。ニ・アケリアは逃げやしないぜ？」

アルヴィンはそう言いながら、俺の肩に腕を回してきた。

「ほら、カイトも疲れてるだろ？」

「うう……まあ、少しな」

あまり戦闘で役に立つてないから、俺から疲れたと言つのは、正直なところかなり抵抗があった。

けど、そんな俺の意思を無視してアルヴィンに言われた。そんなに疲れたように見えたのかな？

「そうだね、少し休もうか」

苦笑いを浮かべたジユードが言つて、ミラも渋々頷いた。

休憩に入つて、ミラは一人で滝まで行つた。ジユードとアルヴィンは2人で何やら雑談。

そんな中、俺は一人でこの透き通つた綺麗な海を、写メで撮つていた。

せつかく異世界に来たんだから、とポジティブに考えて、俺はこのリーゼ・マクシアの綺麗な景色を記録しようと、さつき思い付いた。

自分の旅の記録つてのもあるし、元の世界に戻れたら幼馴染のあいつに伝授出来るな。とか思つていた。

「っし、綺麗に撮れたな。さすが、画素数だけは立派!」

ピッピッと操作して、キジル海滝の綺麗な景色を保存する。
もう少し早く思い付いていれば、ハ・ミルの景色も撮れたのに…
…。惜しかったなあ。

「つと、忘れる所だつたな。あの大きい滝も撮らないとな」

もう一度カメラを起動して、滝に向ける。
滝にはミラが居た筈だけど……お、居た。
滝を背にするように、ミラは浮いていた。ミラの前にま、もう一人誰か居た。さすがにその人は浮いておりず、岩場に居るけど。
さすが精靈の主。苗も浮けるのか。

「……って違うだろッ！？」

思わずノリツッコミ。

そうだ、あの光景を見てゆっくりなんかしてられない。
ミラは明らかに拘束されていた。

「ジユード！ アルヴィン！ 大変がミラな事に！？」

「ど、どうしたの、カイト？」

「何言つてゐるか分かんねえよ。とりあえず落ち着け」

スーサースーハーと何度も深呼吸をして、落ち着いた所でジードが口を開いた。

「落ち着いた？ ミラがどうしたの？」

「拘束されて大変な事に」

「……」「」

やつと伝えられた内容に、2人は驚愕していた。

「それを早く言え！」

「わ、悪い……」

「とにかく、助けに行こう！」

ジユードも少し慌てた様子で、俺達にそう言つた。

ミラの下に行くと、やはつミラは拘束されていた。

そして、多分それをやつてているのは……何だあの人？　スタイルはミラ並に良くて、ミラ並に露出度の高い服を着ている。この世界の女性はみんな格好なのかな？

そして最大の謎は、女性の腰よりも少し下辺りから伸びている何あれ、尻尾？

その女性は、駆け付けた俺達に気付いて、こちらを向いた。

「今はこの娘にじ執心なのかしら？」

何の事だ？

視線を追うと、その言葉が向けられたのがアルヴィンだと分かった。

「放してくれよ。彼女、大事な人なんだ」

ええっ！？　アルヴィンとミラ、いつの間にそんな関係に！？

「いや……ただ単に雇い主つて事だと思つよ？」

何を考えていたのかジューードには分かつたらしく、少し呆れた様子でそう言つてきた。

なんだ、ビックリしたじやないかアルヴィン。

それにしてどうするか。ミラを拘束できるような人と正面から戦つたら、……高確率で俺は死ぬよな……。

「誰の差し金だ？」

「さあ、誰でしょうね？」

女性は会話する気は無いらしいへ、拘束をさらに強めていた。

(アルヴィン、あれ、撃てる?)

突然、ジユードが小声でそんな事を言っていた。その視線の先には、崖の途中にあつた、不自然な出っ張りだった。

(どうする気だ?)

(僕の予想が正しければ、あれは魔物だよ)

(魔物撃つてどうすんだよ? 余計にややこしくならねえ?)

(大丈夫。少しでもあの人の気を逸らせればいいから)

(なるほどな。分かつたぜ)

頷いたアルヴィンが、銃に弾を入れる。

「何をする気?」

「あなたには関係無いんじやないか?」

少しでもアルヴィンから注意を逸らさうとして俺が言つと、女性は俺を見て不思議そうな表情をした。

その時、アルヴィンが崖の出っ張り 魔物に向かつて発砲する。それに驚いた魔物は崖から真っ逆さまに落下して、起き上がるど同時に女性の居た岩場に突進した。そのまま女性は水の中に落ちて行つた。

落ちたのが見えたから、俺は考えるよりも早く、その方向に走り出していた。

「カイトー」
「!?」

だけど、先程の魔物が俺の行く手を塞いだ。
……めちゃくちゃ怒りますね、この魔物。

「とか思つてる場合じやないか……」

仕方なく後退してみんなの所に戻る。

みんなは既に武器を構えていたから、俺も剣を抜いた。
魔物は貝というか……やっぱりよく分からぬ。とにかく堅そうな甲羅をもつていて、そこから長い触手のようなものが伸びている。
あの甲羅じや……さすがのアルヴィンでも破るのは難しそうだ。

「カイト、危ないよ！」

「あ、『めん！』

考え方をしているとジューードのそんな声が聞こえて、自分に向かってくる魔物に気付いた。気付けたのが早かったから、俺は難なく避ける事ができた。

「呆けているな、死ぬぞ！」

「『ごめん！』

ミラにも怒られて、俺はようやく戦いに集中する。

予想通り、相手の殻は堅く、アルヴィン以外の攻撃はあまり効かないようだった。

「魔神剣！ もいつちょ、双牙！」

アルヴィンに教えてもらつた技第1号の魔神剣。その思いつきで追加した技、その名も 魔神剣・双牙。魔神剣を放つた後に、

続けて同時に、2発衝撃波を飛ばす技だ。いや、名前は何かどつかで聞いた事がある気がするからオリジナル技じゃないんだけどさ。

だけど、それも魔物に弾かれて上手くダメージは通らない。

「風よ駆れ、花散らす如く！ アリーヴェ『デルチ！』

ミラが発動させた精霊術は、魔物の真下から突風で巻き上げるものだった。高く舞い上がった魔物は背中から落なし、堅い殻の中の言つてみれば弱点が丸見えになつた。

「やるぞカイト！」

「分かつた！」

「一閃喰らわす！ 閃塵瞬牙！－！」

アルヴィンが撃ちだした衝撃波が敵に当たる直前、俺はそれに向かって瞬迅剣を繰り出した。衝撃波の威力を上乗せした瞬迅剣は、敵を貫く！

『グオオオオオ……』

だけど、それだけでは魔物は倒れる事は無かつた。

「次はこれだ！ 決めるぞジューード！」

「うん！」

「燃え尽くせ！ 炎穿陣！－！」

2人を中心にして、爆発が起きた。範囲はそれほど広くはなかつたけど、身動きの取れなかつた魔物相手には関係無かつた。つまり、弾け飛んだ。もちろん魔物が、燃え尽くすどころか跡形も無く爆ぜた。

「ふう……む、終わった……」

魔物が消え去った後、俺はすぐに地面に座り込んだ。
やっぱり慣れないな……剣持つて戦うのは。
ってそうだ。あの人は！？

「お前達、何を考えているんだ？」

立ち上がってすぐ、ミラのそんな声が聞こえてきた。

「まあ、そんな怒りなさんなって。ジューーはおたくを助けたかつ
たんだからよ」

「それでも、あの魔物がお前達に襲いかかるとは思わなかつたのか
？」

確かに、今思えばその可能性は否定できない。俺達の方に來てい
た場合、ジューーはどうしたんだ？

「それでもよかつたんだ」

「は？ お前、俺達が襲われても良かつたのかよ！？」

「そうすれば、あの位置ならアルヴィンは死角に居たからね

その言葉を聞いて唖然。

まさかここまで考えていたとは……俺の方が年上だつてのになあ
。

「あの短時間でそこまで考えていたのか
「すげーな」

ミラとアルヴィンも驚いている。

「つと、そうだ。水に落ちた人の人、大丈夫なのかな？」
「ここら辺なら1人で大丈夫と思い、俺は1人で様子を見に行くことにした。」

「落ちたのは……確かにこら辺だつたよな」

透き通った水の中を見てみても、人の姿は見えない。まさか、あ
のまま沈んだのか？ やっぱり戦うより先に助けに行つた方が良か
つたかもしれない。

「……でも、何でミラを狙つたんだ？」

ふと頭を過ぎつたのは、ハ・米尔で言つていた黒匣だ。
壊そうとしていたらしいから、それ絡みなのかもしない。
考えていると、ジユードの声が聞こえた。

「……俺が気にする事じやないのかもな……」

小さく呟いてから、俺はみんなの所に戻つた。

* * * * *

みんなの所に戻ると当然ながら怒られた。主にジユードだ。
怒られながら先にキジル海灘を進んで、俺達はようやく一・アケ
リアに到着した。

「なんか、割と普通な所だな？」

「ああ……全然予想と違つな」

もつと普通に精霊みたいなのが居ると思つたのに、言つちや悪
いけど本当に普通な村だ。

「何だ、お前達？ もしかして、私が居る所だからって変な想像を
していたのか？」

「そりやあな。精霊の主様が居るトコとか聞かされたらそう思つた
が普通だつて」

「ああ、俺なんか普通に精霊が見えるのかと……」

「うひ……半透明な精神体みたいな？ つてただの幽靈だそれは！？」

「2人とも……それは非道い気が……」

「何だよ、ジユードだつて思つただろ？」

「う……まあ、少しほね……」

言ひにくそうに俯きながら呟いた。

俺達がそんな話をしていると、ミラが村の入口近くに居た商人に
近付いていた。

「すまない、イバルはどこに居る？」

「巫子のイバルならマクスウェル様を追つて……」

荷を整理していた商人がミラの姿を見た瞬間、止まった。そして

すぐに片膝を地面に着いて崇め始めた。

「マ、マクスウェル様！？『無礼をお許しください！』

「つむ、氣にするな」

商人の声が大きかつたからか、はたまたミラが凄すぎるのか、村人が集まり崇め始めた。

……なんと言つか、この光景は俺の世界じゃ見られない光景だな。

「やっぱ本物なんだな」

「凄いね、ミラ」

「ちょっと疑つてたんだけどな……」

ジユードとアルヴィンは冷静だつた。

これはあれか。ツツコんだら負けつて奴だ。

「精霊の主つて、やっぱり凄いんだな……」

俺の世界で言つて、ミラはどういう存在に当てはまるだろ？
やっぱり神？

「みんな、こつちだ」

村人と話しあつたのか、ミラが俺達を誘導し始める。

「私はこれから、社で四大の再召喚の儀式をするつもりだ。そこで
必要なのは、この村の四方にある世精石だ」

「それを集めるのか？」

「そうだ」

「それなら村人に頼めばいいんじゃないのか？」

「さつきのを見たろう? ここでは巫女以外に私と普段から関わる者が居ないんだ。あれでは話にならない」

言われてみれば、あんな状態の村人に頼み事は無理な気がする。

「だつたら、俺が集めてくるよ」

「うん、僕も」

「そういうのは男の役目だからな」

1人で行く予定だったのに、ジユードとアルヴィンもそう言ってくれた。

「いやいや、ここは俺1人がやるからみんなはここで待っててくれよ!」

俺はみんなの答えを待たずに、1人で走り出した。

* * * * *

「お……終わった……ぜ……?」

四方にある世精石をリラ達の所に持つて行ったのは、あれから30分後だった。

「本当に、一人で持つて来たんだね」

少し呆れたようになりユードが呟いた。

「どうする？ 少し休んで行くか？」

「大丈夫、早く行こう」

俺が言うとミラが頷いて、俺達はミラが居た社に向かう事にした。

第6話 精霊を祀る村（後書き）

共鳴術技出すとか言いながら2つ……。戦闘も下手すぎで」「あん
なさい（汗）

今回の共鳴術技

- ・閃塵瞬牙

瞬迅剣 + ワイドショット

主人公とアルヴィンの共鳴術技。

アルヴィンがワイドショットを撃ち出し、それに彼をぐるりと瞬
迅剣で貫く。

第7話 旅の決意（前書き）

イバルは基本つざつたく思つてしまつけど、そんな嫌いなキャラ
じゃない。そんな感じです（笑）

第7話 旅の決意

「・アケリアから社まで、魔物を倒しながら進んだ。

「この奥だ」

「ここに、ミラは住んでるんだ?」

社を見ながらジユードが言つ。
大きな社だから驚くのも頷ける。

「住んでいる、か。そう考へた事は無いが、そうなるな」
「何も無い所だな。退屈じやないか?」
「私の使命においては何の問題もない」
「いや、さすがに暇だったんじやないか?」
「何の問題もない!」

何故かムキになつて言われた。

中に入つてすぐに、ミラは四大精靈を再召喚させる儀式に取り掛かつた。

床に描かれた円形の魔法陣のようなもの上に世精石を置くと、ミラはその中心に座つた。
そしてミラは、宙にも同じような魔法陣を描いていった。
だけど、世精石はパキン！ と音を立てて崩れた。

「失敗……したのか？」

世精石が割れただけで、四大精靈が現れた様子は全く感じない。

体勢を崩したミラが座り直した。

その時、

「ミラ様！」

誰かが勢いよく入って来て、ミラの前でひざまずいて跪いた。

「……イバルか」

イバル……確かに、村の前で話してた巫子だけ？
女だと思っていたのに……何だ、野郎か。

「ミラ様、心配しました！　これは……四元精来還の儀！？　何故
今このような儀式を！？」

イバルは信じられないようなものを見たように言い、立ち上がり
て辺りを見回した。

「イフリート様！　ウンディーネ様！」

四大の名前を呼ぶが、何の反応も無かつた。

「いつたい……何があったのですか？」

問い合わせるイバルに、ミラはイル・ファンであつた事を話した。
ちなみに、俺もちゃんと聞くのは初めてだ。

ミラはイル・ファンにある黒匣『クルスニクの槍』と冠され
た兵器を破壊しようとした。だけど、破壊する寸前、そのクルスニ
クの槍が発動してしまい、それから四大の力が使えなくなつたらし
い。

「そんな事が……」

「つまり、そのクルスニクの槍つてのが原因で、四大精霊は死んだか捕まつたか。どっちかって訳だな」

「はつ、バカが！ 精霊が ましてや四大精霊様が死ぬものか！ 捕らえられるなんて事も無い！」

思つた事を言つたら、鼻で笑われて全否定された。……ちょっと、これは傷付くなあ。

「精霊は死はない。なら、カイトの言つた通り捕らえられたのかも落ち込んでいた俺をフォローするように、ジユードがそう言つていた。

「人間が四大様を捕らえる事など出来るものか！」
「けど、四大精霊が主の呼び掛けに応えないんだ。あり得ない事でも、他に可能性が無いなら眞実になり得るんだ」

否定し続けるイバルに、ジユードはそう言つた。

「何も無い空間で、卵がひとりでに潰れた場合、その原因は卵の中にある」

「……何言つてんの？」
「カイトは知らないんだつたな。『ハオの卵理論』ってんだ。さすが優等生だな」

「この世界にはそんな理論があつたのか。いや、俺の世界にも似た理論があるかもしれないけど……。」

「ぐぬぬぬ……」

否定出来なくなつた巫子イバルは、唸る事しか出来なくなつた。

「四大を捕らえる程の黒匣だったのか……。あの時、私はマクスウエルの力を失つたのか」

俯いたミラは、いきなり立ち上がつた。そして、イバルも立ち上がる。

「さあ！ 貴様達は去れ！ ここは神聖な場所だぞ！ そして、ミラ様の世話をするのは巫子であるこの俺だ！ 余所者は帰れ！」

途中、白い歯がキラリと眩しく光つた気がした。
ここまで徹底されて言われると、逆に清々しさすら感じるな。

「イバル、お前もだ」

「……は？」

だけど、そのイバルにも帰れとミラが言った。

「そうだな。有り体に言うと、うるさい」

「な……」

効果音で、「ガーン」とでも聞こえてきそうな程に、イバルがショックを受けたのが分かった。

いや、だつてさ、言われ瞬間仰け反つたから。それに、仕えてる人に邪魔と言われたようなものだから、そりやあショックだろ。
この時初めて、俺はイバルに同情したのだった。

言われた通りに社から出ると、イバルは真っ先に（泣きながら）
帰つて行つた。

俺達も村に戻らうとする、ジューードが立ち止まつていた。
アルヴィンは先に帰る事にして、俺は立ち止まつたジューードを見
る。

「どうしたんだ？」

「うん、ちょっとね。カイトは先に戻つてていじよ」

「いや、正直言つて一人で参道はキツい。俺はジューード達みたく強
くないからな」

模擬戦とはいえ、ジューードに勝てる気は全くしない。

「強い、か……。僕は、強くなんてないよ」

呟いたジューードには、憂いが見えた。

「カイトは……元の世界に帰るんだよね？」

「ん？ ああ、そうだな」

「見つかからなかつたら、どうするの？」

「どう……だろうな？ 分かんねーよ」

「そんな……分かんないって……」

俺の答えがそんなに意外だつたのか、ジューードは少し呆れていた。

「実のところ、あんまり考えてないんだよな
「え……？」

「『元の世界に帰る』。そう漠然と思つてゐるけど、どうやつたら帰
れるか分かんないし、いつ帰れるかも分からない」

言葉にしながら、自分でもそれを整理してまとめていく。

「だから帰るまでは、この世界でやれる事をやろうかなって。今思つた
「今…？」

予想通りの反応ありがとひ。ジユードはやっぱり良い奴だな。

「今思つたつて……そんなでいいの？」
「いいんだよ。俺は考えて動くよりも行き当たりばったりだから」「そんな適当な……」
「だからジユードも、思つたよひにやつてみたらどうだ？」
「え？」

いきなり自分の事を言われたからか、ジユードは田を見開いて驚いた。

ちょうどその時、社の扉が開いてミラが出てきた。

「休んだんじゃなかつたのか？」
「それは私の台詞だ。お前達、まだ戻つてなかつたのか？」
「ああ、ちょっと話してた。な、ジユード」
「う、うん……」

バツが悪そうに顔を逸らされた。

「ふむ、ならこれから村の者に君達の事を頼みに行くといひよ」
「あ、ミラ。その話、俺はバスするよ」
「カイトー？」
「どうしてだ？」

2人に問われ 尤も、ジユードは驚いただけだが 僕は真つ
直ぐミラを見た。

「さつきジユードと話してて決めた。この世界に居る間は、僕のしたい事をするつて

「それで？」

「困ってる人の力になりたい。少しでもいいから、人の力になりたいんだ。だから、ミラに付いて行きたい」

「私にか？」

俺の言つた事に、ミラが少し驚いた。

「クルスニクの槍だつけ？ 壊しに行くんだろ？ 足手まといかもしないけど、手伝いたいんだ」

「それが、カイトの『なすべき事』か？」

「……途中でそれも変わるかもしないけどな」

「……分かった。カイト、君のその決意、見させてもらひつとするよ

「ああ、サンキューな」

「さて、ではジユード。行くとしようか」

話は最初に戻り、ミラがジユードにさう言つた。

だけど、ジユードは俯いて何かを言つたそつにしていた。

「どうした？」

「……ミラはどうして強いのかなつて……」

「強い、か。そんな事考えた事も無いな。私にはなすべき事がある。それを完遂する為に行動しているだけだからな」

「でも……今のミラには四大の力は無いんだよ？ ……死んじやうかもしそれない」

「だが、やらねばならない。もつ決めた事だ」

「……やつぱつ、ミリは強じよ……」

ジューードはまた俯いた。

俺は無言でジューードの肩に手を置いた。そして頷く。

「……僕も、行つていいかな？ 一緒に」

その言葉に、ミリはさらに驚いていた。

「君は私に関わった事で普通の生活を失つたのだろう？ 後悔していたのではないか？」

「うん……ホント言うと少し……。でも、後悔したって戻れないしさつきカイトと話してて言われたんだ。『思つたようにやってみる』つて。僕が今思つ事は、今の僕に出来る事……ミリの力になりたい」

ミリが無言で俺を見てきた。そして視線をジューードに移して、クスリと笑つた。

「ジューードはお節介だな。カイトも同じようにな」

「そ、そうかな」

「お節介か、俺？」

まあ……ギジル海灘でおそらく敵であるう人を助けよつとしたから、否定は出来ない。

「全く、私がわざわざ後から出た意味は薄れたな

「そうだったんだ？」

「君達との短い旅で学んだ氣を遣うといつやつだつたんだが……なかなか難しいな」

腕を組んで悩んだ様子だつたけど、すぐにそれは終わった。

「とにかく村に行こ。君達に見つかってしまった以上、急いで発
つ意味は弱くなつたからな」

俺達は頷いて、3人で村に戻る事になつた。

* * * * *

「よ、遅かつたな。ミラも一緒か」

村に戻ると、すぐそこ『アルヴィン』が待つていた。

「身の振り方、決まつたみたいだな」「うん、ミラと一緒に行く事にしたよ」「どういづ心境の変化だよ？ 後悔するんじゃないのか？」

先程の『リカ』と同じような事を言つアルヴィンに、ジユードは首を横に振つて答えた。

「もう決めたんだ。『リカ』の手伝いをするつて
「……あつそ。カイトはどうすんだ？ まさか、お前も行くのか？」

アルヴィンの問いかに、俺はすぐに頷いた。

「まあ、お前らがそう決めたなら、いいんじゃないか」

納得したらしく、小さく頷いた。

そうしていると、ミリガアルヴィンに近寄った。

「アルヴィン。約束の報酬なんだが……」

「ああ、その事なら、村のじこさんが払つていたんだけど」

「村の者が？」

アルヴィンが頷くと、ミリは何かを考えるように腕を組んだ。

「長老か……いらん」とを……」

「まあ、いいじゃん。長老は長老なりにいろいろ考えてんだからさ

ほとんど憶測で言つたけど、ミリはそれに納得してくれたようこそ小さく頷いた。

「しかしあま、待つとけって言われて待つてんのに、一向に来なくてな」

「村に居るんだから、じつちから行つた方が早いよ」

「長老はおそらく集会所に居る筈だ。行つてみよう」

とつあえず、ひづりから出向く事になった。

集会所に入ると、すぐにその長老は見つかった。

ミリに対しても腰が引けていた長老は、「少しでもマクスウェル様の力になれるように」と、村人から集めた金を、アルヴィンに報酬として渡した。

「じゃ、また縁があつたら会おうぜ。」

と、報酬を貰つたアルヴィンは軽い様子で集会所から出て行った。

「なんだか、あっけないね……」

「だな。もう少し惜しんでもいいのにな」

別れるのが辛い訳ではないけど、いろいろと世話になつたしな。
剣も教えてくれたし。

「傭兵とまではああいつものかもしねんな」

さて、一段落といつもんな時だ。また扉が乱暴に開けられて、巫
子のイバルが入つて来た。

「ミラ様！ また、いざこへ赴かれるのですか？」

「ああ。留守を頼む」

「なら自分も一緒にします！ こんどこの誰だか分からん奴らに、
ミラ様のお世話を任せられません！」

どこの誰だかつて……まあ、俺の場合は否定はできない状態だよ
な。異世界から来ました～。なんて言つても、納得してくれる筈は
ない。

「イバル、お前の使命を言つてみる」

「え……自分の使命は、ミラ様のお世話をすることです
「それだけか？」

淡々と言つたミラに、イバルは少したじろいだ。

「……戦えない」・アケリアの者達をお守りする事、です」

「そつだ。お前はもう一つの使命を果たすんだ」

「ですが、こいつらの所為でミラ様は！」

あれ……ミラが四大精靈を失った原因に、何故か俺が含まれてるぞ？

まあ……それは今は置いといて、このままじゃこつまで経つても出発できないな。

「イバル、だつたか？　とりあえず落ち着け」

「貴様は黙つていろ！」

取り付く島も無い。だけビ、俺は諦めないで話しかけ続ける。

「//ミラはお前を信用してゐからそつひつてんだけせ?」

「何ー？」

俺はミラやジユードに話を聞かれないよう、アルヴィンみたいにイバルと肩を組んで集会所の端まで行つた。

「考へてもみるよ。こは小さいかもしれないけどれつきとした村だろ？　村を守るつてのは難しい。それを任されるつてのは凄い事だ」

「な、何が言いたいんだ……？」

「つまりな。ミラは巫子のお前になら安心してこの村を任せられるつて思つてる訳だ。これはかなり信頼されてる証拠だぜ？」

「そ、そつだつたのか……ミラ様はそんなにも俺の事を……」

結構適当な事を言つていたんだけど……言つてみるものだな。

「そんな訳だから。ここで断つたらお前の信用に係わるぞ?」

「そんな訳だから。ここで断つたらお前の信用に係わるぞ?」

そう言つと、イバルは俺の腕を振り切つてミラに向かい合つた。

「ミラ様、自分は村を守るといつ使命を全づしてみせますー。」

「あ、ああ……頼んだ」

さつきまで拒んでいた筈のイバルが自分からそう言つたからなのが、ミラはかなり驚いた様子だった。

「いつたい、何言つたの?」

「ん? ナイショだ」

いきなりの変わりよつに驚いたのはジユードも同じで、耳打ちで聞いてきた。だけど、俺はそれを笑つてしまかした。

「と、とにかく、そろそろ出発するとしよう……」

「ミラ様お気を付けて!—」

何か異様にテンションの上がったイバルに見送られて、俺達は一・アケリアを後にすることになった。

後に、「イバルを持ち上げ過ぎるのは止めてくれ……。何故だか疲れる」と疲れ切った様子のミラに言われたのは、また別のお話。

「どうか、イバルが単純で助かつた。」

* * * * *

（同時刻）

「あの女がマクスウェルか。プレザ、確かに力を失っていたのだな？」

二・アケリアを崖の上から眺めていた男が、ある一点 村を出
ようとしていたミラ達に注目しながら問い合わせた相手は、プレザと
呼ばれた女性だ。

そう、キジル海灘かいじはでミラを襲つた人物である。

「『カギ』もどこかに隠されたとなると、面倒だな」

黒装束に身を包んだ男が呟く。

「あの娘がマクスウェルと知つておれば、ワシも『カギ』のありか
を吐かせたんじゃがの」

次に呟いたのは、ミラ達がハ・ミルで会った大男だ。

「まあいい。今となつては泳がせた方が都合がよからう

「ええ、ラ・シュガルの目は奴らに向けさせ、我らは静かに事を進
めるのが得策です」

「アグリアからの連絡は？」

「失われた『カギ』を新たに作成する動きがある模様です」

「捨て置けんな……」

次々と話が進む中、黒装束の男が大男を一警する。

「ジャオ、例の娘の管理はもういい。『カギ』の件を探れ」「いや、しかし……」

大男 ジャオは言葉を濁した。

「ラ・シュガル兵が去つたなら、お前が直に着く必要も無い」「データが無事なんだから、優先事項が変更になるのは当然ね」「もう……」

プレザと黒装束の男に言われ、ジャオは返す言葉が見当たらなかつた。

ジャオが黙ると、黒装束の男は今度はプレザに言つた。
「プレザ、お前はアグリアと連携し、イル・ファンに潜れ」「あら、マクスウェルはいいの？」

「まだ駒はある。『カギ』のありかも探させる」

黒装束の男が淡々とそう言つた。

「もう一つ、あの見掛けない格好をした男だ。何者だ?」

男がそつ噺く。

「聞けば、『異世界』から来たと」

「『異世界』……だと? 面白い。奴の素性も探れ。我らにとつて、有益な情報が得られるかもしけんからな」

男はそう告げ、ニ・アケリアを一瞥して去つて行った。

* * * * *

ニ・アケリアを出てすぐニ・ミラが立ち止った。

「どうしたの？」

「イル・ファンへ船で行けなかつた場合、どうするか考えていた」

「そつか……海が駄目なら、陸から行くしかないだろ？」

「うーん……陸路になると山脈を越えないとだから、難しいと思うよ」

3人で悩み続ける。

先が思いやられるなあ。とか他人事のようになつたその時、

「なら、サマンガン海停からカラハ・シャール方面じゃないか？」

最近聞き覚えのある声がした。

「「アルヴィン！？」」

ジューードヒリハの声が重なる。何故俺が言わなかつたかと云ひつと、
單にタイミングを逃しただけだ。

ニ・アケリアの方から現れたアルヴィンは、片手を挙げて挨拶を

した。

「信じてたよアルヴィン。きっと戻つて来てくれるって！」

「へえ……オレってばそんなに信頼されちゃつてたのな」

「どうしたの、いったい？」

もう既にニ・アケリアから去つていたと思つていたジユードは、まだ驚いたようにアルヴィンに問い合わせた。

「イバルって言つたか？ あの巫子殿に頼まれたんだよ。それに、仕事に見当たつた以上の報酬を貰うのは、オレの矜持きようじに反する」

言いながら取り出したのは、先ほど長老に貰つていた報酬が入つた袋だった。

「そうか、心強いよ、アルヴィン」

「うん、ありがとう」

「礼なら村人や巫子殿にな。それで、これからのお予定は？」

一段落着いた所で、アルヴィンが切り出した。

これから……クルスニクの槍を壊すんだよな。さつくつ言えば。
まあ……簡単じゃないだろうけど。

「とりあえず、ハ・ミルに向かいラ・シュガルの動向を探る
「まだ居たら、だけどね」
「出来れば居ないで欲しいなあ……」
「弱氣だな、カイトは。ま、行つてみりや分かるだろ」

と言う事で、これから行く場所がハ・ミルに決まり、俺達はすぐにはハ・ミルに向かった。

この旅が、やがて『この世界』を そして、俺の存在 자체を揺るがす事になるとは、俺はまだ知らなかつた。

第7話 旅の決意（後書き）

よつやく次回、あの娘が仲間に！
ちなみに、台詞や場面が曖昧だつたりちよへり違つたりするのは、うろ覚えだつたりするからです。
生温かく見守つてやつてください（汗）

第8話 孤独な少女とぬごぐるみ（前書き）

今回、せとぞの原作と違つと思つます。

……記憶力ないなあ。

第8話 孤独な少女とぬいぐるみ

キジル海灘かいばくからハ・ミルに行くのには、あまり時間は掛からなかつた。同じ道を戻つたのもあつたし、何より俺も強くなつたのが要因だつた。

……すいません嘘です。俺、また足手まといでした。いやでもちちゃんと頑張つてますよ！俺ちゃんと強くなつてますよ！

「足手まといにはなつてない筈ですよーー？」

「えっ、何？ こきなりどうしたのーー？」

「……何でもない」

つい心の声が出てしまつた。

さて、ハ・ミルに着いたはいいけど……まだラ・シュガルの兵は居るんだろうか？

「せういや、四大精霊つてそもそも捕まえられるのか？」

広場に行く途中、いきなりアルヴィンがそつ尋ねた。

「捕まえられるんじゃないのか？」

「だからどうやつて？」

「……牢屋に入れる？」

「そんな事では四大ビヒバヒが微精霊すり捕らえられんよ

でしょうね。

俺のイメージじゃ、精霊つて半透明な精神体みたいな感じだしな。

「四大はマナの塊だ。おそらく、クルスークの槍はマナを吸収、貯蔵する機能があるのだろう」

「マナを貯蔵！？ そんな事が……」

ジユードが驚愕の声を上げていた。

「でなければ、四大が捕まっているこの状況を説明できない」

俺は未だに『マナ』と言つ存在が理解出来ていないから、よく分からなかつた。

「ま、よく分からぬけど、槍を壊せば万事解決だろ？」
「そうだね。そうすれば、四大精霊も助けられるだろ？」

俺とジユードは互いに氣合いを入れ直した。

そうしながら広場に行くと、何やら人集りが出来ていた。
そこでは、この前村を出る時に出会つた少女がうずくまつていて、
その少女に村人が石を投げていた。

「ううっ……」

「ひどい事しないでー！ お願ひだよー！」

考えるよりも先に身体が動いて、俺は少女を庇うように間に立つた。投げられた石が、いくつか身体に当たる。

「つてえ……」「え……？」

俺の呻きに驚いた少女が、俺を見上げてきた。

「怪我、無いのか？」

問い合わせると、少女はそのまま小さく頷いた。
目には涙が浮かんでいる。

「お前らー。こんな小さい子に寄つてたかって非道いじゃないか！」
「うわわー。お前達の所為で、こっちは散々な目に遭つたんじゃ
！」

やつ言つてきたのは、この前泊めてくれたあの優しい村長だった。
あまりの変わりよつて、俺は怒るのを忘れてただ呆然としていた。

「だからって、子供に八つ当たりは無いんじやないか？」

アルヴィンがそう言つた。

そうだよな。どんな理由であれ、こんな小さい子に当たるのよ
くない。

でも……俺達があの時、あんなやつてこの村から出なければ、少
しは違つたのかもしねえ。

「とにかく、余所者は出て行け！」

村長はそういう残して去つて行つた。村人達も、バツが悪そつこ
散つていぐ。

「あ……」

少女も走つて村の西側に行つてしまつた。

「とは言え、ラ・シユガルの動きは探らねばならない」

「悪い、俺ちよつと行つてくる…」

「一言ハリハリ言つて、俺は少女を追いかけた。

村の西側には、小屋が一軒あるだけだ。おやじくやうに居るので
るうと思つて、俺は小屋の扉をノックする。

「あ……出で来ないよな……」

扉には鍵は掛かっていないから、失礼とは思いながらも俺は
中に入った。

しかし、中には誰も居ない。

「……隠れてるのか？　いや、そんな事する意味は……」

中を見回してみると、地下に続く階段を見つけた。

「お邪魔しますよー？」

ちゃんとノックしてから扉を開くと、甘つたるい匂いがしてきた。
匂いに我慢しながら中に入ると、壁に背を向けてづくまつてい
る少女を見つけた。

「えつと……み、見~つけた！」

かくれんぼの台詞を言つと、少女の身体がピクッとき震えた。

「な、何……ですか？」

おれるおれると叫びまつて、少女が振り返って怯えながら呟いた。

「そんな怖がらなくていいよ。俺は君と話がしたいだけだから」

「お話を……ですか？」

「そ、お話をです」

少しづつだけど、少女が警戒を解いてくる気がした。

「まずは自己紹介な。俺は西風海斗。（にじかざかこ）あ、名前は海斗ね」

「カイア……ですか？」

「そうそう」

名前を呼ばれて、俺は頷いた。警戒は解いてくれてる。

しかしどうでもいい事だけど、ジューードやミラ達もそうだけど、

俺の呼び名って何だかカタカナな気がするんだよな。漢字って概念が無いみたいだから仕方ないけど。

「わたしは……エリーゼです……。エリーゼ・ルタス」

「エリーゼか。よろしくな」

「クリと小さく頷いて、エリーゼは腕に抱いたぬいぐるみに視線を移す。

「この子は、友達のティポ、です

「よろしくねー」

「ー?」

こわなり動を出したぞ」のぬごぐるみー

「あ、ああ……よひしべ……」

そう言えども、広場でも叫んでたし、この前村出る時も飛んでた気がする……。何なんだ、ティポって？

「えと……Hリーゼはここに住んでるのか？」

「……はー」

「閉じ込められてもいい」

頷いたHリーゼとは裏腹に、ティポは衝撃的な事を言った。

「村の人いか？」

「違い、ます」

そう言えば、とこの前の事を思い出す。

あの大きなおじさん。あいつ、確かHリーゼの事を気に掛けてたよな。家族か？

「大きいおじさんだが、ここに西郷でつて
「おじさん……？」

やつぱり、あいつが原因なのか？

「おかげで友達とも遊べないー」

「そのおじさんって、家族か何かか？」

そう尋ねると、Hリーゼは力強く首を横に振った。

もしかして、あのおじさんはエリー、ゼを監禁してるのがか？

「あの……怖い顔、します……」

「え……ああ、『じめん』」

監禁。そんな言葉が頭の中に出でてきたからだ。憶測だけだから、何とも言えないけど。

でも、閉じ込められてるし、外では村人に石を投げられてるんだよな。

助けてあげたい。そう思った。

「エリーゼ、俺達と一緒に行かないか?」

だからなのか、いきなりそんな言葉を口走っていた。

「え……?」

「あ、いや……良かつたらでいいんだ」

「……」

俯いて黙ってしまった。ティポも黙った。

いきなり見ず知らずの人に言われたら、そりやこひくなるよな。

「じめん、今の忘れて。じゃ、俺行くから」

これ以上ここに居る訳にはいかないと思った。

ここはエリーゼの場所だから。

だけど、歩き出した時、俺の服の裾をエリーゼが掴んでいた。

「待つて、ください」

「どうした?」

エリー・ゼは何かを言いたそうに、俺を見上げ、また俯いて、それを繰り返した。

「一緒に……行くか？」

助け舟を出すよう指示され、何度も頷かれた。

「じゃあ、俺達は今から仲間だな」

何問

「支那と中國の歴史」

「ヤターニー！」

テイホが声を上げて飛び上かった。エリーゼも嬉しそうに微笑んだ。

「よし、じゃあ俺の仲間の所に行くけど、いいよな？」

「大丈夫だよ

「大丈夫だよ、みんな優しいし、友達になってくれるよ」

不安そうにしたエリーゼをもう一度撫でて、俺達はミリラ達の所に

小屋から出ると、ちゅうじじマークがひびひびて来る所だった。

俺の姿を見つけたジユードが走ってきた。

「カイト! 探したよ」

平謝りしてみると、呆れたように肩を落とした。
そして、俺の後ろに隠れたエリーゼに視線を移した。

「この子……」

「ああ、連れて行く。ほら、自己紹介

「……エリーゼ、です」

「ティポだよー」

やつぱりティポに驚いたジュードも、落ち着いて自己紹介すると、
エリーゼもティポも警戒を弱めていった。

3人で広場に戻ると、ミラとアルヴィンが待っていた。

「ミラ、この子も連れて行く」

「……仕方あるまい」

「いいのかよ？」

渋々といった様子だったけど、ミラは了承してくれた。けど、アルヴィンはそれに驚いていた。

「カイトが私に付いてくる理由は、『自分のやりたい事をやる為』
だからな」

「サンキューな、ミラ」

何も言わずに、ミラは村の出口に歩いて行く。だけどその表情は、
少し笑っていた気がした。

ハ・ミルを出た俺達は、すぐにイラー＝ト海停に向かった。

ここからイル・ファンに行ければ早くて済むんだけど、もちろんそんな甘い事は無く、首都圏全域が封鎖されていて、出ている便はサマンガン海停行きだけだった。

仕方なくその船に乗り、出発した。

「わあーーー！」

甲板から海を見渡してエリーゼとティボははしゃいでいた。俺が隣に行くと、恥ずかしそうに俯きながら言った。

「海……初めて……だから……」

「そんな恥ずかしがらないでいいぜ？　俺だって海見てはしゃぎたくなるし」

「そりなんですか？」

「ああ。俺が住んでた所じゃ、ほとんど海を見る機会は無かつたらな

らな

まあ……港はあつたけど、海水浴する場所では無かつたし、ここまで綺麗に見えないしな。

「カイト、そん……」

「ん？」

「わたしを連れ出してくれて、ありがとうございます

「ありがとねーーー！」

恥ずかしそうに、だけど笑顔でちゃんと俺を見ながらエリーゼが

言った。

そんな表情を見ただけで、良かつたと思えてきた。

「なあエリーゼ」

「はい？」

「呼び捨てでいいよ。あんまりかしこまつたのは苦手だからね」

「……はい、カイト」

微笑みながら雪の上にエリーゼの頭を撫でた。

……何か、俺ダメかも……。無邪気な笑顔って卑怯だ。

撫でていると、向こう側の海を見ているのに気が付いた。

「ほら、あつちにミラが居る。話してみよっ?」

エリーゼも頷いたから、俺達はミラの所に行つた。

「何が見えるのー?」

突然ティポがそう問い合わせたからか、ミラは少し驚いた。
すぐにいつもの様子に戻つて、俺とエリーゼを見る。

「いや、少し考えていただけだ。エリーゼ、お前はこれからどうするんだ?」

「えと……分かりません……」

エリーゼが俺を見てきているのが分かる。

……ほとんど勢いで連れ出したからな。ノープランなんだよね。

「何か分かる事は無いのか?」

「カイト君やジード君、ミラ君、アルヴィン君は友達ー!」

「そういう事ではなくてな。そもそも、ティポは何なんだ?」

「あ、それは俺も気になる」

まるで意思があるよいつて喋るんだ。ただのぬごぐるみな筈がない。

「ティポはティポだよー。そんで、エリーの友達ー！」

「お前と話すのはなかなか難しいな。何故か論点がずれる」「まいいじやん。ティポはティポ。みんな友達つて事だ」「さつすがカイト君。話が分かるねえー」

俺がまとめると、//は呆れたような表情をしていた。

「もう少しで着くみたいだな」

陸が見えてきて、俺はそう言った。

「//君は友達ー！　みんな友達ー！　カイト君はもっと友達ー！」

ティポは宙にグルグルと回りながら言っていた。

そして、何の緊張感も無いまま、俺達はサマンガン海停に到着したのだった。

第8話 孤独な少女とぬごぐるみ（後書き）

次回、あのでっかいおっさんが出でます。
と言つて、何かライトのキャラが定まってない気が……。

第9話 樹海の戦い（前書き）

共鳴術技のネーミングセンスが無さ過ぎただと、今回気付きました
(笑)

第9話 樹海の戦い

サマンガン海停に着いてすぐ、俺達は兵の配置に手を配った。

「思ったより厳重じゃないな」

「でも兵は居るんだから、慎重に行かないとね」

ちなみに、この海停に居る兵の鎧の色は、ライトグリーンのような色だ。各地区で色でも違うんだろうか？

「一時はア・ジュークまで来ていたといふのにな」「もしかしたら、俺達を追つよりも重要な事があつたんじやないか？」

「そつなら好都合だな。気付かれないうちにイル・ファンに行くぞ」

そう言つて、リカとアルヴィンは歩いて行つた。

「ねえ、カイト
「ん？」

俺も2人に続こうとしたが、ジユードに声を掛けられた。

「エリーゼの事だけ……何か考へてるの？」「何かつて？」「まさか、何も考へないで連れだしたの……？」「あはは……その通り……」

しばらく沈黙が流れた。

でも、俺も何も考へてない訳じゃない。ひょっとエリーゼがビリ

したいのかを聞いて、それから決めるつもりだ。その為には、なるべくゆっくり出来る場所の方が都合がいいだろう。

「僕はてっきり、誰かエリーゼを引き取ってくれるよつに頼むのかと思つてたよ……」

「まあ、それも考えなかつた訳じやないんだけどな

「あの……」

ジユードと話してみると、エリーゼがティボを抱いて不安そうにしていた。

「何の話ー？」

「エリーゼのこれからだよ」

「わたしの？」

「そ。エリーゼがこれからビービしたいのか。それはやつぱり、エリーゼも自分で考えないとけないと想つんだ」

俺から連れ出しておいて無責任かもしれないけど、かと言つて俺が強要する事じやないからな。

でも、もしちゃんとエリーゼが決めた事なら、俺は出来る範囲内になるけど、協力は惜しまないつもりだつた。

「わたしは……」

「まあ、ゆつくつ考えればこいつ。とつあえず、今はみんなの所に行ひつ」

「……僕も出来る限りは力になるからね？」

「サンキューな、ジユード」

少し、と言つかかなり呆れた様子だったけど、ジユードも手伝つてくれればかなり気が楽だな。

そう思いながら、俺はエリーゼの手を引いてミラ達の所に向かった。

ミラ達が居たのは、海停の掲示板の前だ。そこに貼つてあったのは、何かの絵だった。文字見たいのが書いてあるけど、あいにく俺には読む事が出来なかつた。

「この手配書……カイトヒジュー、アヒラーハ」

「わあー、3人ともキョーアクー！」

「へえ、手配書ねえ。しつかし全然にてねーな……って手配書！？」

字は読めないし絵は下手くそだつたから、しかもこんな所に貼つてあるとは思えなかつたし、とにかくいろいろな理由から手配書とは思わなかつた。

……ってか、俺何一つ悪い事してないんだよなあ……。

「不幸中の幸いだな。これなら捕まる心配はなさうだ」「笑いを堪えるなっ！」

完全に他人事だと思つて……。ぐらりかと言つて、兵士ぶん殴つたアルヴィンの方が指名手配されててもおかしくないの。

「…………よくないよ

「まあ、自意識の強い年頃にはキツイよな？」

「そうじやなくて。僕はどうでもいいけど、ミラはこんなんじゃないよ

「え、ジユードセーか？」

シックミラ所と書つか……いろいろと間違つてこる気がする。

「うむ、確かによくない」

「//ラさんまで！？」

「です！ カイトもこんなじゅありません！」

「お前もかエリーゼ！？」

「どうしよう、何か意味分からん方向に話が向かっている気がする。

「私が現在の形象を成したのは、この外見が人間の半数 つまり

男性全般に有利だからだ」

「そんな理由だったのか……」

まあ、確かに。とは納得できづらいな、この話。

「だが、//Jの手配書のように非魅力的なじば、基本戦略を見直さねばならない」

「結構生々しい」と考えてんのな……」

「ジユード、正直に答えてくれ。男性視点で見て、私は魅力ある存在だらうか？」

いや、そこジユードに聞きますか！？ ジユードはまだ男性つて言つより男の子と言つか……つまりまだ子供な訳で、その問い合わせは酷じゃないかな。

「えつと、//ラは…………すぐく、ステキだと、思つ」

少し顔を赤らめながら、素直にそう答えていた。

「うん、セクシィー！ ハリーも//ラ君みたいになりたいってー」「ティポ！」

そして、ティップが何か言った。

まあ…… Hリー ゼの歳ならまだ見込みはあるんじゃね？ とか密かに思った。

「自信持つて良いよ、 //」

Hリー ゼ達の会話を聞いて冷静を取り戻したジユードが、 そうフォローしていた。

「具体的には、 ディーラ辺が魅力？」

「そりや、 いい匂いするとか、 ゆれるとか……」

「即答ー？」

しかもいい匂いつて…… へついつてないと分からなくね？ そんな事。

「なるほど。 貴重な意見、 感謝するぞ」

「//はもつと恥じらえー？」

「？ 何故だ？」

心底分からなって表情された！

「いやあ、 ジュード君も男の子だね」

「今のは一般論だからねー」

一般論であんな即答が出来るだろ？

とにかく、 何か見るに堪えなかつたので、 僕は話を中断せた。

ようやく出発、と思つた矢先、海停の入口で変な爺さんご声を掛けられた。

まあ長くなるから要約して話すと、昔々とある部族に魔物の潜在能力を引き出すほどの異能を持つ魔物遣いが居たらしい。そいつは天才では飽き足らず、魔物の靈力野ゲートに手を加えて戦う度に強くなる魔物を造り出そうとした。

そして今から20年前、その魔物は6体完成したらしい。靈力野を爆発的に膨大化させた魔物達は本能のままに未知の精靈術を発動し、各々の体に闘争本能を具現化したような6種の武器 魔装具を生成した。その装備にちなみ、魔物達は『魔装獣』と名付けられた。

しかし、20年前に起きた戦争時に、その魔装獣達は突然の津波で流されてしまった。

だが、魔装獣はまだ現在も生きている。解き放たれた魔装獣は20年の歳月を経て、どれだけ強くなってしまったのか想像も絶するらしい。

だから、もし見掛けたとしても、絶対に戦つてはならないというものだつた。

俺達はその爺さんの教訓を胸に、サマンガン海停を後ににするのだった。

「カイト、要約になつてない気がするんだけど?」

「それに、どこに喋つてたんですか?」

「……気にすんな……」

最後に泣きそつになつた。

* * * * *

サマンガン海停から少し行くと、赤い鎧を着た兵隊が道を塞いでいた。

「ま、当然だな。そんなにうまい話はないって
「どうしよう……」

辺りを見回してみても、他に道はなさそうだった。
いや、あつたとしても塞がれていると考えるのが自然だろうな。

「あつちには何があるのー？」

と、ティポが行つた先には、高台のような場所があつた。

「あつちは樹海なんだ」

「上手く抜けると、カラハ・シャールの街に出られるが……」

「迷う必要は無いな」

ミラはそう言って、樹海の方に進み始めた。

樹海となると、エリーゼが心配だな。

だけど、俺が何かを言つ前に、ジューードが口を開いていた。

「滅多に人は通らないんだ。エリーゼには……」

「こうなる事は、予期できたりう？」

2人は何も言わぬまま、沈黙が続いた。

「あの……わたし、だいじょうぶ、です……だから……」

「ケンカしないでー！ 友達でしょーー！」

エリーゼとティポがその沈黙を破った。

泣きそうな感じではあるけど、エリーゼが自分で言つたんだ。俺が何も言わない訳にはいかない。

「まあ、こぞとなつたら俺とジュークで守ればいいだろ？」

「カイト……」

「2人が納得したんだ。文句はあるまい」

そう結論付けて、ミラはまた先に行つてしまつた。
俺は泣きそつになつてゐるエリーゼの手を引いて、ミラの後を追つた。

* * * * *

樹海の中は想像通り薄暗く、視界は最悪と言つてい。ジメジメしてゐし……やっぱり俺は陽の当たる場所が好きだ。

入つてすぐに、木の上に魔物が居た。身構えるけど、何事も無かつたかのように、魔物は去つて行つた。

「なんだありや？」

「警告かな……これ以上立ち入るなって」「その警告もミラには関係無いみたいだな」

だつて、一人でどんどん進んでつてるし。

「ここから行けるみたいー。早く早くーー」「臆病なのは男性陣だけのよつで……」

ティポに呼ばれて、俺達も進む。

少し進むと、いきなり大きな木のよつな魔物が襲いかかってきた。

「つつ……」

「こいつ、攻撃範囲が広いな。全員がダメージを喰らつちまつー。」

アルヴィンがそう呟くと、後ろで待機していた筈のエリーゼが出てきた。

手には杖みたいなのが握られている。

「エリーゼ、来るなー！」

「お前を庇いながらでは戦えない。邪魔だ！」

俺とミラが言ひ合ひ、エリーゼは逃げよつとしなかつた。

「カイトー！」

「！？」

一瞬、視線を魔物から離したその時、魔物から攻撃を喰らつてしまつた。

後方に吹つ飛ばされて、背中を地面に打ちつける。

「ぐつ……」

「…………」

泣きながら俺に駆け寄ったエリーゼが、手を掲げて何かを発動した。すると、さつきまで激痛が走っていた背中や腹から、途端に痛みが引いた。

「これは……エリーゼがやつたのか……」

「みんな一斉に回復を……？」

「元気出して！　ぼくたちがいるよーー！」

ティポが励まして、俺は立ち上がった。

「一気に叩くぞ！」

「了解！」

「吹っ飛べ！　紅蓮剣！^{くれんけん}！」

炎を纏つた剣で斬り上げ、斬り落としてから空中から炎を投げ飛ばした。炎は着弾した瞬間、爆発する。

「ジユード、俺達も！」

「うん、やるぜー！」

「風よ集い弾けろ！　空縛掌破！^{くうぱくじょうぱ}！」

素早く斬り裂き、真空の刃が敵を囲づ。そして、ジユードが踏み込み掌で思い切り押し飛ばす！

バコッ！　と弾けた空氣もろとも、魔物も消え去った。

「ふう……Hリーゼのおかげで助かってな」

「ああ、まさかこの歳であんな回復術が使えるとはね」

「Hリー・ゼに救われたな

みんなでベタ褒めしていたけど、その本人はまだ泣いていた。

「お前のおかげでみんな助かつたんだ。それに、もう魔物も居ない怖くないよ」

頭を撫でながら言つと、力強く首を横に振られた。
そして、Hリー・ゼの代わりにティイポが言つた。

「仲良くしてよー。友達は仲良くがいいんだよー！」

思わず面食らつてしまつた。

もしかして、樹海に入る前の事を言つてるのか？

「わたし……邪魔にならなによつて、する、から……だから……」

嗚咽を堪えながら、Hリー・ゼがそう言つた。

「だつてさ。Hリー・ゼに免じて許してあげれば？」

「免じるも何も、別に怒つてるつもりは無いんだが……」

「ウソーん。ジユード君とミラ君、もつと仲良しだったもんねー！」

ティイポの言葉に、Hリー・ゼが顔を合わせた。

「……いつの間にやら私が悪者か。ふふ、分かつたよ
「ほら、Hリー・ゼに何か言いたい事あるだろ？」

「だな」

俺がアルヴィンに視線を移すと、何が言いたかったのか分かつた

「うう、アルヴィンはリラリードの肩に腕を回した。

「心配かけちゃったんだね。エリーゼ、ありがとう」

「やつぱり友達は二コ一コ楽しくだねー！」

「//もエリーゼの回復術があれば心強いだろ？」

問い合わせると、//はエリーゼを見て、頷いた。

「そうだな。エリーゼ、これからはアテにするぞ」

そう言つと、エリーゼは頬を赤くして微笑んだ。
これでエリーゼはみんなと打ち解けられたよな。
俺も少し嬉しくなりながら、俺達は先に進む事になつた。

道中、ケムリダケとか言つキノコの被害に遭つた。

「！？ ごふつ！ なんやこれー？」

「（）ほつ！ みんな、大丈夫？」

「田にしみる……催涙性の胞子だな、こいつヤ //も！」

煙り 胞子らしいけど で視界が最悪だつたけど、ようやく
煙りが晴れて、田も回復してきた。

「これ、ケムリダケじゃないかな。田や鼻に入ると……じばく、
涙が止まらない……」

咳をしながらジユードがそう説明した。

確かに、キノコがある。

だけど、それよりも気になる事が一つあった。

「あー、ヒリーゼ。何でくつ付いてるの？」

煙りが晴れて涙も咳も気にしなくなつて氣付いたけど、何故かヒリーゼが正面から抱き付いてきていた。

「「」、「めんなさい……」」

「こやまあ、別にこいいけど」

何か柔らかいなー。とかちょっとビビリてしまつたけど、それがティポと知つて、少し憤りを覚えてしまつた。

……何言つてんだろ、俺……。

「やるねえ、カイト君~」

「……手は出しちゃ駄目だよ?」

「いや! 何か誤解してるぞお前! りー?」

アルヴィンは「ヤーヤーして、ジユードは少し心配そうな眼差しで。
……誤解ですよー?」

とまあ、そんなこんなで、ようやく樹海の出口付近に辿り着くと、入口で見た魔物が俺達を取り囲んできた。

俺達が武器を構えると、出口の方から大きいおっさんが現れた。

「あんたは……」

「大きいおじさん……」

おっさんを見て、エリーゼが驚いていた。

「おひおひ、よう知らせてくれたわ」

いきなり魔物に向かつてそつ言つた。
何だこいつ？

「イバル以外に魔物と会話が出来る奴がいるとはな」

どうやら魔物と話をしていたらしい。
少しカツコいいなあ。とか思つてしまつたのは秘密だ。

「あなたは、ジャオさんですよね？」

「知つてるのか、ジユード？」

「人の話、ちゃんと聞いておひるよ……？」

何故か呆れられた。

「ん？ お前達には名乗つておらん筈だがの」

「ハ・ミルの人達にな。で、どんなご用で？」

「知れた事。さあ、娘つ子、村に戻るつ」

ジャオと言つおっさんが、近付いてきてエリーゼに手を差し伸べた。

「少し田を離したうひこ、まさか村から出でてゐるとはの」。心配したぞ？」

優しい口調で言つけど、エリーゼはティポと一緒に俺の後ろに隠れた。

ジャオは困ったよつて騒つたけど、俺もここつて言いたい事があった。

「あんたがエリーゼを放つておいて、どうなつてると想つてんだよ」

何も答えずに、ジャオは困った表情のままだつた。

「お前はエリーゼとどういう関係なんだ?」

「その子が前に居た場所を知つておる。彼女が育つた場所だ」「そこにエリーゼを帰すのか?」

「//の問い合わせには答えたけど、俺の問い合わせには答えない。

「また……ハ・ミルに閉じ込めるつもりですか?」

「お前達には関係無いわい! まあ、その子を渡してもいいね!」

ちつ……逆ギレかよ!

「また閉じ込めるのが分かつてゐるんだ。渡さねえよ! エリーゼだつて自由になつていいんだ! あんたがどうこうする権利は無い!」

俺が叫ぶと、ぎゅっと後ろで服が摑まれた気がした。

それは、エリーゼも俺達と居たこと、そう言つてゐると思った。

「……仕方あるまい。エリーゼ、わしと一緒に來い!」

大きなハンマーを構えながら、ジャオがエリーゼに叫んだ。

「やだー!」

「嫌、です!」

自分から嫌とエリーゼが言つた。その瞬間、戦いは始まつていた。ジャオは手加減も無く、俺に向かつてハンマーを振り下ろしてきた。

背後にはエリーゼも居るから、簡単には避けられない。悩みながら剣を上に構えると、ズガーン！ 剣が折れるんじゃないかと思う程の衝撃が襲つてきた。

そして、俺は後ろに居たエリーゼと共に吹き飛ばされてしまった。

「がつ……！」

「ううっ……」

吹き飛ばされてる時、とつさにエリーゼを庇つようにしたから、俺は近くにあつた樹に背中を打ち付けた。肺の酸素が一気に吐き出される。

「カイト！ わっ……」

「くっ……邪魔だ！」

痛みを堪えながらみんなを見ると、ジュード達は狼の魔物と戦つていて、とてもじゃないけどこちらに助けに来てくれる余裕は無いように見えた。

つまり、ジャオの相手は俺がしないといけないって事だ。

……出来るのか、俺に。ただでさえ足を引っ張る俺が、エリーゼを守りながら、しかも人を相手にするんだぞ！

「カイト……大丈夫ですか！？」

「しつかりしてよー！」

「つー？」

エリーゼとティポの声を聞いて、俺は考えるのを止めた。
考えていたつて始まらないし、何よりも、一人で戦う訳じゃない。
そう気付いた。

「エリーゼ……今からあいつに、俺達の力を見せつけようぜー。」

「は、はい！」

「やつたろーー！」

こういつ時にティポのハイテンションはいいな。何か、やる気出るわ。

「っしー、おっさん！ 今から田に物見せてやるからな！ 覚悟しやがれー！」

「何を言つか。そんなボロボロな身体で」

そうだった。俺もうボロボロなんだよな。

「大丈夫です！ ピクシーサークル！」

エリーゼが精霊術を発動させると、俺達の足下に魔法陣みたいなものが現れ、傷が癒えていく。

「行くぜー、おっさんー！」

言いながら、魔神剣を放つ。当然避けられると思っていたけど、左右から襲う双刃はどうだ！

「はあー！」
「甘いー！」

ハンマーを地面に振り下ろし、隆起した岩が衝撃波を防いだ。
ありかよ、そんなのっ！

「エリーゼ、連携だ！」

「分かりました！」

エリーゼと共鳴リンクして、俺は接近戦を試みる。
スピードでなら、おそらく俺が勝つているからだ。

「虎牙、連斬！ 真空破斬ツー！」

だけど、放つ技は全て防がれる。
隙を突いても相手が人だからか、一瞬躊躇ためらつてしまつ。

「甘いと言つとるだろ？、小僧！」
「ぐつ……ー？」

躊躇いがこちらの隙を作り、ハンマーが容赦なく俺を襲つた。

「カイトツー！」

「ははっ……大丈夫、大丈夫……まだまだ！」

エリーゼの回復術が無ければ、とっくに死んでるだろ？。

「何故そつまでして、その娘を助ける？」

「さあ、何でだろうな？」

普通はここまでして、他人を助ける事はないのかもしねない。
だけど……！

「強いて言えば……俺はエリーゼの力になつて決めたからな

「それだけか？」

「それだけありや十分だろ？」

ずっと独りだったエリーゼの気持ちは、俺にもよく分かつたからかもしだれない。

「カイト！ エリーゼ！」

「2人とも、大丈夫？」

「つたく、無茶しやがつて！」

会話をしている間に、ミラ達が来た。魔物は倒せたらしい。

「……何故だ、娘っ子。その者達と居ても、安息は無いぞ？」

「仲間つて……ともだちつて言つてくれたもんつ！」

「もう寂しいのはイヤだよー！」

ジャオの問い掛けに、エリーゼとティーポが即答した。

(みんな、少し話を聞いて)

俺達だけに聞こえるように、ジユードは小声で呟いた。そして続いた言葉は、この状況を打破するものだった。

「わしも連れて行くのは本意ではない。……許してくれ

「なり、そのまま帰つてくんねえか？」

もう何を言つても駄目だと分かつているけど、俺はそう言った。そして、アルヴィンがジャオに銃を向ける。

「止めておけ。手負いのお前達が、わしに適つ筈が」

しかし、アルヴィンが狙つたのはジャオではなく、ジャオの頭上に伸びた樹だつた。

次々に銃弾が打ち込まれていき、ついに樹が折れて落下した。そしてその落下地点には、道中で俺達を苦しめたケムリダケがあつた。胞子が噴出し、辺りが胞子でいっぱいになつた。

「口を押さえてー！」

その隙に、俺達は出口へと一直線に走つて逃げた。

逃げる時に、俺は思つていた。

助けるとか守るとか言つておきながら、俺はエリー・ゼに助けられ、守られていた。

結局、目に物見せるとか言つても、俺はジャオに傷一つ負わせる事は出来なかつた。

悔しさで歯を食いしばりながら、何に悔しさを感じているのかも分からず、俺はただ、逃げる事しか出来ないと実感していた。

第9話 樹海の戦い（後書き）

カイトが弱いと言うか、他の人が規格外に強いだけだと思つたり（汗）。例えばジユードとか…。

次回はようやく、あのおじさまが登場（笑）

～今回の共鳴術技～

・空縛掌破

真空破斬 + 掌底破

カイトとジユードの共鳴術技。真空破斬で斬りつけ敵を真空中に閉じ込め、掌底破で破裂させる技。

第10話 賑やかな街

「やつとカラハ・シャールに着いたね」

逃げ込むように街に駆け込んでから、落ち着いた所でジューードが呟いた。

「すいぶん遠回りしちまつたな」

「もうおつきじおじさん来ないかなー？」

後方を見て心配そうにティイポが呟いた。

「大丈夫だろ。さすがにあのおっさんも、こんなに人が居る所で連れてくなんて目立つ事はしないと思ひぞ?」

第一、あの団体だ。何もしなくとも目立つと思つ。

「カイト、大丈夫ですか?」

「ん? ああ、エリーゼの回復術のおかげでなとかな……」

あんまりエリーゼに心配かけたくなかつたからそつ言つた。実際、痛みは無い。まあ、身体中だるくて足もガクガクで、正直立つてのも辛い状態だった。

……あのおっさん、手加減はしていたんだろうな。されてなかつたら、とっくに死んでた。……と言うか、俺よく生きてたなあ。あのハンマーを思い出すだけで血の気が引いてくる。

みんなが近くの骨董品屋を見に行つていたので、俺も身体に鞭打つて歩いた。

「何か、街のあちこちが物騒だな？」

アルヴィンが店主にそう言つていて、俺は視線だけを動かして辺りを見ると、確かに武装した兵士が所々に居た。

しかも、すぐ入口のところにも居た。俺の集中力もかなり落ちているみたいだ。これは本格的にヤバイ気がする。

「ええ、何でも首都の軍研究所にスパイが入つたらしくてね。王の親衛隊が直々に出張つて来て、怪しい奴らを検問しているんですよ。まったく、迷惑な話で……」

愚痴を言つよつて、店主がそう言つた。

「……キレイなカツプ」

そんな愚痴などお構いなしに、エリーゼが他の客が持つていたカツプを眺めてそう呟いた。

「でもこいつのつて高いんだよねー」

「そりゃあ、そいつは『イフリート紋』が浮かぶ逸品ですからね」

「『イフリート紋』！ イフリートさんが焼いた品なのね！」

カツプを手に取つていた女性が、明るくそう言つた。

「イフリートって、あの大精霊の？」

「そうですよ」

「へえ……そりやすーい。と思った矢先、ミラが女性の手からカツプを取つて、指先で器用に回しだした。

「それは無いな。彼は秩序を重んじる真面目な奴だ。こんな奔放な模様は好まない」

と、まるで知ったかのような口振り……ってそうか。イフリートつてミラに仕えてる精霊じやんか。そりや分かるか。

「ほっほっほ、面白いですね。四大精霊をまるで知人のように」

ミラの言葉を聞いていた、紳士な感じの老人が笑いながら言った。
「確かに、本物のイフリート紋はもつと幾何学的な法則性をもつものですね」

言いながら、カップが置かれていた皿を取り、その裏を見た。

「おや、ここのカップが作られたのは18年前のようですね？」

「それが、何か？」

「おかしいですね。イフリートの召喚は20年前から不可能な筈ですが？」

焦り出した店主は、老人のその一言で撃沈した。

うん。何事にも、嘘はいざればれるものだよ。

「残念、イフリートさんが作った物じゃないのね……。でも頂くわ！ここのカップが素敵な事には変わりはないもの！」

そして、女性はかなり心が広かつた。

偽物と知つて買うなんて、なかなか居ないよな。

女性が買い物を終えると、老人と一緒に俺達の所に来た。

「あなた達のおかげでいい買い物ができちゃった。ドロッセル・K・シャールよ。よろしくね」

「執事のローハンと申します。どうぞお見知りおきを」

……どこかのお嬢様だらうか？ 執事も居る訳だし。

「お礼にお茶にじご招待させて頂けないかしら？」

「お、いいね。じゃあ後でお邪魔させてもらいますか」

アルヴィンが真っ先にそう答えていた。

お茶会となれば休めるよな。俺も賛成しておひづ。

「ああ、後で行かせてもらひづよ」

「私の家は街の南西地区です。お待ちしておりますわ」

そう言つて、2人は去つて行った。

「そんな暇は無いのだがな

「ま、この街に居る間は利用させてもらつた方がいいだろ？」

「そうだね。こんなに警備が厳重だと、宿も取れなそうだし」

「それに、このままじゃカイトがぶつ倒れちまうぜ？」

アルヴィンが言つて、みんなの視線が集まってきた。
何ともないようにしていたのに、ばれてたのか？

「本当に、大丈夫なんですか？」

「ダイジヨブダイジヨブ……」

「仕方あるまい。お茶に行くとしようか

俺を見かねたのか、ミラが溜息を吐いて歩き出した。

何か、やっぱり足引っ張ってるなあ。と思いつつ、俺はエリーゼに支えながら歩きだしたのだった。

* * * * *

街の南西地区にあるらしいドロッセルの家を訪問する事にした俺達は、すぐに絶句していた。

「お待ちしておつましたわ

南西地区でドロッセルとローハンと合流して、前にある大きな屋敷に、言葉を失っていたのである。……主に俺が。

いや、こんな屋敷見た事ねぇもん。漫画とかならあるけど、実際に見た時のこの……住んでる世界が違う感じ？　が物凄い。

だけど、ふと視線を入口に移すと、そこにはラ・シュガル兵が居た。

ミラがそれに気付き、剣を抜こうとするけど、アルヴィンが制止した。

そして、屋敷から出てきたお偉いさんみたいな2人は、こちらに気付く事も無く馬車に乗り込んで去つて行つた。

「お客様はお帰りになりましたか……」

ローエンがそう呟いた。何かあるのだらうか？……俺が首を突つ込む事じやないか。

そのままドロッセル達に誘導されるように屋敷の前に行くと、また屋敷から男性が出てきた。

「お帰り、お友達かい？」

「お兄様！」

なんと、男性はドロッセルのお兄さんだったらしい。

「紹介します……あ、まだみんなの名前を聞いてなかつた」

紹介しようと俺達を見たドロッセルだつたけど、いつも言ふばこつちも名乗つた覚えが無かつた。

「はははっ、妹がお世話になつたようですね。ドロッセルの兄の、クレイン・K・シャールです」

「クレイン様は、カラハ・シャールを治める領主様です」

礼儀正しく男性 クレインが名乗ると、ローエンが突然のカミングアウトをしてきた。

お偉方……つて、マジか……！？ 驚き過ぎてリアクションが出来なかつた。

「立ち話もなんですから、中に入つてください」

クレインにそう促されて、俺達は屋敷の中に入つて行つた。

屋敷の中は想像を絶するような広さで、何かもう休めるとか思つてた数十分前の自分を全力でぶん殴りたい。だって、全部高そうな

んだもん！ 傷でもつけた日には一学生が弁償出来る筈も無い物ばかりだ。

「なるほど、また無駄遣いをする所を、皆さんが助けてくれたんだね」

おかしそうに笑いながら、クレインが言った。

優しそうな人で良かつたよ。何でとは聞かないでくれ。

「無駄遣いなんて！ 協力して買ったのよね？」

「ねー」

ティポが何故かそう答えた。

そんな中、ローベンがクレインに近付いて、何かを耳打ちしていった。

「分かった。皆さんのお相手を頼むよ
「かしこまりました」

何か用事が出来たらしく、クレインは「ゆっくりして行ってください」と言い残して去つて行つた。

「俺もちょっと」「
「アルヴィン？」
「生理現象。一緒に行くか？」

〔冗談めかして言つたアルヴィンも一人でビニカに（本人曰く生理現象）行つた。

話も一段落着いた事だし、やつと休めるだろつ。

「ねえ、みんな旅の途中なんでしょう？ 旅のお話を聞かせて？」

「そんな時に、ドロッセルがそう言った。

……休めるかな。

「あの……わたし……」

「私、この街から離れたことがなくて……だから、遠い場所のお話を知りたいの」

「わたしも……外に出たことなかつたです。でも……」

「カイト君たちが、エリーを連れ出してくれたんだー。海と森を通つてねー、波やキノコがすこかつたー」

いや……すこかつたのはキノコだけな気が……。

「そう言えば、カイトってあまり見ない格好よね？ ピンク住んでたの？」

「へ……！？」

久々に聞いた問いただた。

まあ、普通は思う事なんだよな。多分。

とりあえず、自分の格好を確認してみる。紺色のブレザー、そしてズボン。ブレザーの下には白いYシャツで、首にはネクタイだ。

……そんなに無い格好でも無い気がするんだよな。

「それ、わたしも知りたいです」

「エリーゼもか……」

少し困ったからジユードとミラに助けを求めるようと視線を移してみると、ミラは何故か居ないし、ジユードは視線を逸らした。
どうする……ライフカードでもあつたら睨み合いになってるな、

「これは……。

そして俺が取つた選択肢は、

「いやー、実は俺」「

言おうとした瞬間、屋敷の扉が開け放たれた。

良かった。誰だか知らんが助かった。

そう思いながら扉の方に視線を移すと、そこに居たのはクレインだった。……横には兵も居るが。

「すみません。あなた方がイル・ファンの研究所に潜入したと知つた以上、もう少しここに居てもらいますよ」

「な、なんの事だか……」

「とぼけても無駄です。アルヴィンさんが全て話してくれました」

とぼけようとしたジードだったけど、クレインはそう言つてきた
まさか、アルヴィンが俺達を……？　いや、何か理由があつたの
かも。何も考へないでこんな事をする奴ぢゃないと思つから。

「軍に突き出すのか……？」

ミラが声を低くしてそう問い合わせる。けど、クレインは首を横に
振つて否定した。

「いいえ。イル・ファンの研究所で見たことを教えて欲しいのです。
……ラ・シユガルは、ナハティガルが王位に就いてからすっかり変
わってしまった。何がなされているのか、六家にも知らされていな
い……」

クレインは椅子に座りながらそう言った。

「軍は、人間からマナを強制的に吸い出して、新兵器を開発していくた」

「//はクレインを信じたのか、そう答えた。

「人体実験を？　まさかそこまで！？　……嘘だと思いたいが、事実とすれば辻褄がある……」

よほどショックだったのか、クレインは俯いてしまった。

「実験の主導者は、ラ・シュガル王　　ナハティガルなのか？」

「そつなるでしょう」

「そんな……」

王が自国の民を実験に使つなんて……何考えてやがんだ！？

「……ドロッセルの友達を捕まえるつもりはありません。ですが、即刻この街を離れていただきたい」

本当に済まなさそうに、だけど力強くクレインがそつと、//ラが立ち上がった。そのまま出口の方に歩いていく。

「ありがとうござります、クレインさん

そう言つて、ジユードも//の後を追つた。俺もこの場に居る訳にはいかないから立ち上がる。

「カイ……」

追おうとするが、エリーゼが悲しそうに俺を見ていた事に気付いた。

「……そうだよな。エリーゼは研究所とか関係無いんだ。だから、無理に付いて行かなくてもいいんだよな。」

「こんな事、俺が頼むのもなんだけど、一つだけいいか?」

「……何ですか?」

「エリーゼを、ここに引き取つてしまふ」

「え……?」

「カイト君、何でーー!?

俺の言葉に、エリーゼとティポが驚いていた。

「エリーゼは研究所とか関係無いからな。わざわざリラ達に付いて危険な事に巻き込む必要はない」

「やりますか。いやらは構いませんけど……エリーゼさんね?」

クレインがエリーゼを見ると、ビクッと身体を震わせていた。

俺はもう一度、海停で言つた問い合わせをしてみた。

「エリーゼはこれからどうしたい? ここに残るか、付いて行くか

「わたしは……みんなと 友達と一緒にです……」

「そつか」

一度撫ると、俯いていたエリーゼが顔を上げた。

「悪い、さっきのはナシって事で。エリーゼ、みんなの所に行こう

「?」

黙つとエリーゼは小さく頷いた。

俺は手を引いて、屋敷から出たのだった。

屋敷から出て広場まで行くと、//リ達が居た。

「よつ、やつと来たのか」

「アルヴィン君のバカー！ アホー！ 略してバホー！」

「バホー！」

「何だよ、バホーって……」

何となくティポが言つた事を復唱してみると、アルヴィンは呆れたように頭を搔いた。

「で、これからどうするんだ？」

「やつぱり、王様を討つの？」

おそるおそるとこいつにジユードが問い合わせると、//リは静かに頷いた。

「君達国民は混乱するだろうが、討たねば第2、第3のクルスニクの槍が造られるかもしれない。それを見過ごす訳にはいかないからな」

「うん……無理矢理マナを引き出して犠牲にするような事、放つてなんかおけない」

ジユードが頷いたその時、運悪く兵士が俺達の近くに来てしまっていった。

「お前、ひどい……まさか手配書の？」

「往来で堂々としすぎたかもな」

「と言つか、あの手配書で見つかるなんてな……」

ちょっと、いや、かなりショックだ。あんな変な絵だったのに。俺達が応戦しようとしたその時、今度も思わぬ人物が登場した。

「南西の風?……こい風ですね」

「……ローハン?」

そう、現れたのは、執事のローハンだった。

ローハンは俺達を見て、「この場は私が……」と言つて、兵士に背を向けた。

「このじこせん、何を……って、持つてるのはナイフか?」

「おいじこせん!……ひを向け!……何をやつている!」

兵士の1人がそう叫ぶと、ローハンはよがやく兵士の方を向いた。直前に、何かを空に放り投げた気がした。

「おつと、怖い怖い」

ふざけたよつこ声しながら、ローハンは前に出た。

「おや?……後ろのお2人、陣形が開き過ぎてはいませんか?……その位置は、一呼吸で互いをフオロー出来る間合ではありますまいよ?」

ローハンが言つと、後ろの2人の兵士は思い出したよつて距離を詰める。

「このじこせん……何で敵にアドバイスなんかしてんだよ?」

「貴様！ 余計な口を利くな！」

「そしてあなた。もう少し前ではありますか？ それでは私はともかく、後ろの皆さんを拘束出来ませんよ？」

ローハンは前に居た1人にもやつさうとい、その兵士はまるで逆らうように、一步後ろに下がった。

それを見たローハンは、「いい子ですね」と言った。

何がしたかったんだこのじこさん……。と思つた次の瞬間、空からナイフが降つてきて、それは三角形に地面に刺さり、3人の兵士が拘束された。

まさか……ローハンはこれが狙いだったのか。だからワザと3人に言つて、立ち位置を修正させた？ でも、そんな上手くいくのかよ？

「皆さん、こちへ」

兵士が動けない間に、俺達はローハンに誘導されて屋敷の方に向かつた。

「ローハン君すい」「——！ こわいおじさん達もイチコロだね——！」「いえいえ、イチコロなどとても。私程度ではただの足止めです」

ティポの褒め（？）に謙遜するローハンだけど、3人一斉に足止め出来て、しかも相手の動きを操作したんだ。凄いなんて言葉じゃ足りない氣がする。

そしてどうでもいい事だけど、ティポは誰に対しても君を付けるんだろうか？

「助かりました、ありがとうございます。……ローハン、さん」

「ローハンで結構ですよ」

「それで、何か用があるんだろう？」

リハが問い合わせると、ローハンは顔を強張らせた気がした。

「実は……皆さんにお願いがあるのです」

「お尋ね者いる一行にか？ 楽しそうな話じゃなさそうだな」

確かに、と言つか、言い方は悪いけど、追い出そうとした俺達に助けを求めるのって……よほど緊急な事態なんだな？

「先程、ラ・シュガル王が屋敷に来られ、王命により街の民が強制徴用いたしました」

「ナハティガルが来ていたのか？」

「多分、屋敷に入る前に馬車に乗つたあれじやないか？」

顔はよく見えなかつたけど、十中八九あいつだらうな。
けど、強制徴用か……悪い予感しかしないな。

「もしかして……人体実験……？」

「分かりません。民の危機を感じた旦那様は、徴用された者達を連れ戻しに向かわれました。しかしナハティガルは、反抗者を許すような男ではないのです……」

本当に、心の底から心配なんだろう。

冷静そうな人なのに、口調はいつの間にか早くなっていた。

「ドロッセルのお兄さん……危ないんですか？」

『さあ、と福を握つてきたエリーゼを、安心させようと頭を撫でる。

「助けに行こ」『う』

「よろしいのですか?』

「当たり前だろ。むしろ断る理由がない。な、みんな?』

俺がみんなに問い合わせると、エリーゼは頷いてくれた。

「そうだね。クレインさんもだけど、連れて行かれた人達も心配だし、助けに行こ」『う』

「あー、お人好し2人に火が点いちましたか』

何故かアルヴィンは残念そうに言つたけど、別段反対と言つ訳でもなさそうだ。

「分かつた。あれを使おうと企むナハティガルは見過ごせないからな』

「ありがとうございます』

みんなの『承が得られて、ローベンが深々と頭を下げた。

「街の民が連れて行かれたのは、『バーミニア峡谷』です。急ぎましょー!』

そういう訳で、俺達はクレイン達を助ける為に、バーミニア峡谷へと急ぐ事になった。

第10話 賑やかな街（後書き）

よつやくローレンが登場！ ダンディーですよねローレン。何故ギャグ要員なのか、それが疑問だつたりします（笑）。

第11話 峡谷の実験施設（前書き）

戦闘……下手だなあ……（笑）

第11話 峡谷の実験施設

カラハ・シャールからクラマ間道に出て、魔物を倒しながらようやくバー・ミア峡谷に着いた。

刹那、俺は思わず膝を着いてしまった。すぐに立ち上がり、震える足を落ち着かせる。

みんなの様子を見ても氣付いた感じがなかつたので、俺はホッと胸を撫で下ろした。

少し後ろを歩いて良かつたな。屋敷で休んだから大丈夫と思つてたけど、疲労は自分で思うよりも溜まつていたらしい。

「カイト君、遅いぞー」

「あ、悪い」

ティポに言われてしまい、急いでみんなに追い付いた。

そこで改めて峡谷を見回してみると、崖には幾層もの地層があつた。

「すごい地層だね……」

「ああ……まさか……登るのか?」

「はは…… わすがに死んじゃうよ?」

「(イ)はラ・シュガルでも有数の境界帯ですからね。登るのもひと苦労でしょう」

崖は本当に高く、エリーゼやローヘンも大変そうだった。と言ひか、元気である(ラ)やジユードでも大変じゃないか?

そんな事を思いながら峡谷を見上げていると、岩影に人が見えた。

そしてそいつは、ボウガンのようなモノをこちらに向けていた――！

「――? ハリーゼ!」

とつさにハリーゼを抱えて近くの岩影な隠れる。すると、先程までハリーゼが立っていた場所に、矢が突き刺さった。

「あ、危ねえ……。怪我無いか、ハリーゼ?」

「ありがとう、カイト……。大丈夫です」

辺りを確認すると、みんなもちゃんと岩に隠れていた。

向こうでアルヴィンが銃で撃とうとしたけど、場所が悪くて無理そうだった。

何か……何か手は無いのか……?

「僕が囮になるよ」

「なっ、危険だぞ!」

「分かつてゐるよ。でも、誰かがやらなきゃ」

自分の中で決めたらしく、ジユードは退かなかつた。

「分かつた。頼んだぞ、ジユード」

ミラから「――サイン」が出て、ジユードは岩から出て行つた。

そして、矢が放たれるその直前、ミラが気付かれないよう走り出す。矢は放たれると、ジユードは身体を少しだけ横にずらしてそれを避けた。

さすがに敵は予想していなかつたのだらう。攻撃の手は止まり、その隙にミラが敵の懷に飛び込んでいた。

それに気付いた敵は、すぐにミラを射る。だけど、アル

ヴィンのナイフアシストで、敵はボウガンを弾き落とされた。そしてミラが敵を斬り、何とかこの場は助かつた。

「けど、敵とは言え、殺すのはな……。」

「助かつた」

「そう言われるポイントで活躍するのが傭兵のコツなんだ」

「それは言わなければカッコいいのにな……」

わざわざいつのはマイナスポイントですよ、アルヴィンさん。そんな事を思つて居ると、ミラがいきなり背後に振り返った。

「これは……イル・ファンで感じた気配……？」

「なになに、お化け？」

「まさか、ここにもあの装置が？」

イル・ファンの出来事は俺にも分からないけど、とにかく大変な事なんだろう。

ミラが走つた後を追つて洞窟の中に入ると、明らかに怪しい機械が見えた。何かを上方に吸い上げてるけど……もしかしてあれがマナか？

「クレイン様！」

ロー・エンがクレインの姿を発見して叫ぶ。

行く手を阻んでいる結界みたいなモノにミラが手を伸ばすと、アルヴィンが止めに入った。

「あれ、研究所でハウス教授を殺した装置に似てるー。」

「ここでも黒匣の兵器を作り出さうと言つのか！？ それ程容易くはない筈……」

ミリが結界の前で何かを呴いていた。

「とにかく、どうやって中に入るんだ？ 見た所、入口はここしか無いみたいだぜ？」

「……展開した魔方陣は閉鎖型ではありませんでした。余剰の精靈力をドレインしていると考えるのが妥当です。谷の頂上から侵入して、術を発動しているロアを破壊できれば……」

「上って……」

ぞりと見て軽く30メートル以上はある気がするんですが……。

「ま、他に方法は無れそうだしな。仕方ないか……」
「そうだな。行こう」

洞窟から出て、峡谷を登る事になった。

* * * * *

と言つて頂上。……何てパツと行くみたいなものは存在せず、俺達は真面目に登り続け、ようやく3分の2の所まで辿り着いた。
……正直に言おう。軽く死ねる。

ただでさえ辛い山登り（と言つなのロッククライミング）なのに、何故途中で魔物なんか居るんだよ！？ マジで殺しに掛かってきて

んなオイツ！

「……エリーゼ……だい、大丈夫……か……？」

「わたしは大丈夫ですけど……」

「カイト君は死にそーだねー」

その通りだよティポ君……。マジ氣を抜いたら死ぬわ……。

「無理、しない方がいいよ？」

「俺から助けるって言つておきながら、俺がへこたれてたら格好悪いだろ？」

「そこまで我が主を気に掛けてくださいとは……。ありがとうございます！」

「いや、そんな大層なもんじゃないから……」

「この旅をやる事になつた根本　自分のやりたい事をやつているだけなんだし。

「ま、そつやつて話してられればまだ大丈夫だな」

「つむ、先を急ぐぞ」

そしてさらにもスピードがアップしたのは、氣のせいだと思いたかつた。

やつとこを頂上に着いた時には、疲れを通り越してもうフィーバー状態だった。

……やべえ、何言つてゐか自分でも分からねーよー？

「で、こっからどうするんだ？」

「コアが作動してる！ けど……この高丸……」

「時間がありません。噴き上がる精靈力に対して魔方陣を展開します。それに乗つてバランスをとれば、無事に降下できるかもしれません」

……つまり、ダイブですか……。

でも、迷つてなんかいられない。

「俺はいつでもいいぜー！」

「僕も大丈夫！」

「他に手は無いからな」

「なかなか度胸がありで」

「ホント、見掛けによらずな」

度胸とこりよつ、半ばヤケクソだけどな。

「お嬢さんはここで待っていますか？」

Hリーゼは首を横に振つて、俺の手を握つてきた。そつと力を入れる。

「しつかり握つてろよ？」

「クククと数回頷いた。

「では、参りますよ！」

言ひながらローハンはナイフを宙に投げる。それは紙飛行機のような魔法陣を形成した。

スペースは6人でギリギリ。仕方なくエリーゼを抱きかかえる形になってしまった。

「エリーゼ、あんまり動くなよ？」
「は、はいっ……」

何でか慌てるけど、落ちないようにしっかりと抱きかかる。
「うう~」と唸る声が聞こえた気がした。
けど、それを気にする暇も無く、魔法陣は急降下して行く。ほとんど垂直落下だった。

「見えた！ アルヴィン！」

前方にコアのようなモノが見えて、ジユードが叫ぶ。

一発勝負だけど、揺れすぎてアルヴィンはコアに狙いを定められないでいた。

けど、それをジユードが支えて、狙いが定まった瞬間、銃弾はコアを撃ち抜いた。コアは砕け散り、起動していた機械は全て停止した。

クレイン達を閉じ込めていた檻の扉も開いていた。
地上に足を着けた瞬間、また膝から崩れてしまった。

「大丈夫ですかっ！？」

「だ、大丈夫……垂直落下に驚いただけだから……」

心配そうなエリーゼに、そう言つて「まかした。とりあえず、エリーゼから腕を離した。

俺が座り込んでいる内に、クレイン達は助け出されていた。ミハの探していたナハイガル王は、この場には居ないみたいだ。

「こなんと」、早く出よーよー…

「だな。脇腹は無用だ」

そう言つて、みんなで帰らうとしたその時、撃ち抜いたコアがあつた場所が光り出した。

そして、蝶々のような光り輝く生物が生まれた。

「な、何だあれ！？」

「来るぞ、構えろ！」

ミラガそう言つて、武器を取り出す。

辺りを見回して、街の人気が残つていない事を確認した。

「これは……特殊な精霊術を纏つてているようです！」

「こいつを生み出す事が奴ら目的か！？」

ローハンとミラガそう言つて。

「何だらう、この感じ……どこかで……」

「分析は倒してからにしてくれ！」

ジユードの呟きに、アルヴィンが叫んだ。

確かに今は戦わないといけない。それは分かるけど……何故だか俺も、何かを感じた。

懐かしいと言つか…… — 身近にあるもののよつな（・・・・・・・・・・）感じだ。
何だ……これは？

「危ないです、カイアトー！」

「！？ 悪い！」

またぼーっとしてしまっていた。

剣を握り直して、戦いに集中する。

あの魔物は宙に浮いていて、なかなか攻撃は当たらないよつだ。

「やるぞ、ジユード！」

「分かった！」

「連撃喰らえ！ 滅爪乱牙！！」
めっそうらんが

ジユードとミラがほとんど同時に殴り斬り、地面に落として衝撃波を引えて吹き飛ばした。

「ヒリー・ゼ、連携だ！」

「はいっ！」

「ピコッときな！」 「ペコペコドウツー！」

「ピコ連斬！...！」

ダウンしていた蝶々の魔物に、俺は巨大なピココハンマーで叩きつけた。あんまり手応えは無いけど。

「喰らわせるぜじいわん！」

「承知！」

「「喰らえ地の爪！ ブラストライズ！...！」

ローエンが投げたナイフが魔法陣を描き、そこから岩が突き出す。それをアルヴィンが銃で撃ち碎いた。

フルボックみたいで悪かつたけど、それで蝶々の魔物は力尽きたのか、地面に倒れ込んだ。

そこに、ミラは剣でトドメを差そうとしていた。

「//ハー、ちよつと待て！」

「何故止める?」

「いや……なんか、あれは殺しちゃいけない氣がするんだよ……」

上手く理由は言えないけど、何となくそう思った。

「//ハ、あれ！」

ジューードが叫んで魔物を見ると、光り輝いて粒子のようなものが舞つていぐ。

「微精靈だよ」

そう呟くと、//ハは剣をしまった。

「……すまない。我を忘れ、危うく微精靈を滅する所だった。礼を言ひよ、カイト」

「いや……気にしなくていいよ」

俺が気付いたのはほとんど奇跡に近いから。

そう思った瞬間、全身から力が抜けて、俺は地面に倒れ込んでしまった。

「ど、どうしたんですか!？」

そんなエリーゼの悲痛な叫びを遠くに聞きながら、俺の意識は暗闇に呑まれていった。

第1-1話 峡谷の実験施設（後書き）

もう少しである要塞ですか……。どうしよう（汗）
それはともかく、次回はあの人気がどうなるのか！？ とりあえず
もつたいぶつておきます（笑）

～今回の創作共鳴術技～

- ・ブラストライズ（火・地）
- ・タイドバレット + アンビュースアーチ

アルヴィンとローエンの共鳴術技。
ローエンが投げたナイフから出た岩を、アルヴィンがタイドバレ
ットで粉碎していく。

第1-2話 ガンダラ要塞（前書き）

ようやく大事な場面に突入します。

第12話 ガンダラ要塞

ジユード達がカラハ・シャールへ戻ると、屋敷の前でドロッセルが皆の帰りを待っていた。

ドロッセルはクレインの姿を見ると、すぐに駆け寄ってきた。

「お兄様！」

「僕は大丈夫だ……それよりも、この人達を早く病院へ。ローエンは、屋敷に戻つてカイトさんを休ませてくれ…」

「分かりました！」

クレインが指示すると、兵士たちは一斉に動き出して、マナを吸い取られた街の住人を運ばせた。ローホンは一足先に屋敷に戻つて行く。

「ど、どうしたの…？」

ドロッセルは、アルヴィンに背負われたカイトを見て血の気が引いたように顔色が真っ青になつた。

「わかりません……」

「多分、過度の疲労が原因だよ。大丈夫、少し休めば元気になるから

今にも泣きそうなエリーゼを慰めるように、ジユードが言つ。

「つたぐ、疲れてんならそう言ふつての」

そう愚痴を言つて、アルヴィンは屋敷の方に向かつて行く。

「ジャオと戦つて峡谷も登つたんだ。仕方あるまい」「やうかもしれないけど……ちゃんと書いてくれればよかつたのにね……」

「それはあいつが起きてから言えればいいわ」

「みなさんも、屋敷に入つてください」

クレインに促されて、ジユード達は話を中断して屋敷に入る事になつた。

* * * * *

目を覚ますと……そこは何の光も無く、真っ暗な場所だった。これでは自分の目が開いているのかも分からぬ。首を動かそうとしても、何故か首すら動かなかつた。

ああ……もしかして俺……死んじました？

ほり、何か息も苦しいし、顔の回りが何かもじもじして暑苦しいし。

おまけに、「ティポ！ カイトを食べちゃダメです！！」なんてエリーゼの幻聴まで聞こえてきていた。

いやー、さすがにティポは食いませんよ？ あれ？ 食われてんのは俺か？

……つて、マジで息が苦しくなつてきた……。無意識に顔に手を伸ばして、顔に引っ付いていた何かを引っ張がした。

「ホントに死ぬわっ！？」

と、叫びながら起床。手にはもふもふのぬいぐるみ テイポが握られていた。

……あれ？ 僕生きてるよ！？

「カイトツ！」

呼ばれて横を見ると、目に涙を溜めたエリーゼが居た。

「エリーゼ？ ここは……？」

「……ドロッセルのお屋敷です」

「……何で？」

「峡谷で、倒れたんですよ、カイト」

言われてそう言えば、と思い出す。たしか、限界がきてぶつ倒れたんだ。

「ごめんな、心配かけて」

言いながらベッドから降りる。
うん。ぶつ倒れたとは言え、十分休めたみたいだから、疲れは全く無いな。

「もつ、無茶しちゃダメですよ？」

「ああ……うん、善処するよ……」

少し怒った様子で言つエリーゼから視線を逸らして、僕は言った。

屋敷の2階の客間？　で寝ていた俺は、ヒリーゼと一緒に1階へと降りた。

「ようやく起きたか

降りてすぐ」、ミラが俺に気付いてそつまつしてきた。

「めん。迷惑掛け……」「

「別に迷惑ではないぞ」

「でも……」

俺の所為で先に進むのが遅れたとなると、罪悪感は否めない。

「もしカイトが倒れていなくとも、私達は足止めをくらっていたからな

「そうなのか？」

言われて、カラハ・シャールへ来る時の事を思い出した。
検問が置かれていて、仕方なく樹海を通る羽目になつたからな。
今回も検問が行く手を阻んでいるのだろうか？

「それで？　まだガンダラ要塞から連絡は来ないのか？」

不意にアルヴィンがそう尋ねていた。

「すみません、まだのようです」

「それなら私が急ぎで確認をしてきますが？」

「うむ、よろしく頼む」

よく話が分からぬ内に、何やら話は進んでいるようだ。

とりあえず、今から行くのはガンダラ要塞と言う場所らしい。明らかに正面突破は無理そうな名称だな。何たって要塞だから。

そう言つて、ローエンが出発する準備が出来て、俺達は屋敷の前で見送る事になった。

「どのくらいで戻つてくるの？」

「馬を使えば、1日もあれば戻つて来れますよ」

それを聞いたドロッセルは、「早ければ明日にでもお別れなのね」と残念そうに言つた。エリーゼとティポも俯く。

この2人はもう親友の域に達しているようだつた。

「エリー、ミラ、お買い物に行きましょう！」

「お買い物？ 行く行くー！」

ドロッセルのまさかの提案に、ティポが跳ねた。エリーゼも嬉しそうな笑顔を浮かべる。

それで話は決まつたらしく、エリーゼとドロッセルは笑顔でミラの両腕を掴んでいた。そして、そのまま引きずつて行つた。

「ま、待て。話が見えない」

「エリーとお買い物の約束したもの。明日お別れかもしれないなら、チャンスは今日だけよね？」

「それはそうだな。行つて来るといい

「じゃあ出発ー！」

「出発ー！」

まるで他人事のように言つたミラだけど、笑顔な2人（と1つ？）

はそのままリリフを引きずつて行った。

「だから何故こうなるんだ？ 私が行く必要は無いだろ？」

まだ抵抗するリリフに、俺達は笑いを堪えながら囁く。

「いいんじゃねえの？」

「たまには人間の女の子っぽい事するのも、面白いんじゃないかな？」

「そうそう、遊んでいいよ」

そしてまだ何か言つていたけど、うん、聞かなかつた事にしよう。

「」「今の幸せの為に、僕も決心しなければならない……」

3人が去つた後、クレインが何かを決意したように呟いた。

「やはり、民の命をもてあそび、独裁を走る王にこれ以上従つ事は出来ない」

「……反乱を起こすのか？」

「……戦争になるの？」

戦争！？

思いがけない単語を聞いて、一瞬寒気を感じた。

戦争は……確かに俺の世界にもあつたけど、それは俺が生きる世代じゃなかつた。昔の事だつた。けど、この世界じゃ戦争は……そんなに簡単に起つる事なのかな？

いや、簡単じゃない。王様の独裁の所為で何人も死んでるんだから……。

ジユードとアルヴィンの問いに、クレインは小さく頷いた。

「ナハティガルの独裁は、ア・ジユール侵攻も視野に入れたものと考えられます。そして彼は、民の命を犠牲にしてでもその野心を満たそうとするでしょう。このままでは、両国とも、無為に命が奪われる」

他国を攻めるのに自分の国の人間を殺すなんて……狂ってやがるな……。

「僕は領主です。僕の成すべき事、それは、この地に生きる民を守る事」

「…………なすべきこと…………」

「そりゃ。僕の使命だ。力を、貸してくれませんか？」

クレインの言葉に、ジューードは困惑っていた。

「僕達は、ナハティガルを討つところ同じ目的を持つた同志です」

そう言つて、クレインはジューードに手を差し伸べる。

戸惑いながらも、ジューードはゆっくりと、クレインの手を握りうとした。

だけど、その刹那 クレインの胸に矢が突き刺さっていた。紅い血が飛んだ。

「なっ！？」

「旦那様！？」

「クレインさん！？」

こきなりの事で頭の中が真っ白になつた。

ジューードとローホンがクレインに駆け寄る。背後で舌打ちの後に銃声が聞こえた。おそらくアル・ヴァインがクレインを撃つた奴を撃つたのだらう。

「早く治療を…」

「う、うん…」

ジューードの掌が光り、治療を始めるけど、傷は一向に塞がる気配が無かつた。

とにかく屋敷の中に戻り、クレインをソファに寝かせて治療を開する。

抜いた矢を見てローホンが絶句していると、ジューードが治療を止めて、床に膝を着いた。

「お願いします！ どうか田那さまを…」

「……ローホン、無理を言つてはいけない」

まだ意識があつたらしく、慌てるローホンにそう呴いた。

「……僕はここまでのことだ。……国を…頼みます…」

もう喋る事すら難しい状態なのか、所々つつかえながら言つ。

「それこそ私には無理です…」

「無理じゃない筈だ…』『あなた』なら…』

それを言つた瞬間、がくりと力が抜けたようになつた。

「……お前にそ諦めんなよ…」

だけど俺は、そう言つていた。

「カイト……もつ……」

「今の幸せを守れよっ！　1人になるドロッセルはどうするつもりなんだよ！？」

ジューードの弦きを無視して叫んだ。

俺自身、ホントは分かっていた。もう無理なんだろ。助からないんだろうと。

だけど、ただの子供の我が儘みたいだけど、俺はこいつに死んでほしくなかつた。

思った瞬間、俺の中から何かが流れ出るよつた感覚を感じた。

「これは……」

「まさか……精霊術！？」

みんなが驚愕している事には気付かずに、俺は流れ出るそれをクレインに流し込む。

刹那　一瞬で視界がブラックアウトして、何が起こったかも分からず俺は意識を失つた。

目を開けると、今度は普通に天井が視界に入った。

* * * * *

起き上がつてみても、辺りには誰も居ない。あれからどうれぐらい経つたのか。クレインは大丈夫だったのか。

それを知る為に、部屋を出た。

部屋を出て1階に行くと、ジユード、アルヴィン、ローベンが居た。

話を聞くと、俺はまたぶつ倒れたみたいだった。

「クレインはどうなったんだ？」

「カイトさんのおかげで、何とか一命は取り留めました。本当にあります」

「……俺が？」

ローベンが深々と頭を下げるけど、全く身に覚えは無い。

覚えているのは……俺の中から何かが流れ出た感覚だけだ。

……あれは何だったんだろうか？

「そうだ、エリーゼ達は？」

「……捕まっちゃったんだ」

「捕まつた！？」

ジユードの話では、俺が倒れてすぐに街の兵士が来て、広場で戦いがあつたと伝えられる。広場に行つた時には既に、軍の馬車にみんな乗せられていた所だった。

そして連れて行かれたのは、俺達が通りとしていたガンダラ要塞だった。

2度も倒れたけど、そのおかげか体力は既に全快だ。

時間が惜しいと言つ事もあって、俺達はさっそくガンダラ要塞へと向かった。

* * * * *

タラス街道と言つ場所を通りて、ガンダラ要塞には意外と早く着く事が出来た。

けど、さすが要塞と言つだけあって、外にも兵士は結構居る。さらり、もし兵士を倒したとしても、中に入るにはあの大きな鉄の扉をどうにかしないといけない。正面から突破するのは難しいだろ？

「皆さん、いらっしゃりです」

ローレンに導かれるまま、俺達は要塞の横にある排気口の所まで行つた。

「ジユードさん、そこの排気口を呪いて合図を送つてください」

「合図つて……誰に？」

「もちろん中に潜入した者に、ですよ」

「そんな、いつの間に……」

まさか、いうなる事を予想していたのか？ 本当に凄いじいさんだな。いや、じいさんなんて失礼だ。ジェントルメンと呼ぼう。

「ナイス、ジェントル！」

「馬鹿が、叫んでどうする！」

アルヴィンに怒られた。

「……カイトは倒れてたから分からないかもしねいけど、峡谷から戻つてから要塞を抜ける為に、クレインさんにいろいろやつてもらつてたんだよ」

「ああ……なるほど」

呆れ顔のジユードがそう説明する。

そう言えど、俺が倒れなくとも足止めになつてたつて、ミラが言つてたつけ？

ジユードが排気口に入り、合図を送る。しばらくして、ジユードがこちらを向いた。

合図が返つてきたらしく、俺達はジユードに促されて中に潜入した。

第1・2話 ガンダラ要塞（後書き）

注) この物語の主人公はチートではありません。
今回主人公が使った力は、後で真相が分かると思います。
まあ……どれくらい後になるか分かりませんがね（笑）

第1-3話 強くなる為に（前書き）

ガンダラ要塞のイベントはトラウマ物ですよね……。

第1-3話 強くなる為に

要塞の中に無事潜入出来た俺達は、先に潜入していた味方に、助け出しても呪縛と言つ空間がある限り、逃げられないと言つ事を聞いた。

「制御室へ行けば呪縛を消す事が出来る筈です」

と、ローハンの提案で、制御室に向かう事になった。
制御室に向かう途中、やはり簡単には行かしてもらえないようだ、
兵士と戦闘になってしまつ。

「はっ！ 飛燕連脚！」

「ショル・ヴァンガードー！」

「空破鉄槌！ エアプレッシャーー！」

ジユード達はそれぞれ、技を繰り出して兵士を倒していく。
だけど俺は、いつもの事だけど、上手く戦えていなかつた。相手
が魔物ではなく、人間という事もあるのだろう。いつもより手が震
えた。

ジユードは手加減をしているのかもしれないけど、アルヴィンと
ローハンは戦場というものが分かっているのか、手加減は無いよう
に見えた。

「はあっー。」

「つー？」

兵士が俺に向かつて剣を振り下ろしてきた。俺はとっさに飛び退いて避けたけど、バランスを崩して尻餅を着いてしまった。その隙を逃す筈もなく、兵士はまた剣を振り下ろす。避ける事も出来ず、剣を上に構えて防いだ。ギャリギャリと嫌な音が鮮明に聞こえた。

「つー てつー」

「のままじやまざいと、思い付きで兵士の足を蹴つてバランスを崩させる。その隙に起き上がって剣を構えた。

……殺らなきや、殺られる。それは分かつてるけど……殺すのは、俺には出来ない！

だけど、敵はそんな想いを知る訳もなく襲い掛かつてくる。剣を剣で弾き返し、よろけて隙が出来た所で斬りつけようとして、やはり躊躇つてしまい、結局柄つかで兵士を殴りつけ、蹴飛ばした。

「カイト、大丈夫？」

心配そうにジユードが尋ねてきたけど、大丈夫と小さく返す事が出来なかつた。

「カイトさんは、人と戦うのは初めてなのですか？」
「……当たり前だろ？……」

だつて俺は……つっここの間までは普通の学生だつたんだ。魔物と戦つていた今までとは違う。

斬る相手は俺と同じ人間だ。誰だつて躊躇つだろ！

「ミラの力になるつて事は、じついう事だ。分かつてた筈だろ？」

「…………」

アルヴィンの言った事は正論だ。

黒匣ジンを人が扱っている以上、そうなるのは分かつていた。……頭では。

「ま、悩むのはいいが、早くしないことミラもヒューリーゼもドロッセルも、みんな助けられないぜ？」

「……分かつてる」

そうだ。今はヒューリーゼを……みんなを助ける事だけを考えよう。

「無理だけはしないでよ？」

「ああ……ありがとな、ヒューリーゼ」

この時ほど、ヒューリーゼのお節介に救われる事はないだろう。そう思ひほど、ヒューリーゼの優しさに感謝した。

* * * * *

「ナハティガル！」

ようやく見つけた制御室に入ると、そんな叫び声が聞こえた。

階段から下を覗いてみると、ヒリーゼとドロッセルが居て、ミラが男ナハティガル王だらうに斬り掛かっていた。だけど、ナハティガルは腕で剣を受け止め、その剣を握りしめた。そしてミラを壁に叩きつける。

「貴様のような小娘が精霊の主だと？ この程度で笑わせる！ 儂はクルスニクの槍の力をもって、ア・ジユールをもたいらげる！」

ナハティガルが言うと、ジユードは階段から飛び降りた。

「それでカラハ・シャールを……！ どうしてこんな非道い事ばかり……」

「下がれ！ 貴様のような小僧が出る幕ではないわッ！」

ジユードに叫んだと思ったら、握っていたミラの剣を持ち直した。悪い予感がした。そして、考えるより早く身体が動く。

刹那

「貴様などに、我が野望が阻めるものか」

ミラに向かつて剣が投げられた。

もう駄目か……。そう思った瞬間、投げられた剣にナイフが当たり、軌道が逸れて壁に突き刺さった。

「イルベルト、貴様か……！？」

ローエンはバーミア峡谷の時と同じ魔法陣に乗っていた。ナハティガルがローエンに何かを言つけど、ローエンは一瞥するだけだ。

「イルベルト……？ 歴史で習つた、あの『コンダクター指揮者』イルベルト！」

？」

見ると、ジユードとアルヴィンも驚いた様子だった。つと、今の内にエリーゼ達の無事を確認しないと。

エリーゼに駆け寄ると、泣きそうになりながら抱きついてきた。

「エリーゼ、無事か！？」

「わたしは大丈夫です……」

「お嬢様も、無事で何よりです」

魔法陣から降りたローワンも、ドロッセルにそう言っていた。

「逃がさん！」

安心していると、またミラの叫び声が聞こえた。視線でミラを追った時には、既にナハティガルの姿は無く、閉じようとしていた扉にミラが飛び込んでいた所だった。

「//＼＼－＼＼＼－－」

ジユードが叫びながら扉を叩くけど、何の反応もしない。

俺もほとんど勢いで剣で斬りかかると、ガキン！－！と鈍い音がして、剣が真っ二つに折れてしまった。

「皆さん！ これからこの要塞の動力を焼きります。そつすれば扉も呪帯の問題も解決する筈です！」

ローワンが提案して、みんなが集まる。

「でもよ、こんな大きい要塞だぜ！ 焼き切れんのかよ？」

「皆さんのマナを使えば何とかなると思います！」

「待ってくれ！俺、マナとか扱えないんだけど……」

「大丈夫だよ。クレインさんを助けた時と同じようにやれば

だから、その『助けた時』が分からんんだっての！

俺の意見は通らずに、ローエンは魔法陣を展開させた。そこにマナを流し込むんだろうけど、俺はやり方が分からなかつた。みんなが手を掲げるから、それに倣つてマナを出すイメージをする。けど、正直上手くやれている実感は無かつた。

「くつ……6人も居るのに……焼き切れないの……？」

ジュードが呟いた瞬間、爆発音が響いた。

……何があつたんだ？ ミリ、大丈夫なのか！？

「ティポ！ 起きて！ お願い！」

エリーゼが泣きながら抱えたティポに叫ぶ。

そしてエリーゼの呼び掛けにティポが目を覚ました瞬間、魔法陣にマナが溜まつた。

バチイッ！ と何かが焼き切れる音がして、閉まっていた扉が開いた。

それを確認したジュードが先に走り出し、後に続こうと足を動かすと、何故か身体から力が抜けていく感覚に襲われた。

今までと違うのは、気絶する程ではないと言つ事だ。

「カイト！」

「またかよ！」

「大丈夫！ 早く行こう！」

回復が早かつたから、すぐに立ち上がってジユードを追った。制御室を出てすぐに、ジユードとミラの姿が見えたけど、

「なん、だよ……」れ……」

ミラの姿を見て、第一声がそれだった。

全身大火傷で、足はもう……見るのも無理だつた。ジユードが悲痛な声を上げながら治療して、エリーゼも協力するけど、治るとは思えなかつた。それ程、絶望的な状態だつた。

そして、追い討ちをかけるように兵士が集まつて來た。

「これ以上は無理だ！ カラハ・シャールに戻るぞ！」

仕方なく、2人は治癒術を止めて、俺とアルヴィンが協力してミラを運び出す。

「ゴーレムを起動させろ！」

そんな声が聞こえてきて、石像のような大きな人形が動き出した。俺達は間一髪で、来た時に確保していた馬車に乗り込んでいて、逃げる事が出来た。

……ミラの力になりたいなんて言っておいて、何も出来なかつた。
敵を斬る事も……。

馬車に揺られながら、血が滲むほど歯を食いしばつていた。

* * * * *

カラハ・シャールに着いてから、すぐに俺とアルヴァインでベッドに運んで、医者を呼んだ。

医者の診察によると、今夜が峰らしい。

「ミラ……大丈夫かな……？」

雰囲気から、大丈夫とは無責任に言えない。

「ミラ君死んじゃうのー？」

ティポも心配そうにそつと声をかけ、誰も反応は出来なかつた。とりあえず今日は時間も遅いという事で、みんな休む事になつた。ジユードは医者に代わってミラに付きつきりらしいけど。俺は一人で外に出て、夜空を仰いだ。

「……いつも逃げてばかりで、肝心な時も役立たず……か……」

こんなんで、よく他人の力になりたいだの言えたな。
もしちゃんと戦えていれば、もしマナを操る事が出来ていたらと、「ならば」を無意識に考えてしまう。

「カイト……」

「！？ ハリーゼか、どうした？」

いきなり声を掛けられ振り返り、話しかけてきたエリーゼを見た。泣きながら治癒術を使っていたから、疲れて眠つてゐと思つた。

無言で俺の隣に来て、俺をちらちらと見てきた。

なんか……落ち着かねえ。

どうしたんだ？ と尋ねようとするとい、突然ティポが喋った。

「何を考えてるのー？」

「……です」

「え……」

今度はちゃんと俺の顔を見上げていた。

エリーゼにも悟られる程、俺は思い詰めた表情をしていたのか？

「……俺って無力だなって……」

誰かに言いたかった事を、エリーゼに話していた。

「俺はエリーゼみたいに治癒術が使える訳でもないし、ジユードみたいに勘も鋭くない。アルヴィンみたく戦力になる訳でもないし、ローエンみたいに精霊術を操る事も出来ない。ミラみたいに……自分の使命を成す為の信念も……無い。俺はただ、みんなの後ろでガタガタ震ってるだけだ……」

エリーゼに何を言つてゐんだろうと思つても、一度溢れた感情は抑えきれなかつた。

「何が力になりたいだよっ！ 守られてばかりで何も出来ない俺が！ 他人の力になんてなれる訳無かつたんだ！」

涙と一緒に、そんな言葉が出てきた。

すると、不意にぎゅっと手を握られた。見ると、エリーゼが両手で俺の手を包んでいた。

「……カイトは、わたしを連れ出してくれました。嬉しかったです」
「友達にもなったしねー」
「はーー！」

予想外の言葉に思わず目を見開いた。

「……でも、エリーゼには危険な目にばかり……」
「違います！」

俺の言葉を遮るように、エリーゼが首を横に振りながら叫んだ。

「カイト、いつもわたしに言っています。わたしがどうしたいのかって。わたしはみんなと一緒に居たいから、だから……！」

だから危険な目に遭わせてる訳ではないと エリーゼは泣きながら訴えるように言った。

「ああ、こんな子まで泣かして……何やつてんだよ俺はー……」

「それに、カイトはいつもわたしを助けてくれます！」

微笑んで、力強く言った。

「……そうか、俺……ちゃんと人 エリーゼを支えていたんだ。力になれていたんだ。」

俺は軽く、エリーゼの頭を撫でた。

エリーゼが驚いたように見上げてきたけど、すぐに笑顔になった。

「……ありがとう、エリーゼ。おかげで、分かった気がするよ」「何が、ですか？」

「俺がこれからやりたいのか」

俺は無力だけど……まだ何もやつていないんだ。

なら、やるべき事は沢山ある。まだ……俺は強くなれる！

* * * * *

翌日、ミラは意識を取り戻した。だけビ、怪我の状態は深刻で、歩く事が出来ないと告げられた。

俺はミラにどう声を掛ければいいか分からず、部屋の前で右往左往してみると、中からジユードの怒ったような声が聞こえた。悪いと思いながらも聞き耳を立てると、その内容は、ミラはまだ使命を諦めてはいないと言う事だった。でも、ジユードはそれに反対しているようだった。

俺には何も言つ事は出来ずに、その場から去るしかなかつた。

また翌日、ジユードとミラはル・ロンドと町で旅立つ事になつた。

ル・ロンドはジユードの故郷で、そこにならミラの足を治せるかもしれない。そういう理由だった。

「すまないな、馬まで貸してもらつて」

足が動かないミラの為に、クレインは馬を貸し出していた。
これなら海停までそう時間は掛からないだろう。

「カイトも、本当に来ないの？」

ジユードが俺を見ながら問い合わせてきた。

今この場には、アルヴィンは居ない。どうやら新しい依頼人が見つかって、それをやつているらしい。

エリーゼはカラハ・シャールに残る事になつた。引き取り手には申し分ない訳だしな。

「ああ、俺はここでやる事があるからな」

「そつか……」

「そんな顔すんなよ。やる事やつたら必ず……必ず行くから

「……うん、分かつたよ」

納得してくれたらしく、笑顔で頷いた。

「ジユード、ミラ、……」

「エリーゼ、またな」

「元氣でね」

さすがに別れは悲しいエリーゼは、もう涙目になつていた。

「ローエンも、クレインさんもドロッセルさんも、お元氣で」

「また、何かあつたら来てください」

「何も無くても来ていいからね？」

「ジユードさんもミラさんも、お元氣で」

そして、2人はカラハ・シャールを出発した。

そして2人が見えなくなつてから、俺は深呼吸をした。
これから成すべき事をする為に。

「ローエン、無理を承知の上で頼みたい事がある
「改まつて、何でしようか？」
「俺に 戦い方を教えてくれ」

第1-3話 強くなる為に（後書き）

少し懶^{だら}れず^{だら}おましたが、これで自分の中での第2部が終わりました。

次回はいきなり1ヵ月程時間が飛びます。

ちなみに、自分の中の第1部はニ・アケリアから再び旅立つ所でした。

間隔短いとか言わない！

主人公設定2 兼 術技追加（前書き）

強化後の主人公の説明です。

主人公設定2 兼 術技追加

『西風海斗』

読み：にしかざ かいと

基本設定は変わらず。

使用武器：両刃直剣

変形 弓

特性：追加連撃…術技を自分流にアレンジし、追撃も行う

主人公。

仲間からはカタ力ナ表記で「カイト」と呼ばれる。

武器は新調した両刃直剣を魔改造して剣から弓に変形出来るようにした。どう改造したかは謎。

何故か靈力野ゲートもあり、精靈術も使えるようになつたが、地水火風の術はほとんど使えず、逆に氷雷光闇の術はトップクラスになつている。

（術技紹介）

・術技名

昇華術技名

『剣技』

・魔神剣

魔神剣・双牙

· 瞬迅劍

瞬迅回歸

· 虎牙破斬

猛虎豪破斬

· 真空破斬

龍爪旋空破

· 雷斬衝

絕破雷迅衝

· 綜雨衝

閃闇裂破刃

· 幻狼斬

天狼滅牙

· 魔皇刃

魔王雷擊波

· 絶冰刃

冰月翔閃

· 碎冰刃

幻魔衝裂破

· 穿光牙

崩雷殺

・凍牙霧影劍

『弓技』

・蒼破閃

蒼迅速破

・氷雨

氷雨亂雨

・閃裂空破
閃光衝墜

・神射鶴
輝凰旋

・虛空墜衝
虛影空臥

・ヴォルテックライン

グラスニードル

・フォルスエッジ
ブライトスルー

・アロー・レイン

『精靈術』

・ファイアボール

フレイムシユート

- ・ウインドカッター
- スラストファング
- ・ヴォルテックヒート
- ・アイススピイン
- フリーズハンター
- ・クラッシュユガスト
- フリジットコフайн
- ・ライトニング
- スパークウェブ
- ・ヴォルトアロー
- サンダーブレード
- ・デルタレイ
- フラッシュユティア
- ・ホーリィランス
- ディバインセイバー
- ・シャドウエッジ
- ブラッシュディクロス
- ・イベルスフィア
- ヴァイオレントペイン

主人公設定2 兼 術技追加（後書き）

術技はまたこれからも増えるかもしません。そこは未定です。

第1-4話 ル・ロンドの再会（前書き）

いきなり1ヶ月経つた設定です。

第14話 ル・ロンドの再会

「はっ！ 魔神剣！」

瞬時に剣を振り抜き、地を這つ衝撃波を繰り出し、それは魔物ボアに命中した。その一撃で、ボアは絶命する。

「ふう……」これであらかた倒したかな？」

辺りを見ながらそう呟いた。

よし、魔物は近くには居ないみたいだ。

「ありがとうござります。助かりました！」

隠れていた行商人がそつお礼を言つてきた。

「いや、気にしないでください。これも仕事なので」

苦笑いしながら言つ。

俺は偶然……でもないけど、このサマンガン街道で魔物を退治するという仕事を、わざわざ領主様から言い渡されていた。
まあ……実際のところは俺が頼み込んだんだけど……。

「カラハ・シャールに行くんでしたら護衛しますよ。俺、今はそこに住んでるんで。あ、もちろん無償ですよ」

「そうですか。それなら、お願ひします」

話もまとまって、俺は行商人をカラハ・シャールまで護衛する事になった。

* * * * *

ジューードとミラガル・ロンジに向かつてから、早くも1ヶ月が経つていた。あれから何の連絡も無いけど、治療が上手くいっている事を願うばかりだ。

そして俺はこの1ヶ月と言ひ時間、ずっと修行のような事をしていた。

まずローレンに精霊術を教えてもらい 異世界から来たのに何か靈力野ケトがあった 精霊術は使えるようになつた。

折れた剣もちゃんと新調して、さらにはそれを魔改造して弓に変形できるようになった。何故弓アーチなのかと言つて、アルヴィンとクレインの屋敷にあつた小説の影響だった。剣一本が弓に変形するってのが書いてあって、自分なりに工夫したら何か出来てしまった。その時のみんなの驚きようは少し面白かった。

あ、ちゃんとこの世界の言葉も勉強したんだ。とは言え、正直読むのはまだ辛いんだけど……。

剣術と弓術は我流。と言ひか、さすがにそれは教えてもらつ時間が無かつた。

だから、使えるようにするために、クレインに頼んで魔物退治の仕事を貰つていた。実戦だと、剣も弓も精霊術も特訓できるからな。

そんなこんなで、気が付けばもう1ヶ月だ。早すぎじゃね?

でも、1ヶ月前とは比べ物にならないぐらい、強くなれたと思つてる。心身ともにな。

「……」で大丈夫です。ありがとうございました

そう思い返していると、街に入つて少しした所で行商人が俺に頭を下げる。

俺も会釈で返して、行商人と別れた。

「さて、と……変に時間が空いたな。これからどうするかな……」

考えた結果。とりあえず、屋敷に戻る事にした。

その途中、広場にある装飾品の露店の前に、女の子　エリーゼの姿が見えた。

またドロッセルと買い物かなと思つたけど、辺りにはドロッセルの姿は見当たらない。

まあ……クレインの怪我がまだ完全に治つた訳じゃないから、代わりにドロッセルが忙しくなつてるから仕方ないけど。

「エリーゼ、何やつてんの？」

「カイト君」「そー」

声を掛けると、ティポがそう言つてきた。

「俺はひと仕事終えたから帰宅中かな。エリーゼは？」

「アクセサリーを見てました」

「何か買つたのか？」

「そ、それは……」

「カイト君のエチー！」

「何で！？」

すごい人聞きの悪い事を言われた！

アクセサリー買つた事を聞くとそつなるのか？

「兄ちゃん、聞くのは野暮つもんだよ？」

俺達のやり取りを見ていた店主が笑いながらそんな事を言つていた。

「野暮つて……。ま、いつか帰るか、エリーゼ？」

「ククと顔を赤くしながら頷いた。ギュッと抱かれたティポが締まつている。

何で？と思つたけど、どうやら聞くのは野暮らしい。とにかく、言つた通りに屋敷に帰る事にした。

「……カイトー！」

屋敷まであと少しこう所で、突然エリーゼが俺の前に立つて名前を呼んだ。

表情は、何かを決意したようだつた。その様子に、思わずたじろぐ。

「な、何だ？」

と尋ねるとほとんど同時に、エリーゼがティポを差し出してきた。いや、正確には、ティポの口に引っかかる透明なガラス玉のようなアクセサリーをだ。

「これを、俺に？」

「クククと力強く頷いた。

手に取つてみるとかなり軽い。

「友達の証だよー」

「……です！」

「友達の証……？」

ああ、そう言えば、エリーゼもドロッセルにプレゼントしてもらつてたつけな？

「ありがとな、大切にするよ」

俺がそう言つと、エリーゼは頬を赤くして笑つてくれた。
本当に大切にしないとな。

そうだ、確かに携帯には何も付いてなかつたし、いい機会だから携
帯に付けよう。

という事で、ポケットから携帯を取り出して付けてみた。
おっ、結構様になつてるような気がするな。

「それにしても、俺だけ貰つのもな。俺からも何か贈るよ

ここ最近は特訓しながら魔物と戦つたりもして、金には困つ
いないからな。

だけどエリーゼは、首を振つて「いりません」と言つた。

「いらないのか？」

「エリーはカイト君と居ればいいんだつてさー」

「ティボ！」

なんか、ティボが嬉しい事をポロッと言つたな。

嬉しかったから、エリーゼの頭を撫でつつ回した。

「嬉しい事言つてくれるな、ティポは」

「ならぼくを撫でてよー?」

「いやー、エリーゼ可愛いくからー」

何気なくそう言つてみると、豊がしかつたティポが固まつた。エリーゼ本人が固まつてこるのは言つまでもない。

……何か余計な事言つちやつたのかな?

「カイトさん、エリーゼさん、お帰りなぞませ」

どうしたらいいか分からずに慌てていると、そんな事が聞こえてきた。

声の方を見ると、ローハンヒドロッセルが居た。

「た、ただいまです!」

硬直から解放されたエリーゼが、ドロッセルに向かつて走つて行った。

「どうしたのエリー。顔真っ赤よ?」

「何でも……ないです……」

「カイト君がエチー」と一

「じでないからなー?」

ドロッセルがエリーゼを撫でながら、俺をジト目で見てきた。

ティポめ。良いこと言つなとか思つたのを撤回してやる。

「カイトさん、エリーゼさんはそういう事はまだ早いのでは?」

「どうこう事だよー? 僕は何も変な事はしてないって!」

じとー……。

みんながそんな視線を送ってきた。
俺がいつたい何をしたって言つんだろうか? ここの田一番悩んだ
事だった。

* * * * *

時は流れて夜になつた。

ふと夜空を見上げて、この星空をジユード達も見ていくんだろう
か? と、柄にも無くそんな事を思つていると、ローンの姿に気
づいた。

ローンも空を仰いでいて、何か悩んでいるようだつた。

「何か悩み事か?」

「まあ……じじいにも悩みはあるものですからね……」

冗談めかしてローンは言つたけど、その後にはやつぱり真剣な
表情をした。

「……ローン、偶には休んだ方がいいんじゃないかな? 僕が言つ
事じゃないけど、この1ヶ月ずっと休み無かつただろ?」

「……いえ、私は……」

「やつだ、ジユード達に会いに行こうぜ?」

そう提案すると、ローハンは驚いた様子だった。
そんなに意外だつたらうか?

「それにほり、ヒリーゼも会いたがつてゐるだろ?」

俺も強くなつた。今度こいつの力になれると思つ。

「明日、クレインに言つてみるよ」

「分かりました。お気遣い、ありがとうござります」

「気にすんなよ」

ありがとうとか言つてはいるけど、悩みが晴れた訳ではなかつた。
それは分かつたけど、少しは解決出来ればいいと思つた。

翌日、せつそくクレインにローハンの休暇を申し出てみた。

「確かに、最近のローハンは疲れているみたいだからね。いいと思
うよ」

とすぐにアコを得られた。

ヒリーゼにル・ロンド行きを話したら、笑顔で喜んでくれた。
やつぱり、ジユードとミリに会いたかったんだな。
ドロッセルに話すと少し寂しそうにされたけど、別に反対はなか
つた。

と書ひ紙で更に翌日、ル・ロンドに向かう事になつた。

「すこせさん、ル・ロンで行きの船つてこいつ出ますか？」

「もうすぐに出ますよ。乗りますか？」

「あ、はい。3人乗ります」

サマンガン海停ですぐにそいつ言われて、俺達はすぐに船に乗った。

「もうすぐで、ジユード達に会えるんですねー」

「ああ、そうだな。案外、もう歩けるようになつてたりしてな。＝＝

ラだし」

「そうかもー」

そんな他愛も無い話をしているとすぐにル・ロンでの船着き場に到着した。

「つひ……そいつがジユード達がどこに居るのか分からぬじやんか」

ノープランだったからなあ……。

「まあ、＝＝さんが出るのはおれいらへ病院でしうから、そいつを探せば見つかるでしょ」

「そうだな。じゃあ、行こうか……つてあれ？　＝＝？」

町の中に入るとと思つたら、いきなり＝＝ゼが居なくなつていた。

「え、＝＝ゼ！？　ヤバこどりじよう誘拐か！？　それともただの迷子！？」

「落ち着いてください。＝＝ゼさんなら先ほどあらひこ向かいましたから！」

「え、そなん?」

「はい。迎えに行きましょ!」

ふう……焦つた。ローハンが居なかつたら頭の中真っ白になつてた。

Hリー・ゼを追つて港の端に行くと、ジユードヒラヒト、後知らない女の子が居た。Hリー・ゼはヒラに抱きついて、ジユードはテイポにかじられていた。

……ヒラ、マジで立つてゐよー。すげーなのが精霊の主。

「Hリー・ゼ、何故?」

ヒラが不思議そうに問ひ掛け、Hリー・ゼは少し言葉を詰まらせた。

「//ハセカ、お見舞いにきました」

「ローハン、カイトもー?」

顔からティボを離したジユードが、俺達を見て驚いた。

「よ、ジユード、ヒラ、元氣ねうだな。まさかももう歩いてるとは思わなかつたけど」

「うむ、ジユード達のおかげだ」

言ごながら、ヒラがジユードと少女に視線を動かした。

「初めてまして、ローハンと申します」

ローハンが少女に自己紹介していたから、俺もしておこう。

「俺は海斗だ。よろしくな

「あ……ども……」

いきなりだったからか、少女は戸惑いながらも会釈した。
それからジユード達がル・ロンドで何があったのかを説明した。

「医療ジンテクスとこうのですか……。それでこの短期間に
「世の中にはすごい技術もあるんだな」

まあ……//ラが何かと凄いってのも、理由に含まれている気がする。

「みんな、しばらくここに居るの？」

「カイトさんのおかげで、旦那様にしばらく休むように言われました。エリーゼさんも//ラさん達に会いたいと申していましたし」「ぼくたちのせこじやないぞー。ローハン君がボーッとしてるからだぞー」

エリーゼも気付いてたのか。俺の時もそうだったけど、エリーゼつて結構人を見るな。

「らしくないな？」

「いえいえ。私も悩みはいっぱいありますよ。……少し、私も考えるところがありましてね……」

「ふむ。ゆっくりと話を聞いてやりたいところだが……」

//ラが言葉を切ってジユードに視線を移す。それで伝わったのか、ジユードは頷いて口を開いた。

「僕達、明日でもル・ロンドを発つつもりなんだ

それを聞いて、みんなが驚いていた。少女　レイアも驚いていたから、多分話してなかつたんだろう。

「そんな病み上がりの状態で……。イル・ファンにはいつたい何があると言つのですか？」

「クルスニクの槍と名付けられた兵器だ。あれだけは……あれがある限り、精靈人も破滅へと向かつてしまう」

「……ラ・シユガルの王様が作つたんですか？」

ミラが頷いた。

ガンダラ要塞での出来事で、エリーゼも予測ができたんだろう。

「イル・ファンを目指すと言う事はガンダラ要塞へ向かうと言う事。あなたをあんな目に遭わせた場所です。恐ろしくはないのですか？」
「そうだな……私にとつて恐怖があるとするならば、それは……使命を果たそうとする志の火が消えることだけだ」

あんな目に遭つてもまだ使命を果たそうとするなんてな……強すぎだる、ミラ……。

この1ヶ月、必死で強くなろうと頑張つていた俺とは比べ物にならない。

だけど、その強さを支える事なら、今の俺なら出来るかもしだい。

「何でミラ君がそんなに頑張んないといけないのかー！」

「私はマクスウェルだからな。世界を守る義務がある」

言った瞬間、みんなが目を見開いたのが分かつた。

そつか……みんな知らなかつたんだつけ？　まあ、確かに話して

る所は見た事ないけど。

……俺もみんなに言つたら、こんなに驚かれるんだりつか?

「マクスウホル、ですと……?」

「精靈の? //リガ……?」

「//リ……本当に……?」

「あんぐりー」

ティポだけ緊張感が無い気がしたのは氣のせいだな。

「ま、そんなの関係ないだろ? 僕達が知つてるのは精靈の主つてよりも、使命にいつも全力で、みんなを守つてやる//リだよ」「うん。//リは//リだよ」

俺とジユードがそう言つて、みんなが納得したように頷いた。

「それじゃ、外で話し込んでないで戻ろつか
「そうだな」

話が一段落したから、僕達はル・ロンドの町に行く事になつた。ル・ロンドはカラハ・シャールとは違つて、まあ一言で言つながら田舎だつた。

でもまあ、落ち着けるような場所だつた。

「じゃあ、僕と//リは//リだから」

「ああ、また明日な」

と、ジユードと//リは港に近い所の建物 マティス診療所と書

いてあつた に入つて行つた。

ああ、こいつてジユードの家か、もしかして。

「俺達は宿といらないとな」

「それならあたしの家に来てよー。町一番の宿屋なんだからー。」

と豪語したのはレイアだ。

「町一番ですかー。」

「じゃあ決まりだな」

一番とか言われたら、そりゃ テンションは上がるわ。
そんな訳で、レイアの家が経営していく宿屋に向かった。

* * * * *

宿屋 口・ランドの夕飯はかなり家庭的だつた。

「いいやー。食べ物を残すんじゃありませんー。」

「「「」「」めぐなさいー！？」

レイアのお母さんに怒られた。とさなか残した訳じやなく最後に
食べようとしてた物だつたんだけど、凄い威圧感でつい謝つてしま
つた。

……ベクトルは別だけど、ある意味マリリヨツも威圧感が凄い。主
婦つて凄い。

そんな調子で夕飯が過ぎていって、後は寝るだけの状態になつた。

「と言づか……何でこいつなつた？」

寝るだけの筈だったのに、何故か、本当に何故かは知らないけど俺は今、レイアのお母さん ソニアさんと宿の外で対峙していた。俺の手には木刀、ソニアさんの手には箒が握られている。

……事の発端はつい5分前。素振りでもしようかな」と思った俺が剣を持って宿屋から出ようとすると、偶然にもレイアに会つた。初対面だけど難なく接してくれるから、いろいろと話し込んでしまった。いつしか話はソニアさんの話になつっていた。何か、話を聞いていたところでもない人だという事が判明して、さっきの食事での威圧感はそれが原因か。とか納得しているとまさかの本人の登場。そしていきなり俺の腕がみたいと言いだし、今に至ると叫び訳だ。

……どうしてこうなつた！？

レイアに助けを求めるようと視線を動かすと、もの凄い爽やかな苦笑いをしてきた。どうやらもう無理らしい。

「さあ、いつでも掛かつて来なさい！ もちろん、手加減なんかしないように！」

「わ、分かりました……！」

手加減はない。さつきのレイアの話が本当なら、そんな事したら余裕で負ける。……全力でやっても勝てる気がしないけど。

それに木刀とは言え、相手は人だ。ガンダラ要塞の時以来だから、本気を出してちゃんと振れるのか、それが心配だった。

「じゃあ……行きます！」

木刀を構えて、深呼吸。そして 、

「瞬迅剣！」

距離を詰めるように瞬迅剣を放つ。

だけどそれは、1つ横に跳んで避けられた。

「なら」「ひとも、瞬迅爪！」

「！？」

態勢を立て直したその刹那、ソニアさんが箒の柄を突き出して突進してきた。間一髪で木刀で防ぐけど、俺の身体は後ろに吹っ飛んでしまった。

と言づか……何て威力だよ…？ 衝撃が強過ぎて、手が少し痺れる。

「くつ……モリハシ総兩衝！」

すぐに距離を詰めて無数の突きを繰り出すも、これもすべて紙一重で避けられた。さつきのと違い、今のは箒で防御もしていた。

「兎迅衝！」

突き終わってすぐの隙に、思い切り箒の柄で突かれた。ダジャレじゃなくて割とマジに痛い。

「まだやる？」

「次で……最後って事で……！」

そう言つて走り出し、ソニアさんの手前で、

「幻狼斬！」

素早く背後に回り込み、木刀で横に薙いだ。これは決まつただろうと思つたけど、何とソニアさんは避けていた。

「なら……天狼滅牙ッ！」

地面を殴りつけて衝撃波を放ち、両手を使って流れるように木刀を振る。トドメに再び背後に回り込み、斬りつけた。

「良い技持ってるのね！ ならこっちもー！」

「うわあ……元気でいらっしゃったよ？ あれだけの連撃を喰らわせたのに、何故に無傷！？」

そして、今「こっちも」とか仰つてませんでした！？

「活伸棍・円舞！」

持っていた箒にマナが纏つて、それを踊るように回してきた。避けようにもなすすべも無く、俺はボコボコに殴られてしまつた。

「何か……自信無くした……」

レイアに治療術を使つてもらつている時に、そう呟いてしまつた。俺、この1ヶ月で強くなつたと思つたんだけになあ……。

「お、落ち込まないでよー お母さんが規格外に強過ぎるだけなんだから！」

……だよな？ まあ、それで俺が強いつて事にはならないけど。

「でも、カイト、つて言つたつけ？ 基礎もちゃんとできるし動きも分かつてる。まだまだ十分強くなれる見込みはあるわよ？」「ホントっすか？」

それを聞いて、またやる気が出てきた。

「焦らすにじつくり、自分を強くしていきなさい」「はいっ！ ありがと」「わざこましたっ！」

深々と頭を下げた。

ボロ負けだったとはいえ、得るものは沢山あつたからな。

「カイト君、今日はもう休んだ方がいいよ。明日早いんでしょ？」
「あ、そうだった」

「うう」
そうだ。明日にはジュード達はイル・ファンに向かうためにル・ロンドを発つんだ。俺もそれに着いて行きたいからな。

夜遅くまで悪いな。とレイアに言おうとするが、レイアは何故だか少し寂しそうな表情をしていた。

そう言えば、レイアってジュードの幼馴染なんだっけ？ やっぱり離れるのは寂しいんだろうか？

そう思つた瞬間、俺も、幼馴染の事を思い出してしまつた。さすがに……心配ぐらひはしてくれてるよな……？ 帰つたら帰つたで、「学校サボるな！」なんて真面目な事を言われそうだしな。ま、帰れるのかそれ自体が謎だし。むしろ今までんまり頭の中に無かつた。

何はともあれ、ジュードと離れたくないんだなつてのは、何とな

あく伝わってきた。

「ジューードと離れたくないんだ？」

「なつーっ！」

言った瞬間、レイアの顔は真っ赤になっていた。

「隠さずとも、お主の気持ち理解しどるよ？」

「な……別に、ジューードがどうとかじゃないしー！」

完全にジューードで頭がいっぱいになっているらしく。俺が変な口調なのにツッコみどころか気付かずらじていなーい。

これは、ボケとしては失敗か？

「まあ、付いて行きたいなら俺はいいと思ひけどな

「そりなの？」

「自分の気持ちで嘘はいけないと思つからな。だから俺は、俺が思つた通りに行動する

「嘘……か……」

何か納得したように頷いて、レイアは家に戻らうとして、一度振り返った。

「ありがとね、カイト君。あたし、嘘つかないようにするよ

微笑みながらそう言つて戻つて行つた。

これはまた、人の力になれたのかな？

心の中で自問して、答えはでないまま、俺も宿に戻る事にした。

第1-4話 ル・ロンドの再会（後書き）

レイアが初登場しました。これでようやくパーティが賑やかになつたと思います（笑）。

次回は再び、あの巫子が登場するとかしないとか……。

ちなみに、今までチャットつてあんまり入れてなかつたりするんですけど、あつた方がいいですかね？ ちょっとしたアンケートですけど答えてくれると嬉しいです。

第15話 再集結 再出発（前書き）

チャットを入れるべきか入れないべきか…悩み所です（笑）

第15話 再集結 再出発

「朝ですよー！ 起きてくださいーー！」

ガンガンガン…！ と金属を叩く耳障りな音よりも大きい声がして、俺は目を覚ました。

「うあ……耳いてえ……」

扉越しとは言え、かなり耳に響いた。まさかこんな目覚ましまであるとは……完全に油断してた。

カラハ・シャルの屋敷に居た時は、寝る間も惜しんでいたから、今回のよつや休暇で気が抜けていたんだな。かなり熟睡していた。しばらく鳴り続けた金属音が止んでから、ブレザーを着て部屋の外に出る。

1階に下りると、もうローハンが起きていた。

「おはよー、ローハン」

「おはよー」やこます。予想外の目覚ましでしたね
「ホントだよ……何だつたんだ、あれ？」

まだ耳がキーンとしてる感じがする。

「いつまでも寝てたらそれが身に染みちゃうからね。それの予防よ
「予防つて……」

宿屋と並つよりも民宿のノリだな……。

そんな話をしていると、ヒリーゼが起きてきた。まだ眠そうに目を擦つている。

「おはよー、『ゼロ』ます」

「ああ、おはよー、エリー・ゼ」

「まだ眠いー」

見て一目瞭然だよ、それは。

「朝食の用意は出来てるわよ」

ソニアさんに言われて、俺達は朝食を食べる事にした。

朝食を済ませてから各自部屋に戻る所で、ジュード達がやつて来た。多分、もう行く気なんだろ。

軽く挨拶を済ませると、ローレンが本当に行くのかと尋ねた。もちろん、リリは頷いた。

「私には使命を果たす責任があるからな」

「責任、ですか……あなたは強く気高い。しかし、それが私の古い傷跡を抉るようです」

言いながら視線を落とした。

ガンダラ要塞で、ローレンは何のリアクションもしていなかったけど、ナハティガルは完全にローレンを知っている感じだったのを覚えている。

もしかしなくとも、2人は知り合いなのかもしれない。『コンダクター指揮者』って呼ばれていた軍師と国王だし。

「あれから私は悩んでいたんです。……今の私に何が出来るのか。ナハティガルを止められるだろうかと……」

「やっぱり、2人は知り合いなの？」

「友人です。とても古くからの」

友人ときたか……。それは悩んでしまうかもしれない。いや、単に軍師と国王の関係でも悩み所はあるだらうけどさ。互いに殺し合わなければいけない状況なら、友人の関係の方が苦しいと思つ。

「友と戦えるのか……それがお前の悩みか」

「えー！ 友達とケンカしなきやいけないの一！？」

ティポがあんぐりと口を開けて言つ。

「決断に必要なのは時間や状況ではない。お前の意志だ。私達と共に行かないか？ ローエン」

「ミラさん……」

「悩むのもいい。だが人間の一生は短い。時間は貴重なものだろう。なら悩みながらでも進んでみてはどうだ？ 人とはそういうものなのだろ？？」

ミラの言葉に、ジュードも賛成していつだつた。ローエンは微笑して口を開く。

「確かにじじいの時間はとても貴重なものです。立ち止っては勿体ない」

「それじゃあ……」

「はい。ぜひ同行させてください」

ローエンが頷いた。

俺もここで言つておかないとな。その為の1ヶ月だつたんだから。

「ミラー！」

「ん？ どうした？」

勢い余つて叫んでしまった。少しミラが驚いている。
一度深呼吸して落ち着かせて、まっすぐにミラを見た。

「俺も同行させてくれ

「え、カイトも！？」

ジユードに驚かれたけど、嬉しそうな感じだったから触れないで
おく。

ミラの返事を待っていると、何故か「ふふ」と笑われた。

「むしろ来ないつもりなのか？ 私はてっきり、勝手にでも付いて
くると思ったのだがな」

「え？」

予想外の展開に、俺は思わず言葉を失った。

「その為に、カラハ・シャールに残ったのだろう？」

その言葉で分かった。

ミラは……俺がどうしてル・ロンドに付いて行かずに、カラハ・
シャールに残ったのか分かつているようだ。

ははっ……強くなつた所を見せつけてビックリさせてやるうどし
たのに……まさか見抜かれていたなんてな。

「……ああ。だからミラ。俺は今度こそ、足手まといにはならない

よ

「また、よろしく頼む」

「カイトも付いて来てくれるなら心強いよ」

ジユードにも言われて、少し照れるな。

信頼されてるんだよな。この信頼を裏切らない為にも、頑張ろう。

「わ、わたしも一緒に行きます！」

氣を入れ直した所で、エリーゼがそう呟つた。

「ダメだよ。エリーゼは帰らないと」

「でも……」

ジユードに駄目と言われて、今度は俺に視線を移してきた。
まあ……そうぐると思ったよ。

「俺はエリーゼが決めたなら反対はしないよ」

「ちよつ……カイト！？」

驚くジユードを横田に、俺はしゃがんでエリーゼと視線を合わせる。

「エリーゼ、ミラ達と一緒に行くって事は、危険な目に 最悪死ぬかもしれない。それでも付いて行くのか？」

子供には少し酷な言い方をしてしまったけど、エリーゼは力強く頷いた。

「……は、はい！」

「そか、なら俺は全力でエリーゼを守るよ。それでいいだろ？」

立ち上がり、ハリハリとジュークで元気にな。

「そこまで言われると……ね」

「私は別に構わないよ」

2人が頷くと、Hリーゼとティボが嬉しそうに飛び跳ねた。

「それじゃあ、もう少し行くか

ジュークがそう言って、みんなで港に行く事になった。

あ、そう言えば、レイアはあれからどうしたんだろう？ 嘘吐かな

ないよ」と、ハリハリと語ったけど……。

「ジューク、レイアには挨拶したのか？」

「あ、まだだった」

「おこ……もしかして忘れてたのかよ？」

「ソニア師匠、レイア臣ますか？」

師匠って？ と、突っ込み方がない方がいいだろう。と言つたか、やけにジュークは戦い慣れしてると思ってたけど、原因はそれか。あの人ガ師匠ならそりゃ強いわ。

「レイアなら……もう言えば見かけてないわね？」

ええ……マジっすか！？

「カイトは何か知らないの？ 昨日遅くまで話してたみたいだけど？」

「へ？」「

ソニアさんが言つと、ジトーとジュードが視線を送つてきた。
何だよその視線は……って、何故にエリー・ゼまでそんな視線を
！？

「分からぬです。話してたのは『ソニアさんつえー』って内容
でしたので」

心当たりは無い訳じゃないけど、俺はそうしまかしていた。
ま、嘘じやないし。

とは言え、どこに行つたのかは俺も知らないのは事実だ。聞かれ
ても困る。

「まあ……居ないなら仕方ないですね」
「手紙でも書いてあげなよ？」
「は、はい……」

引きつった笑顔を浮かべながら頷いていた。

……何で？

ともかく、俺達は港に向かつたのだった。

港に行くまでも、結局レイアの姿は見られなかつた。

「あれ？ この船つてア・ジユール行きだけど？」
「はい、これに乗りましょう」

イル・ファンに行くならラ・シユガルの中で行くんだろうけど……

… そうか、海路は駄目だし、陸路もガンダラ要塞つて難攻不落の場所を抜けなければならぬ。

だからア・ジューールの方面からなんだろうけど……あっちの陸路つて何だっけ？ なんたら沼野つて名前？

「ジューード…」

そんな事を考えていると、背後からそんな声が聞こえた。それを言つたであろう人物は、慌てたように走つて来た。

「父さん……」めん、僕はミリヤ達と行きたいんだ

なんと、走つてきた人はジューードの父親だった。

「ダメだ！ 行かせるわけにはいかない。彼女は……お前が関わろうとしているのは……」

「おじおじ、オレ達どんな縁なんだよ」

ジューード父の言葉を突然遮つてきたのは、これまで意外にもアルヴィンだった。

「アルヴィン！？」

「新しい仕事クビになっちゃってな。カイト達が居るつて事はまた行くんだろう？ オレ、前に貰つた分の仕事してないぜ？」

前につて……一・アケリアの時のかー？ どれだけ昔の事を……。

「来てくれるんだね！」

「心強いな」

俺達がそう言つてゐると、ジューード父が「知り合いか？」と何故か焦りながら尋ねてきた。

「前に一緒に旅をしてたんだ」

それを聞いてまた驚いていた。
本当にこの反応は何なんだ？

「ヒリー・ゼ姫も行くんだよな？」

「当たり前です！」

「アルヴィン君バカにするなー！」

「いや、してねーから

姫ってなんだ？ と聞くのがと思つたけど、まあ何となく分かる
からいいや。

「とりま船乗る? 逃したら時間の無駄だしな」

「とり、あ……？ まあそうだな。カイトの通りだ。早く乗ろ
うか」

『とりま』が理解されなかつたのはさて置き、俺達は船に乗つた。
ジューードは父親と、走つてきた母親と何か話をしから来た。

* * * * *

「この船つてラゴルム海停行きだよな、イル・ファンに行くんじやなかつたのか？」

よもや乗つてからそんな事を言つとは……。

「乗つてから聞く？ ホント、アルヴィンつてそういうのこだわらないよね？」

「俺が来たのはエリーゼ姫のためだからな。どこ行くにも問題ねーの」

「いやーん、うれしー！ アルヴィン君は友達だねー」

「いや、お前じゃねーよ……」

「いやいやそれ以前に、エリーゼの為つて？」

そんなの初耳なんですけど？

「あれ、言つてなかつたか？ どうせ姫が行くの反対してるだろ？ から、危なくないよう姫を守らうかなーと」「いやいや、聞いてねえから……」

まあ、アルヴィンが一緒に守つてくれるなら心強い事この上ないんだけどな。

「カイトが守つてくれるからいいです

「ありや、つれないねえ？」

そこで何で俺を見るんだよ？

「といひでローハン。何故ア・ジユールに向かつのか、理由を聞かせてもらえるか？」

わけ

ようやく本題。と言つよつ、ミラがそう切り出した。

それに答えるように、ローハンは頷いて口を開く。

「端的に言つと、今のガンダラ要塞を突破するのは不可能だと思われるからです。以前、ミラさんが負傷され脱出を試みた時、ゴーレムの起動を確認しましたから」

あの時に動き出した人形みたいなのか。

確かに、あれを相手にするのは6人掛かりでも難しいだろう。

「けど、海路も無理なのにア・ジユールへつて事は……」

「ア・ジユール側から陸路で行くんだろ。確か、なんたら沼野つて

……」

「ファイザバード沼野か。でもあそこ、れいせい靈勢が不安定で有名じゃなかつたか？」

「だよね……」

名前だけしか知らなかつたけど、ジユードとアルヴィンはどういう所か知つてるらしかつた。

靈勢が不安定か……また大変な事になりそうだな……。

「変節風ブランが吹きましたので、現在は地靈小節に入りました。つまり、火場から地場ラームに入つたこの時期であれば、ファイザバード沼野も落ち着いている筈です」

「つまり……夏から秋になつたから大丈夫。みたいな解釈で合つてんのかな？」

「全然わかりません……」

「安心しろ、私もだ」

「胸張つて言うなよ……」

分からぬのは俺も同じだけや……。

「まあ、とりあえず問題なさそつて事でいいんじゃね？」

「んなアバウトな……。でも確かに、行けば分かるよな」

「はい。いって事です。時間もあまり残されていないようなので」

納得した事にしようとすると、最後にローハンがそう付け足した。

「なんでー？」

「ガンドラ要塞の「ローレムはあの時から起動したままでの情報を得ました。これは、ラ・シュガルが開戦準備を始めた証と捉えてよいでしょう」

さすがにこれは、軽い気持ちで聞けなかつた。

……近い内に戦争が始まってしまうかもしね。そういう事だる。

「ま、今戦争の事言つてたつて仕方ないな。目の前の問題を一つずつ解決してこいつせ?」

少し重くなつつある空気を和らげる為にやうやく、ジユードが笑つた。

「そうだね。僕達はクルスニクの槍を壊さないとだからね」「それが結果的に戦争を止める事に繋がりそつだしな」

ジューードとアルヴィンが乗ってくれたから、少し空気が和らいだ。

「ハカルム海停まではまだ少しあると書いた事で、とりあえず解散になつた。

特にやる事の無い俺は、甲板から海を眺めていた。

「そう言えば、カイトはどうしてカラハ・シャールに残つたの？」
「私も詳しくしりたいな」

同じように甲板に居たジューードが言つと、何故だかみんな集まつて來た。

「何でつて言われると……ちょっと説明じづらいんだけど。強いて言つなら強くなるつと思つたからだ」「強く？」

よく分からないと呟くと、ジューードが首を傾げた。

「今までずっと足手まといだつたからさ。ちゃんと戦えるよう口一エンに教えてもらつてたんだ」「そうだったんだ？」「いえいえ、私はただ精霊術を教えただけですよ

ローベンがそれを言つと、ジューードとアルヴィンが驚いていた。

俺が異世界から來たって知つてゐる3人だからな。俺に靈力野があるのが驚きなんだろう。

……まあ、俺自身が驚いたんだけど。

「と言う事は、カイトは精霊術を使えるって事が？」

「ああ、地水火風は全くだけど、氷雷光闇は上手く使えるよ。後やつたのは……文字の読み書きと剣術と『術だな』

続けて言うとまた3人が驚いた。

「そうだろう。

どこに『』があるのか分からぬ状態だからな。

「お前……読み書き出来なかつたのか？」

「そつちかよ！？」

「はい、カイトはアップルグミすら読めなかつたんですよ」

エリーゼエエツ！？ そこはバラすなよおおおツ！？

「お前ら読み書き出来ないぐらいでいじるなああツ！？」
「別にいいじゃないか。私も生まれてから14年後に読み書きを教わつたからな」

何でここでそんなカミングアウトを……。

「誰に教わつたのー？」

「もしかして……四大精靈とか？」

「四大以外に誰が居る？」

「巫子のイバルが居るだろ！？」

むしろ、「イバル以外に誰が居る？」って言つてやれよ… 可哀想じやないか！

「ま、まあ……これ以上読み書きの話すると、四大のイメージが崩れ去つていきますので……」

ローエンから話題変えるの企図が出た。じつはいつてんだ?

「もう一つ気になつたんだが……お前『』持つてないよな?」

「ようやくその話か」

「待つてたみたいに言つなよ……」

だつて本当に血漫したか?……ゴホンゴホン。話したかつたんだもん。

「『』はな、この剣が変形するんだ」

と言ひながら、俺は剣を抜いて実際に変形させてみる。ガシャンと音を立てて、剣は『』に早変わりだ。

これを見て、ローエン以外のみんなが驚いていた。

「精靈術に加えてこんなものまで修得していたのか

「1ヶ月の間に、凄いよ!」

そうだらうそだらう。とちょっと嬉しくなつてきた。

これでちゃんと実戦で役に立てれば努力は実つた事になる。

「なあ……それって、カイト自身の案か? 剣が『』に変わるつてのは」

「いや、違うけど。何てつたかな……」

「カイトさんが参考にしたのは、『創世紀』と言つ小説ですね

「どういう本ですか?」

「確かにそれって、賢者クルスニクと勇者ゴルティンの伝承の話だつたか。ああ……なるほどな」

アルヴィンが眞っ直ぐ、勝手に納得していた。

「僕も知ってる。けど……読んだ事はないかな……」

「勇者ゴルティンは、剣と弓を同時に扱うと伝えられていて、武器の形状はカイトさんのそれとほぼ同じなんですよ」

「つまり……同じ武器を使用しているのか？」

「同じ種類な。まあ、これは実は手製なんだけどな」

「「手製！？」」

叫んだのはジユードとアルヴィンだった。他の3人も驚いてる。

「カイト君きよーだねー」

「いや、器用つて域越えてるぜ？」

「私も何度も見させてもらつてましたが、まさか手作りだったとは……」

「カイト、凄いです」

予想以上に驚かれたな……。

そんな事をしていると、いきなり悲鳴が聞こえた。
見ると船員が積まれた箱の近くで腰を抜かしていた。

「どうしたんですか？」

「は、箱の中に……」

そう言われる、俺とジユードとアルヴィンが箱の中を確認すると

……「ん、何コレ？」

「何だ……」「りや？」

アルヴィンが同じ事を思つたらしく、そう呟いた。

「あはは……幼馴染……かな……？」

弓きついた笑顔を貼り付けたジユードは、箱の中で眠るレイアから目を逸らしながら言つた。

第15話 再集結 再出発（後書き）

今回出た『勇者』ルーティンは原作にもこの作中にも出てきました。オリジナルです。カイトが変形剣を使うようになった要因に出ただけですが、後々また名前が出てくるかもしれません。
と言つか……巫子は名前しか出なかつたなあ……。おそらく次回
はでるのでお楽しみに（笑）

第16話 歴史ある街（前書き）

共鳴術技のネーミングセンスを僕に下さい………（笑）

第16話 歴史ある街

「あはは……待ちくたびれてつい寝ちゃった」

ラコルム海亭に着いて、レイアの第一声はそれだった。

「そんな問題？　すぐ帰りなよ」

軽い様子で言つレイアに、ジュークが怒つたように言つ。でもレイアはそんな事お構いなしに、「あたしも一緒に行く！」と引かない。

「遊びじゃないんだって
「知ってるよ。ね？」

といきなり話を振つた相手は、何故かアルヴィン。すぐに「誰？」と首を傾げていた。アルヴィンも珍しく戸惑つ。

「アルヴィン君だよー」

とティボ。

そのおかげで、レイアはアルヴィンを君付けで呼ぶようになった。

「ね、いいでしょミリカ？　あたしも一緒に行つても
「そうだな……理由を聞こへうか？」

ダメだ。と言つと思っていたけど、特にそんな事も無くミリカが逆に問いかけた。

まあ、ヒリーの時もそんなに反対してなかつた気がするから不

思議でもなんでもないんだけど。

「鉱山で思ったの。あたしも//リ//リみたいに強くなりたいって」

「……それだけか?」

付いてくる理由が弱いと思ったのか、//リが問いかけた。レイアは首を横に振る。

「それにカイト君にも言われたからね。自分の気持ちに嘘はいけないって。だから、ほっこれ」

//リなり自分の名前が出て驚いていると、レイアが一枚の紙を//ラに手渡していた。

「細かい事はそれに書いてきたから、見て」

「僕達に付いてくる理由を?」

「そ、100個ぐらいにある」

「100個!?」

「いつたい何を書いたんだろうか? 僕が何かを言つた事が原因ならば、書いてある事は少しほぼ予想は出来るけど、100個とか推測も出来ない。」

//リは紙を眺めると、おかしそうに笑っていた。

「ふふ、わかった、一緒に行こう。気に入ったよ、人間らしくてな」

お許しが出た事で、ジューードは少し呆れた様子で肩を落とした。

「さて、お許しが出たところで、みんな、よろしくね」「

俺達と向かって立つて、片手を高々と上げて笑顔で言った。
そんな訳で、俺達の旅の仲間にレイアが加わったのだった。

「カイト……後でレイアと何話したのか聞かせてもらひからね？」「はつ……ー？」

話の途中で俺の名前が出たからなのか、レイアが付いてくる事になつた原因が俺にあるような言い方された。

……やっぱり、俺が言ったからだよな？ でもまあ、レイア自身がそう決めたんだから俺もジユードも口出しが無用だ。

そんな事は知る由も無いジユードに洗いざらい話したのはまた別のお話。

「なあ、ハーフトニー・アケリアの近くじやねーの？」

海停から出ようとしたその時、アルヴィンがふとそんな事を言い出した。

「そりなのかな？」

「寄つてかないでいいの？」

「今は村には用は無い。それとも、何か行きたい理由もあるのか？」

「いーや。みんなおたくを心配して、帰りを待ちわびてるかと思つてさ」

2人の会話に、何故か違和感を感じた。具体的には何なのかは分からぬけど……何となく、嫌な予感が過つた気がした。

「村を気に掛けてくれるのはありがたいが、今は急ぎたい」

「//アガリがそう言つと、アルヴィンが小さく「あつや」と叫つた。

「ラコルム街道を北に進むとシャン・ドゥと書つ街があります。まずはそこを目指しましょう」

「待つた。その街道つて、ラコルムの主つてヤバイ魔物が出没するんじゃなかつたか？」

「主か……。ああ……出合つたら面倒くさうだな。」

「よくぞ存じですね。ですがご安心を。ラコルムの主も靈勢の影響をうける魔物。地場ラコルムに入ったこの時期は、活動を弱めていて街道まで出てくることはないでしょう」

「だつてさー。アルヴィン君、ビビる必要ないよーー！」

「ビビつてないって」

「けど、もし出て来たとしてもこのメンバーなら大丈夫じゃないか？」

？」

みんな強いし。

「そんな、さりげなく自分強いアピールしなくていいんだぜ？」

「そんなんちゃうわー！」

まあ……少し強くなりましたアピールぐらいやつたって別にバチは当たらないよな？

「とにかく、ここに居ても仕方ない。行くぞ」

「//アガリがそう言つて、ようやく俺達は街道に向かつた。

* * * * *

順調にラコルム街道を進んでいると、ジューードが空を仰いで「アルヴィンの鳥だ」と言つた。

俺も見上げてみると、白い鳥が飛びまわっているのに気付いた。

「悪いな。すぐに終わるから休んでてくれよ」

と言つたで、一時休憩をとる事になった。

「わひと……この広大な荒野を写メに撮つておきますか」

ちょうどよく休めたから、俺はポケットから携帯を取り出してパシャリと撮る。

そう言えば、この世界に来て結構経つのに、携帯のバッテリーが全く減らないのは何故だろ？　ここに来てから一回も充電していない筈なのにな。

……まあ、気にして悩んでも分からぬから別にいいか。

そう結論付けて携帯をしまおうとすると、ヒリーゼから貰ったガラス玉が目に留まった。夕日で少しだけ赤く染まつたガラス玉がキラキラと光っているようで綺麗だった。

と、そこでガラス玉に何かが彫られている事に気付いた。

「ん~? 何て書いてあるんだ、これ?」

今でもまだ読み書きは勉強中、ってこともあって、何が書いてあるのかよく分からない。

エリー・ゼにでも聞いてみようか。

「カイトさん、どうかしましたか?」

悩んでいると、ローベンが話しかけて来た。

「ローベン、これに何が書いてあるか分かるか?」

携帯に付いたガラス玉を見ると、ローベンの視線はガラス玉では無く携帯の方に向かっていた。

「これは……なんですか?」

「えっ! ? これはえーと……な、何でもなくてな。俺が聞きたいのはこっち! 」

そう言えば携帯の事はローベンには話していないんだつた。

俺がガラス玉を指差して言つと、やつと視線がガラス玉に向いた。

「カイトさん、これは誰かからの贈り物ですか?」

「ああ、エリー・ゼからな。でも、何て書いてあるか分からなくてさ

……」

「そうですか

何故かローベンはおかしそうに笑っていた。

まさか……俺が読めないのをバカに……つて、ローベンはそんな人じゃないからな。

……じゃあなんですか？

「それは、『自分で読んだ方が良い』と思いますよ」

「そうなのか？」

問い合わせると頷かれた。

「間違つても、他人に聞いてはいけませんよ？ 特にエリー、ゼさんには」

「えつ……わ、分かった」

急に真面目な表情になつて行つたロー・エンに、少したじろいでしまつた。

そこでアルヴィンの用事も終わつたから、俺達はまた進む事になつた。

ホントに、何が彫つてあるんだろうか？ そんな疑問を残したまま、俺は携帯をしまつてみんなの所に走つて行つた。

「リリーリーおひれましたか～～～」

またしばらく街道を進み、ようやくもう少しでシャン・ドゥ、と言つ所で、頭上からそんな声が聞こえてきた。

そして、俺達の後ろに降つて来たのは、巫子のイバルだった。こいつどこから来たんだ？

「リリ様。そのお姿……再び立ち上がる事が出来たのですね

何事も無かつたかのように言葉を続けるイバルを見て、エリーゼは俺の後ろに隠れて、レイアは「誰なの？」とジューードに聞いてい

た。

「//様、足が治つたのであれば、ぜひ村へお戻りください。//様にまた何かあれば、俺は……」「私はイル・ファンに向かわねばならん。今は戻る気はない」「では、俺がお供を……」

『～イバルが仲間に加わった』

……なんて事には当然ならず、//は俺達がいるからと黙つてくれた。

「再び歩けるようになったのも、ジユードとレイアのおかげだ。彼らは信頼できる者達だ」

//からジユードの名前が出て来たからか、イバルはジユードを睨みつけていた。一・アケリアを出る時はそんなでもなかつたと思うんだけど……この1ヶ月の間に随分と反感を持たれたらしい。

「//様を治すという約束は守つたようだな」「うそ。約束通り、//を歩けるようになしたよ

そんな約束をしてたのか……一つ……？

「貴様の成果のように語るな！ //様のお力に決まっている！ くそー！ 僕が治すはずだったのにいい！」

と叫つか、ジユードへの怒りはただの嫉妬（？）だった。さりげなく響いた気がする。

「「」「」めん……」

「そりだ！ 謝れ偽物！ 謝つて死んでしまえ！」

なんかすげー言われよつだな……。

「偽物ですか！？」

「違うからねエリーゼ。信じたらいけないよ……」

ホント……純粋だな、エリーゼは。

「ジュー、ちゃんとお知り合いの方々は、あらゆる意味で個性的です
ね」

「……それって、俺達の事も入つてないか？」

まあ……否定はできないと思つけどな、このパーティー。…………つ
て俺もか！？

「イバル、お前には大事な命を『えた筈だ。何故ここに居るー。』

ミラがそう声を張り上げると、シコッ、バツ。と瞬間移動かと言
いたくなるような速さでミラの前に黙つて土下座をしていた。

「む、村の守りは忘れておりません。お預かりしているものも誰も
知らぬ場所に隠し、無事です！ しかしこの度は、このような物が

……

土下座をしながらミラに差し出したのは、一枚の紙だった。と言
うか……手紙？

「『マクスウェルが危機。助けが必要、急がれだし』」

「突然、俺のもとにこれだけが届けられ、ようやくミラ様を見つけ出したのです」

見た所差出人の名前は書いてないな。……怪しいとか思わなかつたのか？

「明らかに怪しいだろ？」「……」

「誰だろ？、こんなことしたの」

「さてな。どちらにせよ間違いだ。危機など訪れて……」

そこでミラの言葉が切れて、前を見やつた。
その視線のからは、もの凄い勢いでこちらに突進してくる魔物だつた。

「逃げる、イバル！」

「は……？」

俺達はすぐに魔物の進路から離れたけど、土下座をしていたイバルはまだ気付いていないようだった。このままでは、魔物に轟かれててしまう。

「間に、合えよッ？」

踵を返してイバルに駆け寄る。

立ち上がって後ろから来る猪のような魔物に気付いたその瞬間、俺はイバルを突き飛ばした。その時点で俺は避ける事が無理そうだから、剣を抜いて前に構え ガキン！ 剣で突進の衝撃を和らげた。

受け止めた事に一安心する暇も無く、俺は大きく尖った角で宙に放り投げられた。クルリと回転してバランスをとり、無事に着地す

る。

そしてすぐにイバルの安否を確認する。並に背を預けて座つてい
るけど、おそらく大事には至らなかつただろう。下手してたら死ん
でいたけど、それだけでホッとした。

安心した所で魔物との戦いに集中する。

「大丈夫ですか！？」

「ああ、なんとかな」

俺を心配したエリーゼが駆け寄つて来て、治癒術で回復してくれ
た。
よし、強くなつた俺の力を見せてやる。

「貫け氷閃！ アイススパイン！」

冷氣の一閃が駆け抜け、魔物に当たると氷の槍が姿を現し、魔物
に突き刺さつていく。

でも、残念ながらまだ続くぜ！

「そりにツ、フリーズハンター！」

貫いた魔物の周りに陣が描かれ拘束し、再び氷の槍が貫いていく。

「すごい……これがカイトの精霊術？」

「感心するのは終わつてからだ」

あの精霊術で倒せている筈は無く、魔物はまだ元気だし、そりに
小さい猪みたいた魔物を呼び出していた。

「数が多く過ぎるな……」

確かに、と思つけど、打開策は……。

「アルヴィン、やつてみるぞ!」

「仕方ねえ!」

アルヴィンと共鳴リンクして、敵と少し距離を置く。

「逃げ場は無いぜ!」

「ハチの巣だ!」

「「レイン・フィールド!-!」」

『』の形態にした俺は、マナを充填して空に放つ。同様にアルヴィンも銃弾を空に向かつて放つた。そして、無数の矢と銃弾が広範囲に降り注いだ。小さい魔物は射抜かれ撃ち抜かれ、次々に倒れていく。

それでも、大きな魔物　おそらく親玉　はまだ倒れない。

他の魔物を倒してもまた呼ばれるだけだから、親玉を倒さなければならぬ。

「ま、まだ立ってるよ!」

「慌てないでレイア」

「とは言え、次にあの数を呼ばれるとなるとさすがに辛いな

まだ魔物が立っている事に慌てだしたレイアをジユードがなだめると、ミラが呟いた。

「それなら、呼ばせないようごすればいいんですよ」

「それをどーすんだって話だろ、じいさん」

「何があるんですか、ローエン?」

ローハンが頷いた。

「行きますよ、カイトさん！」

「分かつた！」

合図すると、ローハンと共に鳴した。

「凍氷の檻に彷徨い！」

「終焉の刹那を告げる…」

「インブレイスエンド…！」

魔物の頭上に巨大な氷の塊が作られ、それが魔物の巨大な身体を押し潰すように落下した。落下した氷塊は、辺りの空氣すらも凍てつかせる。

巨大な魔物は身体の全てを凍らせていた。

「レイア、トドメ行くぞ！」

「任せて！」

「駆け抜けろ疾風！ 瞬迅風牙…！」

ミラが放つウインドカッターの風に乗り、レイアが瞬速の瞬迅爪を放った。

凍りついた魔物を貫き、魔物は粉々に砕け散った。

「みんな、無事か？」

「それはこっちの台詞だよ。一人あんな無茶して…」

戦闘が終わって無事を確認しようとしたらい、ジューードに怒られた。

「お、俺の無茶なんかミラに比べれば可愛い方だよ?」「む……私がいつも無茶をしていくるというのか?」

「//の//の一言は、全員がツツ「//を堪える事になつた。ティポすら何も言わないのは、ある意味奇跡に近い。

と言づか……何でそんな胸張つて無茶してません。とか言つんだろつかこの人は? 言つてみれば、無茶の塊みたいな人なのに……。

「とにかく、無茶しちゃダメですっ!」
「はい、『めんなさ』……」

「のまま怒られるのは嫌なんで、素直に謝る事にした。
Hリー・ゼ……怒ると結構怖いのかもしれない……。

「それにしても、地靈カラン小節に入つて地場ラームになつたら、おとなしくなるんじゃなかつたのか?」

俺が怒られているのをそつちのけで、アルヴィンが疑問を口にしていた。

「四大様がお姿を消したせいで、靈勢がほとんど変化しなくなつてゐるんだっ!」
「イバル……こつ之間に……」

でも、イバルの言つた理由は氣になつた。靈勢が変化しなくなつたつて事は……。

「ファイザーバード沼野を越えるのは……無理、か……?」「ファイザーバード沼野を越える? くくく……はーつはつはつはー……これは笑える」

「こうなってはワイバーンでもない限り、イル・ファンへは行けないなっ！ だが……巫子であるこの俺はミラ様のお役に立てるぞお！」

「どうやって？」

「俺にだけ扱えるワイバーンが一頭いる。ミラ様と二人でならイル・ファンへ行けるぞ」

「イバル、他に方法は無いのか？」

勝ち誇ったようなドヤ顔だったイバルは、ミラのその一言で何か躊躇いだした。

……他人事で見てるだけなら面白い奴だよな、イバルって。

「あるのだな。話せ」

「……シャン・ドゥの魔物操る部族が、ワイバーンを数頭管理していると聞きます！」

ミラの命には絶対とても言うように、俯きながらそつそつと語った。

「行き先は決まったみたいだな」

「このまま、シャン・ドゥに向かいましょう

「予定通りにな」

シャン・ドゥは通る予定だったし、ちょうどいいな。

「イバル、助かった。イバル……？」

悔しそうに俯くイバルを見て、レイアが「行こつか」と言った。このままここで立ち止まる訳にもいかないから、俺達は、イバルを残してシャン・ドゥに向かう事になった。

俺は何か声をかけてやるべきだったのもしれないけど、この時の俺は、何を言つていいか分からなかつた。

* * * * *

道中、いろいろとあつたけど、俺達はようやくシャン・ドゥに辿り着く事が出来た。

「ここのがシャン・ドゥ？」

「はい。ア・ジユールは古くから部族間の戦乱が絶えなかつたため、このような場所に街をつくつたそうです」

ローハンの説明で街を見回してみる。

シャン・ドゥは一言で言えば、谷に沿つて造られたような街だ。部族間の争い云々でこんな場所に街一つ造るとは……人間の力つて凄いなあ。

「人間が生き生きそているな。祭りでもあるのか？」
「確かに、普通の賑わいじゃないよな」

もし祭りなら……ふふふ、血が騒ぐな……。やっぱり日本人は祭

りが大好きだと俺は思うのですよ。

まあ……ここで日本人は関係無いけど……。

「見て、こっちも面白い像だよー」

レイアが少し先に行つて、石像を指差した。

「偉大な先祖への崇拜と、精靈信仰が同一になつたといわれる像だ」「へえ……なんか凄いな

「こいつ……迫力的なものが。何となく崇めたくなるような像だ。ちよつと手を合わせてみる。

「何やつてるんですか?」

「このお祭り的雰囲気がこの像を崇めと書つてこる。さあ、エリーゼも一緒に!」

「は、はい!」

慌てて合掌するエリーゼ。

何だか微笑ましいなあ……。

「……意味分からないうから

そんな俺達を見て、ジユードが呆れたよう言つていた。

「崇めるのはいいけど頭上には氣を付けひよー、偶に落石があるからな

らな

「えつ……ー?」

「ちよー！ 脅かさないでよー！」

見上げていたレイアがそう怒る。

俺はと言つと……何かテンション下がつた。落石怖い……。

「詳しそうな口ぶりだな？」

「前に仕事で、だよ」

まだ。また正体不明の違和感をハラとアルヴィンに感じた。

……あの2人、何があるのか？

そう考えていると、拝み終えたエリーゼが街を見まわしているのに気付いた。

「どうかしたか、エリーゼ？」

「ぼく、ここ知ってるよー。ねえ、エリー？」

「え、えと……ハ・ミルに連れて行かれる時に来たんだと思います

……」

ティポの言葉に、エリーゼがそう答えた。

ハ・ミルに行く前つて事は、もしかしたらこの辺りに住んでいたのかもしれない。ローハンもそう思ったのか尋ねると、エリーゼは分からないと言つた。

「ちょっとアルヴィン君、どこ行くの？」

そんな話をしていると、アルヴィンが単独行動に走っていた。

「ちょっと用事があつてな。んじゃ、そいつ事で

と去つて行つてしまつた。

「もー！ 協調性ないなあ」

「いいんじやないか？ こんな祭り気分だから1人突っ走つて行きたい気持ちは俺は分かるよ」

「……それはカイト君自身じやないの？」

そうだつた……。アルヴィンが「やつほー！ 祭りだ祭りだ！」とか言つてはしゃいでる姿は……想像は簡単かもしれないけど、あんまり想像したくない光景だった。

とりあえずアルヴィンとは後で合流する事になり、俺達はワイヤーバーンを探す事になった。

第16話 歴史ある街（後書き）

～今回の創作共鳴術技～

・レイン・フィールド

アロー・レイン+レインバレット

カイトとアルヴィンの共鳴術技。2人で空に向かって矢と銃弾を放ち、無数の矢と銃弾を超広範囲に降り注ぐ。

・インブレイスエンド

クラッショウガスト+ブルースファイア

カイトとローエンの共鳴術技。

相手の頭上に巨大な氷塊を作り出し、相手を押し潰すように落させる。落下させた後は回りの空気すらも凍てつかせる。

第17話 開催 関技大会（前書き）

どこかへんかもしけないです……どうぞ（笑）

第17話 開催 開技大会

アルヴィンと一曰別れた俺達は、とにかくワイバーンを探そう。と言つ事になり、とりあえず街を散策する事になった。

だけど、そんな時に事件は起こつた。

俺達の頭上にあつた大きな岩が、崩れてきた。

「ヒリーゼ！」

無我夢中でヒリーゼを抱えて安全な所まで跳んだ。

刹那 背後で爆発音にも似た音と共に、土煙が立ち込めた。

「大丈夫か？」

「はい……なんとか……」

「いきなりなんだよー！」

「うわあ……ティポが土煙で凄い事にー？」

「レイアさん、しつかりしてくださいー！」

そんな声が聞こえて、俺とヒリーゼは声の聞こえた方に向かつた。そこでは、レイアが倒れていた。でも意識はあるらしく、苦笑しながら「ごめん」と謝つてきた。

「今治療するから」

ジユードも駆け付けてきて、治療を始める。

「ローハン、怪我してる。「ごめんね……」

「これぐらい何て事はありません。それよりも、『自分の心配をなさい』

「そつだぞ。大怪我じゃなかつたにしろ、怪我には変わりないんだからさ」

幸い、捻挫とかそんなだろうか。とにかく出血はしていなさそうだった。

「医者よ。手伝つわ」

そんな時だった。1人の女性がこちらに走ってきた。
医者と言う女性の助けもあって、レイアは立ち上がるまで回復した。

「ありがとう。えつと……」

「イスラよ。気にしないで」

助けてくれたからか、何だか優しそうな人に見える。

「無茶をするな、レイア」

「まだ座つてた方がいいよ」

「大丈夫。ありがとね、みんな」

本当に、大事にならずによかつたよ。

「アルヴィン君めー！ こんな時に限つていないんだよなー」

突然喋り出して、イスラさんも驚いていた。

まあ、普通は驚くよな。エリーゼには悪いけど、こんな不思議な体を見せられたら……。

「アルヴィン君ならレイアを助けられたのにー」「年寄りだと思って失礼なー！」

珍しく、ローエンがティポを引つ張りだした。ぐよーんと伸びるその素材は、果たして何で出来ているのか？
それを見てレイアが笑う。もしかしたら、ローエンは笑いが取ったかったのかもしれない。場の空気を和らげるために。

「ローエン、何やつてんのぞ……」

ティポを取り戻したエリーゼは、心配そうに撫でまわしていた。

「イスラさん、本当にありがとうございました」
「イスラさんつて、いい人ね」
「いいのよ。気にしないで」
「そつは言つても、何かお礼を」
「！？…………あなた…………」

俺が言つと、イスラさんが何故か俺を見て驚いていた。なんだ？

「と、ところであなたたち、ここの人間じゃなさそうだけど、街には何をしに？」

頭を軽く振つたイスラさんが、そう尋ねた。

「ワイバーンを求めて來た。この街なら手に入るかと思つてな」「それなら、川の向こうに檻があつて、大きいのがいるわよ。行ってみてはどう？」

「本ですか！　ありがとうございます、イスラさん

やっぱり優しい人だった。

「ふふ、お役に立てたようね。それじゃ、私はこれで失礼するわね」
去っていく直前、イスラさんは俺を横目で一瞥していった。
ホント、何なんだ？ 初対面、だよな……？ たんに俺が忘れて
るだけって事もあるかもだけど……でも、会った事は無いと思つ……。

「イスラさん見つめてどうしたの？ あー、カイト君はああいつの
が好みなタイプ？」
「は？」

考えていると、横からレイアがそんな事を言つてきた。

「そうなんですか？」
「答えるー」

ええー……エリーゼとティポまで！？

助けを求めようとジユードに視線を移すと……あのやうう、目逸
らしやがったな。ならミラだ。と思ってミラに視線を移すと、「こ
れも人間の好みを知るチャンスだ。言つてみろ」とか意味分からん
事を口走つていた。ローエンにいたつてはもう笑つてるだけ。

……何この訳分からん状況！？

「さあさあ、もう観念しちゃいなよー」
「です！」
「はぐじょ'しろー」

「……仕方ない。答えてやるがいいじゃないか。わざと答えられるのは、この祭り的雰囲気のおかげと黙つ事にしておこう。

「俺はな、ああこいつ綺麗なお姉さんタイプじゃない
「そりなんだ？」ちよつと意外だね」
「俺はお前の中でどういうイメージなんだ？」
「じゃあ、カイトの好みは何なんですか？」
「んー、企業秘密って事で」
「なにそれー！」
「もつたいたいぶるなー！」

何故か怒られた。

「じゃあ、レイアとヒローゼの好みも言えよ~。
「え……」「
「俺だけ言つのはフロアじゃないからな」
「え、あー、あたしは……遠慮しどく……」
「わたしも……です……」
「エリーの好みはねー」
「ティボ！」

俺の案にすぐに2人とも動搖してこの話は終わってしまった。
いやー、助かった助かった。

「ど、とにかく、ワイヤーバーン見に行くんだろ？ 早く行こいわ

これ以上ここでたむろつていると收拾がつかない気がしたから、俺はみんなを促して、当初の目的であるワイヤーバーンの所に行く事にした。

ワイバーンは割とすぐに見つかった。檻に入れられても、迫力はスゴイ。本当にこいつに乗って空を飛べるんだろうかと思つてしまふ。

「へーへーへーー」

ティポが挑発するようにワイバーンの目の前で飛び始めると、ワイバーンのは怒ったのか口を開けて咆哮した。身を竦めたティポが、俺の顔面に噛みついてきた。

「は、はひふふはー！？（訳：か、かみつくなーーー！？）」

ティポを取るつもりとして手で掴み引っ張る。……って、あれ？ 取れない！？ ティポさん取れませんよーーー？」

「君達、何をするつもりだ？ そのワイバーンは我が部族のものだぞ」

ティポが取れなくて悪戦苦闘していると、誰かがそう言つた。視界が真っ暗だからどんな人が言つたのかも分からぬ。

「このワイバーンを手に入れたい。どうやって檻を破壊しようか考えていた所だ」

「ほんはほはひほはへふほほおー！？（訳：そんな誤解をまねく事をーーー！」

ああくそつ……ティポの所為でまともにシッコめないじゃないか！？

「……そつちの彼は……いいのか？」
「カイト……まだ噛まれてたんだ？」

誰か分からぬ声とジユードの声がとんできた。

仕方ないじゃないか。引っ張っても何故か取れないんだから。
これは傍から見たらどうなつてているんだろうか？ さながら『テ
イポ仮面』的な事になつてているかもしれない。ピンチに陥つたヒー
ローを助ける為に颯爽^{すがやう}と現れる謎の人物。その正体は身近に居た同
級生、みたいな？

……自分で思つてて、無いな……。第一に前が見えないから窮地
に立たされるのはこつちだし。助けに来て助けられるとかヒーロー
物ではナシだろ。

「ティポ、離れてー！」

「ふはあ……苦しかつたー」

「それはこつちの台詞だー？」

やつと解放されての第一声がツツコミだった。

ようやく現状を把握すると、現地の人人が3人居た。

「で、何の話でしたつけ？」

言つた瞬間、みんなが呆れていたのが分かつた。

仕方ないじやん！ こつちは話聞くだけの余裕は無かつたんだか
らさー。

「あの……ワイヤーバーンを貸してもうつ事つて、できませんか？」
「いきなり何を言い出すんだ」

改めてジューードが言うと、3人の内一人がそう言つてきた。

「こんなことしてると場合じゃない。早く代表者を見つけないと」

女性が言つて、閃いてしまつた。

「何の代表者ですか？」

「街が賑わっているだろう。これは10年に一度開催される、部族間の闘技大会が明日開催されるからだ。だが、我がキタル族は唯一の武闘派である族長が王に仕えているため参加できないのだ。伝統ある我が部族が、このままでは戦わずして負けてしまう……。だから代表者を探しているんだが……」

様子を見た限りじや見つかってないんだな。
なら、ちょうどいいじやないか。

「その代表者、俺達じゃダメですか？」 「はいはい！ 参加します！」

俺と同じ事を考えていたのか、はたまたただ的好奇心か、俺と同じタイミングでレイアが手を高々と上げて言つていた。

「こう見えて俺達腕立ちますし、もし優勝出来たらワイバーンを貸してください」

ダメもとの交渉だけど、そう提案してみた。

「分かった。だけど、君達の力を見せてもうつがいいか？」

「いいよな、ミラ？」

「うむ、ワイバーンを得るためにだ」

「やつたー。闘技大会なんて燃えるなーー！」

レイア……本当にただの好奇心だけだったのかよ……。

「少し目離しただけで面白そうな事に首突っ込みやがって。オレは仲間外れか？」

いつの間にかアルヴィンが居て、そう呟いていた。

「仲間か？」

「そうだぜ。これで全員集合」

「そうか。なら、空中闘技場に来てくれ。力を見たい」

そんな訳で、俺達は闘技場に行く事になった。

闘技場に着いてすぐに力を見せる事になつた俺達は、実際に舞台上に上がつて魔物と戦う事になつた。

「立派な舞台だねー！」

「これは、燃えるな！」

「2人とも……あんまりはしゃがないでね？」

舞台上に上がるなりテンショーンが上がつた俺とレイアだけど、ジュード達はそんなにテンショーンは上がりていなかつた。

「男の子なんだからさ、もつといふ、燃えてきたぜー！　みたいの無いの？　カイト君みたいな」

「ないよ、そんなの」

「ちょっと待て。何かそれ俺が変な人みたいじゃないか！？」

何か釈然としないけど、ちょっとエリーゼが気になつたから、俺は話を切り上げてエリーゼの所に行く。

「エリーゼ、大丈夫か？」

「何がですか？」

「いや、こういうの好きじゃないからさ……」

ただでさえ戦いが好きじゃないだろうに、ここでは見世物だからな。俺もあんまり戦いは好きじゃないし。

でも、言いだしつぺは俺だからそんな事も言つてられない。

「わたしは、大丈夫です。危ない事があつても、カイトが守ってくれますから」

「……そつか。そうだな。全力で守るよ」

エリーゼにそつ言われて氣合が入つた。

「そろそろ始めるが、準備はいいか？」

「ああ、構わない」

「私達は客席で見せてもらつよ」

そう言つて、ユルゲンスさん　さつきのキタル族の男性　は客席に向かい、同時に向こう側から魔物が現れた。見た目は強そうじやないけど、油断大敵つてな。

「エリーゼ、やるぞ！」

「分かりました！」

すぐにエリーゼと共にアーツ共鳴して、術技を放つ。

「冷氣を纏う玩具よー!」

「力チカチですっ!」

「「「チコチハンマー!」」

精靈術を唱えると、空から冷氣を帯びたピコハンが大量に降ってきた。魔物に当たると凍りつく。

「魔皇刃!」

俺は凍りついた魔物を、剣を大きく振りかぶってから地面に強く叩きつけて出した衝撃波で粉々に粉碎した。

「やるねえ、カイト」

「だろ?」

戦闘中だけど、アルヴィンとそりやつて会話も出来るぐらい、戦いには慣れていた。

「ジユードー! あたし達も負けでられないよー!」

「僕達は何と戦ってるのさ……?」

今度はジユードとレイアが共鳴した。

「「水迅舞い上^{れつ}がれ!
裂天旋^{せん}水^{すい}擊^げ!」」

ジユードが水を纏う超下段回し蹴りを繰り出し、レイアは棍を地面に叩き付けて竜巻を起こした。

「さあて、じつも決めるぜ、ミラ様ー。」

「了解した！」

また違う所では、ミラとアルヴィンが共鳴している。

「「歯み砕け！ 龍虎滅牙斬！」」

アルヴィンが振るう剣で龍が舞い上がり、2人で飛び上がって龍と共に衝撃波を叩きつけた。

さすがミラとアルヴィン。破壊力が凄まじい。

「ローエン、一緒に！」

「承知！」

そしていつの間にか、エリーゼとローエンも共鳴していた。

「「水流決壊！ テイポ爆水陣！」」

ティポから鬪気が放たれて魔物がダウンし、そこに水流が降り注いだ。

エリーゼ達が倒した魔物が最後だつたらしく、俺達は勝利する事が出来た。

「こざとなつたら出てこいつと思つておたが、必要ななかつたようだな」

戦いが終わつて武器をしまつていると、コルゲンスさん達が来た。

「あつたり前だよー！ えっへん！」

「すまない。君を見くびっていたようだ

その言葉は明らかにエリーゼに向かっていた。

まあ……仕方ないわな。

「ははは、誰が見たってそうだよな」

「むー……わたしの友達、バカにしないでください…」

「『めん』めん」

と言うかエリーゼ、あのセリフの対象はお前も含んでるよ。……
つて言った方がいいんだろうか？

「だが、それだけ厳しい戦いなんだ。かつては部族間の優劣を決める為に、相手を殺すまで戦っていた大会だ」

「…………」

「え？…………」

まさかそんな大会だつたとは……やっぱり安請け合いは禁物だつたか……。

あからさまに元気を失った俺とレイアを見て、ユルゲンスさんが口を開いた。

「今は大丈夫。現ア・ジユール王がその制度を禁止したからね」

「なんだ、良かった……」

「ア・ジユール王、いい人ー！」

ティポの言うとおり、いい人そうだな。

「それじゃ、本戦は明日だ。宿を用意したから、ゆっくり休んでくれ

「ユルゲンスさん、がそつ語りて、ひとまわす今日は宿屋で休む」となつた。

* * * * *

翌朝。宿屋のロビーに行くと、そこにはユルゲンスさん達の姿があつた。軽く挨拶して、さつそく今日の大会になつた。

「参加者の関係で、本戦は今日1日だけですべて行つ事になりそうだ」

「今日だけですか？」

「めひやくひやハードだな」

こつもほびのへりこなのは知らんけど。

「鐘が鳴つたら、闘技場まで来てくれ。それが大会開始の合図だ。私達は闘技場で待つてるよ」

そう言つて、早々に去つて行つた。

「時間が出来たみたいだけビ、ビーするよ?」

アルヴィンがみんなに問いかける。

「私は広場を見てくる。少し気になるのでな

最初に口を開いたのはリラフだ。あの落石地帯に何があるんだろうか？

「あ、あたしも行く。じつとしても緊張するだけだし」

そこにレイアが言つて、ミラフが頷いた。

「ん~、じゃあオレも行くか」

とアルヴィンも言つた。

俺はどうしようかな……普通に観光とかもいいけど……。

「カイト君、観光しようよー」

「わたしも、いろいろ見てみたいです」

「そうだな。観光しようか

頷ぐと、ヒリーゼが嬉しそうに微笑んだ。

「ジユードヒローベンはどうする？一緒に観光するか？」

「そうしようかな。僕もやる事無いし……」

「そうですね。観光しましょうか」

と言ふ事で、こちらも決まった。

鐘が鳴つたら各自闘技場に直行と言つ事になり、俺達の観光が始まった。

「さて……観光と言つてもビリーハー行こうか？」

歩きながらそう呟く。

さすがに全部は回れないし、あまり闘技場から遠い場所となると、鐘に気付かない。なんて最悪な事態になつてしまいかねない。

「そう言えば、エリーゼはこの街に見覚えがあつたんだっけ？」「はい、少しだけですけど……」

呟いて、街を見回した。

「それなら、何か思い出すかもしないから、やっぱり観光にして正解だね」

とジユード。

「そうだ。ずっと気になつてたんだけど、エリーゼとティポついつから一緒になんだ？」

一応ぬいぐるみだけど、あんまり汚れは目立たないし、何よりもあの伸縮性。あんなに伸ばしまくつてのに縮まるとかおかしくないか？

「忘れちゃつたー。でも、エリーゼとは研究所から一緒にだよー」

「研究所？」

「ティポは、研究所の人が連れてきてくれたんですよ」

研究所……エリーゼはどうかの研究所と何か関係があるのか？

一瞬、人体実験と言う単語が脳裏を過つたけど、エリーゼはいたつて普通の女の子だ。だからその考えはすぐに頭から消した。

「ローハン、研究所つて……」

「つーむ……」

ローハンにも心当たりが無いのかジュークが尋ねる。

「ローハン君は、いつもよりよくヒゲをやわらげてるよねー?..」

「いつしていると、落ち付いて鬱えがまとまるものだ」

よくやつてる人見かけるよな。いや……もちろん、実際に見た事は無かつたけども……。

「ティポさんもどうですか? ほら、みなさんも」

「いや……僕は……」

「俺も遠慮するよ。紳士の髭を触るのは恐れ多いから」

ローハン、普通に手入れとかしてやつだしな……。乱したりしちゃつたら悪い。

俺は遠慮したけど、ヒリーゼとジュークは少し触っていた。なんと云つか……シールやね。

ヒゲから手を離したヒリーゼは、そのまま黙つていた。

「どうした、ヒリーゼ?..」

そう尋ねると、ヒリーゼは俯いていきなり泣き始めた。

「ほ、本当にどうしたヒリーゼ?.. あ、あれか! 鬚の触り心地に感動したのか!..?」

「落ち付いてカイト!..」

「……お父さん……」

慌てていたそんな中、Hリーゼがそう呟いた。

「お、お父さん……？ 父親？」

「Hリーゼのお父さんにもヒゲがあつたの？」

ジューードの間に掛けこ、小さく頷いた。

「お父さん、お母さん、会いたい……」

……そうだよな。Hリーゼはまだ子供なんだ。いくら俺達が居て独りじやなくとも、両親が恋しくなるのは当たり前なんだ。Hリーゼが涙を流すそんな時、闘技大会開始の鐘が、街中に響き渡つた。

「Hリーゼさん、『家族がどこに居るのか思い出したのですか？』

ローハンが尋ねると、Hリーゼは泣きながら首を横に振つた。

「Hの街ならHリーゼさんを知つている人がいるかもしれません。Hリーゼさん達とお別れして、しばらく探しでみますか？」

「ローハンー？」

まさかそんな提案をするとは思わなかつたから、思わず声を出していた。

「みんなと、一緒にいい、です……。と、友達、だもん」「ぼくもHリーゼの友達だから一緒にーよー」

と、2人して即答して、俺は安心した。Hリーゼがティップに小さ

くお札を言つてゐる。

「それじゃ、闘技場に行こつか

「はい……がんばります

涙を拭いたエリーゼが力強く言つた。

一度軽くエリーゼの頭を撫でて悲しいのを紛らわせてから、俺達は闘技場へと向かったのだった。

第17話 開催 関技大会（後書き）

ああ……もうすこしでティポが、エリーゼが！　な展開になりますが、そこはオリジナル入れるつもりです。

（今回の創作共鳴術技）

・コチコチハンマー（氷）

アイススペイン+ピコハン
カイトとエリーゼの共鳴術技。
カツチカチに凍ったピコハンが空から大量に降ってくる。触れる
と凍結。

・裂天旋水撃（水）

転泡+風塵皇旋衝

ジユードとレイアの共鳴術技。風塵皇旋衝は勝手に追加させた技。
転泡で蹴った後に、風塵皇旋衝で巻き上げる。

・ティポ爆水陣（水）

ティポ戦吼+ブルースファイア

エリーゼとローエンの共鳴術技。

ティポ戦吼で吹き飛ばした後、水流で追撃する。

第18話 鬪技大会本戦、開始（前書き）

今回は短くなりましたが、区切りがいいかなと思ったので。

第18話　闘技大会本戦、開始

闘技場に急いで来ると、ユルゲンスさんが待っていた。

もうミハ達も来ているらしく、さっそく会流していろいろ話した。まあ……話すと長くなるからかいつまんで言うと、何とイスラさんとユルゲンスさんは婚約しているらしい。とか、実はアルヴィンの母親がここに住んでて、面倒を見てるのがイスラさんだとか。エリーゼが少し両親の事を思い出したりとか、そう言つ話だ。

話し終わり、受付を済ませて、ようやく大会かー。と意氣込もうとしたその時、こんな所で俺の不幸スキルは発動した。

「は……大会参加って……最高6人なの……？」

「すみません、そつなんですよー」

受付の人と言われて、みんなして絶句していた。

「こんな事聞いてないっすよ?」と言う視線をユルゲンスさんに向けると、「すまない、今年は参加者の関係でどうやら変更になつたようだ」と本当に申し訳なさそうに真面目に言つてきたから、俺もそれ以上何も言えなくなつてしまつた。

「え、じゃあ、誰が出る?」

「ここに出場しない人を聞かないのが、ジユードの優しさだろ?」
だけど、出場しない人は決まつてる。

「んじゃ、俺バスで」

俺がそう言つと、みんなが驚いたように俺を見た。

「いいの？ あんなに楽しみにしてたのに……」

「待て待て、人を戦闘狂みたいに言うな」

本当に、レイアの中では俺の認識はどうなつてるのか、一度問い合わせないといけないみたいだ。

「この大会は優勝しないといけない。負けは許されない。なら、この中で一番弱い俺が抜ければいいだろ」

例え強くなつたって言つても、どうしても埋められない経験の差がある。

なら最年少のHリーゼはどうなるんだって、話になるんだけど、何だかんだ言つてHリーゼも俺よりずっと強いからな。

「カイト……わたしの事、守ってくれるつて言いました……」「ウソ吐くのかー！」

2人に言われて、グサッと来た。
けど、これは仕方ないんだよな……。

「アルヴィン、お前Hリーゼ守るつて言つたら、頼んだ」「そうくると思つたよ」

予想されていたらしい。それはそれで何か複雑だな……。

「Hリーゼ、俺は観客席で見守ってるよ。守るつて意味なら同じだろ？」

「……分かりました。ティボ」

「へ？」

ガブツ！

視界が一気に暗くなつた。

「この感覚は……ティポに噛まれたか。

そう思つてすぐに、ティポは俺の顔から離れた。

「これで許してあげます」

「感謝しろー」

「あ、ああ……ありがとう、Hリーザ」

「……お礼も何かおかしい気がするけど、とにかくハリウッドでHリーザの頭を撫でていた。

「つて事で、俺は観客席からお前らの雄姿を[写真]に収めとへよ

「……シャシン？」

「あ……いや、田に焼き付けておくよー」

レイアに首を傾げられて、慌てて言ひ直す。
まあ……写メには撮るつもりなんだけどな。

「それでは、私とジユード、アルヴィン、Hリーザ、ローハン、それからレイアが参加だな」

「そうだね」

「Hリーザが受付に立つと、ようやく終わった。

「カイト、やんと見ててくださいね？」

「分かってるよ」

「Hリーザさん、私とアルヴィンさんでしっかり守りますので心配しないでください」

ローハンとアルヴィンが守ってくれるなら、心強い事この上ない
な。安心して任せられる。

「それじゃあカイト君。私達は先に観客席に移動しよう」「
あ、分かりました」

コルゲンスさんに言われて、俺はもう一度みんなを激励してから
観客席に向かった。

* * * * *

カイトに見送られてからすぐに、僕達は闘技場の舞台入口に案内
されて、出番を待っていた。

ミラとアルヴィン以外は緊張している様子で、特にレイアが落ち
着きなかつたけど、しばらくしてようやく出番が来た。

『続いて登場するのは、キタル族代表だ!』

言われてから舞台に出ようと前を見ると、大勢の人人がいる観客席
が視界に入った。

「こんなに大勢……」

「過度の緊張は、本来の能力を低下させると言ひ。気楽にだ、ジュー
ード」

緊張をほぐすための言葉なんだうけど、やっぱりそんなにすぐには緊張は解けない。

「それに、あの観客席のどこかにカイトが居る筈だ。本来の力を出せずにいたら、わざわざ出番を譲ったカイトに笑われてしまうぞ？」
「……うん、そうだね。カイトの分も頑張らないと」

そう考えれば、緊張もそんなにないかな。

ミラが先に出ていて、僕もそれに続くようにして舞台に出た。

『登録選手の中で魔物を操らない選手は彼らだけです。その実力はまったくの未知数。いかなるものなのかな？』

「え、魔物？」

人と戦うものだと思っていたのか、レイアがそんな声を上げていた。

驚いたのは僕もだけど、魔物相手なら遠慮する事は無いよね。

『おっと、ここで相手選手の登場だ！』

見ると向こう側から、魔物を引き連れた人が入ってきた。

僕達は武器を構える。

「よし、行くぞっ！」

そして、闘技大会が始まった。

* * * * *

試合が始まつてすぐに、俺はポケットから携帯を取り出してカメラを起動させて舞台に向けていた。

狙うはもちろん、みんなのカツコイい場面。特にエリーゼをいっぱい撮つておこう。

……とは言え、俺が携帯電話持つてゐるのを知つてゐるのはジードとミラとアルヴィンだけだから、エリーゼには直接見せてあげられないからな。それは残念だ。と言つたか、ジユード達にもこのカメラ機能は言つてないから、驚かれるとは思つけど。

お、ミラとローレンが共鳴^{リンクアーツ}術技使つてゐる。舞台から観客席までは結構距離があるけど、何故か音声は伝わつて来ている。

『塊根重圧！』
『全てを潰せ！』
『アドプレッシャー！』

地面に魔法陣が描かれた瞬間、見えない圧力が敵を押し潰していや、トドメに敵を打ち上げた。

おつと、これはシャツターチャンスじゃないか。まあ、シャツターは無いけど。パチリと写メに撮り、すぐに保存。そしてちゃんと保存されているかを確認する。よし、バツチリだ。

「そう言えば、対戦表見てなかつたんですけど、何戦あるんですか？」

ふと思つた事を近くで見てゐるゴルゲンスさんに尋ねてみた。

「やうだな。あの参加者数なら、3回勝てば決勝進出だな」

「3回ですか。なら、大丈夫そうですね」

あいつらなら、きっと勝てるさ。

そう思いながらエリーゼをパチリと『』メに収めた。よしよし、良く撮れてる。

それにしても、何でエリーゼはさつきからキヨロキヨロと観客席を見回しているんだろうか？ もしかして、緊張のし過ぎだろうか？ と、思つたら、不意にエリーゼの視線がある一点 僕の方に止まつて、距離がある筈なのに目が合つたのが分かつた。そして、エリーゼが二コリと微笑んだ。

まさか、キヨロキヨロしてたのは俺を探していたのか！？ なんていい子なんだろうかエリーゼは。感動し過ぎて撮影のボタンを連打してしまつた。

「はは……撮り過ぎた……」

結果、意味分からん画像まで出来てしまつた。なんだこれ？ いつたい誰の頭だよこれは？

「お、落ち着いたかい？」

あまりの事だつたからか、ユルゲンスさん達が若干引いていた。

「すいません、大丈夫です」

少し恥ずかしかつたけど、エリーゼはもちろんの事、みんなの画像を沢山撮る事に成功している俺に、もはや一片の悔いは無い！

まあ、別に死にはしないが。

「それにしても」ここまで戦うなんて。君達はどういう集まりなんだ？」

不意にそんな事を聞かれて、俺は考え込んでしまう。

確かに、今のパーティーメンバーは、医学生が1人、精霊の主が1人（単位：人でいいのか？）、傭兵が1人、無垢な女の子が1人（+喋るぬいぐるみ）、元軍師現執事が1人、看護師見習いが1人、異世界人が1人。

……あれ？ 何このパーティーメンバー……よくよく考えてみると意味分からん構成だな。と言つた、医学に関係している人が2人も居る事に今気が付いた！？

じ、じゃあ、メンバーじゃなくて旅の目的で考えてみよう。黒匣ジンつて危ない兵器を壊そうとしてるんだよな？ ……だから、

「……ええつと……せ、正義の味方？」
「正義の……？」

唚然とされた！

いやまあ、これが普通の反応か。自分でもよく分かつてないからすごい適当な事を言つてしまつた。

「そろそろ、決着が着きそうだな」

「え！？」

考えに耽つていたら、いつの間にか終わりそうになつてしまつていた。一応写メは大量に撮りはしたけど、なんかもつたいないな。とにかく、最後のトドメだけでも撮ろう。

そうやつて舞台にカメラを向けると、エリーゼとアルヴィンが共

鳴術技をしていた。

『行くぜ姫様！』
『分かりました！』
『癒しの光よ！』
『仇為すものを打ち砕け！』
『守護光封陣！！』

光の魔法陣を描き、仲間を癒すと共に敵を攻撃していく。
2人が倒したのが最後で、ミラ達は無事に決勝戦へと進む事が出来た。

カイト君、今回出番無しでした。ずっとヒリーゼを書いてました（笑）。

と言うか、ジユードとレイアも結構空氣だった……。

～今回の創作共鳴術技～

- ・アドフレッシャー（地）

エアプレッシャー + アリーヴェデルチ
ローハンとミラの共鳴術技。簡単に言つてしまえばエアプレッシャーの強化版で、最後に空に舞い上げるのはオリジナル。

- ・守護光封陣（光）

守護方陣 + ハートレスサークル

アルヴィンとエリーゼの共鳴術技。フェアリーサークルとほぼ同じ効果。ただし、回復よりも攻撃向け。

第19話 開技大会の陰謀

試合が終わり、すぐにロビーに駆け付けると、ミラ達が舞台から出てきた所だった。

「おつかれ、みんな」

「ああ！ 見事な戦いだつたよ」

ミラ達が勝つた事がそんなに嬉しいのか、コルゲンスさん達は結構テンションが上がっていた。

「決勝は、食事休憩をはさんでから始まるわ。他の参加者も一緒にから、落ち着かないかもしれないけど、食事にしておきましょ」

と、言われて、さっそく食事にする事になった。

おつと、移動する前に、

「エリーゼ、頑張ったな」

「はい、頑張りました！」

「ヨゴーだったけどね～」

俺が声をかけると、エリーゼは笑顔で俺に抱きついてきた。身長の関係で頭が俺のみぞおちにクリティカルヒットしたけど、ここは堪えるのが常識だろ？。……結構痛かったけど。

「オレが余裕つて言つた時にはウソ吐き呼ばわりだったってのに、どんな心変わりだ？」

もう先に行つたかと思つてたアルヴィンがそりゃつてきた。

「アルヴィンはもつと頑張つてもよかつたんですね」

「オレだってカイトの分まで頑張つてたぜ?」

「そつか、ありがとな、アルヴィン」

「ま、頼まれた事ぐらいはやるさ」

エリー・ゼを守ってくれって事だろうな。

「ほひ、オレらも飯食いに行こうぜ。カイトは腹減つてないかもし
んねーけど」

「いやいや、俺も観戦してて腹減つたから

「わたしもお腹空きました」

「ぼくもー」

ずっと不思議に思つてたんだけど、ティポは腹減つたとは言つけ
ど食つてる所見た事ないんだよな。

まあ……食つたらぐちやぐちやになりそうだけど。

そんな話をしながら、俺達も昼食を食べに行つた。

* * * * *

みんなでテーブルに着いて料理が運ばれてくるのを待つてゐる間、
俺は携帯で撮つた画像を整理してゐた。

さすがに撮りすぎた感じもあつたし、厳選してカッコいいのを残

したかつたのもある。何より整理しないと、フォルダがヒドい事になりそうだった。

「カイト君、何してんのー？」

そうしていると、ティポがいきなり話してきた。画面を覗き込んで首(?)を傾げている。

「何ですか、これ？」

ティポをどうじょうかと考えていたら、エリーゼも画面を覗き込んできて、反射的に携帯を折り畳んだ。

「何でもないよ」

「中にエリー達がいたよーなー？」

「それは気のせいだ、ティポ」

どう説明すれば理解してくれるか分からぬし、なら言わない方がいいだろう。

2人は納得してなさそだつたけど、携帯についていたガラス玉を見て、エリーゼが小さく声を上げた。

「これ……ちゃんと持つてくれたんですね？」

「当たり前だろ。エリーゼに貰つた大切な物なんだから。俺の宝物だよ」

俺がそう言つと、エリーゼが頬を赤くして微笑みながら、小さく「……ありがとうございます」と呴いていた。ティポも何故か恥ずかしそうに静かになつた。

この2人……シンクロでもしているんだろうか？ めぢやくぢやく

仲良いな。

「あれ、ジューードじうした？」

「いや、何でもないよ……」

座つてからそわそわしていたジューードに尋ねてみると、首を軽く振つてそう答えた。

多分、この空間に決勝の相手が居るから落ち着かないんだらう。

「ジューード相好みのめちゃ可愛い子だつたらどうする？」

「なつ！？　あ、相手がどんなだつて関係ないよ！」

アルヴィンの発言に、ジューードが顔を赤くして立ち上がつて言った。

「これは俺もからかうべきだらうか？　……いや、ジューードの好みつてミラみたいな芯の強い感じの女性っぽいし、もし戦う事になつても正々堂々戦うか。からかう価値ナシ。

「ははは…　それにしても決勝か…　本当に今までこれるとはな

「そりや、優勝するつて言つたしな

「カイト君は何もしてないよね！」

レイア、そこを突くんじゃない。出来れば俺だつて出たかったんだから。

そうしている間に料理が全員分運ばれ、ユルゲンスさんが「決勝も頑張ってくれよ」と言つてみんなで食べようとしたその時、慌てた様子でユルゲンスさんの仲間の男性が走つて来た。

まあ……ユルゲンスさんに用があるみたいだし、俺は俺で先に食べさせてもらおうか。

「！」の前の落石、事故じゃなくて事件だつたらしい

落石……俺達が被害に遭つたあれか。事件つて事は、誰かが人為的にやつたつて事か。

……何のために？

男性の口からも人為的に破壊された痕があると告げられた瞬間、ミラが突然立ち上がつた。

「食事には手を付けるなッ！」

ミラが叫び、その場に居た全員が動きを止めた。けど、もう食べてしまつた人もいるらしく、次々に椅子から落ちて床に倒れしていく。そして俺も、もう一口食べてしまつていた。

「ゲホッゲホッ！？」

「か、カイト！？」

「まさか食つたのか！？」

みんなが慌てる中、俺はとっさに吐き出そつとしたけど、突然の事だからか吐き出せないでいた。

「…………あれ…………？」

でも、意識が失われる事はなく、ほとんどいつも通りだつた。

「大丈夫なの？」

「分かんない……けど、大丈夫……かな……？」

ジユードに聞かれたけど、そつとしか返せなかつた。

「な、なんだ……」これは……

ユルゲンスさんが、倒れた人達を見て青ざめていた。

「僅かですが、この独特の木の実のような匂いはメティシア……間違ひありません。水溶性の毒です」

倒れた人に近付いたロー・エンが、そう判断した。

「みんなの食事に盛られてたって事！？」

「でも……カイト君も食べたよ？」

そう、それが謎だ。

こんな無差別に毒を盛るなら、本当に全員分に毒が盛られている筈。なのに何故、俺だけがこうして生きているのか？

まさか……俺だけ盛られていなかつた？

いつかジユードが言っていた、『他に可能性が無ければ、それが真実になりえる』と言う言葉が浮かんだ。

考えていたら、急に気分が悪くなってきた。

「まさか、決勝の相手が勝とうとして……」

「いや違う」

ミラが即座に否定していた。

「このような卑劣な手口を使う連中に、思い当たる節がある

そう言つた瞬間、アル・ヴィンが入口の方で何かを発見したらしく、
1人で走つて行つた。

「……いったい……何がおきてるんですか……？」

//「にしそう尋ねるエリーゼの声が、何だかやけに遠く感じた。レ
イアも続けてジューードに何かを問い合わせている。
さつきまでは大丈夫だったのに、今は意識が朦朧もうろうとしていた。
その原因が、突然の睡魔と言つ事に、意識が途切れる直前に気が
付いた。

* * * * *

目を覚ますと、見慣れない天井が視界に入ってきた。

「…………あれ…………ここは…………？」

身体を起こすと、アルヴィンに以外のみんなが居た。

「あ、目覚めたんだ」
「…………よかつたです」

起きた俺に気付いたジューードとエリーゼがそつそつとてきた。
「よく覚えてないけど、倒れたんだつけ？」

「カイトさんの料理にだけ、睡眠薬が盛られていたようです。死に至る事は無いので」安心を

睡眠薬……？ 何で俺だけに？

「カイトも起きた所で話すが、恐らくこの事件の首謀者はアルクノア」

「……アルクノア？」

聞いた事が無い単語が出てきて、みんなが首を傾げた。

「私の命を狙い続けている組織だ」

「……それじゃあ……さつきの毒は……」

「狙いは、ミラ一人だけだった……って事か？」

「死んだ者には済まないが……十中八九間違いないだろ？」

そんな……1人の命を狙う為だけに、関係の無い人まで大勢殺してたつてのか……！？

「無関係の人をこれほど巻き込んで……一体それは……」

「もとより何でもありの連中だったが、今回は特にひどい」

ひどい、なんて一言で済ましていいレベルを超えている。もう口の域だろう。

「どうして！？ 何で狙われてるの、ミラー！？」

「……私が、やつらの黒匣ジンを破壊し続けてきたからだ。奴らが20年前、黒匣と共に突如出現して以来な」

「20年前……」

「黒匣と共に出現つて……それじゃ、クルスニクの槍にも……黒匣を使ってるあれにも、アルクノアが関係しているの？」

ジューードの問いに、ミラが「確証は無いが出所はアルクノアだろう」と答えた。

「でも、今回の毒にしたつて怪しい行動してる連中なら田付くんじゃないか？」

「いや、見分けるのは難しいだろう。常に街の人間に溶け込んでいるからな。私もこれまで、黒匣が使われた際の、精靈の死を感じることでしか対処が出来なかつた」

それじゃあ、ミラにも無理なら俺達じゃ見分けるのは不可能かもな。

「あれ……精靈って死ぬのか？」

「どこの巫子が精靈は死なないって言つて無かつたか？」

「術を使う度に精靈を死に追いやる」

意外な事実に驚いていたのは、俺だけじゃなかつた。

「人間は精靈の力を借りて暮らし、精靈は人間の靈力野ゲートが生み出すマナで生きる。黒匣は一見、夢のような物だ。だが、黒匣は世界の循環を確實に崩す。黒匣が存在する限り、人間も精靈も安心して暮らしてなどいけない」

今まで俺は、ミラがクルスニクの槍を 黒匣を壊そうとする理由を勘違いしていたみたいだ。ここまで人間と精靈の事を考へてなんて、さすがだと思う。

「……私もまだまだですね……。そのような大事を全く知らなかつ

たとは……」

「知らなくて当然だ。人間に知られぬよう、私が1人で対処してきたのだから」

「じゃあ……今までずっとミラは……」

「世界の為に、1人でずっと戦つてたんだな」

「20年と言う長い年月を。……いや、精霊だから、20年なんかあつと言つ間かもしれないけど」

「だが、私が四大の力を失つた所為で、お前達人間を巻き込んでしまつた事になる。……すまない」

ミラが謝ると同時に、部屋の扉が開けられた。
そうか……まったく気にしてなかつたけど、ここつて宿屋か。
開かれた扉からは、ユルゲンスさんが入ってきた。

「あ、ユルゲンスさん、どんな様子だった？」

「あの場で助かつたのは、私達だけだったよ」

「そんな……」

あの場に居たのが全員で何人居たのかは分からぬけど、それでも結構な人が亡くなつてしまつただろう。

アルクノア……何でこんな事が出来るんだよ……！」

「それと……決勝は明後日以降に持ち越しになつた
「中止じゃないんですか！？」

ジユードが叫んで問い合わせた。

「大会執行部でもずいぶんともめたみたいだけど、10年に一度の

大会だからと……」

そう、だよな……。確かに人が死んで、祭りとか言つてる場合じゃないだろうけど、この街にとつて10年に一度の大事な祭り事だ。開催したいと言つ気持ちは分からぬでもない。

「アルヴィンさんは、まだ戻つてないのか？」

ユルゲンスさんがそう言つて、俺も今更気が付いた。

あの時、慌てたように走つてつたけど、どうしたんだらうか？
アルクノアに狙われたりしてないよな？

ローベンが頷いて答えると、「詳細が決まつたらまた来るよ」と言つて、ユルゲンスさんは退室して行つた。

「大会、辞退した方がよくない？」

「あ、あの……わたしもそう思います」

レイアとエリーゼがそう言つて、ミラが腕を組んで悩みだした。

「もう今日は休みませんか？ 色々あつてお疲れでしょう
「うん、そうだね」

重苦しい空氣の中、取りあえず今日は解散となつた。

* * * * *

翌朝、アルヴィンはまだ戻っていなかつた。それどころか、ミラの姿まで居なくなつていた。

泣きそうになつてゐるエリーゼの頭を撫でてロビーで待つてゐる
と、2人を捜しに行つていたジユード達が来た。

「ジニーに行つたんだよ、こんな時」

アルヴィンも、無事ならわいと戻つて来いよ。余計に心配にな
るだろ。

「従業員の話では、ミラさんは朝早くに一人で出て行つたそうです
「昨日の様子じや、一人で無茶はしないと思つけど」

ローハンとレイアがそう言つけど、

「ミラだしな……」

「……です」

「心配だよね」

「ま、こんな所で話し込んでないで、みんなで探しに行こうぜ」

と俺が促して、みんなで捜す事になつた。

宿屋を出ですぐの露店で、イスラさんを見つけた。レイアが挨拶
すると、じゅらじゅらに歩いてきた。

「昨日は大変だつたわね。でも、あなた達は運がいいわ
「運が良かつたつても、人が死んできますけどね……」

「『』めんなさい、失言だったわ」

済まなそうに『』をついた。

「あの……『』、見ませんでしたか？」

珍しく、エリーゼがそう言っていた。人見知り気味なエリーゼが自発的に人に話しかけるなんて、成長したなあ……。

「あら、あなたときちんとお話をるのは初めてね。『』さん、一緒にやないの？」

イスラさんは、近付いてエリーゼと田線を合わせる。

「1人でどうか行っちゃったみたいで……」

エリーゼが小さく頷いて、レイアがそう言つた。

イスラさんがエリーゼに視線を戻すと、「前にどうかで……」と呟いた。

「もしかしてイスラさん、エリーゼの事知ってるんですか？」

「エリーゼ……？」

気になつてそう聞いてみると、突然イスラさんが身体を仰け反らしてエリーゼから離れた。

「イスラさん？」

「い、いえ……違うのよ。その……私、ちょっと用事があるから、これで失礼するわね」

慌てた様子でそのまま去つて行つてしまつた。

「どうしたんだろうね？」

「ああ……せつかくエリーゼの事、何か分かるかもつて思つたんだけどな……」

ま、イスラさんは何か知つてそうだし、また今度聞いてみよ。アルクノアに不意を突かれいたら大変だから、俺達はまたミラ達を捜し始めた。

橋の所まで行くと、向こう側からミラとアルヴィンが来るのが分かつた。

「ミラ！ アルヴィン！」

2人を発見したジユードが、名前を呼びながら走り出して、俺達も後を追つ。

「どこ行つてたの？ 心配したんだからね

「ああ……すまない」

珍しく怒つたジユードに、ミラも少し驚いている様子だった。

「アルヴィンもだ。一人で勝手にどつか行つて。心配したんだからな

「心配してくれてたんだ？ お優しい事で

「アルヴィン！」

「そんな怒んなって。それよりも、エリーゼが何か言いたそうこしてるぜ？」

アルヴィンに言われてエリーゼを見ると、妙にそわそわしていた。

「あの……イスラさんが……わたしのこと、何か知ってるのかも……」

「イスラが……？」

ミラは不思議そうな表情した。

「エリーゼをまじまじと見た後……顔色変わってたから」「でも、逃げるみたいにすぐにどつか行っちゃったんだー」「ま、それは後で直接本人に聞いてみよっぜ。な、エリーゼ」「はい、そうします……」

エリーゼとそんな約束をした瞬間、闘技場の方から鐘の音が鳴り響いてきた。

「これって……闘技大会が始まる鐘……？」

「どういう事だ？ ユルゲンスさんの話だと、決勝戦は明日以降に持ち越しの筈だ。

……何かの罠つて、そんな可能性もあるかな。

「あんたたち、闘技場へ急いだ方がいいんじゃないの？」「鐘が鳴つたら、大会が始まるのよー」

俺達がじつとしていると、近くに居た街の人がそう言つてきた。

「延期になつたんじやなかつたのか……」

街の人たちがこいつ言つてる訳だし。

「もしかして、早く行かないと失格になっちゃつたり？」

昨日は反対していたレイアが、慌てて言つた。

「いいのか？ 大会の辞退を考えていたのだろう？」

「迷いながらでもやつてみるのが人間、そう言つてくださらつたではないですか」

「そもそも、優勝しないとイル・ファンに行けないだろ。約束したんだし」

「つむ、そう言えばそつだつたな」

忘れてたんだ、ミラさん……。

とりあえず闘技場に行こうと言つ事になつたけど、ジユードはその直前に街の人何かを聞いていた。

「あの、どうして僕達が参加者だつて分かつたんですか？」

「この時期に、よその街の人気が集まついたらそれは参加者か観客に間違いないよ」

「そんなのこじじゃジョーシキよ」

常識ですか……。

と言つたが、何でジユードはそんな事を聞いたんだ？ 街の人人が去つても、ジユードは何か悩むよつとしていた。

「どうしたの？」

「ごめん、何か頭に引っかかつただけ……」

レイアが尋ねると、ジユードがまだ納得していない感じで答えた。

さつきの会話のどこにそんな引っかかる所があつたんだ？
そんなジユードに引っかかりながら、俺達は闘技場へと急いだ。

* * * * *

闘技場に着くと、ユルゲンスさん達が居た。彼らもいきなり鳴つた鐘に戸惑っているみたいだ。

「来ててくれた助かった！ 執行部が急遽決勝戦を行つと言い始めたんだ」

「それに突然、前王時代のルールに戻すなんてことも言い出している」

その言葉にみんなが驚いていた。

さつきの鐘で決勝戦があるかもしない。とは思っていたけど、まさかルールまで変更とは……。

「前王時代のルールって……まさか！？」

「前に話した、相手が死ぬまで戦うというものだ。言つてなかつたかもしれないが、その上、この戦いは1対1で行われるんだ」

サシで勝負。……つて事にはならぬそつだな。

「どうする、ミリィ？」

「明らかに怪しきよな、これは」「つむ……ワイバーーンは必要だ。辞めるつもりはない。が、解せん
な」

「何故前王時代のルールで行つ」と……
「止めとけよ」

いきなりアルヴィンがそう言った。

「こいつは、おたくの命を狙つたアルクノアの作戦だ」「アルクノアの！？」

「あつれー？ なんでアルヴィン君がしつてんの一？」

ティポが聞くと、アルヴィンはバツが悪そうに後ろを向いた。
いいのか、ヒリカが問い合わせると、アルヴィンは「やつきの礼だ
よ」と呟いた。

2人の間に、何があつたんだ？

「アルヴィンは……アルクノアと関係している」「えつ……嘘でしょ！？」
「悪いな、仕事頼まれたりしてたんだわ」「マジか……」

驚きすぎて、よく分からなくなってきた。

「で、でも……何かワケがあつたんだよな？」
「……まあ、そんなトコだよ」

少しの間があつて、アルヴィンが答えた。
ちゃんと答えてくれてもいいじゃないか。仲間なのに……。
俯いてそんな事を思つていると、ぎゅっとエリー・ゼが手を握つて

きた。

驚いてエリーゼを見ると、不安そうにしていたけど、すぐに笑顔になつた。

……また泣かせる訳にはいかないよな。ちゃんとしないと。そういう決意も込めながら、手を軽く握りしめる。

「アルヴィン……まさか今回の事件……」

顔を上げると、ジユードが昨日の事件を聞いていた。

「あれはオレじゃない。オレだって食つてたら死んでた所だつたんだ。だから犯人もしらない。仕事つつても、小間使いにされてただけだしな。そう言えれば、カイトも食つてたのに何で大丈夫なんだ？」

「え……俺は毒じゃなくて睡眠薬だつたんだ」「何でまた……」

やつぱり、アルヴィンは仕方なくアルクノアに居るだけみたいだ。良かつた。

「なら、アルクノアの仕事はもうしないって約束してくれる？」

「わかった。誓うよ」

ほとんど即答に近い速さで、アルヴィンが頷いた。ジユードは良かつたと呟いている。

「アルクノアの作戦は分かるのですか？」

「あ、ああ……オレが聞いた話じゃ……奴ら、決勝のルールを変えてミラを殺す氣だ。勝つたとしても、疲労困憊になつたおたくを客席から狙い撃つ一段構えだとよ」

無差別に殺した奴らだからどんな作戦かと思つたら……前者は合法的に、後者は奥の手つて感じだな。

でも、気のせいか穴だらけだぞ、この作戦。ミラも同じ事を思つたのか、鼻で笑つて「私が出なければ簡単に挫ける」と言つた。ミラの言葉を聞いて、みんなが安堵の表情を浮かべた。

「だが……」のぐだりと眼にはまつてやつて。奴らを引きずり出してやる

「おこつー 正氣かよ？ 何で……」

一番最初に反応したのはアルヴィンだった。

「危険すぎます！ 命を懸けるなど、今回ばかりは賛成しかねます」「そうだよ！ 止めた方がいいって、ミラー！」

続けてローハンとレイアがミラを説得する。

「ミラ君が死んじゃうーー！」

エリー・ゼが領き、ティポがそう言つた。

みんな反対してる。当然俺も反対だ。ミラが危険つてのもあるし、何よりも他に嫌な予感がするからだ。

でも、アルクノアをあぶり出すには今しかないかもしれない。

「ジユードはそつは思つてないよつだぞ」

みんながジユードに視線を移す。いつもの思案ポーズで何かを考えていた。

「//ラを狙つて客席に現れたアルクノアを僕達に止めてほしい……そういう事でしょ？」

俺も考えはしたけど、街に溶け込むような連中を見つけられるのか。それが心配だった。

「普通ならいつ出でてくるか分からぬけど、今ならおびき出せる。理にはかなつてるよね」

「今ここで手を打つておかないと、次の手を考える時間を『』えてしまつ。そうすれば、もつと被害が大きくなる可能性も否定できない」

「の2人がやる氣なら、もつ変えられないだろ?」

「分かつたよ。俺もこの作戦に乗る」

「カイト!？」

驚愕の声を上げたのは、俺の手を握っていたエリーゼだった。

「//ラは俺達を信じて自分から圈を買つて出たんだ。なら、その信頼に応えるのが仲間の義務つてもんだろ」

せつかくあの//ラが俺達を頼つてくれるんだしな。

「では、行こ?」

//ラが頷きながらそう言って、決勝戦に臨む事になつた。

第19話 鬼技大会の陰謀（後書き）

次回は少しオリジナルだと思います。
アルヴィンの名セリフ（？）はもう少く入れますよ。

第20話 ハリー・ゼビ研究所（前書き）

今回は少しオリジナルが入っています。
そして相変わらず戦いが下手だ……。

第20話 エリーゼと研究所

ミラは闘技場の舞台の方に向かい、俺達は客席で待機しているらしいアルクノアを捜しに、散り散りになつて客席に潜り込んだ。

「エリーゼ、出来るだけ離れるなよ?」

「はいっ、分かつてます」

「シンパイシヨーだなー、カイト君はー」

もちろん、俺はエリーゼの近くに居る。嫌な予感つてのもあつたし、何よりこんなに人が居る場所に、エリーゼを1人にさせる訳にはいかなかつた。

とは言え、決勝戦だから観客の多さは昨日の比じゃないくらいだ。少しでも気を抜いたら、エリーゼ達を見失つてしまいそうだ。なにより、こんな人数の中、恐らく数人だろうアルクノアの連中を捜し出せるのか?

『最初に登場したのは、キタル族代表だ!』

アナウンスが入り、俺は無意識に舞台を見た。ちょうどミラが出てきた所だつた。その後すぐに、向かい側からアルクノアだろう対戦相手が現れた。

「ミラ……大丈夫でしょうか?」

「心配ないって。ミラなら上手くやるだらうしさ。それよりも、俺達が頑張らないと被害が大きくなる」

「……ですよね」

あ、しまつた。プレッシャーになる事を言つてしまつた。

「せうならなによつに、みんなも頑張るんだからさ。俺達も頑張ろ
うぜ」

今度はこくこくと小さく頷くだけだった。

仕方なく、俺は舞台に視線を動かした。

『昨日、不幸な事故がありましたが、大会執行部の努力により、本日の決勝戦が実現しました！ その上で、今年の決勝戦は公平に行うため、過去の慣例にならい、前王時代のルールとなります』

おいおい……公正に行つたために殺しを可にするなよ……。どうなつてんだよ、大会執行部は？

「あ……待つて……」
「え……？」

騒がしいほどの歓声に紛れて、エリーゼの声が小さく聞こえた。再びエリーゼに視線を戻した時には、もうエリーゼの姿は見当たらなかつた。

「！？ しまつたッ！？」

ひとりさに辺りを見回すけど、エリーゼらしき人影は見当たらない。すぐに捜そうとしても、人が邪魔で上手く走れない。
何やつてんだよ俺は！ ちゃんと守るつて言つたのに……いや、今はそつやつて腹を立ててる余裕は無い。早く見つけないと！
ようやく上手く身動きが出来るよつになつた瞬間、舞台から爆発音が聞こえてきて、不意に動きが止まつてその方向を見てしまう。
舞台では、対戦相手が何かの兵器を持って、電撃を放つていた。

//は避けると、地面が爆ぜていた。

「なんて威力だよ……あれが、黒匣^{ジン}……？」

「何、や、やめて！　返して！」

エリーゼの叫ぶ声が聞こえて探すと、見知らぬ男性がティポをひつたくろうとしていた。エリーゼはティポを手放さないように必死で引っ張っている。

「エリーゼ！」

伸ばされながらもティポも叫ぶが、相手は大人の2人掛けだ。とてもエリーゼみたいな女の子が勝てる相手じゃない。

くそっ！　何で俺はエリーゼから目を離してしまったんだよ！　ついにエリーゼが男性に押されて、ティポから手を離して倒れてしまつた。

「どうした？」

舞台の方から//がそう叫んだ。

「…………」

「ティポがさらわれたの！　エリーゼもそれを追つて！」

俺が答えられないでいる、レイアが代わりに言つていた。
舞台では爆発音がさらに増していくけど、それを気にしている余裕がなかつた。

ようやく、ようようと力なく立ち上がつたエリーゼに追いついた。

「エリーゼ、大丈夫か！？」

「ティポが……ティポが……」

泣きじゃくるHリーゼを落ち着かせようと頭を撫でるけど、一向に泣きやまない。

どうすれば……いや、ティポを取り戻すのが先決だよな。

「カイトー！」

あまりの事態に混乱していると、ミラが俺を呼んだ。

「ティポは任せた！」

「//に言われてハツとした。

「言われなくとも分かつてん。」

そう叫び返して、Hリーゼを抱きあげる。

「Hリーゼ、今からお前の友達を取り戻しに行くぞー！」

まだ泣いていて何も言わなかつたけど、小さく頷いたのが分かつた。

「アルヴィンー！」

ミラが今度はアルヴィンの名前を叫んでいた。

「奴らの狙いはお前じゃない、きっと初めからティポだつたんだー！」

走りながらアルヴィンの言葉を聞いて、俺は驚愕していた。

初めからティポだつたつて！？ 何で……。

「客席から狙つてる奴なんてのも、居なかつたんだ！ オレは知らなかつた！」

アルヴィンはアルクノアの小間使いとか言つてたから……本当の作戦を知らされていなかつた？

「2人の事、お前に任せる！」

リックのそんな叫びが聞こえてきた。

2人と言うのは、俺とエリーゼの事だらう。アルヴィンが居てくれれば心強い。

「お前しかフォローできる奴は居ない！ 頼んだぞ！」

「……どうなつても知らないぜ！」

アルヴィンが叫び返して、じつちに走つてきた。

「まだ遠くには行つてない筈だ。わつわと取り返そげー！」

まだ泣いているエリーゼを抱え直して、俺達は闘技場から出た。

* * * * *

無我夢中で追いかけた結果、俺達はシャン・ドゥの近くにある王の狩場とよばれる場所を抜けて、リーベリー岩孔という場所に着いた。

着いてすぐに、抱えていたエリーゼが俺のネクタイを軽く引っ張つた。

「どうした？」

「もう、大丈夫だから……降ろしてください……」

「本当か？」

とても大丈夫そうには見えないけど、小さく頷いたエリーゼを、仕方なく降ろした。

自分の足で立ったエリーゼは辺りを見回して、突然俯いた。

「どうした？」

「なんでも……ないです……」

エリーゼの様子が心配だけど、ティポを取り戻せば大丈夫だよな。

「ちつ……あいつら、どこに行きやがった！？」

「居た！ あそこだ！」

つり橋を渡つている姿が視界に飛び込んできて、俺はすぐに剣を抜いて弓に変形させる。

「絶対に逃がさないからな！」

「落ち付け」

矢をマナで作り出していると、アルヴィンが止めに入ってきた。

「なんだよ！ 早くしないとティポが！」

「そのティポも巻き込みたいのか！？」

「ツー？」

「今撃てば確実に仕留められるだろうが、つり橋まで落ちるぞ。いつもならそれぐらい分かんただろ？ それに、どんな理由であれ人を殺そうとするなんて、カイトらしくない」

確かに……頭に血が上り過ぎていた……。そんな簡単な事も、人を殺してしまった事も、何一つ理解が出来てなかつた。

「そんなどと、エリーゼが不安になるだろ？」

「……エリーゼ……？」

振り返つてエリーゼを見ると、少し怯えたよつとしていた。
……俺、またエリーゼを泣かせる所だつたな。

「ごめん、エリーゼ……。でも、もう大丈夫だから、怖がらないで」「……よかつたです……いつものカイトで……」

ようやく安心した表情になつて、でもすぐに表情は暗くなつた。それだけ、ティポの存在はエリーゼにとって大きかつたんだろうな。俺はエリーゼの頭を撫でてから、氣を入れ直す。

「よし、行こう、アルヴィン」

「ああ」

リーベリー岩孔の下層部の部屋のような所に、ティポをさりつた

連中が向かったのを見て、俺達はすぐにそこに向かった。

扉を開け放つと、中に居たのはティポをさらつた連中と、闘技場

でミラの対戦相手が持っていた武器と同じ物を持った兵士が居た。

俺達が来た事に特に慌てる様子も無く、誰かがふつ、と鼻で笑つた。

「ようやく來たか。ニシカザカイト」

「え……？」

前に出てきた1人の兵士がそう言った。
何で……こいつら、俺の名前を……？

「こいつに用があつたが、やはりお前も釣れたな
「ティポ！」

兵士が手に持つていたのは、ただのぬいぐるみになつたかのよう
に静かなティポだった。

俺を釣つた？ 何のために？

いや、今はそんな事どうだつていい。

「ティポに何をした！」

「データを抜いただけだ。もう用は無い」

そう言つて、兵士がティポを投げ捨てた。エリーゼが声にならない悲鳴を上げる。

「……アルヴィン、俺、もう我慢の限界だ……」

「そうだな。こいつらの目的も意味分かんねえし、これ以上はお前
と姫が心配だからな」

「サンキュー……」

短く礼を言つてから、俺は駆けだした。

刹那、兵器　おそらくは黒匣だろう

から電撃が放たれた。

紙一重で避けて兵士の懷に入る。

「穿光牙！」
せきりゅうが

引いていた剣に光を集中させ、突き出すのと同時に開放する。光は刃となつて、黒匣を貫いた。

「こいつっー？」
「崩雷殺ツ！」
「があああーー？」

囮まれそうになり、まだ剣に残るマナを雷に変換し、地面に突き立てる。すると、俺の周りを電撃が走った。

周りの敵を倒して　おそらくまだ息はある　から、俺はティボを拾う。

データを抜き取つたって言つたけど、何で動かなくなつたんだよ

……。

「カイトー！ 敵が逃げるぞ！」

さつき倒したと思つていた奴らが起き上がつていて、部屋の外に行こうとしていた。

まだ抜き取られたデータを取り戻してない。追いかけないと！

「ぐあつーー？」

そう思つていると、アルヴィンが敵の電撃を喰らつてしまつてい

た。

「！」…………かむいじどう神射鶏ツ！」

『』に変形させて、瞬時に溜めたマナを兵士に撃ち出した。吹き飛んで壁に激突する。

「アルヴィン、大丈夫か？」

「つ……オレはいいから、早く逃げた奴を追え！」

壁に背を預けていたアルヴィンに駆け寄ると、そう言われた。

「エリーゼはオレに任せろ……」

「……ああ、分かった！」

ひとまずアルヴィンから離れて、エリーゼの所に向かう。

「エリーゼ、必ずティップを元に戻すからな」

「……はい……」

動かなくなつたティップを手渡すと、ぎゅっと抱きしめた。

そんなエリーゼを撫でて、俺は逃げた兵士を追いかける為に外に出た。

相手は手負いの状態だったから、あまり遠くには行けない筈だ。その予想は正しく、一つ下 最下層に姿を見つけた。崖を飛び降りるようにして最下層に行く。

「お前、ティップから抜き取つた物を返せ！」

「そんなにこれが欲しいのか？ ふん……どうせこれはもう用済みだ。好きにする」

と、いきなり投げて渡してきた。これが本物かどうかは分からなけれど、とりあえず受け取つておく。

「ただし……生きて帰れたらの話だがな」「！？」

今ほどテンプレが恐ろしいと思つた事は無かつた。崖の上に、黒匣を持った兵士が5人ほどいた。

「抵抗しなければ命だけは助けてやろう、異世界人」「なつ……！？」

何で俺が異世界から来た事を知つてるんだ！？いや……それよりもまず……この状況をどうにかしないと……。

「……悪いけど、俺はあんたらと仲良くする気は無いよ。喰らいな、ヴォルテックライン！ グラスニードル！」

黒匣を構えている兵士に、電撃の矢を放ち黒匣を壊す。続けて複数の氷の矢を放射状に撃ち出し、他の3人の黒匣を破壊できた。けど、1人だけ当たらず、黒匣が放電を開始しようとしていた。

今から撃つんじゃ間に合わない。そう思つて目を閉じた瞬間、短い悲鳴が聞こえた。

おそるおそる目を開くと、俺を撃とうとしていた兵士が、ジュードに殴り飛ばされていた。

「大丈夫……みたいだね？」

「ジユードー？ 何でここに……」

予想外のジユードの登場に驚いていると、後からミラ、ローヘン、レイアが現れた。

「無事のようだな？」

「心配しましたよ？」

「良かつた、元気そうで」

「みんなも、何で？ つて、驚いてる場合じゃなかつた」

俺は辺りを見回して、深手を負つた兵士を捜す。だけど、何故かそいつの姿は見当たらなかつた。

「早く、アルヴィン達の所に行こいひ~」

「あ、ああ……そつだな」

何で俺の事を知つているのか聞きたかつたけど、今はエリーゼとアルヴィンが心配だ。

俺はみんなを連れて、2人の居る部屋に戻つた。

2人の居る部屋に戻ると、エリーゼが地べたに座つて泣いていて、アルヴィンが壁に背を預けていた。

ジユードがすぐに怪我だらけのアルヴィンに駆け寄り、治療を始めた。

俺はエリーゼに近付く。

「エリーゼ、無事か？」

「…………」

「ティボ、どうしたの……？」

力無く横たわるティイポを見て、レイアが呟いた。

俺はティイポを手に取り、データが抜き取られた場所を探した。すると、口の中の上の部分に、ほつれが見つかった。そこに基盤のようなものが見えた。

「これか？ とりあえず、一か八か、やってみるしかないだろ。」

「戻つてこいよティイポ……お前が居ないと、みんなが……エリーゼが悲しむだろーが！」

力チリ、とはまつた音がした。

刹那、

「うわーん！ こわかつたよー！」

「ふがつ！？」

いきなり動き出したティイポに顔面をかじられた。

「ティイポ！」

「うわつ！？ いきなり動いたよー！」

「ひほ、ほほつはほ（訳：ティイポ、良かつたよ）」

ああ……本当に。本当に良かった。

俺の顔から離れたティイポは、エリーゼの腕の中でぎゅうっと抱きしめられた。

「ふう……何とか一段落か……」

「アルクノアの連中はどうした？」

やつと一安心かなあ。とか思つたら、ミラガそう問い合わせていた。

「アルクノアなら、オレとカイトで倒したよ……」

立ち上がったアルヴィンがそう答える。//「は良くやったと言ひながら、落ちていた黒匣を踏んで壊した。

「//に長居は無用です。皆さん、早くシャン・ドゥに戻りましょう」

「そうだね。アルヴィンもエリーゼも、カイトも休まないと」

ローハンとジユードに促されるまま、俺達はシャン・ドゥに向かつた。

その帰り、魔物に囲まれてどうしようかと悩んでいた、頭上から声がしたと思つたら人が降ってきた。

地響きに驚いてると、降ってきた人は「済まないな。密猟者を追つていたのでな」と言つてきた。

とか思つてたら、降つて来たのって、いつぞや俺をボッコボコにしてくれたジャオ!?

「ジャオ……!」

その人物に気が付いたミリも、驚きながら自分の剣の柄に手をそえる。いつも抜く事が出来るようだ。

「お前さん達がどうしてー?」

俺達がここに居るのが予想外だったのか、ジャオも驚いていた。

なら、エリーゼを連れ戻しに、つて話は関係なさそうだ。

「娘っ子。とうとうこの場所に来てしまったのじゃな。覚えている
だろ？」「

だけど、ジャオはエリーゼにそんな事を言っていた。

「エリーゼ……この場所、知つてたのか？」

「…………」

問い合わせてみても、エリーゼは俯いて黙つたままだ。
やつとひさつき笑つてくれたのに、またか……。

「ここはお嬢ちゃんの育つた研究所だったんだよ」

「え……？」

俺の問い合わせたのは、意外にもアルヴィンだった。
そう言えば、前にシャン・ドウの橋の所で、ティポは研究所の人
から貰つたつて、そう言つていた。……じゃあ、ここがその研究所？

「以前、侵入者を許してしまっての。その時、この場所は放棄され
たのだ」

「侵入者はお前だったのだろ？？」

と、ミラがアルヴィンに問い合わせた。
アルヴィンは諦めた様子で答える。

「いい勘してんな……ああそうだよ。ブースター増靈極についての調査だった

んだ」

「なんと……お前さんじやつたのか」

侵入者がアルヴィンだった事に、ジャオは驚きを隠せないようだつた。

「増靈極って、何なの？」

「ア・ジユールが開発した、ゲート靈力野から分泌されるマナを増大させる装置だよ」

「そんなものがあったのか……」

「ああ、ティポがそうだ。第三世代らしいがな」

アルヴィンの言葉に、エリーゼとティポ本人も驚いていた。でも、そう言われると納得はできる。エリーゼみたいな幼い子が強力な治癒術を使えていたんだからな。

「そうだつたんですか……ティポ……？」

「うーん…… そなのかも？」

本人は分かつてないみたいだけだ。

「ティポはエリーゼの心に反応し、持ち主の考えを言葉にするのじや」

「それじゃ、ティポはエリーゼの考えを喋つてたの？」

そうなると、今までのティポの発言はエリーゼの本心？

「ウソです！ ティポはティポが喋つていたんですね！」

そう叫んで、「ね、ティポ？」と聞いて、「分かんない」とティポが答えた。

そして、「でも……」と続ける。

「ヒリーの考へはいつも分かつたよー？　ヒリーの知りたい事とかねー」

そう言つて、ティポはジャオの田の前に飛んで行った。

「おひきおじさん。ヒリーのお父さんとお母さんほどのことのー？」

「ティポ！」

確かに、ジャオは前にヒリーゼが前に居た場所　つまりここの事を知っていたから、両親の事も心当たりがあるかもしれないけど……なんで今その話を！？

「それはの……」

ジャオの表情が曇つた。それだけで、話の内容が良くない事だつてのが分かる。

「…………もづ、」の世にはおらぬ

ジャオの言葉が信じられないのか、ただ言葉を失つていた。

「お前が4つの時、野盗に遭い、殺されたのじや……」

「…………もづ、会えないんですね。……お父さんにも、お母さんにも

……」

あまりのショックで、ヒリーゼは顔を俯かせたまま、やつ眩いた。

「ヒリー、」

「気を落とさないで……」

ジユードとレイアが言つて、俺はなんて声を掛ければいいのか分からず、頭を撫でる事しかできなかつた。けど、エリーゼは俺の手を握つて叫んだ。

「ジユードやレイア、カイトにはちゃんと届くじゃないですか！
家族が……！」

「！？」

「そんな人達にエリーの気持ちが分かるもんかー！」

俺が2人の言葉に言葉を失つている間に、2人は走つて行つてしまつた。

俺は足が、まるで杭に打たれたように、足が動かずに、手を伸ばすだけだつた。

「エリーゼ、待つて！」

動けない俺の代わりに、レイアがエリーゼ達を追いかけた。
その直後、バンッ！ と銃声が聞こえた。

「ぐつ、密猟者どもめ！」

先程の銃声は密猟者によるものらしく、ジャオはその方向に走つて行こうとした。

そんなジャオに、ミラがどうしてここにエリーゼが居たのかを問い合わせる。

「うむ……連れてこられた。売られたようなものだ」

「売ら、れた……？」

親が殺されて……そんな事まで……！？

「娘っ子のような孤児を見つけては研究所に連れてきた女に……名
は……」

「まさか……イスラ……？」

「おお。確かにそんな名であった」

イスラって……。ジューードが言つた名前の人物は、心当たりは1人しか居ない。

でも……そんな事をするようには見えなかつた。

「……小僧」

いきなりジャオに呼ばれて、俺はジャオを見た。

「……わしが言えた義理ではないが、頼む。あの娘っ子を、これ以上1人にせんでやつてくれ」

「え……」

「1人で力の差があり過ぎたわしに立ち向かい、ボロボロになりながらもエリーゼを守つたお前なら、任せられる」

俺が何も言えずにいる間に、ジャオは去つて行つた。

「カイト、大丈夫？」

「……ちつと、堪えたな……」

エリーゼが言つた、カイトには家族が居るつて言葉に。

そんな人にはエリーゼの気持ちは分からないと言つたティポの言葉にも、グサツときた。

だつて俺も……父さんや母さん……家族が居ないから……。だから、エリーゼの気持ちも少しごらいは分かつて上げられるつて、そういう……思つたんだ……。

その後、エリーゼとティボを見ていたレイアと会流して、ひとまずシャン・ドウに帰る事になった。

第20話 ハーベゼと研究所（後書き）

原作とは違ったティポはそのままになっています。が、どのみちHリーゼは少し黒くなつてしまつようです。……。
そう言えばカイトの事をあまり掘り下げていなかつた気がしたので、今回最後に少しだけ書いてみました。

第21話 不穏な空気

みんなが心身共に疲労状態だったから、魔物との戦闘は極力避けながら、ようやくシャン・ドゥに着いた。

あれから、エリーゼは誰とも口を利こうとしない。ティポを抱き締めて、一人でみんなから少し離れた所に居た。

さすがにエリーゼを最後尾にする訳にはいかなかつたから、俺が後ろに付いてるんだけど、……俺も避けられているようで、少しでも近づくとすぐに距離をとられてしまつ。

……やっぱり、あの時ちやんと話をしておけばよかつた……。

「何か気掛かりな事でもあるのか、ジユード？」

街に着いてすぐ、何か考え方をしていたジユードが問い掛けた。

「ジャオの話を聞いてから、様子が変だぞ？」

「……うん。でも、様子が変なのは、僕よりもカイトの方だと想つよ」

ジユードが言つと、みんなが俺に視線を集中させる。エリーゼは俺を一瞥しただけで、すぐに視線を外した。

「だ、大丈夫だつて。何にも無いからさ」

と言つても、みんな納得はしてなさそつだ。
うあ……どうにかしないとなあ……。

そんな話をしていると、向こうからイスラさんが走ってきた。
俺は思わず息を呑んでいた。ジャオの話が脳裏を過ぎた。

本当に……この人がエリーゼを……？

「犯人を追つて王の狩り場へ行つたと聞いて、心配していたのよ」

イスラさんが何食わぬ顔で言つてきて、思わず憤りを感じた。

「色々あつたけど、とりあえずは無事、かな」

「偶然とはいえ、あなた達を巻き込んでしまつて、『ごめんなさい』」

イスラさんが謝つたけど……俺はそれを上の空で聞いていた。

「イスラさん……それ、嘘ですよね？」

ジユードの言葉に、イスラさんはもちろん俺達も驚いていた。
何でジユードがそんな事を言い出したのか分からぬけど、イスラさんは明らかに慌てていた。

「な、何？ 私が心配したら変かしら？」

「そうだよジユード。どうしちゃったの？」

こきなりの発言に驚いていたレイアが尋ねると、ジユードは考えながら口を開く。

「イスラさんが僕達と知り合つたのは、偶然じゃないんだよ。決勝を知らせる鐘が鳴つた時、街の人々に言われたでしょ。この時期によその人間が集まつていたら、それは闘技大会の参加者か観客しかいないつて」

「確かに言つてたけど、それが何だつて……」

呟いたその瞬間、思い出した。

この街で初めてイスラさんに会つた時、彼女は俺達に、『何をしに来たのか』を聞いてきた。街の人間なら、聞かなくても分かる事を。

「私達がイスラに助けられた、あの時か……」

「そう。きっと言わないよね、あんな事。僕達に近付くように言われたんでしょう……アルクノアに……」

アルクノアと言つ单語が出た瞬間、イスラさんの身体が震えた。

「イスラさん……嘘だよね……？」

「レイア……」

すがるよつに問い掛けたレイアだけど、それはもう、イスラさんは届いていなかつた。

「あの人達……ばれないから……平氣だつて言つたのに……でも、私だつてあの人達に……」

「脅されてたんだよね……弱みがあつたから……」

「昔の仕事ですか……」

ローハンの呟きを聞いて、反射的にエリーゼを見てしまつた。ずっとそつぽを向いて、今のこの話を聞いているのかも分からなかつた。

「ユルゲンスにばらされたいのかつて……この子には済まないと思つてゐ！ だけど、あの時は私だつて……！」

叫んでから、イスラさんが地面に膝を着いて頭を下げた。

「お願い！ 彼には黙つていて！」

「……ユルゲンスは知らないのか？」

「言える訳無いじゃない！ ユルゲンスはとても純粋な人なのよ……」

…

イスラさんがどれだけユルゲンスさんを好いているのか……そういうのが伝わってきた。

けど……だからと言つて頷きたくはない。

「何故話さないんだ？ 既に過ぎた事だらう」

「あなたも女なら分かるでしょ！？ こんな醜い女わたくしを彼が愛してくれるのはわけない！」

断言した……？ この人……何でユルゲンスさんを信じてあげないんだ？

「あのことを知られたら……私は捨てられる。私は幸せになりたいだけなの。お願い……彼には言わないで……く、ださい」

イスラさんが地面に頭を着けて、そんな事を言った。

俺はもう、自分の意思とは無関係に身体が動いていた。
土下座をしているイスラさんに近付くと、彼女は顔を上げた。その瞬間、俺は胸ぐらを掴んで立ち上がらせた。
そして、叫ぶ。

「自分が不幸だと思うなああつ……！」

「な、何を……」

「両親も居ないでずっと独りで、あんたに無理やり連れてかれたエリーゼの気持ちを、少しでも考えた事があるか！？」

「そ、それは……」

「少しでも罪悪感があるなら、謝る前に罪を償おうとするか……。」「どう、やって……」

「そんな事、自分で考えろ！　一人で無理なら、あんたには頼れる人が居るだろ……。」

叫んで喉が痛くなつてきて、だんだん声に霸気がなくなつてきた。

「ユルゲンスに話せつて呟くの…？　そんなの無理」

「ユルゲンスさんを信じてやれよ…　愛すとかそんなの前に…。」

「でも……」

「なら、ずっと独りで苦しんでりよ…　そんな気持ちで幸せになろうとか言つてんな！」

これ以上言つても無駄だわ！と思いつつ、イスラさんから手を離して、俺は橋の方に向かった。

橋まで歩いて、そこでみんなを置いて来てしまつた事に気付いた。叫び過ぎて痛む喉に手を当てながら、みんなが来るのを待つ。
……結局、エリーゼの事は何も解決になつてない。イスラさんが何かしたからって、解決になるとは思えないけど。

「カイト君、先行つちゃ わないでよね？」

「い、『めぐ……』

レイアが怒つたように言つてきて、すぐに謝つた。

「カイトがあんなに叫ぶのは、初めて見た気がするな？」

「ですね。カイトさんはエリーゼさんの事になると、まるで人が変わつたようになる時がありますし」

「え……そ、そうか？」

まあ……普段あんまり大きい声は出さないから、叫んで喉が痛いけど……。人は変わらないと思つ。

エリー・ゼを見ると、一瞬目が合つたと思つたらすぐに逸らされた。ああ……これ結構ツラいなあ……。

「何か、声変だけど大丈夫？」

「大丈夫……とは思うけど、後で時間あつたら診てくれないか、ジユード先生？」

「分かつたよ。宿屋でね」

知り合いに医者が居て助かつたなあ。

つて、そういうや鞄の中にのど飴あつた気がする。後で舐めよう。

「悪い、オレちょっと寄るところあるから」

「分かつた。みんなで行こう」

アルヴィンが単独行動しようとするべく、ミラがそう言った。まだ疑つてたりするのか？

「おいおい、ワイバーンはいいのかよ？」

「ワイバーンなら後でユルゲンスに聞けばいいだろ？」「

「……分かつたよ。付いて来たけりや付いて來い」

そんな訳で、アルヴィンの用事に付き合つて向かつた先は、一軒の家だつた。

中に入ると、女性が1人ベッドに横になつていた。

「この人……まさかアルヴィンの……？」

「ああ、オレのお袋。ちょっと具合が悪くてな」

ちょっと悪い訳じゃないだろ？。寝たきりみたいだし。

「父親も兄弟も居ないから、オレが居ない間、イスラに看てもらつてたんだ」

そういうや……レイアがそんな事を言つていた氣がする。不意にアルヴィンの母親が目を覚まし、ジユードを見た。

「バルンじゃない。また家を抜け出して遊びに来たのね。せっかくバルンが来てくれたのに、アルフレッドったらどこに行つたのかしら？」

「今……この人、ジユードを見てバルンって言つたのか？ それに、アルフレドって……アルヴィンの事か？ 何がおかしい。」

「この人何言つてるのー？」

ティポが、俺達の気持ちを代弁してくれていた。

「レティシャさん、アルフレドは幼年学校の寄宿舎じゃないですか？」

「ああ、そうだったわね……」

母親だつて言つてたのに、アルヴィンは他人行儀な話し方だつた。

「あの子、きっと泣いてるわ。気が弱くて寂しがり屋だから……」

「大丈夫。元気だつて手紙が届いてます」

「ええ、休暇には帰つて来るんですつて。大きな船で旅をする約束をしたのよ」

「……アルフレドも楽しみにしてましたよ」

「ふふ……あの子、手紙でね、私が泣いてないか心配してるのよ。おかしいでしょ？でも、とっても優しい子なの……」

話すだけ話して、母親 レティシャさんは眠りについた。

「若い頃に故郷を離れて苦労したんだ。親父も死んじまつてさ。親父と暮らした家に帰りたいって、そればっかり言つてた……」

何で声を掛ければいいのか分からずになると、アルヴィンが話していた。

「こんなになつちまつたけど、故郷を思い出さない分、幸せなのがもな」

アルヴィンも、俺も、ヒリーゼと似た状況だつた。だから俺は、何も言えないのか？

自分が分からぬ事を、気休めで言つてしまいそうだから。

「お前は今まで母親のために？」

「そ。ママのために汚れ仕事をこなしてきたんだ。美しい話だろ？」

「そんな言い方……」

「同情はいいつて。実際、きれい」とじゃないんだ。たまんないよ、ほんと」

それでも、そんな言い方……母親の為にやつていたんだから。

外に出ると、イスラさんが居た。俺はもう話す事は無いから、視線を外す。

その先にはエリーゼが居て、ずっと俯いたままだった。けど、少し顔を上げて、何かを見ていた。

「……あの人、泣いてますよ……」

「ああ、泣き虫なんだ」

エリーゼの視線を追いつぶと、イスラさんが涙を流していたのが見えた。

それを見ただけで、俺はまた視線を外す。もうあの人とはあんまり関わりたくない。

「……いいの？」

「気になるなら慰めてやれよ。悲劇のヒロインさんを……む」

「そ、そんな事より、早く行かないか？」

ジユードが何か行動を起こす前に、俺はそんな事を言っていた。

「おつと、少年からそういうのはな。ま、オレも賛成だけど」

アルヴィンも俺に同意して、すぐこここの場から離れる事になった。

* * * * *

ワイバーンを借りる為にユルゲンスさんを捜す俺達は、一度集まつて話をしていた。

エリー・ゼだけ、少し離れた所で腰をおろしている。

「エリー・ゼ、大丈夫かな……」

「…………」

いつもなら俺が言っている所なのにな……。言われた事を気にしているにしても、エリー・ゼと話をしようとしてる筈だ。なのに、俺はそうしない。また拒絶されるのが怖いからか……？いや……拒絶とは少し違つたけど、結果的にはそつ言つ事だよな……。

「カイト君も……大丈夫？」

「え、ああ……大丈夫。気にしないでいいよ」

駄目だ……一度考えだすと止まらないな。

どうせ考えるなら、マイナスな事じやなくてプラスに考えられればいいのに。

「ブースター増靈極について、少し気に掛かる事があるのですが」

突然ローレンがそう言った。続けて口を開く。

「ナハティガルがガンダラ要塞で行つていた実験……あれは増靈極を使用する為のものだつたのではないでしょうか」

「増靈極が既にラ・シュガルにも渡つていると言つのか？」

「そつ考えるべきでしょうね」

「今、聞こに、ローハンが即答した。

「増靈極はエリーゼみたいな子供でも魔物と戦えるようになるものだろ？ そんなのを両国使って争つたら……」「ああ、かつてない程の惨事が待つている」

惨事、って言葉で止まるんだろうか？

「ホントにそんな戦いが始まるの？」

「少なくとも、ナハティガルにはその戦いに踏み切れる理由がある」

「クルスニクの槍だね……」

それがどのくらい危険な物なのかは、実際に見た訳じゃないから分からぬけど……それがある限りは、戦争は起こりつつあるのか……。

「おお、戻ったのか」

話をしていると、捜そうとしていたゴルゲンスさんがあちらから出向いてくれた。

「イスラから戻った事を聞いたんだ。無事でよかつた」

「どうやらイスラさんは、俺達が戻ってきた事しか言つてないらしい。」

「あの……いろいろ、すみませんでした……」

「どうしたんだ、いきなり？」

「いえ……何でも……」

大会の事とか、イスラさんの事とか……何となく、謝つておきた

かつた。完全に満足だし何で謝ったのか正直分からぬけだ……。

「それより、約束のワイバーンの準備出来てんの？」

アルヴィンが尋ねると、コルゲンスさんは頷いた。

「ただ、今は戦の雰囲気が高まってるとかで、王の許可なしには空を飛べないんだ。私はこれから首都のカン・バルクへ行つて、王の許可を貰つてくれるつもりだ」

戦争が……もつそんなに近いのか……。

「ねえ、ア・ジユール王に戦いが起きたら危ないって事を伝えた方がいいんじゃない？」

「……確かに、評判良いみたいだから、もしかしたら戦争を回避しようとしてくれるかもな……」

まあ、そんな事にはならない気がするけど。

「あたし達と一緒に戦ってくれたりするかもね」

「その戦いつて戦争だぞ！？」

レイアの言葉に反対するように、アルヴィンが言つ。

「私も直接会つて、研究所の真意を確かめたいと思つていた……」

「//がそう言つと、アルヴィンは諦めたように頭を搔いた。

「ア・ジユール王に会いたい。すぐカン・バルクとやらで出発する

七

ああ、それじゃ荷物を出してもいいんだ。

ユルゲンスさんが荷物を取りに行つた。なんか、主導権が完全にミラにある気がする……。

「ねえ、研究所の真意つて？」

工口セガ局

「ジヤホナが書つてたの？」

卷之二

「ア・ジユール王が民を守る存在なら、私の望む答えを持ち合わせている筈だ。だが、別の答えを持つのであれば、金輪際やめると誓わせる。どんな手を使つても」

主に簪とかは洒落にならん氣がするけど

「うん、そうだね。ガツンと問い合わせただしちゃおうー。」

レイアも乗り気だった。

「あ、そうだ。そりゃ宿屋に荷物置きいはなしじゃない?」「私達が取つて来ましょう

その後で、ローハンとレイアがエリーゼに近寄る。

すると、まるでヒリーを帯びるなりしてティボが浮き上がった。レイアはしゃがんでヒリーゼと視線を合わせようとすると、ヒリーゼはすぐに俯いて目を逸らした。

立ち上がったレイアはローハンと一緒にヒューズを立たせて、宿屋に向かつた。

「そんじゃ、オレもひょっくら……」
「アルヴィン」

続けてどこかに行こうとしたアルヴィンを、ミラが呼び止めた。

「よくやつてくれた。2人を守ってくれると信じていたよ」

それを無視して数歩離れたアルヴィンは、いきなり足を止めてこちらを向いた。

「ぼく、約束したから覚悟決めたんだよー、ママ～」

ふざけた様子で言つて、アルヴィンも去つて行つた。

……何だつたんだろうか、今のは？

よく分からずに、ジユードが笑つているのを見ていると、いきなりポケットの中が震えたような気がした。

そう、携帯が入っているポケットが。

ジユードとミラに気付かれないように2人から離れて、携帯を開くと、

「なつ……メール……！？」

慌ててアンテナを確認しても、相変わらず圏外の表示。なら、このメールはいつたい何だ！？　どうやってこの携帯に受信したんだ！？

疑問は絶えないと、俺は一番の疑問であるメールを開く事にした。

震える手で開いたメールを開いて、また目を見開いた。

アドレスも件名も書かれていない。本文は、文字化けし過ぎて何が書いてあるのか、推測でも分からなかつた。

ただ1つ。

唯一読めて、なおかつ言葉の意味が分かつたのは、『みがわり』と言つ言葉だつた。

「身代わり……？ 何が……何の……？」

気持ちの悪い汗が出ていたけど、そんなものを気にしていられる余裕がなかつた。

俺が誰かの身代わりになるつて事なのか……？ それとも……他にそんな人が居るつて、そう言つ事なのか……？

「みんな来たよ、行こうカイト。って、ビラしたの、顔色悪いけど？」

いきなりジユードに声を掛けられ、俺はとっさに携帯を閉じた。よくよく考えたら、ジユードは読めないから見られても心配はないんだけど。

「何でもない。ちょっと喉が痛くてさ。でも大丈夫だから。ほら、みんなの所戻るんだろ？」

「う、うん……何かあつたら、言つてね？」

「ああ。気遣いサンキューな」

出来るだけいつも通りを装つたけど、これ以上に無いほど不自然になつてしまつた。けど、ジユードは深く聞いてくる事は無かつた。ホント……ジユードのお人好しには救われるな……。

メールの事は忘れよう。あんなものを信じるのは……怖いから……

⋮。

みんなの所に行くと既にみんな集まつていて、俺達は首都カン・バルクに向かう事になった。

第21話 不穏な空気（後書き）

果たしてカイトはエリーゼと和解できるのか？ そして最後のメールは誰が送ったものなのか？
いろいろ謎を残して次回はカン・バルクへ行きます。王は出でくるかな？（汗）

第22話 仲直り（前書き）

王様……でえへんやん……。

第22話 仲直り

シャン・ドゥを後にユルゲンスさんの案内の下、モン高原という雪原を行く途中、喉の痛みを思い出して鞄からのビーグルを取り出した。

何でこんなものが入っているのかと言つと、ただ飴が好きだからだ。

今まで忘れてたとか言つた。

買い物置きがこれしかなかつたんだけど、良かつたなあ。未開封だし。

1つ取り出して口に入れ。ああ……レモン味うまい。何か落ち着くわ……。

「ねえねえ、何食べてるの？」

飴を口中で転がしていると、レイアが横から興味津々な感じで言つて来た。

「のび飴だよ」

「のびの……？」

「ふつと何かを考え始めて、突然驚いたように身体を震わせた。

「いや……何考てるかだいたい予想は付くけど……これだからね

とレイアの手のひらに飴を置いた。

「え、これ？」

「ああ。試しに食べてみろよ。口の中で転がして溶かして食べるんだ。絶対にそのまま飲み込むなよ？」

「う、うん……」

一応念を押して言つと、レイアは意を決して餡を口に入れた。

「ん~、結構美味しい？」

「いや、俺に聞かれてもな

渡したのは俺だけどさ。

「何、美味しい物があるのか？」

「早っ！？」

前を歩いていた筈のリリがいつの間にか田の前に居た。
本当に食に目覚めてんのな……。

「……リリも食べるか？」

「よく分からんが、食べる」

分からぬいのに食うんかい。

心の中でツッコミを入れながら、餡玉を手渡した。

「何やつてるのさ？」

「ジューードも食べるか？」

「え、じゃあ、貰おうかな」

話の流れと言つか、数はあるからみんなに渡そつ。

「はー、ローンにもせぬよ」

「ありがとう」*ジ*こます。これは綺麗な球形ですね

「おーい、オレには無いのかー？」

「分かつてると、アルヴィン。あ、コルゲンスさんもビリ^ア」

「済まないな」

と、ローハンとアルヴィンとコルゲンスさんに渡した。
後は、

「はい、ヒリー^ゼ」

「……………いりません」

渡そうとしたら、また距離をとられてしまった。
早く……何とかしないとなあ。

* * * * *

それからしばらくして、モン高原を抜けてようやく首都カン・バルクに辿り着いた。

それにも、世界が違つても雪はあるんだな。まあ、俺はあまり見た事なかつたから新鮮だけじ。

「シャン・ドウもそうだったけど、こゝも少し変わった街だね

街に着いてすぐ、ジユードが言つた。

変わったとか……俺にとつてはどの街も変わったよつて見えるよ。

「ア・ジユールはラ・シュガルと違つて精靈信仰が強いからな」

「わづ、何あれ？」

驚いたレイアの視線の先には、ロープウェイみたいな乗り物があつた。

話によると、あれは空中滑車　まあ、ロープウェイだみなところじへ、あれでいくつかの地区を行き来しているらしい。

「景色がよくて楽しそうだね」

エリーゼに気遣つよつてレイアが言つたと、エリーゼはふくさ

れるように顔を背けた。

レイアはそれを見て固まつている。

「ユルゲンス、ア・ジユール王と会つてみたばい？」

固まつたレイアそつちのけで、ミラが尋ねていた。

「ワイバーンの許可を取るついでに、謁見を申し出てみるよ。ただ、多くの民が謁見を望んでいるから、ずいぶん待たされると思つ。済まないが、宿で気長に待つてくれ」

そう言つて、ユルゲンスさんは城の方に向かつて行つた。

「そ、それじゃあ、僕らは宿に行つてよつが」

「そうだな。ミラが何かする前に……」

「む……まるで私がいつも何かしてゐるような言い方だな、それは？」

何でこの人は自覚が無いんだろうか？

とりあえず、腑に落ちない様子のミラを押して宿屋に入り、部屋をとつた。

ようやく休める時間が出来て、ちょつといこから俺はエリーゼの事を考えていた。

もちろん、マイナスには考えないよつにして、みんなにとつてプラスになる事を考える。

とは言え、何から考えればいいだろう？

エリーゼがあんなになつたのは……ティポを取り戻して、両親の話をジャオに聞いてからだつたよな。家族が居ない事がショックで、1人ぼつちだつて……。

それで、両親がちゃんと居るジユードヒレイアに当たつてゐる。

確かに、あの歳の子に両親が居ないつて現実は辛いと思う。実際、俺も同じように塞ぎ込んでいたから、気持ちは分かる。

だけど、俺には支えてくれる人が　俺を気に掛けてくれる人が居た。

エリーゼもそれは同じなんだ。それに気付かなくて、傷付きたくないで拒絕しているだけだ。

なら……俺は気付かせてあげればいいんだ。ちゃんとエリーゼの事を、大事に思ってくれてる人達が居るつて事を。

それでもまだ悲しいなら……いつその事俺が……つて、これはマジで奥の手だし……上手くいかなかつた場合、怪我するのは俺だな……。

まあ……頭の中が整理出来た気がするから良かつたな。後は行動に移すのみだ。

「まだユルゲンスさん戻つて来ないのー？」

考えていると、レイアがそう呟いた。ジユードが「まだだよ」と本を読みながら答える。

どうやら結構時間が経つたみたいだ。
ベッドの上でレイアが暇そうにしていた。

「ねえ、ヒリーゼ。街の観光でもしようつか？」

「……」

レイアの誘いを、ヒリーゼは完全に無視していた。

「ヒリーゼさん、行つてきただいでですか？」

ヒローハンが言いながら、俺に視線を移した。何か言つてくれと言われてる気がした。

「そうだな。ヒリーゼ、観光行つてみよつか
「……そんなに行きたいなら、レイアとカイトが行けばいいじゃないですか……」

みづやく口を開いてくれたと思つたら、そんな刺々しい言葉だった。

「そんな事言わずにさ。ヒリーゼも行こよー？」

もうやつてレイアが誘つても、また黙り込んでしまった。
ヒリーゼの心の内を言葉にするティポすら何も言わないって事は、
完全に俺達を無視しているって事なんだろうか……。

「ティポがはしゃいでくれないから、あたしづっかりつるさいみた

いだよ～

「前からもうでしょ？」

レイアはレイアなりにヒリーゼを元氣付けようとしてるんだけどな……。ジユード、フォローするならしてくれ。

「じゃあ、少しお話しあよつか。あたし、ヒリーゼの口から自分の事話してほしいな」

レイアのその言葉に答えるように、今まで静かだったティボが口を開いた。

「レイアはうるさいこなー。みんなの足をこいつも引っ張つてくせにー」

「え……」

さすがのレイアも、こればかりは言葉を失っていた。もちろん、部屋の空気は最悪だつた。

「ヒリーゼ、今のは言ひ過ぎだ。謝つた方がいい」「ミラが言つんだから相当地だ」

俺が何を言つた恼んでる、ミラが言つた。アルヴィンも、少しばかり焦つて言ひ。

「ミラも……レイアも……！」
「バカー！」

立ち上がったヒリーゼとティボは、怒つたまゝに叫んで部屋から出て行つた。

「え、エリーゼ！」

早く追いかけないといけないのに、何故か足が動かなかつた。

「あ痛たた……今のは効いたなあ……」

「レイア……」

表情は笑顔な筈なのに、泣ぐのを堪えているように見えた。

「ほら、あたしはいいから、エリーゼ連れ戻しに行かないと！　ね、
カイト君」

「あ、ああ……」

明らかに無理してゐるのに、上手い言葉が見つからない。
レイアの強がりに感謝しながら、俺達はエリーゼを追いかけた。

* * * * *

宿屋を出て、すぐにエリーゼを捜そうと思っているのに、あたし
の足はすごく重くて、まるで捜す事を嫌がっているようだつた。
本心は嫌な筈はない。むしろ、こんな寒い中、1人だけで外に出
たから心配でしうがない。エリーゼは可愛いから、変な人に襲わ
れてないかなとか、そんな的外れな心配もしてしまう。

なのに足が重いのは、ヒリーゼに言われた事がショックだつたら
ら。かなあ……。

足手まといはさすがにショックだよ……。確かに……まあ……自
分でも少し思つてた事だけじや……。

カイト君も、リーベリー岩孔から元氣無いよね。あの時言われた
事も、結構効いたんだよね。

多分、カイト君の方がダメージ大きいんだろうけど

「おたく、相当落ち込んでんな?」

「あ、アルヴィン君……！」

いきなり背後から話しつけられて、思わず驚いてしまつた。
び、びっくりした……みんな先に行つたと思ってたから、なおさ
ら。

「アルヴィン君、みんなと一緒にやなかつたの?」

「いつも騒がしい程元気な奴が、下向いてトボトボ歩いてたら、そ
りや気になるつしょ?」

「そ、そんな……だつた?」

尋ねてみると、アルヴィン君はすぐに頷いた。

そんなにひどかったのかな? なら、ジューード辺りが声を掛ける
と思うんだけど……もしかしたら、ひどすぎたとされた……の
かな?

「おたくは猪突猛進な感じで良いんじゃないか? 当たつて砕ける
みたいで」

「……それは、慰め?」

だとしたら、アルヴィン君はあたしの事をどんな目で見てるのか、

一度聞いただしたくなつた。

「なんつーか、ようするに言つたこのせ、悩んでないで元氣出せつてコト」

やつぱり、慰めてくれていたみたいだ。

「…………ありがと。最初からやつててくれればいいのに」「別に。パーティのムードメーカーが落ち込むと、みんな元氣出ないからな」

「うーん……照れてるのかな？ なら、可愛いトコもあるんだねえ、アルヴィン君も。

「そうだね。ウジウジして落ち込むのはあたしじゃないよね！ よーし、早くエリーを搜して仲直りしないと… ありがとね、アルヴィン君！」

慰めてくれたアルヴィン君に礼を言つて、あたしはみんなを追いかけた。

「モーモー。レイアはやつでなくひやな」

そんな咳きが、後ろから聞こえた気がした。

* * * * *

エリーゼを捜している内に、いつの間にかアルヴィンとレイアも居なくなっている事に気が付いた。

「な、何で行方不明者が一度にこんなに出るんだよー…？」

「まあ、あの2人は別で捜してるとかもしないし、僕らはエリーゼを捜そう」

「そうですね。と言つてる間に、お2人が来たようですよ」

ローベンが後ろを振り向いて言つて、俺達もそつちを見てみると、アルヴィンとレイアが走つて來た。

いつの間にか元気になつたレイアと、何故か疲れた様子のアルヴィンと合流して、再びエリーゼを捜し始める。

そしてすぐにエリーゼの姿を発見して、同時に近くに居たジャオに驚きながらも、俺達は2人に近付いた。

ジャオが居ると言つう事で、無意識に構えてしまつ。

「安心せい。偶然会つただけじゃ」

ジャオはエリーゼから少し離れた。

それを見たレイアは、エリーゼに近付いた。

「さつきばじめんね。エリーゼ、寂しい思いしてたのにね……。ほら、あたしつつて、遠慮なく言つちゃうとこあるからさ……。許してよ……」

さつき笑顔が戻つたレイアだけど、今は少し悲しそうな表情で頭を下げていた。

だけば、ヒリーゼはそんなレイアに向かい合ひて、

「…………いやです……」

と、そう言つていた。

頭を下げたまま、レイアは身体を一瞬震わせた。そして、顔を上げた。

「そ、そんな事言わないでよ、ね？」

「レイアもカイトも、みんな嫌い！ 友達だと思ったのに…」

「…………」

嫌いと、そう叫ばれて、胸が締め付けられるような苦しさを味わつた。

「ヒリーゼ、あたしはただ、あなたが心配で……」

「ウソ！ わたしの事なんてホントはどうでもいいじゃせんっ！ もう友達やめるっ！」

レイアの声も届かずに、叫んだヒリーゼは走り去りうつした。ここで呼び止めなければ、何か言わなければ、ヒリーゼとは一生すれ違つたまま分かり合えないかも知れない。

いや、そんなの抜きで、ここで退くなよ、俺！

「ヒリーゼッ！」

叫ぶと、走っていたヒリーゼが止まった。

「みんなお前を思つて優しくしてるんだ。分からぬ訳じやないだろ？ それに、お前は自分が傷付けられたって言つてるけど、さつ

他のトイポの言葉にレイアが傷付いてるのに気付かないのか？

「え……レイアが……？」

よつやく、Hリーぜが俺達の　レイアの顔を見た。

「あ、いや、傷付いたっていうかわ……その、へこんだっていうか……」「……」

それを傷付いたって言つんだと黙つよ、世間一般では。

「わたし……レイアを傷付けてるなんて……思つてなかつた……」

声を小さくして、Hリーぜが呟いた。

「Hリーぜはちやんと謝れるよな？」

「でも、わたし……ひどここと言つわかった……」

今度は泣きそうになりながら呟く。

「ちやんと謝れば許してくれますよ。それが友達ですよ」

ローエンが俺をフォローするよつて言つてくれた。
すると、Hリーぜはレイアに近づいていく。

「レイア……ごめんなさい。許してくれますか……？」

「もちろん。だけど、これからはHリーぜの言葉でHリーぜの事を
もっと教えてほしいな」

レイアもエリーゼも、2人とも笑顔だった。
良かつた、一見落着か。

「3歳しか違わないのにエリーゼだねー」

「ダメ、ティポ！」

綺麗に片付いたかなー、と思つた矢先、ティポ……なんて事を。慌ててティポの口を押さえにかかるエリーゼの名前を、レイアが呼んだ。

エリーゼが少し戸惑いながらレイアを見上げていた。

「それでもあたしの方が年上だからねー」

「はう……」

「レイアこわー！」

ティポの言葉がエリーゼの本音だと分かつた上であの言葉。
人は良い友達になりそうだな。

「娘っ子、友達を大事にな

とエリーゼに言つて、ジャオは去つて行つた。
……『めん、すっかり忘れてた。

「…………カイト…………」
「ん？」

ジャオを見送つていると、エリーゼがいつの間にか俺の近くに居た。
田がちょっと潤んでいて、今にも泣きそうだった。

「カイトにもひどい事、言つちやいました……『めんなさい』……」「許してー」

ティポからも同じ言葉が出て、少し驚いた。

ジヤオがさつき友達は大事に、と言ったから、俺からほ今さり言えない。

けど、これは言つてみるチャンスかもしれない。

「エリーゼ……俺も家族居ないんだよ」

「え……？」

信じられない、と言つてみた表情だった。

「小さい時に2人とも死んじゃつてな。もう、顔も覚えてない」

「そう、だつたん、ですか……」

エリーゼがまた泣きそうになつていていた。

「だから、つて訳じやないなけど……もし、エリーゼが嫌じやなかつたらさ……家族にならないか？ 俺と

「え……？」

『『えつー？』』

エリーゼの驚いた声に重なつて、みんなの声も聞こえてきた。

「お前ひ……その反応は何だよ？」

「いや、だつて……犯罪なんじや……？」

ジユードが代表して言つと、みんなが頷いていた。
何……この扱い……グレるぞこのやろつ。

「それは洒落にならない誤解だ！ 俺が言つてるのは、妹にならな

いかつて話だ！

「い、いもうと、ですか……」

あれ……何でエリーゼさんは残念そうに泣いていらっしゃるのですか！？

「兄妹なら、いいんじゃない？」

「そうですね。カイトさんのような方が兄なら安心です！」

何か釈然としない納得のされ方だな……。

「エリーゼはどうしたい？ 嫌なら無理ことは言わないけど……」

「嫌じゃないです……妹……」

「家族だよ、エリー！」

「はい……家族、ですっ」

まだ信じられないと、そんな感じだけ、ティップを抱きしめるエリーゼのその表情は、心の底からの笑顔だったと思う。だから、俺も嬉しかった。エリーゼがまた笑ってくれたから。

第22話 仲直り（後書き）

やつとレイアとエリーゼが和解です。ここはレイアはカツコ¹（？）

そして、レイアとアルヴィンが怪しい雰囲気（？）
カイトはまたとんでもない提案をしましたが、ヒロインエリーゼ
なのに妹ってええんか！？と思つ方も居るでしょうが、そこは終
盤に多分上手く（？）やると思つので、あまり期待しないでください

では、次回もお楽しみに。

第23話 信頼と裏切り

「それでどうしよう? ゴルゲンスさんはまだ戻つてこないけど……」

ひとまず落ち着いた所で、ジユードがそう言つた。

「直接城に乗り込んでみる?」

「だから、ゴルゲンスさんに迷惑掛けちゃダメだつてば」

「ダメか……アルヴィンの案はしつくつくるのだが……」

「そりや…………いつも真っ正面から殴り込みしてゐる氣がするからな……」

「でも、とりあえず城は行つてみないか? どんな状況か見といて
損はないだろ?」

俺がそう言つと、みんなが頷いた。

と言つて、城門の田の前に来た。
街の人で行列が出来て、いる門をぐぐる。

「すごい行列だな」

「みんなの声をちゃんと聞いてくれる、いい王様なんだね」

行列を見ながら言つと、レイアがそう言つた。

「現在のア・ジュール王は、かつて混乱を極めた国内を、その圧倒

的なカリスマで統率した人物だと言われています

「そ、そんなすごい人なんだ……」

「それなら、あたし達に協力してくれるよ」

ジユードが緊張する一方、レイアはかなり前向きだった。

「だが、影でエリーゼのような境遇の人間を生み出しているのであれば、許せはしない」

「そうだな。ちゃんと言わないと」

リラの発言に、俺も頷いた。

「//リ……カイト……ありがと……です」

笑顔でお礼を言つエリーゼを見て、ホッとした。
出来ればもう、悲しい思いはさせたくないからな……。エリーゼ
には笑顔で居て欲しい。

そんな話をしていると、城からコルゲンスさんが出てきた。

「『めんなさい』、待ちきれなくて
『いや、ちょうどよかつたよ』

呼びに行く手間が省けたって意味かな？

「ワイバーンの方はどうなった？」

「問題無しだ」

つい事は、もうイル・ファンに直行できるのか。

「それと、リラさんに頼まれた謁見の件だが、ちょっと驚いたよ

「……？」

「みんなの名を伝えたら、逆に陛下が会いたいって仰つたんだ。ひよつとして、ラ・シユガルじゃ有名人なのか？」

「いえ……そんな事は無いと思つんですけど……」

まあ……ある意味有名人だよな。指名手配されてるんだから。でも、理由はそれじゃない気がするんだよな。

「えつと、闘技大会の結果が届いてたんじゃないですか？」

「そうか。そなうならキタル族にとつても榮誉だな」

……何だろ? ここの得体の知れない罪悪感は……。

「じゃ、私は一足先にシャン・ドゥに戻つて、ワイバーンの用意をしておくからな」

そう言つてシャン・ドゥに戻るゴルゲンスさんを見送つた。ホント……いろんな意味で感謝しきれないな。

「ふむ、思わぬ歓待だな」

「何かの眼だつたりしないよね?」

「ジユードは心配し過ぎ。素直に歓迎されよつぜ?」

心配性のジユードにそいつと、かなり呆れた表情で、「カイトは氣楽過ぎるんだよ……」と呟いていた。

「あまりいい予感はしませんね」

「ロー・エンまでそんな事言つて……」

「やうだよ。会えないで帰るよりはよかつたじやない」

レイアが俺に賛同するように言った。レイアもホントに前向きだよなー。ポジティブがアイデンティティな感じか。

「また隠し事が、アルヴィン?」

いきなりミラがそんな事を言っていた。

「つたり前だよ。だからオレは魅力的なんだ」

「?」

「は……?」

ミラが不思議そうな表情を浮かべると、俺の氣の抜けた声が出たのはほぼ同時だった。

「ジューード、今のはどういう意味だ?」

「……秘密のある男はカツコいいとか言つからね……ははは……」

おい、なんか笑いが乾いてるよ?

と言づか、そうなるともしかして俺もカツコいい? 一応隠し事はあるんだし。

ま……言つたら言つたで頭おかしい奴認定されるのがオチだろ? けどさ……。

「せつせと王様に会いに行いつぜ」

「アルヴィン……嘘は嫌だからね?」

先に行いつとしたアルヴィンに、ジューードが確認するように言った。

俺は信じてるけどな、アルヴィンの事。闘技大会の時だつて、アルクノアの作戦を教えてくれたし。ティボがさらわれた時だつて、

俺達の力になつてくれた。

「お前達がオレを信じてくれるつてのは知つてゐるよ」

アルヴィンは振り向かずにはう言つて、城の中に入つて行つた。
答えに満足したのか、ジユードも笑つてゐる。

「俺達も入ろぜ。いい加減寒いし」

俺が促して、俺達はアルヴィンの後を追つて中に入つた。

* * * * *

中に入ると、謁見の間の前に居た兵士に呼び止められた。

「王への謁見は、城の外で順を待つて頂かねばなりません」

「ア・ジユール王が僕たちに会いたがつてゐる」と聞いたんですけど

「ジユードがそう言つと、兵士達は互いに顔を見合わせてから、ミラの名前を出した。ミラが自分がそうだと言つと、兵士は頷いて、次に何故か俺の名前を呼んだ。

「え、あ……俺、ですけど……」

「分かりました。このままお進みください」

と、道を開けてくれた。

何で俺の名前を……？（この世界では）ちょっと変わった名前だからかな。

首を傾げながら進む。すると、ローエンがエリーゼと話しあつているのに気付いた。

「どうしたんだ？」「どうしたの？」

同じように2人が気になつたレイアと声が重なり、思わず顔を見合わせた。

……何故かエリーゼの視線が痛かった。うん、氣のせいですね。そんな俺達を見て笑いながら、ローエンが言ひ。

「王との謁見にぬいぐるみはどうかと思ひますので、預かつて頂こうかと」

「あー、なるほどな。確かにちょっと失礼になるかも」

「どういう意味だー？」

「です！」

ローエンと同じ意味だよ、エリーゼ。と言おうとしたけど、ティポが頭に噛みついてきた。

何か……これに慣れた自分が悲しい……。

「いいの、エリーゼ？」

「大丈夫です。ティポはいい子ですから。ね、ティポ」「ねー」

顔から離れたティポがエリーゼと頷いていた。

いい子なら人の顔に噛み付かないと思う。とは言えまい。

「私が責任をもって預からせて頂きます」

と兵士が言つて、ヒリーゼがティップを手渡した。

「あんた、ティップに何かしたらただじゃおかないからな？」
「わ、分かつております」

一応、念には念を入れて兵士にさう言つておく。
またせりわれたんじゃシャレにならないからな。

「ありがとうございます、カイト」

笑顔で言つてくれたヒリーゼの頭を撫でて、俺達は謁見の間に進んだ。

進んだ先には玉座がある広い部屋だった。そこには、何とジャオの姿があった。

「ジャオさんがどうして？」

「まさか……あんたが王様とか言つオチじゃないだろ？」「…

だとしたら、今までの言葉遣い諸々で打ち首かもしけない。
まあ……その前に俺はボツコボコにされた訳だが。

「わしが王の筈なかわ！」

俺の言つた事をすぐさま否定したジャオ。

「わしは四象刃フォーヴが1人、不動のジャオじや」
「四象刃？」

フォートて事は……4人居るんだろうか？ つて、英語の概念が無いから関係無いのか。

「王直属の4人の戦士です。あの方がその1人だつたとは……」「お、王直属！」

つまりそれって……親衛部隊つて事か？

でも、それなら何でエリーゼの事を気に掛けていたんだ？

そんな疑問が浮かんだのと同時に、玉座の後ろにあつた扉が開かれ、男性が2人入ってきた。

赤い甲冑みたいな物を身に纏つた男性が玉座に胡座あぐいで座る。多分、その人がこのア・ジユールの王だ。威圧感が凄い。1対1で対峙なんかした日には、眼力だけで死ねそうだ。

そして、その王の横に真っ黒な服を着た男性は立つた。王の右腕的存続なんだろう。

「イルベルト元参謀総長、お会いできて光榮だ」

「まさか、ア・ジユールの黒き片翼 革命のウインガル……」

黒い服の男性 ウインガルがローエンを見ながら言つと、ローエンも心当たりがあつたらしく驚いていた。

「お前がア・ジユール王か？」

ちょつ……王に向かつてお前つて……。

「我が字はア・ジユール王、ガイアス。よく来たな、マクスウェル」

ミラを見ながら、歓迎（？）の言葉を言った。

そして、何故か視線を少し動かして俺を一瞥した。
それだけで、まるで蛇に睨まれた蛙のように、動けなくなつた。

「お前達は陛下に謁見を申し出たそつだが、話を聞かせてもりおつか？」

俺達にそつ言つたが、全く優しむは無い氣がする。

「ア・ジユールで作られた増靈極^{ブースター}は、既にラ・シユガルに渡っています。もし両国で戦争が始まれば、取り返しのつかない事態になつてしまつんですか？」

意を決したよつこ、威圧感に負けないよつこ、一歩前に出てジユードが言つた。

「ほつ……それを伝える為にわざわざ來たと言つのか？」

だけど、ガイアス王がそつ言つと、ジユードは後ずさつながら小さく頷いた。

「それであたし達、ラ・シユガルの兵器を壊そつと思つていいんです。それが無くなれば、ラ・シユガル王は戦争を始められないんじやないかって……協力とか……してもうえ……ませんか？」

ジユードをフォローするよつてレイアも言つたが、ガイアス王の威圧感に压されて、最後の方は小さくて聞こえない程だった。

「要件はそれだけか？」

そんな2人の言葉を、まるで大した事ではないと言つかのよつて、
ワインガルが切り捨てた。

「もう一つお伺いしたい事があります。以前、王の狩り場にあつた
といつ増靈極の研究所の事です」

話を終わらせまいと、ローヘンがそう言つた。

「あの場所に親を亡くした子供を集め、実験利用していたといつの
は本当か？」

続けてミラが言つと、ガイアス王は小さく息を吐いた。
それが、何故だか俺には鼻で笑つたように感じた。

「何を言い出すかと思えば、精靈のお前に関係があるのか？」
「私はマクスウェル。人間と精靈を守る義務がある」

ミラはガイアス王の威圧感にも引かず、真っ直ぐ目を見て話して
いた。
やつぱり……凄いな……。俺も何か言わないとなのに、全く口が
動かない。

「精靈が人を守るとは、実際に面白い事を言つたな？」
「貴様は王でありながらも、民を自らの手で弄んだ。違うか？」
「その件は全て私に任せている」

会話に割り込むよつてワインガルが言つた。

「あの研究所に集められた子供達は、生きる術を失った者達だった。お前達が想像するような事は無い。実験において非道な行いはしていない」

「それを信じるというのか?」

「ともじやないけど、言われただけでは信じられない。だって現に、エリーゼは……。」

「わ、わたしは……」

小さくエリーゼが呟くと、ワインガルが「例の被験体の娘か?」と、ジャオに尋ねていた。ジャオは頷く。

俺は、被験体って言葉に憤りを覚えて、叫ぶように言った。

「エリーゼはハ・ミルの村でも閉じ込められてたんだぞ!」

「それじゃあ、あまりにも……」

「非道だと?」

俺をフォローするよつにジューードも口を開いたけど、俺達の言葉を遮るように、いや、むしろ俺達を黙らせるように、ガイアス王が……あー、いちいち王付けるの面倒だ。ガイアスが言った。

「え……あ、はい……」

「……少なくとも、俺はそう思う

「お前達は民の幸せとは何なのか、考えた事があるか?」

「幸せ……?」

いきなり話が変わったように、ガイアスが問い合わせを投げつけてきた。

「人の生涯の幸せだ。何をもって幸せが答えられるか?」

「……そんなの……」

今まで考えた事がある筈無い。
でも……そんなの、人それぞれで違うんじゃないかな？ 僕の幸せ
と……例えばジュークの幸せと同じや、きっと違う。

「己の考え方を持ち、選び、生きる事」
「や、そう、僕もやう思つ

俺が口もつてこると、ミラが代わりに答えていた。それにジュー
ークも賛同する。

ガイアスは、その答えとは違つと言つて、玉座から立ち上がった。

「人が生きる道に迷つ事、それは底なしの沼にはまつていぐ感覚に
似てゐる」

「生きるのこ、迷つ……？」

「そう。生き方が分からなくなつた者は、その苦しみから抜け出せ
ずにもがき、苦しむ。故に民の幸福とは、その生に迷わぬ道筋を見
出すことだと俺は考える」

ガイアスの言い分けは、確かに筋は通つてゐるかもしない。王
だからこそ考へれる事だと思つ。

「俺の国では決して脱落者を生まぬ。王とは民に生きる道を指示示
さねばならぬ。それこそが俺の進むべき道……俺の義務だ！」

ここまで考へる王なんか居るのか？ と内心尊敬してしまつた。
だからと言つて、研究所の事を納得したくはないけど。

「お前達をここに呼んだ理由は二つだ。一シカザカイト、異世界の

事を話しても「うるさいのか？」

「…………！」

前に兵士に名前を聞かれたから、王が知つていてもおかしくはないと思つけど……何で……何で俺が異世界から来た事を知つてるんだ？

ガイアスが言つた事に、事情を知らないエリーゼ、ローハン、レイアも戸惑いの色が見えた。

「な、何の事だよ？ 異世界って……」

「見た事の無い服装。そして見た事の無い奇妙な道具。知らないとは言わせんぞ！」

確かに……制服と携帯は隠しようがない。いや、服は違うの着れば良かつただけだし、携帯も使わなければ問題はなかつた。不注意過ぎたな……。

「もし……本当に異世界があつたとして、俺が知つていたとして、それを聞いてどうするつもりだ？」

「我が国の利益になるか否か。それだけだ」

「…………悪いけど、俺はあなたの納得するような事は知らないよ」

実際、何が利益になるとか知らないし。それに、言つたとしても、理解出来るとは思えない。

携帯すら知らないんだ。自動車とかその他諸々を説明しても分からぬと思つ。

「ふつ、シラを切るか？ それも良かろ？ 」さうには貴様を問い合わせただすだけの物的証拠は何も無いのだからな」

……結構あつさり諦めたな……。何を考へてるんだ、ガイアスは？俺との話は終わつたとでも言つよう、ガイアスはミラに視線を移した。

「2つ目だ、マクスウェル。ラ・シュガルの研究所から『カギ』を奪つたな？ それをこちらに渡せ」

睨むように、命令するようにガイアスが言つ。が、ミラは全く物怖じしない。

「断る。あれは人が扱いきれるモノではない。人は世界を破滅に向かわせるような力を前に、己を保つ事など出来ない」「お前には俺の言葉が理解出来なかつたと見えるな」「どれだけ高尚な道とやらを説いたところで、人は変わらない。2千年以上見てきた」

「ここまで頑ななら、もう聞く術は無いだろ。誰もがそう思つた。

「では、あなたに『カギ』の在処を聞くとしよう」

ワインガルが俺達の方を見ながら言つと、アルヴィンが前に出た。

「え……？」
「あ、アルヴィン……？」
「嘘、だよね……アルヴィン……？」
「……ひどいです」
「……アルヴィン」

信じられなかつた。アルヴィンは信じたいのに……目の前の現実が……信じたく、なかつた。

だからか……ガイアスが俺が異世界から来た事を知っていたのは。と、頭の隅で冷静に思っていた。

「すまんね。これも仕事つてやつなのよ
「アルヴィン、マクスウェルは『カギ』を誰に預けた?」
「巫子のイバルだ。今頃はニ・アケリアでおとなしくしてるんじや
ないか?」

何の躊躇いもなく言った……。

アルヴィン……これも母親の為なのか?

俺達が言葉を失っていると、奥の扉から露出度の高い服を着た女性が慌てた様子で入ってきた。

確かあの人は……キジル海灘でミラを襲った人だ。

女性はアルヴィンを見ると、「ビリビリしてこにー!?」と驚いていた。

「よ、フレザ。久しぶり」

2人は知り合いなのか? そう言えば、前にもそんな感じだった気がする。

「フレザ、何用だ?」

俺達が居るからか、フレザと呼ばれた女性は報告を躊躇つっていた。

「構わん。報告しろ
「……ハ・ミルガラ・シユガル軍に侵略されました
「なんですと……」

フレザの言葉に、俺達はまたショックを受けていた。

悪い事つてのは本当に、よく重なるもんだな……。

「村民の大半が捕らえられ、ラ・シユガルへ送られた模様。殺害された者も多数おります。そして、その場には大精靈の力と思わしき痕跡が多数ありました」

「なつ……大精靈！？ 四大はクルスニクの槍に捕まってるんじゃなかつたのか！？」

「大精靈だと？ 四大精靈は20年前から召喚が不可能になつている筈だ」

ミラを疑つているのか、ガイアスはミラを睨んだ。
だけどミラは、それに気付きもせずに顔色を悪くしていた。

「……バカな、四大が解放されていれば感知出来る筈だ。……まさか、クルスニクの槍の力！？ ナハティガルは新たな『カギ』を生み出したのか！？」

目を見開いて驚愕するミラ。

もしクルスニクの槍の力ならば、戦争が始まってしまう。

「全ての部族に通告しろ。宣戦布告の準備だ。我が民を手に掛ける者は、何人たりとも許しはしない！」

ガイアスは叫ぶと、部屋を出て行つた。
残つたワインガルが、俺達を見やる。

「さて、あなた達はもう用済みになつてしまつたが……陛下が精靈マクスウェルを得たとなれば、反抗的な部族も従わざるを得まい」

ワインガルがそう言つた時こま、既に俺達は兵士に取り囲まれていた。

けど、ローホンは何かを伝えるようにエリーゼに声を掛けた。すると、エリーゼはティポの名前を叫ぶ。

俺達を取り囲んでいた兵士の中に、ティポを抱きかかえていた兵士が居て、急に動き出したティポに驚き、その隙に俺はとっさに蹴り飛ばした。

「ナイスカイト君ー！ 今のうちに逃げろー！」

逃げられるだけの道が出来て、ティポが叫ぶ。

みんなが走り出す中、俺は振り返つてアルヴィンを見た。
あいつ……呑気に手振つてやがる……。

「カイアートー！ 早くですつー！」

エリーゼに呼ばれて、俺は最後に叫んだ。

「アルヴィン！ 僕は信じてるからなつー！」

そうして俺達は、城から脱出した。

後ろから聞こえたのは、ワインガルが俺とミラヒエリーゼを捕らえる命令を出している声だった。

第23話 信頼と裏切り（後書き）

ついにア・ジユール側の人達が一気に登場！ そしてアルヴァインが裏切りました。設定上、アルヴァインがカイトが異世界人だと話した事になります。

それでは次回もお楽しみに〜。

第24話 雪の街の脱出（前書き）

やつぱり戦闘が下手やなーと感ひ今口の型。

第24話 雪の街の脱出

「やつぱつ……アルヴィンはウソつきです……」

城を出て、城門の前で足を止めたエリーゼがそう呟いた。
「事情があるのかとも思いましたが、今回はさすがに……」「アルヴィンをダンザイしるー！ 引きずり出すー！」「アルヴィンをダンザイしるー！ 引きずり出すー！」

みんな、アルヴィンを信じただけに、ダメージは深い。

「アルヴィン君……あたしの事慰めてくれたのも……ウソ、だつたのかな？ ……アルヴィン君、どうして？」「私にも本心は分からぬ……」「何が僕達が信じてるのを知ってるだー！ アルヴィンなんて……もううー！」

ジユード何か、肩が震えていた。

「俺は……アルヴィンを信じじるよ……」

みんなの視線が俺に集中するのが分かる。

「どうして……ですか？」
「アルヴィンは僕達の目の前で裏切ったじゃないか！」「そうだけど！ 今までの事が全部嘘だつたなんて、俺は思わない。俺は仲間を信じるー！」

確かに裏切られて、ショックじゃないと言えば嘘になる。けど……

…だからと言って信じない理由にはならない筈だ。

傷付けられたから信じないってのは、違う気がする。

「ソリに留ても捕まるだけだ。とにかく、街の外に逃げよ！」

納得はされてないと思つたが、そう促して空中滑車の方に向かつた。

けど、そこは固い壁で閉められていた。

「5カ所の制御石を復帰させれば、ロックを解除できるかもしれません。石にマナを注いでください。石が完全に赤く輝いたら、完了の合図です。」

「ガンダラ要塞の時と同じですね」

ローハンが的確に指示を言つて、エリーゼがあの時の事を語つ。

「ただし、みなが近いタイミングで完了させなければ、ロックは解除されません」

なかなかシビアな事を……だけれど、このメンバーなり心配はないだろう。

「なら、兵士が来ないか俺が見張るよ」「すみませんカイトさん。お願ひします」「ちょ、ちょっと待つてよカイト君！」

ローハンに任されて剣を抜こうとしたが、レイアが待つたをかけた。

「あ、あたし……マナを注ぐなんてやつた事無いよ！」

「大丈夫だよ。レイアなら出来る。それに、足止めは棍より『』の方がいいからな」

「時間はあまりありません、レイアさん！」

「うん……分かった。やってみるー！」

何とか納得してくれて、それぞれ石の前に立つ。

俺は改めて剣を抜いて『』に変形させる。まだ兵士は来ないけど、なるべく早くな。

「行きませぬー！」

ローハンの合図で、みんなが石にマナを注いでいく。

それを確認しながら、俺もすぐに足止めが出来るようにマナで矢を形成し始める。

そう思つたら、もう城の入口から兵士が出て来始めた。

「終わりました

「もうー!？」

ローハンが終わつたらしく、レイアが驚いていた。
確かに早いけど、ローハンなら納得だわな。
ひとつ、ひとつずつで兵士を足止めしないとな。

「頭上には注意しろよー。氷雨！」

幾つもの矢を束ねた状態で空に向かつて放つた。放物線を描きながら、矢は雨のように兵士に降り注ぐ。

「氷雨乱雨ー！」

続けて跳躍し、空中から同じ数の矢を兵士に向かって放った。足止めをすればいいだけだから、狙うのは足だけだ。

「熱風よ、吹き飛ばせ ヴォルテックヒート！」

着地した直後に詠唱を始め放った術は、俺が使える風属性の精靈術の中で一番威力の高い術だ。それを兵士達に直撃しないように照準を合わせて発動させると、熱風が吹き荒れて兵士達を城の方に吹き飛ばした。

これで少しは時間が稼げるだろう。

「みんな、まだか？」

振り返つて確認すると、後はレイアだけだった。少し手間取っているらしい。

そうしている間に、また中から兵士が出てきた。
俺はまた矢を作り出して今度は放射状に放った。足だけを狙うのは効率は悪くて、足を止める兵士は少ない。

「カイト！ 開いたよ！」

「分かつた！ 最後に一発！ アローレイン！」

少しだけ溜めたマナを空に放ち、光の矢を雨のように降らせる。氷雨と違うのは、この技はマナそのものを攻撃として使っている事だ。エネルギー状の矢を放つてると言えば分かりやすいか。
それから俺は、武器をしまってみんなと合流して、空中滑車に乗つて下に降りた。

市街地に出ると、そこにはプレザが待ち構えていた。

「私を置いて先に行くなんて、そんな奴滅多にいないわよ

「プレザと言つたな。まさかガイアスの部下だつたとはな。イル・ファンを脱出した私達は、初めから狙われていた訳か」

「うか……あの時ミラを襲つたのは、クルスニークの槍の『カギ』の在処を聞き出すためだつたのか……。

「ニ・アケリアアじや、アルが陛下にあなた達の情報を売つたのよ」
やつぱりか……辻褄が合つた。

「アルヴィンは……最初からあなた達の仲間だつたんだね」「やめて。あんな男……仲間でも何でもないわ」

ジユードが苦しそうに言つた事を、プレザはすぐに否定した。
傭兵だからか……？ 雇われたら誰の味方にもなるから。

「……私達の関係はご想像にお任せするわ。けど、アルは組織を渡り歩く、根無し草の一匹オオカミよ。誰にも心を許さない。信じた方が悪いわ、ボーヤ」

「それでも俺はアルヴィンを信じるよ。あんたと違つてな

明らかにジユードに対して言つっていたセリフだつたけど、俺がそう言つていた。ギロリと睨まれる。

「戦になればクルスニークの槍が、最たる脅威となるのは明白。それが分からぬマクスウェルじやないだろう？」

どこから現れたのか、それとも最初からそこに居たのか、ワインガルがミラに向けて言った。

「お前達の繩張り争いに手を貸すつもりはない。あれをお前達人間が手にすれば、待つてはいるのは悲惨な結末だけだ」

「随分、上から見られたものだな」

「//の言葉を聞こいつともせず、ワインガルは剣を抜いた。プレザも構える。

俺達も武器を出したりとするけど、それを制するよりローレンが前に出た。

「おやめなさい！ 戦巧者と名高いあなたでも、その^{ほまれ}誉め 剣で得たものではないでしょ。若者が見誤らせているのでは？」

ローレンが言ひつと、ワインガルはローレンに剣を向けた。

「イルベルト殿。それがあなたの限界。古い。……故に間違い……逃げ出す！」

ワインガルが叫んだ瞬間、奴の纏う霧囲気が一気に変わった。そして、いつの間にか髪の色が白に変わっていた。

「な、なにあれ！？」

「マナ^{ブースタ}が急激に……！？」

「増靈極！？」

「どうして……？」

「なんだお前……！」

みんな驚愕しているけど、俺はもう……この世界に来ていこう驚いたから……正直髪の色変わるぐらいじゃ驚きませんよ。

(ヒリー、誰に向かってそんな口をきいていい？ 先輩には敬意

を払うものだ）

「は……！？」

いや…… わすがにこれは予想外だ。何言つてるとか欠片も分から
ない。

それは他のみんなも同じようで、ローエンがロンダウ語と呟いた
のが聞こえた。

（マクスウェル、捕えるつもりだったが……殺した方が早そうだ）

何を言つているかは分からぬけど、その一言がとてもなくヤ
バイ事だと言うのはワインガルの雰囲気で分かつた。

いきなりもの凄い早さで距離を詰めてきたワインガルが剣を振る。
かろうじてすぐに反応できた俺達は、ワインガルを取り囲むように
散らばつていた。その間も、何かを言つてゐようだけど全く分から
ない。

「くつ……話すなら日本語にしてくれよな……」

「今はそんな事言つてる場合じゃないよ！」

「分かつてるよ、んな事は！」

でも、戦闘中に意味分からん言葉を聞いてると、なんか気になつ
て仕方が無い。

「碎氷刃！」
サイヒョウジン

斬りかかつてくるワインガルに、氷を纏う刃で対抗する。剣と剣
が打ち合わされる度、氷が砕けていく。俺は少しだけ距離を空けて、
剣を握り直す。

「はあっ！ 幻魔衝裂破！」
〔ガンマショウレッパ〕

回転するように一度十字に剣を振り、大きな衝撃波を放つ。突進してくるワインガルは、それを大きく跳んで難なく避けた。

「飛燕翔旋！」
〔ヒエンシヨウセン〕

跳んだワインガルに追撃するように、レイアが棍を振り上げながら大きく跳ぶ。それにはさすがのワインガルも避ける事が出来なかつたのか一度喰らう。一撃目は剣で防ぎ、逆にレイアを地面に叩き落とそうとした。

「神射鶴！ 続けて輝凰旋！」
〔カムイドリ キオウセン〕

レイアを助けようとワインガルに向かつてマナの塊を放ち、続けて光を集めた矢を撃ち出す。ワインガルはその2派を、レイアを吹き飛ばす反動で避けていた。

「ぐう……いつたあー！」
「大丈夫か？」
「回復します！」

地面に倒れたレイアに、エリーゼが治癒術を施した。

「ほら、立ち止まつてる暇なんか無いわよー！」
「させないよ！ 飛天翔駆！」
〔ヒエンシヨウク〕
「バニッシュユヴォルト！」

術を使おうとしていたフレザに、ジュードとミラが連携で阻止していた。

「エアプレッシャー！」

「さやあー！」

2人の攻撃を避けたフレザだけど、ローホンの追撃には気付かず、術を喰らっていた。

「カイト、やりましょう！」

「頼んだ、エリーゼ！」

エリーゼと共鳴リンクして、隙の出来たフレザに術技を放つ。

「闇の刃よ今ここに！」

「連撃受けな！」

「斬魔ザンマ、飛影斬ヒヨイヅク！」」

フレザの周りに幾つもの黒い剣が現れ、俺はそれを空中で掴み取りながら斬り続けていく。そして最後に現れた剣を掴み、真上から落ハシしながら斬りつける。

「あああああっ！？」

それがトドメになり、フレザは力無く倒れた。急所は外した筈だ
からちゃんと生きている筈だ。
残るはワインガルだけだ。

「ローホン、お願い！」

「お任せを！」

いつの間にかワインガルが押されていて、レイアとローホンの共

鳴術技が炸裂する。

「「踊つて砕けろ！ 連舞華鷹！」」
レンノカカヨウ

2人が舞うように殴り斬りを続け、ローエンが斬り上げるとトドメにレイアがワインガルを地面に叩きつけた。

「がはあっ！」

白くなっていた髪の色が、元の黒色に戻った。それが、戦闘の終了を告げていた。

「やつてくれたな……」

フラフラになりながらも、2人が立ち上がる。それを見たミラが再び剣を構えた。

「まだ……相手をしてくれるのかしら……？」

いつ斬りかかってもおかしくない状態だつたけど、ワインガルとフレザの後ろの方から、兵士が走つて来たのが見えた。

「ミラ、そんな事やつてる場合じゃない。逃げないと捕まるぞ」

「……潮時と言う訳か」

ワインガルとフレザはもう追いかけるだけの力は無いだろうから、今から逃げれば兵士に捕まる事はなくなる筈だ。

俺達が街の外に走り出すと、ローエンがワインガルに呼び止められていた事に気が付いた。

何かを言われてローエンの表情が強ばり、何も言わずに走り出し

た。それを確認して俺も走り出す。

「無理はしないようにな、ローハン」

「……お気遣い、感謝します」

辛そうだったけど、俺に言えた事はそれぐらいしかなかつた。

* * * * *

兵士が追つてくる事もなく、なんとか無事にシャン・ドウまで戻つてくる事が出来た。
けど、兵士に追われた訳だから、その事がコルゲンスさんに伝わつてゐるかもしれない。そうローエンが言った。
……両国のお尋ね者に行く場所はあるのか?
そんな事を思つてみると、コルゲンスさんが来てしまつた。
思わず俺は半歩後ずさつてしまつた。

「謁見はどうだつた?」

俺達の心配は杞憂だつたのか、コルゲンスさんは至つて普通に接してくれた。

「えつと……それなりに……成果はあつた……のかな……?」

実際に歯切れの悪い答えを言つてしまつた。そもそも、成果なんかあつたか？

「済まないコルゲンス。急いでいるんだ。すぐに発てるか？」

俺の返答に見かねたのか、ミラがそう言つていた。

「まあ、出来ない事はないが……何か急ぐ理由でも出来たのか？」
「うん、ぼくたちガイアスに……」
「おつとティポ。いきなり噛んだらダメだろー」「もががが……」

ティポが余計な事を言つ前に、俺はティポを掴んで自分の頭を噛ませた。いつもと逆のパターンに、ティポも驚いていた。

「ティポー！」
「わっ、カイト君何やつてんのー？」

そんな俺の行動に驚いたエリー・ゼとレイアが声を上げた。
とつさにやつたから、自分でも何やつてんのか分からぬ。
ただ一つ分かるのは、噛まれる事に完全に慣れていると言つぱし
い現実だけだつた。

とりあえず誤魔化せたと思うから、ティポを顔から離した。
ちょうどその時、

「急ぐ必要は無くなつたよ」

と背後から声がした。

「アルヴィンー？」

ジューードが驚きの声を上げた。

「さう、背後に居たのはアルヴィンだった。」

「奴ら、今頃せつせと山狩りでもしてるからな」

「……手土産のつもりか？」

「//ラはアルヴィンを警戒しているのか、そう尋ねた。

「土産も何も、仲間だら、オレ達」

「……」

白々しいことでも言つよひ、「//ラがアルヴィンを見ながら黙る。

「何だよ、信じられないって？　お前達が信じててるって知ってるって、そいつただろ？」

そう言つて、アルヴィンがジューードの肩に腕を回した。

「まだオレの事信じてくれるよな？」

「う、うん……」

「俺も仲間だつて信じてるからな」

ぐつと親指を立ててアルヴィンに言つと、一瞬戸惑った様子だったけどすぐにいつもの調子に戻った。

「アルヴィン君、おかえり……」

「帰つてきてくれて……うれしい、です……」

腕を組んでジト目でアルヴィンを見るレイアと、警戒して俺の後

ろに隠れるエリーゼを見て、アルヴィンがおかしそうに笑った。

「とにかく、しばらく時間は稼げそうですね」

「そうだな。ちゃんと休んでからイル・ファンに行こうぜ」

カン・バルクでワインガルとフレザの2人と戦つてから走つて来て、口クに休んでないしな。

クルスニクの槍を壊すのには、やつぱり万全でなければいけない気がする。

まあ…… わすがに宿に一晩泊まるのは無理だなうな。

「事情は聞かない方がよさそうだな。まつたく、君達と関わつていると飽きないよ。私はワイバーンの檻の前に居るから、飛ぶつもりになつたら来てくれ」

「ありがとうございます、コルゲンスさん」

本当に、何度も言つた気がするけど感謝してもしきれないな。

「さて、少し時間が空いたな?」

「すみません、一つ気になる事があるのですが、ようじですか?」

ローベンが俺を見ながら言つた。

……何だらう?

「ア・ジユール王 ガイアスさんが言つていた、『異世界』の事

です」

「あ……」

すっかり忘れてたけど、そつ言えればそんな話が出てたんだよな……。

普通なら冗談で済ませられるけど、ガイアスがあの状況で言った事だ。冗談とは思えないかもしれない。

「あ、それあたしも気になる
わたしもですっ」

あー、みんな興味津々な感じ……？
でも、エリー・ゼ達になら話しても問題はないかもしれない。むしろ、今がチャンスかもしれない？

「じゃあ、話すけど……今から話す事は他言無用、誰にでも話さないよ!!」

みんなが頷いたのを確認してから、俺は自分の世界の事、何故かこの世界に迷い込んだ事を話した。

「そんな事が……」

「うん、普通は信じられないよ……」

「……嘘じや、ないですよね？」

話し終えると、みんながそんな反応をした。
まあ、想定の範囲内だな。

「もう少しひん詮明出来るのはあるよ

ポケットから携帯を出してみんなに見せる。
みんながそれに注目するのが分かった。

「これ……カイトが最初に見せた……『ケータイ』だっけ？」
「あれ、このガラス玉は何？」

「ああ、これは貴い物

ジユードは覚えていたらしく名称を言った。
レイアがガラス玉に目を向けたから、俺はひとつ答える。
Hリー・ゼの顔が真っ赤になつてるのは何でだらう？

「わつこや、そのケータイは何に使う物なんだ？」

とアルヴィン。

「用途はいろいろあるけど、主な使い方は……遠く離れた人と会話
したり、一瞬で手紙をやり取りしたり、かな」

分かりやすくなつて言葉を選びながら言つて、当然ながらみんな
驚いていた。

「まさか……黒匣……」

「違うからー！」

「わざと……一瞬目がマジだったよー…？」

「まあ……そう言つて訳でさ……黙つててごめん」「
アルヴィンみたいに嘘じやなくて安心しました」「
本人前にして言つたなよ……」

Hリー・ゼ、黒くなつたのか？

「あたしも安心したよ。変な話じやなくて」

……ある意味変な話でしたけどね？

「じゃあ話はこれぐらいにして、コルゲンスさんの所に行こうぜ」

話を切り上げてそう言つと、今度はジユードが何かあるらしく、アルヴィンを見た。

話の内容が分かったのか、アルヴィンが頭を搔いた。

「納得いってないってか？」

「当たり前でしょ？」

「4人で初めてニ・アケリアに行つた時だよ。社から俺一人でどこかに行つたら」

諦めたようにアルヴィンが話し始めた。

「私が社を出ると、ジユードとカイトが2人で居た時だな」

「その時だよ。ワインガルと会つてたのは」

そんな初めの時からだったのか。

「密約を交わしていたのでは？ ござとなれば//ワさんを引き渡すと」

「アルヴィン君ひどい！ やつぱは//ワやジユードやカイト君を裏切つてたんだ！」

レイアが怒ったように言つと、アルヴィンが慌てて弁解する。

「待てよ。確かにあの時は色々考えてたけど、今回は逆にそれを利用できると思ったんだ。ワイバーンの許可が下りたのだって、事前に話を通してたからなんだぜ」

「え、それって、ガイアスの前で裏切つたのは……」

「あの場で裏切ったフリしてなきや、ワイバーも使えなかつたつて事。だから、わざわざシャン・ドゥとは真逆に逃げたて嘘ついたんだ」

つまり……遠回りながらも俺達の為に動いてくれてたって訳だな。

「ジユード、これでもアルヴィンの事信じられないか？」

「…………僕は、カイトみたいには信じられないよ…………信じたいけど……」

「……」

また裏切られるかもしれないと、そう思つてゐんだらうな。

「あのフレザと言つ女。キジル海灘の時といい、知つた仲のようだつたな？」

そんな中、ミラがフレザの事を聞いていた。

「何が聞きたい？」

「どういう関係なの？」

さすがにジユードも氣になつてゐたんだろう。一度戦つた敵と仲間が知り合いつてのは。

だけど、アルヴィンは黙つてしまつた。それに聞いたのですつてジユードがアルヴィンに叫ぶ。

珍しく泣きそつになつてゐたジユードを見て、アルヴィンはやつと口を開いた。

「出会いはオレがラ・シュガルの情報機関に雇われてた時だよ。あいつはア・ジユールの工作員として、イル・ファンに潜入中だつたけどな」

「……それで？」

「その後、個人的になんつーのよ、色々あつたのは聞かないでくれよ」

煮え切らないけど……大人の事情ってやつでしょつかね？ よく分からんけど。

「納得はした。けど、まだ信用しきつた訳じゃないからね」

そこまで行つたら信用しりよ、ジユード……。

「くくく、ジユード君はかわいいね」

「な、なんだよそれ！ 僕は怒ってるんだよー！」

「わかつた、わかつた」

とりあえず、和解はしたのかな。ギスギスよつはよつぽど良い。

「最後に一つだけいいか？」

「何だ？」

ミラが真剣な表情で尋ねた。

「お前が私達に肩入れする理由を教えてほしい。何かメリットがあるのか？」

「それ今さら聞く？ 優等生やみんなが大好きだからに決まってるでしょーよー」

「はあ！？」

思わず声を出してしまった。みんなも呆れて言葉を失つている。さすがに……これは胡散臭いと思つてしまつた。

「ウソつきやがつてー！」

「なんだそれ、ちょっとヒテーじゃねえか！」

ティポの怒ったようなツッчиミラにアルヴィンは笑いながら言った。

「と……とりあえず……コルゲンスの所へ行こうか……」

珍しく顔が引きつったミラが促して、俺達は呆れながらコルゲンスさんの所へ向かった。

……こんなんで大丈夫なんだろうか？
氣を引き締めないでいいのか？

第24話 雪の街の脱出（後書き）

ついにエリーゼ達に異世界から来た事を告げました。すごい端折った感じがあるけど気のせいです。

あと……オチ無いわあ……とか言わない

～今回の創作共鳴術技～

- ・斬魔飛影斬（闇）

凍牙霧影剣 + フラッターズ・ディム

カイトとエリーゼの共鳴術技。

空中に出現した幾つもの闇の剣を、超高速で移動しながら掴み、敵を斬る。トドメに真上から落下しながら斬る。

- ・連舞華鷹

三散華 + マーシーワルツ

レイアとローエンの共鳴術技。

2人で踊るように攻撃して、最後にローエンが斬り上げた敵をレイアが叩き落とす。

第25話 飛翔 イル・ファンへ（前書き）

今回も短くなりました。

第25話 飛翔 イル・ファンへ

改めてユルゲンスさんの所に行つて、ワイバーンを借りると申し出る。

「さすがにラ・シュガル王都に降りるわけにはいかないからな。近くの街道にでも降りる事になると思う」

「なんか……ホントありがとうござります」

そして何度も礼を言う俺だった。

ワイバーン1頭に乗れる人数は2人と言う事で、とりあえず借りるワイバーンは4頭。俺とエリーゼ、ジュードとミラ、アルヴィンとレイアがペアで乗つて、ローベンには1人で乗つてもらう事になつた。

ここで1つ。

乗り方が分からん。

ユルゲンスさん曰く、手綱を握つていればとりあえず何とかなるらしいけど……不安で仕方がない。

「よ、よし……行くよ、エリーゼ。しつかり掴まつてな」「しつかり掴まつてます」

と言つて抱きついてきたエリーゼ。

刹那、ワイバーンが飛び上がつて大空を駆け、俺達はイル・ファンへと向かつた。

* * * * *

「うわああああー？ ちゃんと飛べえええーっ！？」

大空に出てからそれなりに経つた後、ワイバーンは未だ蛇行を続けていた。既にどっちがイル・ファンなのか、俺には分からない状態になっていた。

「ちや……ちやんと飛んでください……！」

「ちゃんと操縦しろー！」

「これでも精一杯ですからっ！？」

手綱を離すまごとしがみつくようにしてこののが悪いのか……。エリーゼが失神しないのが驚きだった。

「うわあああああっ！？ //ハー 逆さー 逆さになつてるからつー？」

「繋がるな、ジユードー。慣れれば愉快なものだぞー！」

「ど！」があああああッ！？」

前を飛んでいる、ジユードと//ハのペアからは、ワイバーンが逆さに飛んでいた。ジユードの悲鳴が聞こえる。

これを愉快と思えるのは、きっと//ハが精霊の主だからだらうつな。そう思つておいつ。

「アルヴィン君ー 落ちるー 落ちちゃうよっ！？」

「つるせえー 黙つてろー オレだって精一杯なんだよー！」

また違う所では、レイアがアルヴィンにしがみついて絶叫していた。アルヴィンも余裕が無いのか、言葉を返すだけで精一杯のようだ。

「これ……イル・ファンに着くまで保つのか？」

「なかなか難しいですね……！」

と、蛇行し続ける3組とは違い、ローエンは普通に飛んでいた。何故……？と思つより早く、ワイバーンがまた明後日の方向に旋回し始める。

ミラ達の乗るワイバーンが何故か垂直落下して、水面ギリギリでなんとか浮上。そして何故か俺達の乗っているワイバーンも同じ様に続いた。

水面の次は断崖絶壁のある岩場。間をくぐり抜けると今度は急上升して一気に雲の上に出た。

「こんなアクロバティックはいらないからっー！」

雲の上でよつやくワイバーンが落ち着いた。
空気が澄んで　むしろ冷た過ぎるが　いて、見える景色が綺麗だった。

「エリーゼ……くれぐれも下は見るなよ……」

「下は一面雲だけど……。」

「綺麗ですね」

「ああ。一生に何回も見れないぐらいの光景だな」

飛行機で飛ぶよりも高い高度なんぢゃないか？　あいにくと乗つた事無いから分からぬけど。

そうして綺麗な景色に見惚れていると、いきなり雲の下から巨大な魔物が出てきた。

「うわっ……！　何だこいつー。」

大きな口を広げてきて、俺はとつさに手綱を強く引いてワイヤーバンにスピードを出させて避ける。

「このままじや落とされちやうよー。」

「みんな！　ひとまず降りようー。」

ジューードの声が聞こえて、俺達は雲の下へと戻る。けど、魔物もこちらを追いかけてきた。

雲の下には大きな街が見えた。このままじやあの街に被害が及んでしまうかもしれない。

そう思つた瞬間、魔物の放つた火球がミラ達の乗つたワイヤーバーンに直撃してしまつ。

「ジューードー！」

「//アー。」

落下して行く先は、街のど真ん中だった。俺達も急いで2人を追つた。

* * * * *

落ちたのは見慣れた街 カラハ・シャールだつた。

広場に落ちた2人を発見した俺達は、ワイバーンから降りて2人の下に走る。

その時、身体を起こしたジユードに向かつて、先程の魔物がすごい勢いで迫つているのが見えた。

「ジユード！」

と俺が叫ぶのとほぼ同時に、アルヴィンが俺を抜かしてジユードの前に立ち、大剣で魔物の攻撃を受けて吹っ飛ばされていた。アルヴィンは何事も無かつたかのように地面に着地する。

「アルヴィン……」

「今は余所見してゐ場合じやないぜ！」

魔物に銃を向けるアルヴィン。

俺達もようやく追い付き、武器を構えた。

この魔物はいつぞやの飛んでいた敵と似た感じがする。

「やるぞレイア！」

「分かった！」

戦闘が始まつてすぐに、俺はレイアと共に^{リンク}変形せられる。

「集え8元素！」

「より取り見取りで行くよ！」

「「Hレメンタルマスター！..!」

俺が作った矢にレイアがそれぞれ属性を付与し、俺は空中から魔物に向かって連続で撃ちだした。

直撃はしているけど、致命傷にはなつていよいよだ。

早く片付けないと、街に被害が出てしまう可能性もある。

「聖なる槍よ、敵を貫け！ ホーリィランス！ サラに、ディバインセイバー！」

魔物の周囲に光の槍が現れ、魔物を串刺しにする。そして、閃光が敵を取り囮み、徐々に中心へと集まり弾けた。

「このような大技があつたのですか……」

「もつたいぶらないでください！」

「え……何かごめん……つて、まだ倒してないからな！」

さつきの術は俺が使える中でも高威力だけど、さすがにあの大きさの魔物を倒せるほどの威力では無かつた。

とは言え、あと一撃でも大技を喰らわせれば多分倒せそうだ。

「いくよ!!ワー！」

「了解だ！」

そのトドメを、ジユードヒーラーが共鳴術技でやつとしていた。

「斬り抜ける！」

「一瞬の交差！」

「双碎迅！」

「！」

2人が一瞬の内に瞬速の突きを繰り出し、魔物が絶命した。速過ぎて何が起きたのかよく分からなかつたけど、とりあえずこれで一安心だ。

「皆さん、落ち着いてくださいー。女性と子どもは家に入つて出てきてはいけません」

魔物を倒してホッと安心していると、聞いた事のある声が聞こえてきた。

振り返つてみると、そこに居たのはこの街の領主 クレインが兵士を連れて剣を抜いていた。

「旦那様！」

「ローハン！ それに、皆さんまで！」

クレインがローハンに気付くと、俺達の姿にも気付いて驚いていた。

その時、アルヴィンが苦しそうに片膝を着いていた。

「アルヴィン？」

「……ははっ、じくつちまつたな……」

「さつきジユードを庇つた時だな。大丈夫か？」

「何とか、な……」

とは言え、かなり辛そうにしてるし……休ませないと戦うのも厳しそうだな。

アルヴィンの様子を見たクレインが、兵士達に言つて屋敷まで運んでくれる事になった。

俺達も屋敷に入れさせてもらつと、ワイバーンも、魔物の攻撃が直撃してしまつたから、一日は休ませないとけなくなつてしまつ

た。

「仕方あるまい。今日はしっかりと休んで、明日改めてイル・ファンに向かうとしよう」

リリがそう言って、予定外の休息をとる事になった。

第25話 飛翔 イル・ファンへ（後書き）

どうにも戦闘が共鳴だけになってしまい…。どうしましゃうか（笑）

次回はちょっとオリジナルが入る予定です。

～今回の創作共鳴術技～

- ・Hレメンタルマスター（全属性）

虚空墜衝 + ファンシーHレメンツ

カイトとレイアの共鳴術技。

カイトが作り出した8つの矢に、レイアが属性を付けて撃ち出す。火 水 風 地 雷 氷 光 閻の順で撃つ。

第26話 束の間の休息 衝撃の事実（前書き）

別にそこまで衝撃の事実は無かつたりします。

第26話 束の間の休息 衝撃の事実

一時解散になつて各自自由に動き出してすぐに、俺達が戻つてきた事を知らされて来たドロッセルが走つてきた。

「エリー！
「ドロッセル！」

まるで生き別れた親子　いや、姉妹が奇跡的に出会つた場面を彷彿させるように、エリーゼとドロッセルが抱き合つた。

ティポはと言つと、2人の周りをグルグルと飛び回つている。

「おかえりなさい、エリー。大丈夫だった？ 怪我は無い？」
「はい。みんなが居ましたから」

いきなり旅に出る事になつた感じだったからな。ドロッセルはかなり心配していたらしい。

親友を通り越してもう家族だよな。

「カイトに変な事されなかつた？」
「つてちよつと待てーい！？」

関心していた時にそんな事が聞こえて、俺はとつさにシッパミを入れていた。
すると、何故かジト目で見られた。

「な、何もしてないからな……変な事は……」

……してない、よな？ 頭を撫でる事は数回あつたけど、別にそ

「分かつてゐるわよ。おかえりなさい、カイト」

からかわれたらしく、すぐに笑顔になつてそつとしてくれた。
俺もただいまお話をうどするべく

「ドロッセル！ いろいろお話をしたいのです！」

「うん……お話ししましちゃう！」

と普段のエリーゼとは思えない速さで走つて部屋に向かつて行つた。

「うーん……1人になつてしまつた。

「ドロッセルもエリーゼも、久しぶりに会えたから嬉しいんだろうね」

ソファに座つて何をしようか考えていたら、いきなりクレインがそう話し掛けてきた。

「そうだな。俺は前から思つてた事だつたけど、エリーゼにしてみればいきなりの旅だつたからな」

「でも、まだ途中とは言え無事な様子を見るとホッとするよ。監さんは恩人だからね」

「恩人……俺はどうやってクレインを助けたのか、未だに分からないんだよな。」

「ローエンに精霊術を教わつてからも、治癒術を使おうとしても発動しなかつたしな。」

「この機会だから、また治癒術の特訓でもしてみるか。」

「それじゃ、僕は仕事にもどるよ。カイトの部屋はそのままにしてあるから、後で見に行つてみるといい。留守中にいろいろ来てたからね」

「来てた……つて、何が？」

「手紙とかがね」

「手紙……？ そんなのを貰うような間柄の人は居なかつたと思うんだけどな……。まあいいか。

「分かつた、見てみるよ。それと、後で書斎使わせてもらひけだしいか？」
「別に構わないよ」

と答えを残して、クレインは仕事に戻つて行つた。
俺は早速、自分が前に使つていた部屋に向かつた。
部屋に行くと、確かにここを出発した日からあまり変わつた所はなかつた。

けど……机の上には結構な量の手紙が置かれていた。
まずはこれの整理からか……。

「えーと、これは……領収証？」

ちゃんと読み書きの練習の結果は実つた。ちゃんと読める。

ああ……本の代金か……。

「……3万ガルド……？ そんなに買つたっけか？」

まあ、これは後に回そづ。

次は、つと。

「何これ？」

きむんと封をされた手紙を開けて読んでみて、思わず息を嘆き出していた。

「……これはなんだ……あ、あれか？　いわゆる、その……手がレターー…？」

実際に貰った事は無いけど、書いてあるのはだいたいそんな感じの内容だった。

とりあえずこれも置いておこうと、他の手紙を見てみると、同じような内容の手紙が数十通あった。

その4割程が同じ名前だったのには触れる事はしない。
とりあえず、手紙はそんな感じの物ばかりだったので、整理には思つた程時間は掛からなかつた。

「さて……またやる事が……つて、そつだ。書類借りるんだつた」

ベッドに倒れ込もうとした時に思い出して、俺は書類へと向かつた。

* * * * *

屋敷に運ばれた後、医者の治療を受けてすぐに怪我が良くなつたオレは、特にやる事が無くて街に出でた。

ミラやジユードが話に来たけど……それは別に語る事じゃないか。 独りでボーッと、シャン・ドゥやカン・バルクでの出来事を思い出す。

予想外だったのは、オレの事を何が何でも信じよつとするカイトだ。他の奴みたいに、少しでも疑つてくれればこいつちは楽だつてのに……。

カン・バルクで裏切つた時も、逃げる直前にあんな事を言いやがつた。その後合流して、全員半信半疑な状態 それより悪いかもしないが にも関わらず、あいつだけは信じじると言い切つた。

「ミラだけでもやつてくつっての……」

もしかしたら、あいつだけは最後までオレを信じよつとするのかもしれない。

例えオレが、どんな裏切り方をしようとも。

「ミラがどうかしたの？」

「ツー？」

いきなり近くから声が聞こえてきて、オレは思わず身構えてしまつた。近くに居たのはレイアで、そんなオレの様子に驚いていた。 独りでボーッとし過ぎた所為か、近寄るレイアに気付かなかつたのか。

「『』、『』めん…… そんな驚くとは思わなくて……」「勝手にオレが驚いただけだ。何か用？」

レイアはオレを完全には信用していない筈だ。ジユードを裏切っていた事で何か言つつもりか？

俯いて言いにくそうにしているレイアから、言葉を待つた。

「大した用じやないんだけど……ケガ、大丈夫なのかなって……」

予想外の言葉に思わず言葉を失つた。
けど、次の瞬間オレは笑つていた。

「くくく、怪我の心配でわざわざオレの所に来たのか？ 優等生のお節介が移つたんじやないか？」

笑いは堪えられなかつたけど、これは茶化すとかそんな笑いじゃない。

オレが笑うと顔を上げていつものような表情になつた。

「移つてないし、何で笑うかな！ もう、心配して損した！」
「悪い悪い。怪我はもう大丈夫だよ。それに、心配するなら優等生を心配しどけつて」

何かと抱え込もうとするからな、あいつは。

「な、何でそこでジユードが！？」
「別に。言つてみただけ」
「……あたしだつて、カイト君程じゃないけど、ちゃんとアルヴィン君の事信じてるんだからね」「は……？」

今、何つった？

「何でもない……じゃあの、アルヴィン君」「あ、おい……！」

オレの呼び止めを無視して、レイアが去つて行つた。

「……信じられる程、罪悪感が増すつてのにな……」

* * * * *

書斎で治癒術に関する本を読みふけつて、時間がだいぶ経つたらしく、日は傾いて空は茜色に染まつていた。結局、読んでもそんなに成果は無かつた。いや、『そんなに』じゃないな……『全く』だ。

今回のこれで分かつた事は一つある。

「俺に治癒術の才能は皆無……とな……」

応急手当でぐらり出来てもいいじゃないか。と愚痴をこぼしそうになる程、全く出来なかつた。

治癒術が駄目と分かつた後は、これまた上手く出来ない地水火風の各精霊術を調べただけど、やっぱり何も変わらない。

「つーん……短所を直すよりも、長所を伸ばすか？」

唯一上手く出来る氷、雷、光、闇の4属性の精霊術のバリエーションを増やす方が、もしかしたらいいのかもしない。

けど、一つ問題があった。

「IJの書齋……IJの4属性に関する本がほとんど無いんだよな……」

地水火風はたくさんあるのに、残りの氷雷光闇の特に氷と雷に関する本が無い。

本当にキレイさっぱりに。まるで切り取られたかのように無い。

「……ま、無いなら仕方ないんだけどな」

探すにも時間は遅すぎるし。

椅子に座りながら伸びをすると、ポケットから携帯がするりと落ちた。

拾つて机に置いて、そう言えればと思いついた。

エリーゼから貰ったガラス玉。それに彫られた文字は何て書いてあるんだろうか？

「ちょうどいい機会だから調べてみますか」

と囁きで読み書きの基本が書かれている教材用の本を開く。

「えーと……」

彫られた文字は少ないからすぐに分かると思つたが……探すのは難しいもんだな。

しばらく教材とガラス玉とを交互に見ながら文字を読んでいき、全部読めて意味を理解したのは、探し始めてから一時間は経つていたと思う。

そして、その言葉に俺は固まっていた。

「…………は？」

いや、言葉の意味は分かる。エリーゼが俺に渡したと言つ事は、エリーゼが俺にそう思つてゐるつて……そういう事なのか？ 理由が分からずに固まつていると、いきなり書斎の扉が開いて、エリーゼが顔を覗かせていた。

な、何でエリーゼが今来るんだよ！？

と内心思いながら、俺はエリーゼを見る。

「どう、したんだ、エリーゼ？」

ちゅうと棒読みみたくなつて、エリーゼが首を傾げたけど、すぐ不信感は無くなつたようで、部屋に入ってきた。

「もう少しで夕食の準備が出来るそつなので、呼びにきたんです」「え……もうそんな？」

窓の外を見てみると、なんと既に日が暮れていた。

「カイト、一緒に行きましょうっ！」

「ああ、分かったよ」

と椅子から立つて、机の状態に気付いた。

……調べるのに夢中で、かなりじつちやじちやになつてるな。

「悪いエリーゼ。これ片付けてから行くから、先に行つてくれないか？」

「わたし、待つてます」

「いや、結構時間掛かりそうだからさ。みんなに遅れるって言つてきてほしいんだ」

「……分かりました。早く来てくださいね？」

「分かつてるよ」

残念そうにしたエリーゼは、そう言って部屋から出て行った。

俺は早速、出した本を片付け始める。

片付けていた最中、俺はエリーゼの事を考えていた。

ガラス玉に彫られていた、『好き』と言つ葉の意味を、ずっと

考えて、自分の中で整理をしていた。

* * * * *

本を片付けた後にみんなの所に行くと、みんな既に食事を始めていた。

片付け中にはやはり考えはまとまらなかつた。

「ごめん、遅れちゃって」

「早く来ないと、ミラが全部食つてしまつぜ？」

「ね、狙つてなどいないからな！」

アルヴィンが冗談っぽく言つたのに對して、ミラは何か本気な感じだった。

俺がもう少し遅れていたら、本当に食べられていたのかもしれな

い。

みんなで賑やかな夕食を食べ終えて、俺は自室で考えをまとめ
る。

ガラス玉に彫られた言葉は、エリーゼは本気なんだろ？ だ
としても、俺はそれに応えたら妹に手を出した事に……。
いや、あれを貰つたのはその話が出るずっと前だ。

そうか……だから俺が妹にならないかつて言つた時、残念そうな、
悲しそうな表情をしたのか。

……なら俺、かなり悪い事をしたんだな。読めなかつたとは言え
な。

でも。それでも俺は、エリーゼの気持ちに応えられるか分からな
い。自分の気持ちが分からぬかい。

「あー！ 考えても始まらないな。とにかく、エリーゼと話をしよ
う」

そうすれば、答えも分かるかもしれない。

そんな訳で、エリーゼの部屋の前に来てしまった。

つてか……今さら思つた事だけど……友達の証つて言つてたんだ
よな、渡して来た時に。だからこれつて……友達として好きとかそ
んな感じなんじやね？ という可能性が出てきた。むしろ、その可
能性の方が高い気がする。

「ははは……自意識過剰だな、俺……」

とは言え、ここまで来たら事の真相を聞いてみようじゃないか。
頭の中で、どう話すかを組み立ててから扉をノックする。
しばりしてエリーゼが出てきた。

「どうしたんですか？」

「あ～えっと……ちょっとお話を……」

首を傾げるエリーゼだけ、すぐに部屋の中に入れてもらえた。
そして、何故かティップに顔をかじられた。

「何してるんですか、ティップ！」

まあ……慣れたんで別にいいんだけどな。

俺が窒息する前に、エリーゼがティップを剥がしてくれた。

「カイト君、何の用ー？」

「まさかティップから言われるとほ……」

聞くならかじるなよ……。

俺は呆れながら、とりあえず本題に入らうとエリーゼから貰った
ガラス玉を取り出す。エリーゼが小さく声を上げた。
出したはいいけど……何を言おうか。

「えっとね……『めんな』

少し考えた結果、出たのは謝罪の言葉だった。

「……なんで、謝るんですか？」

俺の言葉に俯きながらエリーゼが尋ねてきた。

「いや、実はさ……今までこれに何が彫られたのか分からなくて……やつを、やつとよめたからさ。ほら、俺って読み書きダメだから、時間掛かったんだ……」

本当の事なのに……言ひ訳っぽく聞こえるのは何でだろうか？
俺が慌てながらそいつ言つた、Hリーぜは一度顔を上げて、それからまた俯いた。

「……だから、今の『じめん』は今まで読めなかつた事と、それでHリーぜを傷つけちやつたかもつて思つたから……」

ああ……俯いてるけど何となく、怒つてるのが分かる……。
そりゃやうだよなあ。貫つてから結構経つし……。

「カイトって、鈍感だつたんですね」

「……すこません……」

Hリーぜの言葉に謝る事しかできなかつた。

「カイト君はエニーのこと、どう思つてるのー？」

とティボ。

いつもなら口を塞ぐとしているヒトリカビ、今回はずつた。

「俺は……」

Hリーぜと話せば答えが見つかるかもしないと思つたけど……全然見つからない。

大事に思つてるし、好きかと聞かれれば、間違いなく好きと答え

られる。だけどそれが、どうこう意味の『好き』なのかは、今の俺には分からぬ。

1人の女の子として好きなのか。友達として、家族としてなのか。

「わたしは、カイトの事、好きですよ」

急かすように、エリーゼがそう言つた。

「……それは、友達として？」

恐る恐る聞いてみると、すぐに首を横に振つた。それなら家族としてなのかと尋ねると、それも違つた。
なりやつぱり、エリーゼの想いは……そう言つ事なんだろう。

「……この事、言つて迷惑でしたか？」

「違うよ、そんな事無い！」

答えるのを躊躇つよう見えていたのか、エリーゼが不安そうな表情で言つてきて、俺はすぐにそれを否定した。

「……正直、俺は自分の気持ちが分からないんだ」

「分からないんですか？」

「エリーゼの事はすごく大事に思つてるし、好き……なんだと思う。けど、その『好き』がどういう意味なのか、俺には分からないんだ

……

「どうこう意味？」

エリーゼの代わりにティップが尋ねる。まあ、エリーゼの考えを口にするらしいから、エリーゼがそう考えたんだろう。

「……つまり……時間をください」

何で敬語になつたんだ！？

言つた自分がかなり驚いていた。

「どのくらいですか？」

「えつと……分からな……」

「なんだよそれー」

煮え切らない答えで本当にじめん。

自分でも考えが浅い事は腹立たしいと思つてるよ……。

「……エリー・ゼがもう少し大きくなつたら、かな」

改めて考えて、そんな言葉が出てきた。

結局は先送りにしようとしてるけど、実際にエリー・ゼはまだ子供なんだ。じついう話は、もう少し大きくなつてからでもいいと思う。

「大きく……ですか……」

「ミラ君みたいなバリボージやないとー？」

「そう言つ意味の大きくじゃないからー？」

いきなり何を言い出すんだティボは……。

まあ、エリー・ゼは今が成長期だらうから見込みはあるのかも……つて、何言つてんだ、俺は？

「つまり……カイトに見合ひ女性になればいいんですね！？」

曲解した！？

と言つか……大きくなつたら、逆に俺はエリー・ゼに釣りあつんだ

るつか？ とか心配になつてしまつた。

「わたし、それまで頑張ります！ ね、ティポ！」

「うん！ ガンバロー！」

いや……ティポは何をするんだ？

「まあ……そういう事……なのかな？」

「だからカイト、今度からわたしの事は……『ヒリー』って呼んで
ください！」

「え、何で？」

「その方が頑張れそうだからです！」

「そ、そうか。分かったよ……」

シリアルスな空気（？）はどこへ……？

とりあえず、ヒリーゼの決意が新たになつた所で、今日は休むこ
とになつた。

あんな事を言わせちゃつたんだ……。俺もちゃんと考えて、ちゃ
んとヒリーゼに応えないといけないな。

第26話 束の間の休息 衝撃の事実（後書き）

今回、書いてエリーゼが少し変になつた気がしなくは無いですが……氣のせいと言う事で（笑）アルヴィンとレイアの絡みは今後どうなるのでしょうかねー。次回はようやくイル・ファンに向かいます。

第27話 常夜の街、再び

翌日。

ワイバーンの傷も治り、十分に休息がとれた俺達は街の広場に集まっていた。

「みんな、お待たせ」

と屋敷の方からジユードとミラが一緒に来た。クレインとクローラセルも一緒に見送りに来てくれたみたいだ。

「アルヴィンはまだ来ていないのか？」

辺りを見回しながらリリヤが言つ。

「うん、まだ来てないよ」

「きっと……また嘘つく準備ですよ……」

まだカン・バルクの時の事を根に持つてているのか、エリーが俯きながら言った。

……どうも慣れないな、エリーって呼ぶのは。

「そんな事ないだろ」

「…………ですか？」

「俺はアルヴィンを信じてるからな」

俺が言つと、エリーが考えるようになついた。

「皆はアルヴィンを庇つて庇つて……この先の戦いを共にしていいのか

？」

ミリがみんなに問い合わせた。

「お母さんの事で頑張つてゐるから、あたしは応援したいな」「私は、彼自身のままでいるのか、とても心配しています」

レイアとローランがそう言つて、エリーはふいと顔を背けた。でも、ティポは「アルヴィン君はまくを助けてくれたけどねー」と、エリーの心の声を言つていた。

「俺は

「ミリはどう思つてゐるの?..」

「俺は!..?..」

自分の意見を言おうとしたが、ジュークがミリに尋ねていた。

「カイトはつき信じてゐつたでしょ?..」

「まあ、そうだけじや……」

改めて言わせてくれてもいいじゃないか。

「真意が測れない以上、判断は出来ないが……戦いに置いては」と信頼しているよ」

「……って事は、みんなアルヴィンの事をそれなりに信頼してゐる訳だな」

「つむ、やつなるな

俺がまとめると、ミリが頷いた。

エリーだけ不満そうな表情をしていたけど、ティポがアルヴィン

を批判しないから、心の奥底では信頼していると思いたい。

「本人の居ない所で悪口なんて、いけない子のする事だぞ、エリーゼ」

まるで狙つたかのようなタイミングで現れたアルヴィンがそう言うと、エリーゼは「知りません」とまたそっぽを向いた。

「……オレの味方は、お前らだけだよ」

アルヴィンがそう言つと、みんな呆れたような表情をした。

「何はともあれ、これで全員揃つたな。では……
待つて……ください！」

出発しようと言おうとしたミラの言葉を遮るよう叫んだエリーが、ローハンを心配そうに見た。

「ローハン、友達とケンカするのー？」

ティポがそう言つて、そう言えばと思い出した。

かつての友人と、恐らく剣を交える事になるだろう。ローハンが答えを見出していくなかつたら、とても辛い結末になってしまいかねない。

だけど、俺の心配が杞憂だといつぱり、ローハンはティポとエリーに微笑みかけていた。

「ナハティガルがこうなつてしまつたのには、私にも責任があります。私は、私の覚悟を持って戦います」

もう覚悟を決めていた。そんなローハンを心配せつにジユードが見ていた。

「頑張りうね、ローハンー。あたしも頑張るからー。」

「まくも応援してるよー。」

「皆さん、ありがとうございます。」

レイアとライポの言葉にて、ローエンは礼を言つていた。

「俺も、出来る限りの事はやらせてもらつよ。」

「骨は拾つてやるよ、じいさん。」

アルヴィン……「冗談だろ? けど、そいつはシャレにならん気があるよ……?」

俺が呆れてアルヴィンを見やると、ローエンが「その時は、ようしくお願ひします」と本気なのか冗談なのかよく分からぬ答えを言つた。これにはアルヴィンもたじろいでいた。

「覚悟は決まつたね。あとは……。」

「つむ、準備を整えて出発するのみだな。」

ジユードヒミラがさう言つた。

とは言え、あとは出発するだけの状態だったから、最終確認として荷物を確認するだけで、俺達はワイバーンに乗る事になった。

「世話になつたな、クレイン、ドロッセル」

出発前に、ミラが2人にさう言つた。

「僕達に出来る事は、これぐらいですか?」

「そのおかげで、俺達は万全の状態で戦えるんだ。ありがとな

この旅で、またいろんな人に支えられたからな。感謝してもし足りない。

「ローエン、生きて帰つてくださいね」

「はい、お嬢様」

ドロッセルは最後までローエンを心配していた。

エリーとは昨日の内に色々話していたのか、微笑み合つだけだった。

「では、行くぞ」

そして、再びワイヤーバーンに乗つて、イル・ファンを田指すのだった。

* * * * *

カラハ・シャールから出発してから数時間後、今度は何のトラブルも起きずにイル・ファンの近くの街道 バルナウル街道へと降り立つ事が出来た。
空は既に暗くなつてゐるけど、別に夜が来た訳じやなく、イル・ファンの靈域 夜域による暗さだらう。

「イル・ファンはこの道を行けばいいんだな？」

「そうです」

「それじゃ、行こうか

降り立つて一息つく間もなく、俺達は陸路でイル・ファンに向かつた。

しばらく歩いて空が完全に暗くなつてすぐで、俺達は旅の目的地であるイル・ファンに到着した。

初めてここでジユード達と会つたんだよな。とか感慨に耽る余裕も無いほどに、慌ただしい空気が街中を支配していた。

武装した兵士が街中を走つてしたり、道の端で苦しそうしている人々が目に入ってきた。

「どうなつてるの？」

「ねえ、あつち！ 煙が上がつてゐる！」

レイアが指を差した方を見てみると、確かに黒い煙が上つているのが見えた。

「あつちは……」

「研究所だよ！」

と、リヒとジユードが反応した。

「クルスニクの槍は研究所だ。行こう！」

慌てたよつひがそつ言つて、俺達は急いで研究所に向かった。

研究所の近くに行くと、怪我をして倒れている人達が多くなつて
いるのに気付いた。

やつぱり、研究所で何かがあつたようだ。

「大丈夫ですか！」

ジユードが倒れていた兵士に近付いて、兜を取つた。

「エテさん……？」

「先生……ジユード先生なのか？」

倒れていた兵士とジユードは、どうやら顔見知りらしい……つて、
この人俺も見た事あるぞーー？

「あつ！ あんたあの時のー！」

そうだ、思い出した。この世界に来てすぐこ、どう言つて説か俺を
重罪人扱いした奴だ。

「カイト、知つてる人ですか？」

「あ、いや……気にしないでいいよ……。大した事じやないし」

わざわざ指名手配を蒸し返す事は無いし、今ここで言つてばれた
ら厄介だしな。

「聞いてくれ。研究所の中にア・ジユールのスパイが紛れ込んでい
たんだ。逮捕しようとしたらい……そいつらが実験室を爆破させて…

…

爆破つて……もしかして見付かつたからって道連れにでもしようとしたのか？

「怪我人は病院へ搬送する。こちらへ」

男性が一人こちらに来て、エーテを連れて行った。

「ミラ、ガイアスが動き出したんじゃ？」

「速過ぎじゃないか？」

宣戦布告を……つて言つてたのは、ついこの前だつた筈だ。

「どうせよ、急いだ方がよさそうだ」

そう言つて、研究所の中へと入つた。

ジユードとミラの案内の下、俺達はクルスニクの槍があるらしい部屋の前まで来ていた。だけど、拒むようにして分厚い鉄板に扉が閉ざされていた。

「この中に入るのは、ちとキツイぜ」

アルヴィンがそう言つと、ミラが突然剣を抜いて壁に斬りかかつた。金属が打ち付けられるような甲高い音が響き渡る。けど、何度も斬りつけても壁には傷一つ入らない。

「すぐそこにクルスニクの槍がありながら……」

「と、とつあえず落ち着けて……」

悔しそうに歯を食いしばる//ア。

黒匣の事になると性格変わるんだな……。

「きつと他に方法がある筈だよ。探してみよつ」「ああ……取り乱したよつで、すまない」

ふう、と一息ついてミラが落ち着いてから、俺達は別の方法を探す事になった。
と、その時、

ガタンッ！

どこからかそんな音がした。

「今の音……何だ？」
「どうかしたんですか？」
「あれ、エリーは今の音聞こえなかつたのか？」
「……分かりません」

つて事は、気のせいか？　いや、でもはつきり聞こえたしな。

ガタガタッ！

「また聞こえた！」
「はい、今度は聞こえました！」
「どうしたの、2人とも」

さつきの音は俺とエリーしか聞こえていなかつたのか、ジユード

達が俺達を不思議そうに見ていた。

「変な音がするんだ。もしかしたら何かあるのかも」「ふむ、気になるな……行ってみよ」

ミラがそう言って、俺とエリーがみんなを案内するように音の聞こえた方に向かった。

そこは一つの部屋で、中に入ると怪しげな装置が沢山あって、その中に人が入っていた。その近くにも、人が倒れているのを発見する。

「大丈夫ですか！」
「わ、私はもう何も……許してください……」

起こしてみると、その人は何とハ・ミルの村長だった。

「ここのバアさん……」
「村長さん……！」
「しつかりしてよー！」

みんなが駆け寄つて来て、エリーが俺の隣に座り込む。

「ハ・ミルの村長か」「ラ・シユガル軍に侵攻されたって言つてたよね」「ああ！ 皆が……凍りづけにされる……やめてください……！」

村長は俺達が居る事も認識できていなじようで、うわ言のようになつて叫ぶだけだった。

「おい、しつかりしる」

「エリー！ 治癒術を！」

「カイトさん……残念ながらひつ……」

俺がエリーに叫び、ローハンが答えるよつとそう言った。
エリーもあまりの事に錯乱していて、治癒術を使える状態では無かつた。

「村長さん、村長さん！」

そして、息絶えてしまった。

「ハウス教授の時と、一緒だ……」

ジューードの言葉を聞いてから立ち上がると、エリーが抱きついてきた。

俺も上手く言葉が出ず、頭を撫でる」と精一杯だった。

「村の人達が凍りづけにされるとは一体……ガイアスの所で聞いた、大精霊の力でしょうか？」

「……でも、大精霊って地水火風の4属性じゃないのか？ 凍りづけにさせるなんて出来ないんじゃ……」

「そもそも、あんな状態での言葉だ。どこまでアテになるか分からねえぞ」

「ハサミの事には憤りを覚えたのか、「許せる事ではないな」と呟く。

「そうだ、あれなら……」

何かを考えていたジューードが、上にある端末らしきものを見ながら

うるさい。

早速みんなでそこに行くと、ジユードが操作し出した。

「これで、何か分かるのか?」

「槍の様子が分かるかもしれない」

端末を操作しながらジユードが答える。

これは……俺の世界で言うパソコン的物だろうか?
それにしても、ジユードって結構いろんな事出来るのな。
そんな事を思つてみると、画面に映像が映し出された。

「映ったよ」

「すごいな、ジユード」

映つた映像は、かなり大きな部屋だ。しかし、そこには何も無い。

「何も無いよ?」

「クルスニクの槍が消えている……。さつきの爆発で破壊されたのか?」

「ですが、それなら残骸が残つてもおかしくは無い筈……」

「それに、そんな爆発で壊れる物なのか?」

「確かに……壊れる筈は無いな……」

自分で言つといて何だけど……どんなだけ丈夫なんだろうか、クルスニクの槍。

「では、槍はその前にどこかへ運び出されていた? そう考えるのが妥当な所か……」

「しかし、いったいどこへ?」

あんなに大きな部屋を使ってたって事は、それなりに大きな兵器だつた筈だ。それを運び出すなら、何か痕跡が残つていたって不思議じゃない。

「みんな、見て。記録が残つてたんだ。これって、エーテさんの言ってたスパイじゃない？」

そう言つて映し出された映像には、赤い服を着た少女が居た。

「この女……確かにここに……」

「そうだよ。突然、僕達に襲いかかってきた子だ」

2人は面識があるらしい。

その間に、映像では少女に兵士が近付いていた。

「おい、女が何か取り出したぞ」

アルヴィンが言つたその瞬間、映像から爆発音が響いた。

「素性がばれて爆破したようだな」

「って事は……自爆？」

「けど……ア・ジユールのスパイなんだよな？」

何か腑に落ちないのか、アルヴィンがそう言つた。

「オレなら素性がばれても、自分をこんな危険にはさらさないぜ。敵にしてみれば、死体だつて貴重な情報源だからな」

つまり……自爆した訳じゃないのか。恐らく敵だろうけど、安心した。

「それなら、ヒーチさんに見つかったのは偶然で、以前から槍の破壊を計画してたんじゃない？」

「この方も、クルスニクの槍がここには既に無い事を知らなかつた可能性がありますね」

「となれば、今頃は運び出した場所へ向かつてゐるか、あるいは……」

「運び出された場所を探してゐるね」

アルヴィンに続いてジョーダがそう言つと、ミラが考えながら口を開いた。

「いざれにせよ、あの女を見つければ何かつかめそうだが……」「記録の日時を見る限り、爆破されてから半の鐘しか経つてないよ」「なら、まだこの街に居てもおかしくないんじやない?」

正直、半の鐘がよく分からぬけれど、今から捜せばまだ間に合ひ時間だつてのは分かつた。

「捜し出す他無いな」

みんなが頷いて、早速赤い服の少女を捜す事になつた。

第27話 常夜の街、再び（後書き）

戦いがボス戦以外にないなあ。とか思つ今日この頃ですが、あと3～4話程で連戦がやつて来るんで、そこを上手く書ければ問題無いですね（笑）

まあ……書ける自信はありませんがね。

次回はあの人との戦闘！

第28話 炎を操る少女（前書き）

今回はほぼ戦闘だけとなりました。

第28話 炎を操る少女

研究所を出てすぐに、俺はミラを呼び止めていた。

「どうした？ 話なら後でもいいだろ？」

「『めん、今聞いとかないと、いざ戦いになつた時に集中できそつにない。それに、多分すぐ終わるから』」

俺がそう言つと、ミラは仕方が無いことでも言つて、小さく息を吐いた。

「大精霊って、何体いるんだ？」

「四大のみだ」

「言い切れるのか？」

「……何が言いたいんだ？」

ミラは俺の問いに対する答えが自信が無いのか、そう言つてきた。

「もしかしたら、ミラが認識していない大精霊もいるんじゃないかなって思つてな。現に、地水火風の4属性とは違う、氷の大精霊の力らしき存在もほのめかされてる」

「バカな……それなら私が感知出来る筈だ。今までそんな力は感じた事がない」

俺の言葉を否定するよつて、ミラが言つた。

「これはあくまでも可能性の話。いないならそれでいい。けどいたとしたら、そいつはラ・シユガルについている。戦う事になるかもしない いや、戦いは避けられないと思う

「つまり……用心しておけ。と云つ訳だな？」

「そう云つ事。それに、マクスウェルの言葉なり、聞き入れてくれ
るかもしないだろ?」

聞き入れてくれて、それで戦闘が回避できるのであれば、それに
越した事は無い。

「それは分かつたが、何故私だけに話す?」

「あー、それは……みんな、結構こいつぱいこいつぱいに見えたからさ

……」

俺がやつぱいと、ミリヤがクスリと笑った。

「な、何だよ?」

「いや……何でも無い。早くみんなの所に戻るぞ」

「え……最後の笑いなんだよ!…?」

めひやくひや気になるじやんか!

ミリヤは先にみんなを追つて行つたから、問いただす事も出来なか
つた。だから仕方なく、俺も後を追うのだった。

* * * * *

街を捜しまわって、案外すぐに赤い服の少女を見つける事が出来

た。

他の工作員らしき人達と何やら話していた……けど、スパイならもう少し見つかりにくい場所にしとけよ……。

俺達が近付くと、少女も俺達に気付いて振り返った。何か……落ち着きの無い子だな……。

「あんたは……」

そして視線はミラに向かっていた。

「アハハハハ！ ようやくあんたを殺れる日が来た！」

身体全体を使って喜び（？）を現わしていた。

……これは、関わると疲れるタイプか……？

「恨みたっぷりのことろ悪いが、聞かせてもらいたい事がある」

「アハハハハ！ バーカ。答える訳ないだろ！」

「うわあ……否定早え……。

何となく、エリーは見ない方がいいんじゃないだろうか？ とか思ってしまう。

「あなたは……どこかで……ひょっとして……トラヴィス家のナディア様ではありますか？」

ローハンの言葉に、少女が目を見開いた。

「やはりそうでしたか。六家のお嬢様がア・ジユールのスパイとは……一体なぜ？」

え……この子お嬢様だったのか！？

「あたしはトラヴィスなんて関係無い！　あたしは四象刃、無影のアグリアだ！」

少女　　アグリアがそう叫んだ。それを言つ時だけ、まともな感じがしたのは氣のせいだろうか？

「四象刃って事は……」

「ガイアスの命で動いているのか」

「だったら何だよ？」

スパイって、こんなに簡単に自分の事言つていいんだっけか？

「お前はクルスニクの槍を破壊しようとしていたのだな」

「あたりだよ、アハー！」

「私も同じだ。つまり私達は敵では無い。槍の運び出された場所を知っているなら教えてくれ」

ミラが真剣にそう言つ中、アグリアは腹を抱えて笑っていた。

「アハハハハ！　誰が教えるかつつーの」

「お願よ。あなたもあんな危ない物、壊したいって思うでしょ？」「くせえな……」

アグリアがレイアを見ながらそう呟いた。

「アハハハハ！　決めた！。槍を壊す前に、ラ・シュガルに向けて一発ぶっぱなしてやるよ」

街を指差して笑いながらそう言つた。

駄目だこいつ……会話が成り立つてない。

「何言つてゐるの、あなた。みんな一生懸命やううとしているのに、どうして邪魔しようとするの！」

「アハハハ！ やつぱりくせえよ、お前！」

「何？ 失礼な人！」

今度は咳くのではなく、大声で笑いながらレイアに言つた。さすがに怒つたのか、レイアも腕を組んだ。

「お前、頑張れば世の中どうにかなると思つてるだろ？ アハハハハ！ お前からはそんな悪臭がふんふんすんだよ！」

「頑張るのはいい事じゃない！」

「うつせー、ブス！ 嘆るんじゃないよ！」

「な、なによー！」

今のやり取りで、みんなが呆れたような表情になつた。

何だ今のは……？

そんな事を思つていると、アグリアが特殊な作りをした剣を構えた。そして、視線は再びミラに戻つている。

「あんたにやられた、あの時の痛み。忘れて無いからね！」

「結局戦うのかよ……」

「話にならない奴だ」

俺達も武器を構えて、街中での戦闘が始まった。

「アハー！ 火旋輪！」
カセンリン

アグリアが炎を纏つた剣で突いてくる。標的となつた俺は、とつさに剣で防ぐ。が、ギャリギャリギャリ！ 剣の刃が回転して、嫌な音が響き渡る。回転も力強く、気を抜けば一緒に回されそうだ。

「アサルトダンス！」

「ちつ……！」

横からリリカが連続で剣を振るつてきて、アグリアは舌打ちをして後方に飛び退いてかわした。

「はあっ！ 大輪月華！」

その先で、レイアが棍の端を持ち長さを活かした回転攻撃を繰り出すが、

「甘えんだよ！ 炎舞陣！」

アグリアが剣を頭上に掲げると、剣が3方向に開いた。奇妙な作りだと思つたら、そんなカラクリだったのか。

開いた剣が回転し、炎の竜巻を生み出してレイアを巻き込んだ。

「きやあっ！？」

「アハハハハ！ そのまま焼け落ちろオーー！」

「ちつ……ジユードやるぞー！」

「うんー！」

炎に巻き込まれたレイアを助けようと、アルヴィンとジユードが共鳴した。

「飛んでき！」

「貫く！」

「^{ヒテンショウセイク}飛天翔星駆！」」

アルヴィンの大剣に乗ったジユードが、振り上げられるのと同時に天高くジャンプ。そして落下の勢いを乗せた盛大な飛天翔駆が炎の竜巻の中に飛び込んだ。

「ぐあつ！？　このやろ……！」

「まだ行くよ！　アルヴィン！－」

「任せろ！－」

攻撃を受けたアグリアが体勢を崩している間に、ジユードとアルヴィンが再び^{アーツ}術技を繰り出す。

「^{チドリシブキ}千鳥飛沫！－！」

ジユードが竜巻を生む程の回転を繰り出すと、空中からアルヴィンがジユードに向かつて連射する。銃弾は竜巻によつて軌道がずられ、アグリアに直撃する。

「くそつ……調子に乗るなよガキがあつ！－？」

年齢的には同じぐらいな気がするけど……今はそんなツッコミてる暇は無いな。

「レイア、今治します！－」

「あ、ありがと、エリーゼ」

ジユードとアルヴィンが相手をしている間に、エリーゼがレイアを治癒していた。

「フリー・ズランサー！」

「アリー・ヴェデルチ！」

ローエン、ミラがそれぞれ精靈術を発動すると、アグリアはすぐに体勢を立て直して避ける。

「ソウウショウ総雨衝！からのつ、センエンレッパジン閃闇裂破刃！」

避けた隙を突き、無数の突きからの闇を纏つた突きを数回繰り出し、最後に吹つ飛ばした。

「があつ！？……テメエら……もうただじや済まさねえからな！..」

叫ぶと、アグリアの纏う霧囲気が明らかに変わった。

「アルヴィン！ 気を付けろ！」

「なつ……！？」

「アハハハハ！ おせえんだよ！ グランドフレイム！」

俺の声でとつさにアルヴィンが剣を構えて防御するが、その防御を無視して、アグリアが炎を纏う剣で切り上げた。

アルヴィンが空中に放り出されると、アグリアが地面に剣を突き刺し、上に乗つた。

「ぐつ……！」

「焼けろッ！ 口ギズ・アクセルッ！」

そして、アグリアを中心に炎が巻き起こる。空中に居たアルヴィンは直撃します。

「頼むローレン！」

「承知！」

アルヴィンを助けようと、俺はローレンと共鳴する。

「水流集いて！」

「駆けろ一閃！」

「アクアレイザー！..！」

矢に水属性のマナを集中して撃ち出す。が、アグリアの作り出した炎には効果は無かつた。

「テメエら丸焼きだ！ 焼き払え！ 口ギズ・イーターッ！..！」

アグリア中心に発生していた炎がさらに大きくなり、俺達みんなを巻き込んだ。

「アハハハハ！ 消し炭になつたかあ？」

俺達は何とか炎に堪えたけど、ダメージは思つたよりも大きい。

「まだ終わらないからね！ とつておきスペシャル！」

すぐに立ち直つたレイアとジュードが共鳴していた。

「どうなつてもいいよね！」

「神速の連撃、いくよ！」

「インフィニティア・ストライク！..！」

レイアがジユードを精靈術で強化すると、ジユードは目にも留まらない連撃をアグリアに打ち込み、最後に掌底で吹っ飛ばした。そしてその先には、レイアが棍を持つて待ち構えていた！

「カッシンゴン 活神棍・円舞！」

飛んできたアグリアを、棍を回しながら舞つよう叩く。あの技は……俺がル・ロンドでソニアさんにならつた技だ……。

「ぶつ飛べ！ グルグル～！ お母さん直伝つ！ 活神棍・神楽カグラあ

ーツー！」

円舞に続く形で棍を回して吹き飛ばし棍を空高く投げた。それを空中に跳んでキャッチして、落下と同時に地面に倒れていたアグリアを叩きつけた。

「うああああつ！？」
「パーフェクト！」

スタッ、と着地したレイアがそう言つた。

アグリアも地面に倒れたまま、ミラガアグリアの首に剣を突き付けた。

「あいにく、剣は不得手でな。うつかり手が滑らないよう、よく考えて答える事だ。槍はどこだ？」

ほとんど脅しな気がするけど、剣を抜いたのはあちらが先だから、これは立派な正当防衛です。

と言うか、こうでもしないと会話が成り立たないもんな……。

これでは分が悪いとアグリアも分かったのか、舌打ちをしてから

素直に答え始めた。

「研究所の地下には秘密の通路があつて、オルダ宮に繋がつてたんだ」

「オルダ宮つて……？」

分からぬ単語が出てきてつい口にしてしまうと、ジユードが「王宮だよ」と教えてくれた。

つて事は……クルスニクの槍は王様の所にあるつて、そういう事か。

「その通路、まだあるのか？」

「残念。もう潰されたみたいだよ」

「使えないか……」

考えるようにミラが呟いたその瞬間、あまり言葉にしたくない動きでアグリアが逃げ出した。

……強いていうなら……この世の人なら約9割9分程は嫌いだろう、あの昆虫の動き？

「マクスウール！ あんたもいつかぐちやぐちやにしてやるからね！」

ある程度逃げてから、ミラを指差してそう叫ぶと、次はレイアを指差した。

「それとブス！ これだけは言つといてやる。お前がいくら努力しようが、報われる事なんて無いんだよー！」

「どうしてそんな事あなたに……！」

レイアが言い終わる前に、アグリアは逃げるよつと去つて行つた。

「何なのよ、モー！」

「あ、あんまり氣にすんなよ？」

「そりです！ レイアは可愛いです！」

エリー……それも大事かもしかれんけど、今は的外れだ……。

「うん……ありがとう、2人とも」

明らかに落ち込んでるけど、空元氣みたいにレイアが言つた。

「ま、報われるかどーかはその人次第つてな」

「……アルヴィンが言つと、嘘臭いです」

「ちょっ……それはビデーよ。なあ、カイト？」

俺に振るなよ……。それと、エリーがアルヴィンに対して黒すぎ
る氣がある。

「しかしアルヴィンちゃんの言つ通り、努力をしなければ報われる事
はありません。その点、レイアさんの努力は私達が知っていますよ」

「ああ、レイアはちゃんと頑張ってるよ」

「……そりかな、ありがとうね、みんな。よおーし、もっと頑張つ
やがうよー！」

落ち込んだ空氣はどうかに行つて、レイアは元気になつた。

「頑張るのはいいけど、あんまり調子には乗らないでね、レイア？
「分かつてますよーだ」

調子が戻りすぎちゃいないか？

「みんな、これからオルダ宮に乗り込む。が、まずは様子見だ。行くぞ」

話しが一区切りついでミラがそつと、俺達はナハティガルが居て、そしてクルスニクの槍があると言つオルダ宮に向かった。

この旅の終着点が見えてきた気がした。

第28話 炎を操る少女（後書き）

戦闘が上手く書けない……何回言つただろうか（笑）
次回もほとんど戦いばかりになると思います。何たつて王様が
出てきますから。

～今回の共鳴術技～

・千鳥飛沫（水・風）

烈風拳 + レインバレット

ジユードとアルヴィンの共鳴術技。

ジユードが作り出した竜巻に銃弾を撃ち込み軌道を逸らしながら
相手に攻撃する。

・アクアレイザー

ヴォルテックライン + スプラッシュ

カイトとローエンの共鳴術技。
水の力を集めた矢で敵を貫く。

・インフィニティア・ストライク

連牙弾 + クイックネス

ジユードとレイアの共鳴術技。

レイアの術で強化されたジユードが神速の連撃を叩き込み、トド

メに掌底で吹き飛ばす。

第29話 王都の決着（前書き）

共鳴術技の案が尽きかけている……。

第29話 王都の決着

アグリアの戦闘で負った傷を少し癒やしてから、俺達はオルダ宮へと来ていた。

オルダ宮は大きな樹をそのまま建物にしたような外装で、装飾も綺麗だつた。これだけでも芸術品と言えるだけの価値はあるだろ？
と、品評会をやる為に来た訳じゃないから、感想はここで終了。

「何か……兵士が全然居ないな？」

「うん、王宮なんだからもう少し居てもいいのにね」

俺が言つと、レイアも賛成するよつと云つた。

「出来れば、このまま突破したい所だね」

「だが、敵の本拠地だ。慎重に行くべきだろ？」

いつもなら、「正面衝突だ！」とか言つて一人で突っ込もうとするミラが、珍しく慎重と言つ言葉を使つていた。

それだけ、クルスニクの槍を破壊する事に本気つて事か。

「どうしたんですか、ローハン？」

エリーの顔でローハンを見てみると、髭をいじっていた。何か考
えている時、ああいう事をするらしいけど、何かいい案もあるん
だろうか？

そう思つて期待してると、思ひもよらない言葉が出てきた。

「ジユードさんの言つよひ……やつてみませんか？」

その言葉に、みんなが驚いた。Hリーなんて俯く程。

「おこおこ。珍しく//リが慎重について言つてんだぜ？」

「……何か考えがあるのか？」

アルヴィンの言葉に反応しながらも、//リはローハンに聞い掛け
る。

「考え方と言つ程のものではあいませんが、ビリでじゅうか？」

//リとローハンの言葉が真逆な気がするナビ、ビリでも信頼は
出来る。

「まあ、俺はここと思つみ。ローハンを信じる」

「そうだね。ローハンが言つなり、そつした方がいい気がする」

俺が言つと、ジュークも同じ同意してきた。

話がまとまった所で、俺達は武器を出して王宮の入口に向かって
一気に走り出した。

入口に居る数人の兵士を氣絶させる。

「増援も来ないのか？」

「そうみたいだね」

兵士を倒しても、一向に増援が来る気配は無い。

「王様の居る場所なの……不思議です

「罷かもしれないぜ」

確かに、中に誘い込んで一網打済に、って算段かもしれないけど、

それでも妙だつ。

「すでにラ・シュガル軍はア・ジユールとの戦いに向けて動いているのかもしません」

「それなら、むしろ守りが厚い筈じゃないか？」

「もしかして、南北の要害が関係してるの？」

ジユードが尋ねるとローエンが頷いた。

「ヨリは決戦都市としては造られていませんから、街の内部にまで突破されれば敗戦は濃厚です。ですから、戦時下は兵士の大部分が街を離れ、海上の防衛やガンダラ要塞に配置されるのです」

「だから突破しようつて言つたのか

「賭でしたがね」

とは言え、そこを読むのはすゞいと思ひ。

けど、そうだとすれば、もう戦争は間近と言ひ事だ。その前になんとかクルスニクの槍は破壊したい。

みんなの思いも同じと信じて、オルダ宮の中へと入つた。

入つてすぐ、道が無かつた。その代わりとでも言ひようつて、変な魔法陣が描かれていた。

「オルダ宮の各所を繋ぐ蓮華陣ロータスです。これを使わないと奥には進めません」

ローエンの説明を受けながら、蓮華陣に乗る。フワッとした瞬間、違う場所に飛ばされていた。

……これがワープつて奴か……。まさかこんな所で味わえるとは

な。

それからいくつか蓮華陣に乗つてワープを繰り返して、ついにナハティガルの居る部屋に辿り着いた。

ナハティガルは中で、玉座に座っていた。

「来たか、マクスウェル。……まさかあの怪我から復活するとはな
」
「……ナハティガル」

ミラの足が治っている事が少し驚きだつたのか、そんな事を言った。

「貴様は槍の下で待つておれ。マクスウェル狩りの後は、北の部族狩りといくぞ」
「かしこまりました」

ナハティガルは近くに居た男性　名前は……何だっけ、ジラン
ドって言つたか。そいつに言つて、ジランドは一礼して去つた。

「イルベルト。主である儂に、本気で逆らうつもりか？」
「私の主はクレイン様、ただお一人だけです」
「今なら許してやる。儂の下に戻つてこい！」

ナハティガルはローハンの言葉を無視するかのように、そう言い放つた。

「あの頃、あなたの内に見た王の器は、すっかり陰りをみせてしまつた
「儂以外に、王に相応しい者など存在せぬ

「まだ分かっていないよつだな。人を統べる資質とは何かを」

//リガ言つとナハティガルは、「資質など王には無縁」と豪語した。

「だから民を犠牲にしてもいいと？」

「そうだ。それが儂の権利だ。精靈も、今に支配してみせよ！」

「……人間も精靈も、全部犠牲にするつもりなのか！？」

「人も精靈も、あなたなんかに支配されたりしない！」

「小僧が……マクスウェルとつるんですつかりつけあがりおつて」

我慢出来ず叫ぶジユードを侮蔑するよつて、ナハティガルが言う。

「あんたこそ、いきなり強い力得たからって調子に乗り過ぎなんじやないか？」

「ふんっ、腰抜けが何を言つか」

どうやらガンダラ要塞の時の事を言つてゐるらしい。
残念ながら、あの時とは違つんだよ。

「その様子じや、ローハンがどんなにあんたの事で悩んでいたのか
も理解出来そうにないな？」

「民が悩むなど当然！ 貴様らに安息と生きる権利など無い！ 儂
の為に命を費やせ！ それが儂の民たる使命だ！」

俺の世界にも独裁政治はあるけど、それもこんなのか……。
話し合ひじや何も解決はしそうに無い。

「救いようが無いな」

「時間の無駄だったようだな。今、全てを終わらせてやる」

ミリカが呆れたように言つたと同時に、ナハティガルは武器を取り出した。槍のようなそれを天井に掲げると、何かのエネルギーが槍に流れ込む。

「クルスニクの槍が吸収したマナの部分転用よ」

「私は、あなたと同じ道を歩む友だと思つていましたが……じつはもう引き返す道はないのですね……」

ローエンが覚悟したかのように言いながら、剣を抜いた。
やつぱつこうなるんだな。俺達も武器を構える。

「お前みたいに考えられたら、どんだけ楽だろうな。だけど、正直付き合つてらんねーわ、裸の王様さんよ」

「こんな人が自分達の王様だなんて、信じられない！ 絶対、変わつてもうつから！」

「ジユードやミリカ……カイト……みんな……友達を守ります！」

「やるぞー！ 敵討ちだー！」

「あんたに人も精靈も犠牲にはさせない！ 何が大切なのか、分からせてやる！」

「あなたの野望も終わりだ！ つづく、ここで終わりにしなきやー！」

「覚悟しろ！ ナハティガル！」

みんなの思いは同じだった。

なら……負けない！ 贠ける訳にはいかない！

「見せてやる。リーゼ・マクシアを統一する力を！」

ナハティガルも武器をこちらに向けた。

先手必勝と言わんばかりに、俺は矢を放った。けど、それは簡単に槍で弾かれてしまう。

「このよつな鈍ら、なめるな！ 閻竜槍！」
アンリュウソウ

弾いてすぐに、ナハティガルは槍を構えて突進突きをしてきた。かなり距離があつた筈なのに、一瞬で距離が詰められる。ミラは槍をどうにか回避した。

「三散華！」
サザンカ
「蒼破閃！」
ソウハセイ

「ふんっ！ 崩岩槍！」
ホウガソウ

少しだけ隙が出来た所で、ジユードが3連撃の技を仕掛けた。それを防いだナハティガルの背後から、俺は真空の衝撃波を放つ。

衝撃波は槍を右に薙ぐ事で防がれてしまった。

「ディバイнстリーク！」

ミラが光のレーザーを放つと、ようやくそれがナハティガルにヒットした。

たたみ掛けるなら今のうちだ。

「ここだね、アルヴィン君！」

「やつてやるぜ！」
ショウハウジュー

「衝破十文字！」
ショウハウモジ

レイアとアルヴィンが共鳴^{リンク}して、2人が十字を描くように交差して突き、クロスした所が爆発した。

「ぐぬう！」

「ジユード、今だ！」

「分かつた！」

まだ身動きが取れていない内に、俺はさら^ヒジユードと共鳴する。

「「灼光拳！^{シャッコウケン} はあつ！」」

俺がナハティガルに突進して背後に回り込みそのまま斬りつけ、ジユードがそのうちにナハティガルに上段突きを放ち、最後に鬪気を爆発させた。

「ぐつ！ 貴様らの力はその程度か？」

床に倒れ込むけど、すぐに立ち上がるナハティガルには、まるでダメージが無いかのようにそう言つた。

「まさか……効いて無いんですか？」

「なんてタフな野郎だよ……！」

「ですが、全く効いていない訳ではなさそうですよ」

驚いていたエリートアルヴィンに、ローハンがそう言つ。

「貴様らが何をしようど、儂を倒せる筈は無い！ ハアフレッシュ

！」

「ぐあつ！？」

いきなり精霊術が発動して、頭上から重圧で押し潰されそうになる。

「カイト！ 回復しますよ！」

「そのような暇を与えると思つてはいるのか！」

ハジャチリュウジン
破邪地龍陣！

「きやああ！」

駆け寄つてくるエリーの足元から竜が出てきて、エリーが床に倒れ込んだ。

ジレンバクショウ
時練爆鐘！

「え、何これ！」

「まさか、爆発の術式！？」

ナハティガルの横薙ぎを喰らつたレイアとミラに、何かの術式が刻み込まれたらしく、次の瞬間 2人は爆発に巻き込まれていた。

「きやあつ！？」

「ぐううつ！？」

「ミラ！ レイア！」

なんとか起き上がった俺は2人の名前を呼ぶ。爆発のダメージは大きいのか、なかなか立ち上がろうとしない。

「2人とも大丈夫？ 治癒功！」

ジユードがナハティガルの攻撃を避けながらミラとレイアに近付くと、治癒技を使って2人の傷をある程度癒していた。

「エリー、大丈夫か？」

「は、はい……」

「なんとかぶじだよー」

よかつた、エリーもティポも無事のようだ。

「回復頼むな？」

「任せてください！」

今度はエリーを傷つけさせないよう、俺は治癒術を唱えようと
しているエリーの前に立つ。

「行くぜ、じいさん！」

「やりましょう！」

「降り注げ！ フェイタルサーキュラー！！」

ローエンが投げたナイフが大きな三角形を作り、アルヴィンが宙に放った無数の銃弾が降り注いだ。それと同時に、エリーの治癒術も発動してみんなの傷が癒えていく。

「ぐうっ！ まだこんな力が残っていたか！ ならば、我が力で絶望を味わうがいい！ はあっ！！」

ナハティガルが闘気を開放して、槍を構える。

「ふんっ！ 天上天下、唯我独尊！ デモンズランス！！」

宙に飛んだナハティガルが槍にマナを溜めると、その槍を俺達に向かって投げつけてきた。床に突き刺さった瞬間、俺達全員を巻き込むような大爆発が起こる。

俺はとっせに近くに居たエリーを庇うように抱きしめた。

「が……っー？」

爆発で身体が宙に浮いていたのか、いきなり背中を固い床に叩きつけられて、肺の酸素を吐き出してしまつ。

抱きかかえたエリーを見ると、なんとか怪我は無いようだ。

「愚かな奴らだ。王である儂に楯突くとはな」

戦いが終わつたとでも言つように、ナハティガルが言つ。確かに、みんなダメージが大きくて、みんなは床に倒れている。けど……これで終わりになんかさせてやるか！

「まだ終わつてないぞ！ ナハティガルッ！」

向こうでミラが立ち上がりながら叫ぶ。

いくらミラでも、今のフラフラの状態ではまともに戦えないだろう、俺は抱えたエリーに治癒術の使用を促した。

「まだ立ち上がる余力があつたか……。だが、マクスウェル。貴様1人で何が出来る？」

鼻で笑いながらナハティガルが言つ。

立ち上がる俺と、一瞬目が合つた。そしてミラは、笑つて答えた。

「ふふっ……私は一人ではない。信頼出来る仲間達が居るからな！」

「カイトッ！」

「任せろ！」

「何ツ！？」

「任せろ！」

ナハティガルを挟んで俺達は走り出した。途中、ナハティガルがミラに精靈術を発動させるが、

「やらせ、ないよ……！」

「頑張つてくださいっ！」

エリーとレイアが共鳴して、強力な治癒術を発動した。

「万物に宿りし命！」

「その息吹をここに！」

「リザレクション！…！」

俺達全員を包み込むような治癒術で、傷はほぼ完全に癒えた。それによつて、ナハティガルが放つた精靈術を、ミラは堪える事が出来た。ナハティガルの表情が歪むのが分かる。そして、俺とミラも共鳴して、大技を叩き込む！

「絶対なる終焉！」

「それが貴様の運命だ！」

「刻め！ セルシウスキャリバー！！」

氷を纏わせた剣でナハティガルを斬り、ミラが雷の剣で斬り上げ、投げつける。そして、俺は氷のマナを再び剣に集中させて跳ぶ。落下しながら斬り下ろし、最後に駆けながら斬る。

「ぐおおおッ！？」

「今だ！ ローエン！」

精靈術を準備していたローエンに叫ぶ。

「分かつてありますとも！ タイダルウェイブ！」

発動した術で、ナハティガルは激流に飲み込まれる。

「フェロー・チエ、荒々しく！」

激流から複数の水柱が上がり、

「グラツィオーソ、優雅に！」

それら全てを凍てつかせる。

「ナハティガル、あなたが望んだ決着です。従つてもらいいますよ」

背を向けたローベンが数歩歩いてそう呟き、

「グランドフィナーレ！！」

合図と共に凍てついた全てが砕け散った。

「ぐおおおおおおッ！？」

今のローベンの攻撃で深手を負つたナハティガルは、ついに片膝を床に着いた。槍も遠くに転がっている。

「ぐうう……バカ者共が……儂を殺せば、ラ・シユガルはガイアスに飲み込まれるぞ……」

ナハティガルは傷付いた身体を必死に動かし、玉座へと向かった。

「ですが、王とて罪は償わねばなりません」

その背中にローレンが言った。

「関係あるか…… クルスニクの槍があれば…… 儂は絶対の力を……」

「この期に及んでまだ力を欲するナハティガルの名を、ミラが叫んだ。剣先をナハティガルに向ける。

「人の分を超えた力は世界そのものを滅ぼす。お前も同様だ」「ミラ、待つて！」

今にも斬りかかって行きそうなミラを、エリーが叫んで止めた。

「この人はローレンの友達だから…… ローレンに……」

エリーがそういつと、ミラは剣を鞘に収めていた。

その間に、ローレンは一人、玉座に座るナハティガルに近付いた。

「ナハティガル…… この国には民を導く王が必要です。私もあると同じなのです。背負うべき責任から目を背けた…… ナハティガル」

2人にしか分からない内容の会話。ナハティガルが目を見開いて、何かに気付いたようにローレンの名を呟いた。

「私とあなたとで、もう一度ラ・シュガルの未来を……」

「貴様は儂の生み出した業まで背負つて……」

「構いません」

ロー・エンが即答した。

2人は分かり合えたんだろうか？ ナハティガルは力を抜いて、戦いの雰囲気は無くなつた。

ロー・エンの覚悟は、じついう事だつたのかもしれない。

「……ツ！？」

一安心と思つた瞬間、急に背筋に寒気が走つた。

何だ……この、嫌な予感は！？

「ロー・エン！ ナハティガルを連れて逃げろ！」
「何ですと……！？」

叫んでロー・エンが振り返つた次の瞬間、どこからか氷の槍が飛んでき、ナハティガルを玉座ごと貫いた。

バリイン！ と、貫いた氷の槍は碎け散る。

俺はすぐにナハティガルに近付く。とっさに脳裏を過ぎつたのは、クレインを助けた時の事。致命傷だつたクレインを助けた時、自分の何がが抜けたクレインに流れていつた。

今なら分かる。あの時流れたのは、俺のマナだつた。

なら、この致命傷だつて、俺がマナを送れば治るかもしれない。血が流れで止まらない傷口に手をかざすと、淡い光が発せられた。

「これは……あの時と同じ光！」
「治癒術だよ！」

ロー・エンとジユードが叫ぶ。あの2人は前にも見てたもんな。

「傷口が塞がつていきます！」

「頑張つて、カイト君！」

ヒリーとレイアの声も聞こえる。

「これは……止せ、カイト！ 死ぬ気か！？」

ミラが叫んだ瞬間、急に力が抜けて行く。
視界も次第にぼやけてきた。

くそつ……あと……ちよつと……なの、に……。

「カイト！」

俺の名を誰かが叫ぶのが聞こえるのと同時に、俺の意識は暗闇に落ちていった。

第29話 王都の決着（後書き）

ナハティガルはクレインみたいに死なないようにする事も出来た
んですが……物語上仕方ありませんよ……。

次回は沼野に行きます。

～今回の共鳴術技～

・灼光拳

幻狼斬 + 烈破掌

カイトとジユードの共鳴術技。

幻狼斬で斬りつけた敵に上段突きを繰り出し爆発させる。

・セルシウスキヤリバー

凍牙霧影剣 + サンダーブレード

カイトとミラの共鳴術技。

2人がそれぞれ氷と雷の剣で交差するように斬りつけ、最後にその力を敵に叩きつける。

第30話 沼野を驅ける

「ん……あれ、エリは……？」

目を開けると、辺りは暗い場所だった。背中は冷たく固い床。

「起きましたか、カイトさん」

「大丈夫ですか？」

そう言いながら、ローハンとエリーが俺を覗き込んできた。
起き上がると頭痛がした。

「俺……どうして……そうだ、ナハティガルは！？」

ローハンに聞くと、無言で首を横に振った。エリーも悲しそうに
俯いてしまう。

「ごめん……俺が気絶なんかしなければ……」

「いいのです。カイトさんは必死にナハティガルを助けようとして
くれました。そのお気持ちだけでも、私は嬉しかった」

そう言つてはくれるけど……俺はやっぱり助けたかった。
どんなに悪い奴でも、助かるなら、助けられたなら助けたかった
のに……。

「身体、大丈夫なんですか？」
「え？ ああ……大丈夫だよ」

突然エリーが聞いてきたから、無意識に心配させない言葉を言つ

ていた。

まあ、実際に全然問題は無い訳だからな。

「みんなは？」

「クルスニクの槍を見に行きました」

ローエンがそう答えた瞬間、ミラ達が玉座の後ろにあつた蓮華陣ロータスに現れた。

「おっ、カイト起きてるな？」

「心配したよ」

「悪いな。気絶ばっかりで」

旅の当初から気絶多かったもんな。

まさかこんな所でも気絶するとは思わなかつたけど。

「それで、クルスニクの槍は？」

「それが……何も無かつたの」

「もしかしたら、ジランドが持ち出したのかもしれない」

ジランドって……ナハティガルの側近みたいな奴か。何が目的で?

「とにかく、話は後だ。ひとまず外に出るぞ」

ミラがそう言つて、俺達はオルダ宮から出る事になつた。

けど、その直前、俺だけミラに呼び止められた。研究所の時とは反対だな。

「カイト、どうこうつもつだ？」

「何が？」

いきなりそんな事を言われて首を傾げると、//リマササヘ息を吐いた。

「ナハティガルを助けようとした時の事だ。お前、治癒術ではなく直接マナを送つていたな？」

「ああ、よく分かったな」

「私を誰だと思っている？」

確かに……マクスウェルなら分かるのか。

「お前のマナがどういう理由で治癒術と同じ効果になるのかは分からぬが、今後それは使うな」

「…………どうして？」

「研究所でハ・ミルの村長がどうなったか、覚えているな？」

村長……確かに、マナを吸い取られていたんだっけか。
それと何の関係が？

「マナを渡し続け枯渴すれば、お前もあのようになる」

「！？」

「私も仲間があのような事で死ぬのは見たくないのでな」

//リマが言つた事は少し衝撃的だつたけど、俺は首を横に振つた。

「俺は、俺が助けられるのなら助けたいだけだよ」
「自分の命を危険にさらしてもか？」
「もちろん死ぬのは嫌だ。けど、その時俺にしか助けられないのなら、俺は力を使つよ」

見殺しになんかしたくないから。例え自分が危険な状態でも。

「……どうあっても、その意思是曲げないよつだな」

「ああ。俺は誰も殺したくないし、誰も死なせたくないんだ。それが信念……って言つと大袈裟かな」

とは言え、俺が出来るのは小さな事だ。だからそれは、自分の手が届く範囲の事になつてしまつ。

「信念、か……分かつた。そうなら私は止めはしないよ

「サンキューな、ミラ。さあ、早くみんなを追おうぜ」

そう言つて、俺達は走つてみんなを追つた。

誰も死なせたくない。でも……俺なんかが助けられる命はあるんだろうか？

* * * * *

みんなと合流してから外に出ると、早速兵士に見つかってしまう。けど、ローハンの姿を見た兵士は、警戒を解いた。
引退しても、ローハンってやつぱり凄い人なんだな。

「伝令だ！ 通してくれ！」

そんな時、やけに慌てた様子の兵士が一人走ってきた。

「ア・ジユール軍の侵攻だ！ 敵兵力およそ5万！」
「5万も……！？」

兵士の言葉に思わず声を上げてしまった。

「戦争が……始まった……」

しかも、王が亡くなつたこの最悪な状況で、だ。

「『、5万の大軍！？ 東方辺境か！？』

「違う！ イル・ファン北方、ファイザーバード沼野だ！」

それって……今は靈勢の影響とかで通れなかつたんじゃないのか？

「バカな！ どのようにしてあの地を攻略するつもりなのですか！？ 瞬勢は変化していない筈！」

ファイザーバード沼野を実際に知つているのか、ローエンが驚きの声を上げる。

兵士はそんなローエンに気付くと、ア・ジユール軍がどのように進行しているかは不明と教えてくれた。

「大丈夫なの？ 兵力はガンダラ要塞や海上に集中してゐんじよ

？」

「そうだよ！ 今から移動して間に合つのかー？」

ジユードが言つた事で思い出して、俺もそう言った。

海上ならまだ間に合うかもしれないけど、ガンダラ要塞の兵はも

「い」安心ぐだれ。ジランド参謀副長が敵の攻撃を予期し、すでに

新兵器を移送中です」「新兵器……つて、まさか！」

「新兵器……つて、まさか！」

クルスニクの槍か！？

ミラが腕を組んでやはりかと呟いた。

「あなた、この伝令は誰の命令によるものですか？」

「ジランド参謀副長ですが……それが何か？」

「いえ、ありがとう」

ローエンがそう礼を言つと、兵士は敬礼をしてオルダ宮の中に入つて行つた。俺達を呼び止めた兵士達も後に続く。

「何か裏がありそうだな」

「ですが、今はファイザバード沼野へ急ぎましょ」

クルスニクの槍が使われる前に、なんとか壊さないといけない。

「休まなくともいいんですか？」

出発しようとした所でエリーがそう聞いてくると、みんなの視線
が俺に集中した。

「大丈夫だよ。それに、今は休んでる暇は無いだろ？」

俺の所為で行動に滞りが出来るのは嫌だしな。

「ああ、カイトには悪いが休む暇は無い
でも、無理はしないでね?」

ジューードの言葉に頷いて、俺達はようやくファイザーバード沼野に向かった。

でも、ここで無茶すんなってのは……無理な注文だぜ、ジューード。

* * * * *

アルカンド湿原を通りて、ティポが湿氣吸い過ぎて膨らむと言う以外と言つか緊張感の無いアクシデントがあつたりしながら、俺達はファイザーバード沼野へと辿り着いた。

着いてすぐに兵士に動きを止められたけど、そこはローハンの出番。

『コンダクター』
『指揮者』の二つ名で簡単に通してくれた。

作戦司令部みたいな場所に連れられると、そこには不思議な台があつた。これが戦局図と言つやつだらうか。ローハンの話では、リアルなオープの反応を拾つて表示する物らしい。

まあ……一学生にはぱつと見じや何が何だか分かる筈も無い。シヨミレーショングームとかが得意な人なら、何となく分かるんだろうけど……あいにく俺はゲームやらないからなあ……。

「あれ? これだけなんか違うよ?」

レイアが戦局図を見て、一つの駒みたいな物を見つけて言った。
確かに他のよりも大きい気がする。

「それは参謀副長が進めている戦略の為の部隊です。フォーヴ四象刃アグリアの妨害を突破したようですね」

アグリア……あいつが居るのか……。
いや、戦争なんだから、他の四象刃 ジャオ、ウインガル、ブレザも居るんだろう。

「ジランドの戦略だと？」

何か思う所があるのか、ミラが聞いた。

「一の鐘の後には、予定到達点に至ると思われます。詳細は聞かされていませんが、戦局の流れを一気にこちらへと傾ける切り札だと。作戦実行の際に、予定到達点へ出来るだけ部隊を集結させるよう、指示が出ています」

何で兵に詳細を言わないんだ？ それに、何の為に1か所に集めようとする……？

ダメだ……こいつのは苦手過ぎる。考へても全く分からぬ。

「ふむ……」の進路だと、予定到達点はここですね？」

と、ローハンが示すと、兵士は驚いていた。

「嫌な予感がしますね……」

場所を確認してから、ローハンがそう呟く。

「ああ。クルスニクの槍を使つつもりだつたが、自軍に詳細を明かさない理由が見えない」

「//も俺と同じように分からないらしい。

「……クルスニクの槍は、ジランドと言つ人が持つて行つたんでしょうか……」

「状況的にそうだろうな」

エリーの言葉を肯定するように俺が言つと、ジューードが「けど……」と呟き//ラと視線を合わせた。

「クルスニクの槍の起動に必要な『カギ』は私が奪い、イバルに託してある」

「だから槍は使われる事は無いと思つてたんだ」

イバルに託したんだ……何か、不安だな……。

「ですが、槍は持ち出され、おそらく使用準備を進めている。それはつまり……」

「新たな『カギ』が生み出されたのかもしけん」

いずれにしても、判断材料が少な過ぎるな……。

「そういうえば、ア・ジユール軍つてどうやって沼野を進んでるんだ?
？ 確か地靈^{ラノーム}は来てないんだろ？」

槍がどうやって使われるのかは分からないから、とりあえず話を変えてみる。

「それなら、ア・ジユールが開発した増靈極^{ブースター}の効果です」

「増靈極……」

その単語を聞いて、みんなの視線はティポに注がれた。

「そんな見ないでよー。ハズカシイ~」

みんなの視線に、エリーも頬を赤くしていた。

「敵は増靈極によつてマナを増大させ、自分達の周囲の靈勢を変化させています」

「えつと……つまり……人工的に地靈を作り出したって事か?」

「そのようですね。マナで地の微精靈を大量に召喚すれば、確かにそれは可能だと思います。さすがウインガル……何と言ひ奇策を……」

「……」

みんなに分かりやすくローエンが説明する。

増靈極って、そんな使い方もあるたのか……。それを戦い以外の使い方してほしかったけどな。

「ラ・シユガル軍はどうやって抵抗してるんですか?」

確かに……いや、ローベンの予測だとラ・シユガル側にも増靈極はある筈だ。

「我々にも増靈極はありますからね」

「兵全員に配備し、小隊の1人に靈勢を変化させる者を充てたのですね?」

「は、はい。おっしゃるとおりです」

ローベンにはすべてお見通しだった。

「もしかして、まくらの出番?」

そう言つてHリーとティポが顔を見合せた。

俺達は増靈極持つてないし、必然的にそななるんだりうか?
と思つていたら、ミラが「ここは地の術に長けたローベンに任せ
た方がいいだろ?」と言つた。Hリーとティポは、残念そうに肩を
落とした。

「ははは……まあ、援護は頼りにしてるよ」

「……はい、頑張ります……」

撫でながら言つと、少し不満そうに返された。

「時間がありません。すぐジランドの部隊を追いましょう」

ローベンがさつて、増靈極を借りるローベンを俺達は外で待
つた。

「まさかとは思つたけど……来ないよな……? ……イバル……」

「ま、まさか……来ないよ、多分……」

俺の呟きが聞こえたのか、ジユードがそう答えた。顔が少し引き
つっている。

不安が生まれてしまつたジユードは、アルヴィンを捜しに行つた。
こんな時にどこに行つたんだろうか?

「アルヴィン……また嘘ですか?」

「エリー、ゼット、何言つてるんだよ
「白々しいぞー！」

いつの間にか居たアルヴィンに、エリーとティポが何か言つていた。

「おたくも疑つてんの？」

アルヴィンが近付くジューードにさう言つと、ジューードは俯いた。
この状況で空気が悪過ぎじゃありませんか？

「アルヴィンさん、この状況で1人で動かれますと、さすがに疑わ
れますよ」

「アルヴィン、今は勝手に僕達から離れないでよ

「ホントだよ。約束だからね！」

ジューードとレイアに言われて、アルヴィンは呆れたように頷いて
いたのだった。

* * * * *

「歯さん、私から離れないでください

戦地へ向かう途中、崖を降りるとローホンがさう言つて増靈極を

使用した。ローハンを中心に、靈勢が地靈に変化する。

「思つたよりも視界が悪いね。敵がどこに居るのか、全然分からな
いよ」

強く降る雨の所為か、視界は最悪だ。

「迂回して、安全なルートを探すか？」

「つづん、直線に駆け抜けようよ。それが一番早い」

アルヴィンの安全策を、ジユードは蹴った。
オルダ宮の時もだけど、何か考え方がミラに似てきてるよな。

「ぼくたち死んじゃうかもねー」

「大丈夫だよ。みんなが居るんだからさ」

「」
レイアもエリーも不安で仕方がない中、ミラがそう言つた。
「まあ、氣持ちはそつなんだけだな。

「恐れるな」

レイアもエリーも不安で仕方がない中、ミラがそう言つた。

「今、最も恐れるべきは、人間と精靈の命が奪かされる事だ」
「ミラ、カッコいい！」

確かにカッコよかつた。レイアもエリーも、それだけで不安が無くなつたような表情を浮かべる。

「みんな、行こう」

「クルスークの槍を破壊するー。」

ミリラがそう叫んで、俺達は戦場へと走り出す。

途中、兵士が道を塞ぐけど、「止まるなー」とミリラが叫んだ。

少し進んで戦場のど真ん中を走つていると、いきなりラ・シュガルの兵士が攻撃してきた。

「何すんだよー。」

「僕達は敵じやないよー。」

「ジランド参謀副長より全軍に通達があつたー。『指揮者イルベルト』は敵となつた。殺しても排除せよ、となー。」

「なんですよー?」

兵士の言葉に、ローハンは驚きを隠せない。

「ラ・シュガル戦略要点の破壊など、絶対にさせんー。」

兵士達は武器を構えて、俺達を殺す氣だ。

「くつ……！ 結局ラ・シュガル兵と戦うのかー。」

「私達を殺そうとしています。ジランドは感情的な軍師のようですね」

「まさか……俺達がナハティガルと戦つたからか？」

あの時ジランドも一緒に居たからな。俺達を敵視する理由は十分にある。

「勝つためには手段を選ばない。んな奴はいつもそんなもんだろ」

「戦争に勝つ事のみが目的ではないかもしかんな」

他の目的……？ それにはクルスニクの槍が関わっているのは確かだな。

「何か嫌な感じがするよ…」

「うん、槍の下へ急ぐつー…」

「一気に蹴散らすぞ！」

倒してもまた現れる兵士達に、ミラが一人で突っ込む。

「ミラ、張り切つてますね！」

「張り切りすぎじやないか？」

剣を振るいながらミラの様子を見る。いつもの何倍も勇ましいな
……。

（てめえが死んだら人間も精霊の命も脅かされる。どうしてその矛
盾を無視していられるのかね……）

「何、アルヴィン？」

小声で何かを呟いたアルヴィンにジユードが反応した。その一瞬
の隙に、兵士がジユードに槍を向けた。

俺はその直前に、槍を弾いて兵士の顔面を柄で殴つて気絶させる。

「余所見すんな、ジユード！」

「そうだぞ、優等生！」

「うん、ごめん2人とも！」

乱戦に次ぐ乱戦。兵士は倒しても倒しても、先が見えてこない。

「まだ来るの！？」
でも、僕が！

「おー、無理し過ぎじゃねえか？」下がつてろつてー。」

「ではなーどー」

1人で頑張るジュードだけど、これだけは譲れないと言つように拳を振るう。

「アルヴィンの言うとおりだ。槍はまではまだある」
「僕は大丈夫だよ！ それよりも、ミラは前だけを見ていて！」
お

願し！」

「ふふ……ありがとう。私は心強い友を得た。
「俺ら出来ん限りワオロードするからな！」
ゾ

俺も出来隠す? あかんな! シー=エー=」

とは言え、エリーからはあまり離れられない。守ると決めているからな。俺もそこだけは譲れないし譲るつもりも無い。

「うーーー、うじゅうじゅと瀧こできやがつてー、あと少しだつての

「アルヴィン君、大丈夫？」

「無理はすんなよ！」

「お前ら、心配されるほど、やわじやないよ。」

そういうつまでも、兵士に向かつて剣を振る。

「本当に平気ですか？」

「嘔吐だから心配してくれんの？」

女道の心

「それもウソだねー

「こればっかしはホントかもよ？」

「え……？」

「2人とも、話し込んでるとやうられるぜ？」

ヴォルトアローを放ち、兵士を倒していく。クルスニクの槍まではあともつ少しだった。

「はあ、はあ…………あと、ちょっとだ！」

「大丈夫ですか？ ジュードさん！」

「これが戦争なんだね」

疲れをものとしないように言ひ。無茶してんのはお前じやねーかよ！

「はい。戦争は若者の命を奪い、先を生きた者達を置き去りにする。若者に残すべき未来に彼等はいません！」

「行こう、ローベン！ そんな戦いは早く終わらせなきや！」

「参りましょ！ 槍の運ばれた丘はもうすぐ。あとひと踏ん張りです！」

ジューードがもう一度気合を入れ直した。

「はあ…………はあ…………」

「キビシ……」

「大丈夫か、エリー！」

明らかに疲労が溜まっているエリー。このままじや、丘に着く前に……いや、何としても守り抜いてやるからな！

「フォローするぜ？ お姫様！」

「そんなの、頼んでませんっ！」

「その元気があるなら、大丈夫だな」

「あ……」

「ありがと……」

心配された事が嬉しかったのか、エリーとティポがアルヴィンに礼を言つていた。

「もう！ しつこい！」

「レイアさん！ 単独で突つ込むと包囲されますよー。」

レイアが突つ込みそつになつたのを、ローハンが止める。

「ミラー、このままじゃまずいよー。」

「かと言つて引く訳にはいかない！ なんとか押し切るんだー！」

丘まであと少し！

「エリー、無理すんなよー。」

「はい、大丈夫です！」

「カイト君こそ無茶しないでよねーー！」

エリーとティポに心配されて、思わず笑つてしまつた。

「ほんなの無茶に入らねえよー。」

それを証明するかのように、俺は雷を纏つた剣で兵士を薙ぎ倒していく。もちろん、気絶させるだけだ。

「す、凄いです……」

「まひ、行くぜHリー。」

ちょうど兵士が居なくなつて出来た道を、俺はエリーの手を引いて走つた。

クルスクの槍が運ばれた丘は、もうすぐ目の前だつた。

第30話 沼野を駆ける（後書き）

今回会話ばっかになつてゐる気が……一応戦つてますよ。
次回はあの3人と戦います。

第31話 四象刃との決戦（前書き）

とは言え物語上の都合で1人いませんがね（笑）

第31話 四象刃との決戦

戦場を突つ切つてようやく兵士に襲われなくなり、ほんの少しだけ休息をとつてから進むと、またラ・シユガルの兵士が沢山見えてきた。

けど、そいつらは俺達には気付いておらず、何かを囲んでいた。

「あれは……四象刃！？」
「フォーガ

兵士の合間から見えた3人の人物を見て、俺は声を上げた。
そう、ラ・シユガル兵士に囲まれていたのは、ジャオとワインガルとフレザ 四象刃の面々だった。

残りの1人、アグリアが居ないのは何でだろうか？

だけど、数でかなりハンデがあつたにも関わらず、ワインガル達はほとんど一瞬で兵士を倒していく。

改めてデータラメな強さだと思い知らされた。

戦闘が終わつた事を確認してから、俺達は3人のもとへと行く。

「来たか、マクスウェル」

ミラの姿を確認したワインガルが、まるで待つていたように言つ。

「やはり戦場でまみえる事になつた、か。悲しい時代だのぉ

ジャオは俺達を見て もしかしたらエリーを見て 残念そうに目を伏せた。

「山狩りは楽しかつたわ、アル
「そいつはよかつた」

フレザはカン・バルクの時の事を語つてゐるらしい。あの時、アルヴィンが嘘をついてくれたんだっけな。

「ジランドは討つたの？」

「答える義理は無いな」

こいつらの問いには相変わらず答えない。

「ならば話を変えるとしよう。道を開けやー。」

「うふふ、冗談でしょ？」

//の言葉に、フレザが失笑する。

「槍は破壊する。それでこの戦いはお前達の勝利だろう。何故それで満足できない？」

「陛下の望みだからだ」

「この戦は通過点に過ぎない」

ガイアスは何を考えているんだろう？

これが通過点つてどういう意味だ？

「ここで争えば、あなた達も命を落とすかもしない。王を支える者が居なくなるのですよ！」

「陛下はお一人でも歩まれるわ」

そんな事は無いと思う。支えてくれる人が居なければ、自分を正してくれるものは完全に無くなる。

王だつて、それは同じな筈だ。

ナハティガルは最期にそれが分かつたんだと思う。

「イルベルト殿。あなたがそれを言えるのか？」

ワインガルが言つと、ローエンは眉をひそめた。
何も答えないローエンに、ワインガルがさらに言葉を続ける。

「民の先陣を切り、戦わねばならない者であるあなたは最後尾に回つてしまつた。その結果、ナハティガルの独裁を許し、手に掛けた」
ワインガルはナハティガルが死んだ事を知つていたらしい。
情報早すぎじゃないか？

「ローエンは悪くないよ。悪いのはナハティガルだ」

ジユードが庇つように言つたが、ワインガルは「国にとつて個人の是非は関わりの無い事だ」と言つた。

「……どういう事？」

「導く指導者が居なければ、民は路頭に迷うだけ、と言つている」「なら……今からでもローエンが……」

ローエンなら、混乱した國でも導く程の技量があると思つた俺は、ローエンを見ながら言つ。
だけど、ローエンは首を横に振つた。

「そう簡単にはいきません。私など所詮は一介の軍師。王にはふさわしい器が必要なのです」

王になるには……それだけの器が必要だつて、そういう事か……。

「我らが王はその器をもつておる」

「そして民を導く為の道をこの先に見出されたのよ」

「槍は我らが、王の力として貰い受ける!」

3人が言つと、ミリも叫んだ。

「何度も言わせるな。クルスークの槍は渡さない。どんな理由があ
るつとも、だ!」

「ミリの……マクスウェルの思いは邪魔させない!」

ミリヒジコードが構えると、俺達も武器を出した。

それと同時に、ウインガルの髪が白くなり、マナが急増した。カ
ン・バルクで見た戦闘モードだ。ジャオとフレザも構える。

「あんたらを倒しても先に進むからな!」

(倒せるものなら倒してみろッ!)

相変わらず何言つてるかは分からなければ、多分通さないって言
つてるんだと思つ。

素早い動きで突っ込んでくるウインガルの剣を防ぎ、こちらも攻
撃する。けど、ほとんど防戦一方だった。

「カイトさん、援護します! スプラッシュ!」

(そんなものが当たるとでも思つてゐるのか?)

空から水流が降つてくる直前、ウインガルはバックステップで避
ける。

「甘いぞ! グレイブ!」

(どちらがだ! 断空剣!
ダンクウケン
鳳凰天駆!) ホウオウテンク

避けた先に居たミラが剣を地面に突き刺すと、岩が槍のようになに突き出す。ワインガルはそれを竜巻を伴う斬り上げで回避し、さらに炎を纏つてミラに突進した。

避けようとしたミラだけど、体勢的にも厳しくて完全には避けきれず、地面に倒れてしまった。

「ぐあっ！」

「//アー！」

（他人を気遣う余裕があるのか！？ 神風！
カミカゼ）

「くっ……つわっ！？」

//に駆け寄ろうとしたら、ワインガルに斬りつけられた。とつさに防御したけど体勢を崩してしまい、大きくぶつ飛ばされてしまう。

「カイト！」

「エリーゼ、駄目だ！」

「娘っ子、行かせはせんぞ！」

「邪魔だぞ、おっさんー！」

「」うちに来ようとしたエリーだけど、ジャオに道を塞がれていた。ジユードがエリーを守っているみたいだ。

「ほら、あなたも余所見はいけないわよ。ブルースファイア！」

「ちつ……これじゃあ加勢に行けねーな

「アルヴィン君、援護するよー！」

「」達に加勢しに行こうとしていたアルヴィンだけど、プレザに阻まれていた。アルヴィンにレイアが加勢する。

「カイト！ 先に行け！」

「え……？」

ミラの言葉に自分の耳を疑いながら、俺は辺りを見回した。
ワインガルに吹っ飛ばされた先は、どうやらクルスニクの槍の方
に行く道の方だつたらしい。

「少しどいい！ ガイアスから時間を稼いでくれ！ 私達もすぐに
追いつく！」

「そうか……ここで時間を使いすぎて、ガイアスがクルスニクの槍
を得たら元も子もない。」

今自由に動けるのは俺だけ。阻まれずにガイアスのもとへ行ける
のは俺だけだ。

「分かつた！ ミラ達もなるべく早く来てくれ！
(ちいっ！ 行かせるかッ！)

走り出すと同時に、俺を行かせまいとワインガルが追い掛けく
る。

「「アドフレッシャー！」」「
(ぐおつ！？)

だけど、ミラとローホンの共鳴術リンクアーツ技で、ワインガルの足が止まつ
た。

その隙に、俺は全力でガイアスのもとへと走った。

みんな、信じてるからな！

* * * * *

(へつやつてくれたな)

「お前の相手は私達だ！」

カイトが走り去った後、ワインガルの進路を阻むよつていうとローランが立ちはだかる。

(ふつ……まあいい。奴を追うのは貴様らを殺した後でも間に合つ！)

「何をじりじりと歩いている…」サンダーブレード。

ミラが精霊術を発動させると、ウインガルはそれを簡単に避け、ミラに近付いた。

(はっ！ そんな攻撃が当たるか！)
白牙追蓮！(ピヤクガツイレン)

۱۷۸

素早い突進からの多段斬りに、ミラは防ぐ事で精一杯だった。

「ロックトライ！」

それを助けるなように、ローホンが精霊術を発動する。足下から箭の槍が3つ飛び出すのを、ワインガルは間一髪で避ける。

「済まない、ローホン」

「ワインガルの速さは侮れません。普通に攻撃しただけではまず当たりないです」

ワインガルと距離が出来て礼を言つたミラに、ローホンが近付いて言う。

速さについてはミラも敬服をせざるを得ない。仲間の中でも一番速いジユードですが、ワインガルの速さに付いていけるかは分からないからだ。

だが、じつは一人ではないと、ミラは知っている。

「ローホン。連携、頼めるか？」

「もちろんです、ミラさん」

（最期の相談は済んだか？）

2人が話し終えたのが分かったワインガルがそう言つと、ミラが鼻で笑つた。

刹那、ワインガルは地面を蹴つて距離を詰めた。

「行くぞ！ ルナティックステイキング！」

ミラが正面に円を描くと、そこから槍が飛び出す。だが、それをワインガルは剣で受け流して避ける。速度は落ちない。ワインガルはミラに向かつて剣を突き出す。が、

「フリー・ランサー！」

ミラが横に飛び退いて剣を避けた瞬間、ローエンが詠唱していた
精靈術が発動する。

無数の氷の槍はワインガルにヒットしていく。

「まだだ！ デイストールノヴァ！」

周囲を攻撃しながら浮き上がり、剣を振り下ろしてワインガルを
地面に叩きつけた。

（ぐおおつ！ 貴様ら……！）

起き上がったワインガルは怒りを露わにしていた。

「まだ立ち上がるのか？」

「ミラさん！ いけません！」

（遅いッ！ 空破絶風撃ツ！）

ワインガルはミラを一度斬り上げ、突進斬りを放つ。
そして、ミラを何度も斬りつけ雷の鎖で捕らえ、

（ライトニングノヴァ！－）

「がああああ！？」

斬り伏せた。

（ふんつ……手こずったか……）

「まだ、だ……」

（何つ！？）

ワインガルの奥義を喰らつたミラだが、フランフランになりながらも立ち上がった。

(ふつ……その状態で勝てると思つてゐるのか!)

ワインガルの速さに、今のミラは付いていく事はあるか、反応も出来ないだろ!う。

だが、

「私をお忘れでは? ソリッヂ・コントラクション!」
(しまつ……ツ!?)

ミラに突進するワインガルの四方に鎖を張り巡らせ、ワインガルの動きを止めた。

「終わらせる! ハイアーザンスカイ!」

ミラは空に向かつて飛び上がりながら、強力な突きを繰り出した。

「始まりの力、手の中に!」

空から炎を纏い急降下、そして水を巻き上げワインガルを浮かした。

「我が導となり、こじ開ける!」

飛びながら風の刃で斬りつけ、岩の槍を飛ばす。

「スプリームエレメンツ!』

トドメに地水火風全ての力がワインガルを襲つた。

(があああああツツー！？)

ワインガルはドサッと地面に倒れ込んだ。

同時に、ミラも地面に膝を着く。

「大丈夫ですか！ ミラさん！」

「なんとかな……それより、皆は？」

ミラは慌つかと、辺りを見回した。

* * * * *

ヒリーゼはカイトを追おうとしたが、ジャオが立ちはだかる。ジ
ュードはヒリーゼを守りながら戦っていた。

「おじさん！ 通してください！ わたし……おじさんと戦いたく
ないです……！」

「わしも娘っ子とは戦いたくはない！ だが、わしとて成すべき役
割があるー！」

ヒリーゼの言葉に、ジャオはハンマーを振り下ろす事で答える。
地面が爆ぜて、岩が飛び出た。

ジユードはその直前、エリーゼを抱えて後ろに飛び退いて避け、着地すると同時に魔神拳を放つ。

「どうしても、退いてくれないんだね？」

「ふんっ！ くどいぞ、小僧！」

魔神拳の衝撃波を、ジャオはハンマーを叩きつけて防いだ。

「ガリヨウクウハ臥竜空破！ ヒエンレンキヤク飛燕連脚！」

素早い動きでジャオの懷に入ったジユードは、飛び上がりながらのアッパーから連續蹴りに繋げる。

「ちいっ！ レッシンテンショウ烈震天衝！」

ハンマーで振り払い、さらに拳を払い無数の岩片を巻き上げジユードを吹き飛ばした。

「続けて喰らえ！ ガロウゲキ牙狼撃！」

「うわあっ！」

地面に倒れていたジユードをハンマーを振り上げることで起き上がらせ、拳を叩きこんだ。大きく吹き飛び、地面を転がった。

「降り注げ、博愛の慈雨！ ハートレスサークル！」

その後に、ジユードを中心に治癒効果のある魔法陣が描かれ、ジユードの傷が癒えていく。

「ありがと、エリーゼ」

「ジユード、援護です！ 行くよ、ティポ！」

「まかせろ～！」

エリーゼは立ち上がるジユードに近付き、手にした杖を握り直した。

「わたしは、あなたを倒してカイトを追います！」

「仕方あるまい……来い！ エリーゼ！」

ジャオもハンマーを握り直し、本氣を出す。

「湧き出よ、闇の腕！ かいな ネガティブゲイト！」
〔マオウチガクジン〕
「魔王地顕陣！」

ジャオの足下から闇のエネルギーが発生して攻撃するが、ジャオはハンマーで地面を強打し、現れた岩槍でそれを打ち破った。

「今だ！ ホウツイケン 凤墜拳！」

「ぐつ！？」

その一瞬の隙で、ジユードは現れた盾を足場にして高く跳び、拳から火球を叩きつけた。

「フラッターズ・デイム！」

さりにエリーゼが精霊術を発動して、闇の剣で連續で斬りつける。

「ぐぬおおおー！」

怯んでこる今の中に一気にたたみ掛けようとして、ジユードが再度ジ

ヤオの懷に飛び込む。

「まだ終わる訳にはいかんのだ！」

「ツー？」

急に体勢を立て直したジャオは、懷に飛び込んだジユードを掴み、地面に何度も叩きつけ、放り投げた。そして、

「これで終わりじゃ！ 轟魔隆衝断！」
〔ガカマココウシヨウダン〕

「うわああつ！」

「きやああつ！」

強力な衝撃波がジユードに向けて放たれた。衝撃波の威力は凄まじく、余波はエリーゼをも襲う。

「うう……」

「僕達だって……ここで終わる訳にはいかないつ！」

「なんといつ！ あの技を受けても立ち上がるか！？」

しかし、ジユードとエリーゼはボロボロの状態。治癒術で回復してようやく戦える状態だった。

「エリーゼ、僕がジャオを引きつける。その間に、頼むよ

「わかりました」

「がんばれー！ ジユード君ー！」

拳を握りしめたジユードが走り出す。

「まだやると言つのか！」
〔エイショウ〕

「ふつ！ 遅い！」

〔ムエイショウ〕

「戦迅狼破！」
〔センシンラウハイ〕

「無影掌！」

「何ー？ ぐおー！」

ジャオが狼の形をした鬪氣を放つが、ジューードは瞬時にバックステップでそれを避け、素早い突進からの突きを放つ。

「今だよ！ エリーゼ！」

「深淵の盟約を果たせ！ リベルールイグニッシュヨンー！」

エリーゼの目の前に魔法陣が現れ、闇のレーザーが撃ち出される。

「まだ行きます！」

「目標ロック！」

「チャージ完了！ 発射！」

「覚悟しろー！」

ティポに闇のマナを集中し、発射される。ティポはジャオの周りをグルグルと飛び回り魔法陣を描いた。

「ただいま！」

「リベルールゴーランドーー！」

ティポがエリーゼの所に戻ると、2人で魔法陣を爆発させる。

「ぐおおおつー？ 強くなつたな……エリーゼ……」

ジャオはそう呟いて地面に倒れた。

「なんとか……なりました……」「みんなはつ！」

なんとか戦闘を終えたジュードとヒリーゼは、辺りを見回す。

* * * * *

「次はその子に『執心』なのかしら？ とつかえすぎじゃない？」

「え、あたし？」

「何の話だよ、何の！？」

フレザと戦っているアルヴィンに加勢しようとしたレイアに、フレザがそんな事を言っていた。

「あなたも、アルを信じ過ぎて捨てられない事ね？ ドラゴネス・ハンド！」

「何だか知らないけど、多分違うからね！ ショウシングン瞬迅爪！」

フレザの本から出た竜の爪を、レイアは敢えて正面から突っ込んで受け流すことで避ける。

「ブルースファイア！」

「ちい！ ハリアルレイザー！」

大きな水の玉がレイアの真上に出現し、それが落ちる直前にアルヴィンが銃で撃ち破裂させる。水が飛び散るだけでダメージは無かつた。

「ありがとう、アルヴィン君」

「礼は後だ！ んな事より、妙な話してんじゃねえ！」

「いや……あたし、巻き込まれてるだけなんだけど……」

「話してる暇は無いわよ！ スプラッシュ！」

2人に向かって、プレザが精霊術を発動させる。

アルヴィンはとっさにバックステップで避け、レイアはプレザに向かって走り出していた。

「チリサザメ
散沙雨！」

「くつ！」

レイアの素早い突き攻撃に反応出来ずに、プレザは数度、攻撃を喰らっていた。

「悪いが勝たせてもらひうぜ！ マジンセンコウダイン
魔神閃光断！」

突き攻撃が終わる直前、アルヴィンが飛び上がる。それを見たレイアはすぐにバックステップで距離を取った。落下しながらの斬り下ろしは、地面に当たる直前に爆発する。

「あああああ！？」

爆発が直撃したプレザの身体は、大きく吹き飛んだ。

「ナイスコンビネーション！」

「気付いて無かつたらあたしまで巻き込まれてたよー！？」

「あれえー、そうだっけ？」「

攻撃が当たりそうだったと、レイアがアルヴィンに怒る。しづばつくれるアルヴィンは、倒れたプレザに視線を動かした。

「やつてくれるじゃない、アル！ 守護方陣！」
シユゴホウジン

プレザを中心に描かれた魔法陣が、プレザの傷を癒していく。

「厄介な技持つてんな……」

「なら、こんなのはどう？ アクアスパイラル！」

アルヴィンに向けて、回転する水流が放たれる。横に跳んで避けるアルヴィンに、追撃が来る。

「スプラッシュ！』

「ぐつ！」

避けた先で、頭上から降り注ぐ水流にアルヴィンは身動きが出来なくなつた。

「アルヴィン君！」

「あなたはこれよ！ ドラゴネス・テール！」

「きやあつー？」

駆け寄ろうとしたレイアも、プレザの本から現れた竜の尻尾で薙ぎ払われて地面に倒れた。

「レイア！ ヴァリアブルフラッシュ！」

「必死ね、アル！」

大剣と銃を合わせて、プレザに向けて発砲する。が、簡単に避け

られてしまつ。

「ならつ、タイドスパーク！」

大剣を薙ぐようにして振りながら地面に向かつて銃撃を行う。これはブレザも避けきれずにバランスを崩してしまつた。

「任せで！ 翔舞煌爆破！」
ショウブコウバッパ

「きやああ！」

レイアが空高くにジャンプしていく、体勢の崩れたブレザに空中から強い衝撃波を放つた。

「つ……ちょっとはやるようね……でも、これはどうかしら…？」
「えつ…？」

地面に着地したレイアに余裕を与えず、ブレザは本から竜の頭を召喚し、水流を放つ。突然の事に反応出来なかつたレイアは直撃してしまつた。

「まだ終わらないわよ？ 龍精召喚！ ドラゴネス・スードゥー！
！ 逝つちゃいなさい！」

本から巨大な竜が2体現れ、レイアに向かつて行つた。

「くそつ！ レイア！」
「きやつ！ アルヴィン君！？」

攻撃が当たる直前、アルヴィンがレイアに体当たりして吹つ飛ばした。

水の竜は軌道を変えず、そのままアルヴィンに直撃した。空に舞い上がり、アルヴィンは地面に落ちる。

「そんなにあの子が大事なの、アル？」
「別に……傷つけると怒る奴が居るだけだ……」

起き上がるアルヴィンに、フレザが意外そうに聞いていた。だが、アルヴィンの答えはフレザの納得のいく答えでは無かつた。

「彼の者に注げ！ 安らぎの光輝！ ヒール！」

攻撃を受けたアルヴィンの身体を光が包み、傷を癒した。

「さあて、そろそろ終わりにするぜ？」
「やれるもんならやってみなさい！」

大剣に銃を合わせたまま、アルヴィンが突っ込んだ。そのアルヴィンに、竜の頭からの水流が放たれる。

「やらせない！ バリアー！」
「なつ……！？」

水流は、レイアの補助術によつて防がれた。
フレザが驚いて、一瞬隙が出来ると、既にアルヴィンは剣が届く位置にフレザを捉えていた。

「ガリュウゲレンケン
我流紅蓮剣！」

フレザの技が不発に終わり、アルヴィンが炎を纏う剣で斬り上げ、もう一度飛び上がりながら斬り上げた。

「田えかつぼじつてよく見てな！　おたくの最期の光景だ！」

宙に跳んだまま、フレザに向かつて銃を乱射して、大剣と銃を合わせる。

「エクスペンドブルプライド……」

トドメに落下して地面を叩きつけ大爆発させる。

「あああああああーー？」

フレザの悲鳴が響いた。

「アルヴィン君、大丈夫ーー？」

「お前の術のおかげでな。それより、あいつらの心配が先だ」

アルヴィンがそう言ひと、2人は辺りを見回した。

* * * * *

3組の戦闘が終了したのは、ほとんど同時だった。

「皆、終わったようだな……」

勝利はしたが、ダメージは皆一様にひどい状態だった。

「ワインガルさん、あなたの増^{ブースタ}靈極はどこですか？」

戦いの後、ローハンがワインガルにそう問い合わせると、ワインガルは自分の頭を指差して地面に倒れた。

戦いの傷で気絶したらしい。

「さうまでしてガイアスに仕えるのですね……」

ワインガルの信念に敬服するように、ローハンが呟いた。

「悪い。遺言訊くつもりないから

また違う所では、アルヴィンが倒れたプレザの頭に銃口を突き付けていた。

「アルヴィン君、待つてよ！ もう決着ついてるんだよー！」

レイアが必死にそう叫ぶと、アルヴィンが仕方ないと叫ぶように銃を下ろした。

「怖い怖い。そうやって、生きていくのよね。お嬢さん、そうやって弄ばれて、いつかは捨てられるのよ」

「だから何の話か分からぬけど……あたしは一応アルヴィン君の事は信じてるつもりだよ」

「一応かよ……」

レイアの返しに、アルヴィンは呆ながら呟いた。

「あの…………わたしを、心配…………してくれるんですか？」
「理由を言えーー！」

エリーゼとティポがジャオに問い合わせるが、ジャオは黙つたまま
だった。

「ど、どうして…………」
「エリーゼ…………」「

何も答えようとしないジャオにもう一度問い合わせる。心配になっ
たのか、ジュークもエリーゼに近寄った。

「クルスニクの槍まであと少しだ。質、思う所もあるだろうが、先
に行かせてくれ。先に行つたカイトも心配だしな」
「やつです！ 早く行きましょー！」

リラがそう言つて、エリーゼが慌てたよつてそつ言つだして、リ
ラ達は先を急いだ。

第31話 四象刃との決戦（後書き）

今回パーティーを分けたのは、ただ単に混戦が書くの苦手なだけです。必ず1人は空気になつてしまふ人が出るんで……。

そして今回、敢えて共鳴術技はほとんど使いませんでした。理由は忘れていた訳ではありません（笑）

フレザにはいくつか新技を追加してしまったのはただの事故です（笑）

次回は時間を稼ぎに先に行つたカイトとガイアスの一騎討ちになるかもしれないです。

第32話 時間稼ぎの一騎討ち（前書き）

ガイアスが強過ぎる気がしなくて無いですが、……原作もこんな感じですね（笑）

第32話 時間稼ぎの一騎討ち

後ろ髪を引かれるような思いでみんなを残して先に進むと、丘の上に巨大な黒い兵器が設置されているのが見えた。多分、あれがクルスニクの槍なんだろう。

あんな大きな兵器が発動したら、いったいどれだけの人が犠牲になってしまうんだろうか？ 僕には想像もつかない事だけど、これだけは分かる。起動したら、最悪な結果になってしまうと言う事だけは。

走って丘の下まで行くと、やっぱりそこにはガイアスが居た。

「ほつ……貴様一人だけとは……俺もなめられたものだな？」

「俺はただ、時間を稼ぎに来ただけだよ。ミラやジユードはあんたの手下と戦ってる」

「同じ事だ。マクスウェルならばまだしも、貴様のような奴に俺の相手が務まると思つてているのか？ まして、時間を稼ぐ事さえもな

「うわあ……完全に見下されてるよ！？ 確かに、内心はかなりビビってるし、気を抜いたら立てるかどうか分からぬほど足は震えてる。

「こんな奴と顔を合わせずに会話をしたって、話し合いつ事すら俺には恐怖だつてのに、もしかしたら剣を交える事になるかも知れない。恐怖を感じるなつて方が無理な話だ。」

けど、みんなはミラは俺を信じて1人でここに送り出した。例え吹き飛ばされたのが偶然だったとしても、俺が信頼されているのには変わりは無い。

なら、俺はそれに応えるだけだ。

時間を稼ぐ方法なら、戦い以外にもある筈だしな。

「ガイアス……何であんたはクルスクの槍を欲しがるんだ?」「答える義理は無い」

とりあえず時間を稼ごうと話しかけてみると……」いつなるのな……。

「話し合ひと言つか……会話する気が無いのか、こいつは……?」

「あんたが答えないならそれでもいい。だけど、俺は槍をあんたに渡す気は無いぜ?」

「ふつ……貴様に何が出来る? 僕を倒すとでも言つつもりか?」

それが出来たらどれだけ楽だろうかねえ……。

「言つたろ。俺は時間を稼ぐだけだ。俺があんたの足元にも及ばない事は自分が一番分かつてるよ」

「己の力量が分かるか……。ただのバカではないようだな」

あれ……何で俺バカ扱いされてんの!?

そう思つていると、ガイアスが振り返り俺を見た。

「ジャオに挑み敗北したお前が、何故ここまで止まらず進み続けられたのか。興味がわいた」

「……俺がここまでこれたのは、みんなが 仲間が居たからだ。決して俺一人の力じゃない!」

あの時から……強くなろうと思つたけど、俺の強さは俺だけの物じやない。

「それもよからう。丁度良い機会だ。貴様の力量……この俺が囮つてやるう! 俺の道に害があるかも含めてなツ!」

ガイアスは、自分の身長よりも長い長太刀を抜いた。

「戦うのかよ……。相手が務まらないとか自分が言つたくせに！愚痴る余裕なんか皆無だ。俺も剣を抜いた。」

「異世界の人間の力……俺に見せてみろッ！ 異世界人！」

「俺にはちゃんと、海斗って名前があるんだよー！」

「うなつたら……俺を 僕と言つ存在を認識させてやるー！」

「先手は譲つてやるつ 来いッ！ー！」

なめられてるとは思わない。それだけの力の差がある事は分かっているのだから。

でも、その余裕……一度でも崩せば俺の勝ちだ！

「はあつ！」

剣を構えて地面を蹴り走り出し、全力で振る。

当然防御されるけど、それでも俺は攻撃を続ける。

ガイアスに唯一勝てる可能性があるのは、力でも技量でもない。俺自身の速さだ。

もちろん、ガイアスが遅い訳じゃない。けど、俺の能力の中でもそらく一番高い能力はスピードだ。

「ぬるい！ 魔神剣！」
（マジンケン）

「ツー？」

ガギンッ！！ 剣と剣がぶつかり合つ。力負けして、俺は後ろに吹っ飛ばされた。そして、俺を追いかけてくるように衝撃波が迫

り、俺はとっさにLに変形させて横に衝撃波を放ち、吹つ飛ぶ方向を変えて何とか衝撃波を避けられた。

ガイアスが大きく剣を振つて放つたのは魔神剣だ。
だけど……威力が俺やアルヴィンのそれとは桁違いだ。あれが直撃しただけでも相当ヤバい。

「ふつ！ 瞬迅剣！」
「おおつ！ 絶氷刃！」

俺が体勢を立て直さない内に、ガイアスは剣を正面に構えて高速の突きを繰り出してきた。それを防ぐ為に、氷を纏う剣でガイアスの突きを弾いた。

何とか防げたと息を吐く間もなく、ガイアスは剣を横に薙ぐ。

「くうつ！？」

今度は足を踏ん張らせて吹つ飛ぶ事は避けられた。

「どうした？ もう終わりか？」

ガイアスが挑発するように剣を構え直した。
まだ戦い始めてからあまり時間は経つてないけど、力の差が歴然と言つ事を改めて思い知らされた。

「まだまだあつ！ 真空破斬！」

高速で剣を振るい真空の刃を飛ばす。けど、ガイアスは正面から一振りで真空の刃を切り捨てる。

ああ、そうなるだろ?と思つたよ。だから、今の一撃はフェイク。
本命はこっちだ！

「**穿光牙**センコウガあ！」

剣に瞬時に光を集め、ガイアスが真空の刃を切り捨てている隙に近付き、光を開放して貫く。

「甘い！ 獅子戦吼シシセンコウ！」

「がつ！？」

突きを出す直前、ガイアスの放つ獅子を思わせる鬪氣に吹き飛ばされた。

地面を何度も転がる。

……くつ、まだだ……まだみんな来てない……。ここで倒れる訳にはいかないんだ！

「雷光一閃！ ライトニング！ スパークウェブ！」

立ち上がりつてからすぐに精靈術を発動する。

一筋の落雷がガイアスに落ちるが、それも剣を強く振り消し飛ばす。だけど、さらに俺は追撃でガイアスの居る場所に大きな雷球を発生させる。

「おおおおおおおッ！－！」

「なつ……嘘、だろ……？」

やつと直撃したと思ったスパークウェブは、ガイアスの全身で放つ鬪氣に打ち消されていた。

確かに俺の術は威力は低いかもしだれいけど……打ち消すなんか反則だろ！？

「ふんつ！ 虎牙破斬！」
〔ガハザン〕

「ツ！－！」

驚いている余裕なんか無かつたのに、一瞬気が緩んだその刹那にガイアスが2連撃の技を繰り出す。

直前に何とか反応出来たけど、空に打ち上げられてしまった。

「飛燕瞬連斬！」
〔ヒエンシンレンザン〕

いつの間にか目の前に居たガイアスが、空を駆けながら俺を斬りつける。トドメと言わんばかりに、地面に叩きつけられる。

「つ……！？」

肺から酸素が吐き出される。

全身も斬られて痛い……。

スピードでなら勝機はあるかもしれない。そう思つたけど、ガイアスの能力は全て俺のはるか先を行つている。

「貴様、おかしな服を着てゐるな。我が剣技を以てしても斬れぬとは」

「え……？」

起き上がりながら自分の姿を確認してみる。確かに、あれだけ斬られたのに、制服は全く斬れていなかつた。

……何で防刃仕様なんだ？ でも、おかげで助かつた。身体は痛いけど、出血が無い分マシだ。

「それにしても解せんな？ 貴様、何故急所を外した攻撃をする。まさか、この期に及んで人を斬る事に臆しているのか？」

どうやら、ガイアス相手でも無意識に急所を外そつとしていたら
しい。それで全力が出てないのか……。

「そりや怖いさ……人を斬るのは……。剣だつて、握るのは今も怖
いよ。けど……」

信じてくれる仲間が居るから、俺はこれまで殺さずを貫く事が出
来ていた。

これからも人を殺す事はしない。絶対に。

「ほう……ここに来ていい眼をする」

「……次は……全力でいく……」

別に手加減をしていた訳じゃないけど……ガイアスなら急所を狙
つた所で、死ぬ事は無いだろう。
そもそも、この人を相手にして遠慮をしたのが間違いだつたんだ。

「カムイドリ
神射鷦！」

弓に変形してマナを撃ち出す。

ガイアスがそれを防ぐのは予想済み。俺はまた正面から突っ込む。

「獅子戦吼！……ツ！？」

先ほどと同じように、俺に鬪気を放つ。けど、その時には俺はガイアスの後ろに回り込んでいた。

この時始めて、ガイアスが息を呑んだのが分かった。

「ゲンロウザン
幻狼斬！

「テンロウメツガ
天狼滅牙ア！」

後ろから斬りつけ、さらに息をも吐かせない連撃を叩き込む。

「センレツクウハ 閃裂空破！ センコウショウハウ 閃光衝墜！」

『』に変形させながら斬り上げ、浮いたガイアスを下から射抜き、続けて光の矢を放つ。

「ぐつ……おお！？」
「まだまだあ！ ライサンショウ 雷斬衝！ ゼッパライジンショウ 絶破雷迅衝！」

雷を纏わせた剣で数回斬りつけ、突き、飛び上がりながら斬り上げ、さらなる雷を纏いながら斬り下ろす！

「レツテンガエイジン 裂天臥影刃！」

斬り上げ、さらに斬り上げ、思い切り斬り下ろし、駆け抜けながら無数に斬り裂く！

そして、連撃はまだ終わらないッ！！

「この連撃でッ！ 沈め！」

マナを剣に集中させ、ガイアスに乱舞攻撃を繰り出し、回転するように空高く斬り上げる。

「テシセン 天旋、レイハダン 靈霸断！！」

マナをさらに集中させ、落下してガイアスに叩きつけた。

「ぐおおおおおッッ！…！」

「はあ……はあ……ビツ、だ……！」

バックステップで、地面に倒れるガイアスから距離を置く。これが、今の俺に出せる全力だ。これで駄目なら……負けは決定だ。

もう……立たないでくれよ……。

「ふつ……今のは効いたぞ……」

だけど、そんな俺の願いむなしく、ガイアスは立ち上がった。しかも、効いたとか言っておきながら、あまりダメージは無さそうだった。

「これが貴様の全力と言つ訳か……」

「くつ……やつぱり……いつ……バケモノかよ……。」

「俺はお前の力を覗くびつていたようだな……改めて、名を聞こいつ？」

「……西風……海斗……」

俺の名前を聞いたガイアスは、剣を構えた。

「ニシカザカイト。貴様の全力には……俺も全力で応えよう」

「……ツ！？」

構えた剣にマナを集中させたガイアスが、一気に距離を詰める。

「貫け！
霸王天衝剣！」

「ぐつ……あ！？」

ハオウテンショウケン

マナを集めた剣で突いてきて、俺は空に打ち上げられた。

「醒めよ！ 黄昏の地より呼び寄せし流転の狼王！」

打ち上げられた俺に向かい剣を振り上げ、火球を投げつけられる。
そして、

「ギャク
マジンオウケン
闘・魔神王剣！！」

「うわああああッ！？」

一刀両断されるッ！

地面に落下して叩きつけられる。身体が動かなかつた。けど……
まだ意識はある。俺はまだ生きていた。

「案^サずるな。死にはすまい」

「ぐつ……は、あ……」

「これが……ガイアスの……全力……？
全く歯が立たなかつた……。」

「カイトッ！」

その時、誰かが俺を呼ぶ声が聞こえた。

第32話 時間稼ぎの一騎討ち（後書き）

今回ガイトはボロ負けしました。やっぱり普通の人がガイアスと一緒に討ちとか無理な気がするんですね。生きてる方が奇跡みたいな感じです。

初の秘奥義も難なくかわされてしまっています。

次回はいよいよあの精靈が！？ そしてまさかの展開に…？

（オリジナル術技）

・裂天臥影刃

上昇しながら斬り上げていき、落下しながら斬り下ろす。トドメに駆け抜けながら無数に斬り裂く奥義。

・天旋霊霸断

武器にマナを集中させ、目にも留まらぬ剣と刀の乱舞攻撃をしながら上昇していき、マナを開放して相手に叩きつける秘奥義。

第33話 壊れる殻

俺の名前を呼んだのは、エリーだった。
倒れたまま首を動かすと、エリーが涙を溜めながら走ってきた。
ミラ達も走ってくる。

「ほう……ワインガル達が敗れたか……」

ガイアスがミラ達を見てそう呟いた。

「ははっ……試合に負けて勝負に勝つた……ってか？」

あれ、逆だつけ？

「カイトー！ 今治しますね！」

「エリー、ゼ、僕も手伝うよ！」

エリーとジユードに治療術を施されて、何とか立てるだけには回復した。

「サンキュー、2人とも」

「無茶しないでって……言いました……」

「……ごめん」

泣きながら言つエリーの頭を撫でる。
でも……ガイアスと戦つて無茶するなって、それの方が無茶だよ
な。

「答える、ガイアス」

そうしている間に、ミラがガイアスと対峙していた。
俺達もミラを追つてミラの後ろに立つ。

「何故クルスニクの槍を手に入れようとする？」

ミラが俺と同じ問いを投げつけると、ガイアスが微笑する。一瞬、
俺を見た気がした。

まるで、最初に問い合わせた俺に答えるようだ。

「全ての民を守る為だ。力は全て、俺に集約させ管理する」「
それはただの独占に過ぎない。結果、お前も守るべき民も、槍の
力が災いし、身を滅ぼすだろ？」「
俺は滅びぬ。弱きものを導くこの意志がある限りな」

ガイアスは何が何でも退かない気なんだろ？
だからこそ、ミラはガイアスに言つ。「お前は一つ重要な事実か
ら目を背けている」と。
ガイアスがミラを睨みながら問い合わせた。

「お前がいくら力ある者であつても、いつかは必ず死ぬ」

そうだ。ガイアスがいくら人外な強さを誇るうとも、人間には生
きる事についてタイムリミットがある。
いくらガイアスでも、これからずっと生きていける筈はない。

「その後はどうなる？ 人の系譜の中で、お前のような者がもう一
度現れるのだろうか？」

ガイアスも考えなかつた訳では無いだろ？。けど、だからこそ答

えの無いそこは突かれれば何も言えない。

「遺された者達は過ぎたる力を持て余し、自らの身を滅ぼす選択をする……それが人間だ。歴史がそれを証明している」「……ならば俺が、その歴史に新たな道を標そう」

「どうやって？」

「そう聞いたかつたけど、空気はそれを許さない。」

「……ガイアス。やはりお前も人間だな」

「ふ、そうだ。人間だからこそ俺にはリーゼ・マクシア平定と言う野望がある。お前は、ただの欲望と捉えるだろうがな」

そこまで分かっていてミラに向うなんてな。

「最後だ、ガイアス。槍は渡さない。どうしても退かないか？」

「剣を抜こうとするミラ」

「退かぬ！」

ガイアスは長太刀を構える事で答えた。

俺と戦つた事は、それほどダメージでは無かつたらしい。

「あなたならもしかしたらって思つた……でも、クルスニクの槍は絶対に壊さなきや駄目だと思つー！」

「ジユードがミラの隣で身構えながら言つ。

「ええ。クルスニクの槍は悲しみを生み出すものです」

「悲しいのは終わらせないといけないんだから…」「

「そうです！ミラはいつも正しいんです！」

「うん！ぼくたちはミラ君の味方だもんねーー！」

「まあ、そう言う事らしいぜ？」

みんなが武器を出しながらガイアスに言いつ。

俺もジユードの隣に行き、武器を構えガイアスを見る。

「さつきも言つたぜ？ クルスニクの槍は渡さない！」

「ならば俺も言おう！ クルスニクの槍は必ず手に入れる！」

叫んだガイアスは、とてつもない量のマナを身に纏わせ、太刀に纏わせた。

さつきも対峙していた時に感じた、ガイアスの全力が来る！

「行くぞーー！」

ガイアスが剣のマナを開放しようとしたその瞬間、どこからか剣が2本ガイアスに向かつて飛んできた。

とつさの事に、ガイアスは俺達を攻撃する事を中断して、2本の剣を振り払つて落とす。

「何者だ！」

俺達も、突然の乱入者を見回して搜す。

「そこまでだー！」

声は丘の上 クルスニクの槍の方から聞こえてきた。
見上げると、そこには巫子のイバルが仁王立ちしていた。

「イバル？ 何故ここに……！？」

予想外の事態に、ミラは言葉を失っていた。
……と言づかこれつて……最悪過ぎじやないか！？

「ミラ様！ 本来のお力を取り戻し、その者を打ち倒してください！」

叫ぶイバルは、懐から円形の何かを取り出した。

……あれが、まさかクルスニクの槍の『カギ』！？

「はははっ！ どうだ偽物！ お前との違いを見せ付けてやるー！
待て、イバル！」

とつさに俺が叫ぶけど、イバルはそのまま槍の方に走り出し、『カギ』をクルスニクの槍に差し込んだ。

クルスニクの槍が、開く。

「どうだジユード！ この俺が本物の巫子だ！ 四大様のお力が、
今蘇る！」

イバルが叫んだ瞬間、クルスニクの槍が起動された。
刹那、何かが吸われる感覚に襲われた。

「な……何だ……」れ……？」

吸われてるのは……マナか……？
辺りを見回すと、この場に居る　いや、この戦場に居るみんな
からマナを吸つていいようだった。

もちろん、吸収を行っているのはクルスークの槍だ。

吸収が終わると、クルスニークの槍からレーザーのようなものが空に向かつて放たれた。

バキイインッ！

何かが割れる音が、戦場に響いた。全員が空を見上げている。

「今……何だ？」

「どう、なつたの……？」

「そんな……破られてしまつた……？」

珍しく//リカの顔色が悪い。空を見上げる//リカは、驚愕で言葉を失つていた。

「そつか……そうだつたのか！ クルスニークの槍は兵器などでは無かつた！」

「それ、どういう

「

ミラに問い合わせようとした刹那、爆発が起こった。クルスニークの槍が放たれた空を見ると、そこから何かが無数に降つてきていた。それは地上を焼き尽くすと降り注ぐ。

そして、割れた空から出てきたのは、

「なつ……！？ 飛行艇！？」

現れたのは空を浮かぶ船。

俺の世界で言うなれば飛行艇

飛行機、そう言つ物だらひ。

でも、あんな巨大な しかも攻撃が出来る飛行機は俺の世界に

は無いと思つ。

「ひこにやつた！ くくくく……くははははー！」

「ど」からか笑い声が聞こえた。

声の方向を見ると、クルスニクの槍の前に男性が一人立っていた。

「ジランドー！ どうなつてゐるー！」

アルヴィンがそう叫んだ。

あれが……ジランド？ 髪をオールバックにしているからか、別人に見える。

「ジランド……お前！」

アルヴィンがジランドに銃を向けると、「ど」からか氷の槍が降り注ぎ、アルヴィンを襲う。

この氷……ナハティガルを襲つた奴か！？

「ハ・ミルをやつたのは貴様らか？」

「そうオレの精靈、このセルシウスがな」

ガイアスの問いに答えるように、ジランドが匣のような物を掲げる。魔法陣が描かれると、そこから精靈が現れた。

「精靈セルシウスだと……？ そのような名、聞いた事も……
やつぱり、四大以外にも大精靈は居たのか……」

分かったのはいいけど、明らかに状況が最悪すぎる。

「我が民を手に掛けた事……許しはせん」

ガイアスが剣を構えると、再び船から砲撃が行われる。

そして、空から黒匣で武装した兵士がかなりの人数降りてきた。

「何なの、この人達……」

レイアが声を上げる中、降り立つた兵士の一人がジランドに近付いた。

「アルクノアのジランドさんですね？」

「ああ、そうだ。あれが例の女と小僧だ」

俺とミハを交互に見ながら、ジランドが囁く。

「……アルクノアだと……？ 貴様がナハティガルに黒匣を伝えたのかー？」

「……そうすれば辻褄は合つ。ナハティガルの側近に、アルクノアが居たんだから。

「あの小僧と女は殺すなよ？ 台無しになる」

ジランドが兵士に指示を出すと、武装した兵士が丘を滑り降りてきて、マシンガンのような兵器を乱射してくる。

それだけでみんな戸惑つのに、黒匣から電撃が放たれた。

「うわあーー！」

どうやら事にみんな反応出来ずに、吹き飛ばされてしまつ。

「くつ…… ハリーー？」

安否を確認しようとハリーを捜すけど、見当たらない。

一瞬、最悪な事が脳裏を過ぎる。

そうしていると、アルヴィンがジランドに銃を向けていたのが視界に入る。だけど、氷の槍に銃を吹き飛ばされていた。

「聞いてなかつたのか？ 勝手な事はさせねえぜ」

2人が睨み合っているけど……悪いけど今はエリーが心配だ。

「ハリーーゼさん！」

「ツー？」

ローハンの声に反応して見てみると、遠くでエリーが倒れていた。

「そのガキも連れて行け。ブースター増靈極の適合好例だ」

俺が動くのとほぼ同時に動いたミラだけど、ガイアスが肘打ちして氣絶させていたのが、視界の隅に見えた。

けど、俺は止まらずにエリーの所に走り続ける。

アルクノアの兵士がエリーに近付き、エリーとティボを抱え上げた。

「あせるかよー！ ヴォルデックラインー！」

雷の矢を放つて、ティボを持ち上げた兵士に当てる。エリーを抱え上げた兵士にも撃ちたい。けど、エリーに当たるかもしれないと思つてしまい、撃てなかつた。

だけど、思わぬ援軍が来ていた。

「……ジャオー!？」

そう、四象刃のジャオがエリーを抱えていた兵士の顔面を足蹴にして階に叩きつけていた。エリーが地面に落ちると、ジャオがエリ一を抱える。

俺は安堵の息を吐きながら、2人の所に向かう。

「これ、娘っ子。目を開ける」

ジャオがそう言つと、エリーが目を覚ました。自分を抱えているのがジャオだと気付くと、目を見開いて驚いていた。

「な、なんだよー！ やるかー！ エリーを離せー！」

「エリー落ち付け。ジャオが助けてくれたんだ」

近付いてそう言つと、エリーがそただつたんですか。と小さく呟いた。

そして、エリーが地面に下ろされる。

「わしは謝らなければならぬ事がある」

そう言つたジャオは、とても悲しそうな いや、そういうのじやない。優しい筈なのに……それが今にも消えてしまいそうな、そんな表情だ。

ジャオが言葉を続けようとすると、後ろにアルクノアの兵士が見えた。

「ジャオー！ 後ろー！」

「ぐぬおー!?

俺も気付くのが遅くて、ジャオは兵士に背中を強打されていた。そして、自分を殴った兵士の顔面を掴み、持ち上げた。もう一人ジャオを狙っている奴を見つけて、俺はとっさに矢を放つ。けど、一瞬間だけ遅くて、黒匣の電撃が放たれてしまい、ジャオに直撃してしまう。持ち上げた兵士を投げると、ジャオは地面に片膝を着いた。

「お前の殺された両親だが……殺した野盗ってのは……わしだ」「…………え?」

エリーが信じられないといふうに小さく声をもらした。
そりやそうだろう。一応敵と言う関係になつてはいたけど、それでもジャオはエリーをいつも案じていたんだ。そんな人が自分の両親を殺したなんて……言われても信じたくは無いだろう。俺
だって……信じたくは無い。

でも……だからこそ、罪悪感とかそういうので、ジャオはエリーを心配していたんだろうな。

「エリーゼ! カイト!」

ジユードが俺達を追ってきた。俺もエリーも、ジャオの一言で反応は出来なかつた。

戦場の中心となつているガイアスが力を振るい、アルクノアの兵士を一掃したのが、視界の片隅で見えた。

「これ以上お前を見守る事は出来ないだらつ……だから、生きてくれ

「……ジャオ……わん……」

泣きそうに、いや、雨で分からなければ、もうエリーは泣いているんだろう。ジャオの名を呼ぶけど、ジャオは立上がりつむりと歩いて行く。

もう動く事すらやつとな筈なの……。

「ジャオ！」

「小僧……いや、カイト、と言つたな。エリーゼの事、頼んだぞ」

「ま、待てよつ」

俺が走つてジャオを止めようとすると、エリーがすがるよつて俺の服を掴んできた。

俺を見上げるエリーは、これ以上無いつてくらいいじり泣いている。エリーを安心させるように頭を撫でながらジャオを見ると、ガイアスに近付いていた。何か会話しきものも何も無かつたけど、ガイアスはジャオの横を歩いて通り過ぎた。ワインガルとフレザも、ジャオに一礼してからガイアスを追う。

ジャオは、死ぬ氣……らしい……。

あいつの目の前には、百を超える程の兵士が居る。例えあれに打ち勝つ事が出来たとしても、無傷では無いし、上の戦艦からの砲撃を喰らつてしまえばそれで終わりだ。

いいのか……？ 俺は、何もしないでジャオを見殺しにしても……。

…。

「カイト、ひとまずミラ達と合流しよう」

「こんな所で立ち止まつてたら、狙い撃ちられるぞー」

立ち止まる俺に、ジユードとマルヴィンがそう言つてきた。

エリーはまだ泣きながら俺の服の裾を掴んでいる。走り出すジユードに腕を引かれて、俺とエリーも走り出す。

だけど俺は、エリーの手をほどいて立ち上った。

「カイア……？」

「何してるの！ 早く！」

動きを止めた俺を、エリーが心配そうに見上げている。

「ジユード、アルヴィン……エリーを頼んだ」

「え……？」

「お前、何言つて……！」

3人から視線をそらすように言つて、後ろからそんな声が聞こえてきた。

「やつぱり俺は、ジャオを見殺しになんてできない！」「だ、ダメです！ 行かないでください！」

俺を行かせまいと、エリーが腕にしがみ付いてきた。

「カイトまで居なくなつたら……わたし……」

声が次第に小さくなつていぐ。振り返つて、エリーの頭を撫でた。

「大丈夫、俺は死なないよ

「そんなの……分からぬいじゃないですかっ！」

どうしたら納得してくれるだろうか？ あまり考える時間は無い。

「……じゃあ、これ、預かってくれないか？」

ポケットから携帯電話を取り出して、エリーから貰ったガラス玉だけは外してからエリーに携帯を手渡す。

「それ、俺にとつては大事なものだからや。生きて帰つたらまた返してくれ」
「でも……っ」
「ジューード！ アルヴィン！ 頼んだからなー！」
「ちょつ……カイト！」
「何考えてんだよお前は！？」

エリーに携帯を押しつけて、ジューードとアルヴィンにそう言い残してから、俺はジャオの所に向かつて走り出した。
俺には何も出来ないかもしないけど、足手まといとかになるかもしれないけど！ ジャオ！ お前を見殺しになんてできるかよ！

「ジャオ！」
「小僧！ 何故来た！？」

俺が駆け寄ると、ジャオが怒声を上げる。
いつもなら怯むけど、俺もそんな余裕は無い。

「エリーの為だ！」
「何……？」
「エリーの両親を殺したって、そつと死のうとするなんて卑怯だろ！」

どうしようもないこの状況。誰か一人が全員を相手にする事によつて、みんなを逃がす。ジャオはそういう役目を自ら引き受けた。それは凄いよ。尊敬も出来る。
だけど……、

「あなたは生きて罪を償つべきだ！ 逃げるなんて許さない！」

「逃げ……か……。痛い所を突いてくるのぉ」

俺の意志が伝わったのか、ジャオが一瞬だけ表情を和らげる。

「しかし小僧……」この状況をどうしのぐつもりで来た？

「あなたの死ぬ気の覚悟と一緒にない、なんとかなるんじゃないかな。死なすつもりは無いけど」

「ふつ……面白いーー わしに付いてこれるか、小僧！？」

「上等ッ！」

俺とジャオが共鳴リンクして、強力な一撃を放つ！

「『ゲート靈力野……全開！！』イウハライダノンショウ轟霸雷断衝ツツッ！」

ジャオの渾身の一撃に、俺の雷の一撃も合わせ、沼野を揺るがすほど大きな衝撃波を放つた。巻き込まれた兵士達は吹き飛んでいく。

「はあ……はあ……これで、どうだ……？」

田の前に居た兵士達は全員吹き飛んだのか、姿は見当たらない。

「ジャオ！ 早く逃げるぞー！」

今逃げれば、兵士の追つても来そうにない。なのにジャオは、仁王立ちしたままハンマーを地面に投げ捨てた。

「すまんな小僧……わしはやはりここで終わりのよつじゅ……」

「何言つてんだよー。今ならまだ間に合ひやー。だから」

俺の言葉に、ジャオは首を横に振つて空を仰いだ。その瞬間、辺りが急に明るくなつた気がした。

ジャオの視線を追つてみると、空にある船の一隻の砲台が、こちらに向いている。多分、砲撃準備を行つてゐるんだろう。

駄目だ……あんなものを撃たれたら、今から走つても無事じゃ済まない。

考えるまでも無く、ただ本能がそつ告げている。

刹那、俺の身体がいきなり浮いた。

「小僧……Hリー・ゼを託したお前を死なせる訳にはいかん！」

ジャオにそつ言われて、ようやく俺はジャオに持ち上げられていく事を認識した。

「Hリー・ゼを……頼んだぞ……」

「待つ……？」

俺が何か口にじみつとしたその瞬間、俺はジャオに空高くに投げ飛ばされていた。

そして、

「ジャオ……！」

爆発音が聞こえたとともに、俺の身体は爆風に飛ばされる。そんな感覚だけを何故か感じながら、俺は意識を手放した。

第33話 壊れる殻（後書き）

まわかのジャオとの共鳴術技。でもやつぱりジャオさんは「いつな
つてしましました。

投げ飛ばされたカイトの運命やいかに！？

次回もお楽しみに！

第34話 合流 空いた穴

「……ツー？」

気が付くと、見知らない天井が視界に入ってきた。

「こ……こは……？」

身体を起こそうとする、全身に激痛が走る。けど、今の自分の状況を確かめようと、痛みを堪えて起き上がる。

辺りを見回しても、やっぱり見覚えは無かつた。

「…………俺、1人か」

フラッシュバックするように、あの時の記憶が蘇る。

結局……助ける事が出来なかつた。逆に助けられるなんてな……何やつてんた、俺……。

みんなも……エリーもちゃんと逃げられただろうか？

「……！ そうだ、キーホルダー！」

ポケットの中に手を入れて目的の物を探す。手に触れた物を取り出すと、綺麗なガラス玉が出てきた。

「……良かつた……無事だつた……」

無傷だつたガラス玉を手に握りしめる。
きっとみんな生きてる。そう信じながら。

「やつと起きたか？」

「え……」

いきなり声が聞こえて、その方向を見てみると、なんとそこには
イバルが居た。

「イバル！ 生きてたんだな！」

「当たり前だ。俺を誰だと思っている？」「巫子だぞ！」

いや……巫子は関係無い気がするんだけど……。

「それ以外でも……………なんだ?」

二・アケリアの俺の家だ

[6]

ニ・アケリア……つて、ファイザーバード沼野からビのくらに離れてるんだ?

よく分からなければ、かなりふくらはされたんだな。もしろ、何で俺生きてられたんだ？

「じゃあ、イバルが助けてくれたんだな」
「し、仕方なくだ！ 貴様がいきなり俺の上に落ちてきたからな！」

なんか照れ（？）ながらイバルがよく分からん事を言った。

「落ちてきたつて……？」

「あの後、ミラ様をワイバーーンに乗つて捜していたら、いきなり貴様が落ちてきたんだ！　おかげでワイバーーンが驚いてニ・アケリアに戻つてしまふし！　ミラ様の行方は分からずじまいだ！」

いつものよう呟くイバルに、思わず謝ってしまった。

「ジユード、よくあしらえたよなあ……」

「でも、助けてくれてサンキューな、イバル」「ふ、ふんつ……俺は借りを返しただけだ」「借り?」

何か貸してたっけ?

と言つか……イバルとはあまり会わないからな。そんな機会も無かつたと思つ。

「ラコルム街道の時だ! あの時、お前に助けられた借りは今返した!」

ああ……そう言えど、イバルが魔物に跳ねられそうになつたのを助けた事もあつたっけな?
イバルつて……意外に律儀だったのか。

「別に気にしなくて良かつたんだけどな

「それでは俺の気が收まらん! 返せバカ者!」

バカ呼ばわりされた!?

何だろ? めちゃくちや腑に落ちない……。

「つで、こんな事してる場合ぢゃないだろ。早く//ア達と合流しないと……」

「何!? //ラ様がどこ居るのか知つているのか!?」

「いや、知らない。けど、ここで寝てる訳にはいかないからな」

もしかしたら俺、死んでる扱いになつてゐかもしないし。
とは言えどもやつて搜そうか？ あんまりゆっくりしてゐる時間
は無いから、効率よく捜せねばいいんだけど……。

「あ……そつ言えばイバル。ワイバーン扱えるんだよな？ 乗せて
くれよ」

「団々しこぞ貴様！」

「頼むよ。お前だつてミラが心配だろ？」

ミラの名前を出すと、イバルが「うつ……」と後ずさりした。
本当にここにはミラに弱いんだな。まあ、自分が仕えている
訳だから仕方ないと言えは仕方ないんだらうけど。

そんな事を考えていると、イバルが踵を返して家から出ようと
した。

「お、おこ……イバル！」

「俺はワイバーンでミラ様を捜す。付いてくるなら勝手にしりつー」

と言つて出て行つた。

……とにかく、ワイバーンには乗させてくれるんだな。

「イバル、ありがとな！」

そう叫びながら、俺はイバルを追いかけた。

エリー、今行くからな。無事でいてくれよー

* * * * *

カイトがイバルと一緒にワイバーンでミラ達を捜そうとしていた頃、そのミラ達はカン・バルクの街の外れに位置する、ザイラの森の教会で合流していた。

「ミラー。」

先に到着していたジユードが叫ぶと、Hリー・ゼガがミラに抱き付いた。

「良かつた、みんな無事で……」

ジユードが安堵の息を吐きながら辺りを見回す。そこで異変に気が付いた。

「ミラ……カイトは……？」

「……会つてない。ジユード達と一緒に戻つていたのだが……」

「……そんな……」

一気にHリー・ゼガの表情が暗くなり、目に涙を溜めた。

「カイト君……さつと無事だよ……」

「さうですよ、Hリー・ゼガさん。の方なり、さつと……」

「……」

レイアとローハンの言葉にも、Hリー・ゼガは泣きやうになつて聞く

だけだった。

皆も俯きがちになつていていた。そんな時、宙に浮いた女性がミラリミラ話

し掛けた。

「誰だ？ 初めて見る者だか……？」
「え？」

ミラガミラがぞうせいと、ジユードが意外そつに驚いていた。

「私はあなたの姉です」「姉……？ 私に姉など居ないぞ」「どうこいつ事、ミラゼー？」

話が分からなくなつたジユードは、ミラの姉と畳つ女性ミラ

ゼに問い合わせる。

「私も話をするの初めでです。けれど私達は同時にこの世に生を受けた精霊である事は事実」「確かに……精霊である事は間違いない」

ミラガミラの氣配を確かめて頷く。すると、ミラゼは笑いながら畳つ。

「そんなに警戒しないで。姉と偽つてあなたを騙す意味など精霊には無いでしょ？ だつてあなたは、マクスウェルなのだから」「確かに……何の得にもならないもんね」

ミラの畳つ分に納得したのか、ジユードが頷いた。

「では、何故、ジユードの前に現れた？」

『ハリの間にに、またしてもコロゼは笑いながら答える。

「あなたの彼を思つ強い感情が、私を彼のもとに召喚させたのよ
「そんな事が、あるのでしょうか？」

まだ半泣きの状態のエリーゼが尋ねた。

その時、教会の扉が開かれ、中から四象刃フォーブのウインガルが姿を現した。

思わず皆が身構えるが、ウインガルには戦意は無く、ジユード達を手で制する。

その瞬間、何かの音が当たりに響き、ウインガルが「情報通りか」と呟いた。

そして、カン・バルクの方から鐘の音が聞こえてくると、次に聞こえてきたのは、ジランドの声だった。

『私はジランド。まずは、君達の街に強引に進駐した非礼を詫びよう。だが、我々の目的は支配などではない！　これは大国間による最終戦争を回避するための、非常措置だ』

ジランドの淡々とした声が響く。

『諸君の生活と安全は、アルクノアが責任をもつて保証しよう！　我々と諸君の願いはひとつ箒だ！　リーゼ・マクシアに平和を！』

そして、響いていた声は聞こえなくなる。
この場に居る誰一人として、ジランドの言葉を信用している者は居なかつた。

「ふざけた男だ。……ジランド。黒匣シンなどを使って人や精霊に害を

なしながら！」

「……もつ、あの者達を討つしか道は無いのではないかしら？」

ジランドの言葉に反論するよりまだ//リテ、//ユゼがそんな事を言った。

//リテは小さく頷く。

「しかし、どうあるおつもりですか？」

「そうだよね……あいつら、すごい強かつたし……」

アルクノアを討つ。それについては賛成だが、ファイザバード沼野での戦いを思い出したローエンとレイアがそう言つ。ほぼ奇襲と言つても差し支えないだろうが、それでもまともに戦う事は出来ていなかつた。

2人の不安は仕方ないものだらう。

「……アルヴィン。もう知つてる事、全部話してよー。」

少し離れた所で座つていたアルヴィンにジユードが言つが、アルヴィンはそれを無視したように歩き出した。

ジユードが怒りながらもう一度アルヴィンの名を呼ぶが、それさえも無視して腕に着いた鳥から何かを取り出していた。

「ガイアスは奴らに抗うのだらう？」

//リテが問い合わせると、ウインガルは何も言わずに教会の中へと入つて行つた。

「誘っていますね……わざと私達の前に現れるとは……」

「僕達を試してくるの？」

「眠……とか……？」

ジユード達が話していると、アルヴィンが皆に近付いた。何か覚悟を決めたようにも、焦ったようにも、自棄になつたよつこも感じる。

「……行こうぜ。ケリつけるんだり?」

「……アルヴィン君?」

「何か……あつたの?」

レイアとジユードの言葉には耳を傾けずに、アルヴィンはノリをまつすぐに見る。

「もう裏切らない……約束する」

「……信じるといふのか?」

これまでに何度も裏切られているからか、ミラが警戒しながら言う。

「ジランドは許せねえ。頼む……オレにジランドを殺らせててくれ。次にもし裏切つたら、迷わずお前の剣をオレに突き立ててくれてもいい。だから、オレも一緒に行かせてくれ」

必死に懇願するアルヴィンは、いつになく真剣だった。

「駄目だと言つたら?」

「……オレだけでも奴を殺る」

覚悟は本気なのだろうと、アルヴィンの目を見て納得する。

「ふつ……いいだろ？ それに、この場にカイトが居たなら、必ずお前を信じると呉ってきかないだろ？ からな」

「……悪い……サンキューな……」

カイトの名が出たその一瞬、アルヴィンの表情が動いたが、誰もそれを気に留める者は居なかつた。

「ガイアス達の思惑も確認せねばな」

「ま、待つてください！ カイトはどうするんですか！？」

ミラ達が教会に入ろうと動き出すと、エリーゼがそう叫んだ。

「お前の気持ちは分かるが……いつこに来るか分からない者を待つていられる程、私達には時間は無い」

「どうしてそんな冷たい事が言えるんですか！？」

「エリーゼ……」

ミラの言葉に反感を抱くエリーゼが、涙を溜めながら叫ぶ。

「私はカイトが私達を信頼するのと同じよう、私はカイトを信頼している。カイトの一番近くに居ながら、エリーゼはカイトを信じてやれないのか？」

「信じて……ますよ……！」

「なら、今は前に進め。カイトが生きているなら、必ず私達を追いかけてくる筈だらう？」

エリーゼはカイトに託された携帯電話を取り出して、ぎゅっと胸に抱いた。

「『めんなさい』……ミラ……わたし……カイトを信じてます。だ

から……前に進みます

涙を拭きながらエリーゼが言つと、ミリは微笑んで教会の中へと入つて行つた。

「行こう、エリーゼ」

「……はい」

レイアに手を引かれて、エリーゼも歩き出した。一度だけカイトを搜すようにして振り返り、教会の中へと入つて行つた。

教会の中には、ガイアスと四象刃フォーナの姿があった。ただし、ジャオの姿だけは無い。

その事実が、エリーゼをより一層不安にさせた。

「来たか」

「……結局その男を信じると言つのか。意外と甘いな、マクスウエル」

ワインガルがアルヴィンを見ながらそう言つた。

「私達をここへ導いた狙いは何だ?」

早速、ミラが本題に入るよつに問ひ掛ける。

「我らはヤツらと雌雄を決すべく、立つ。お前達が勝手にヤツらに挑むというのならそれはそれでいい」

「だが、その前にお前には話してもうつぞ。お前がひた隠しにして

きた「断界殻の事をな」

ミラはその間も、表情を動かさずにしていた。

断界殻という初めて聞く単語に、ジューードも呟きながらミラを見た。

全員の視線が集まると、ミラはジューードを一瞥してから意を決したように口を開いた。

「今から一千年前……このリーゼ・マクシアは、私の施した精靈術
断界殻によって閉ざされた世界として生まれた」

「この世界が……ミラに創られた世界？」

そう言われても実感がわかないのだろう。レイアがそう呟く。それにティポも驚きの声を上げた。

「全ては、精靈と人間を守るためにだつた」

「閉ざされた、と言つたな。それでは断界殻の外にはまだ、世界が広がつていると言うのか？」

「うむ。その世界をエレンピオスと言ひ」

ガイアスの問いに、ミラが即答した。

今あるこの世界が閉ざされたもので、さらに外には世界が広がつていると言う。その事実に、この場に居た皆が驚きを隠せず、戸惑っていた。

「だが、クルスニクの槍について、私は大きな思い違いをしてしまつた。奴らはナハティガルに兵器と伝え、謀り、断界殻を打ち消す装置を作つていたのだ」

クルスニクの槍の本来の力。それは人を大量に殺してしまつ兵器

ではなく、ただ断界殻を打ち消すためのものだつたのだ。

「打ち消すだと……？ それに何の意味がある？」

ミラは分からないと首を振る。

「断界殻を打ち消し、エレン・ピオスにマナを還元する算段でもして
いたか……」

その弦きにアルヴィンは違うと答える。

突然口を開いたアルヴィンに、視線が集まつた。

「アルクノアはただ……帰りたかつただけだ。生まれ故郷のエレン
ピオスにな」

自分もそうだと言ひついで、アルヴィンは言ひ。

「この世界に閉じ込められた二十年余り……その為だけに動いてき
た。断界殻をぶち破る方法を見つけるか、断界殻を消すか……」

そう言つたアルヴィンは、ミラに視線を向けていた。

「断界殻を消す為には、生み出した者を排除しなければならない」
「……アルクノアがミラの命を狙つたのは、その為だつたんだね」

レイアが納得したように言ひ、ミラが静かに頷いた。

「解せんな……ジランド、何を企んでいる？」

何か思う所があるのか、ガイアスがそう言つと、エリーゼが何が

と尋ねた。

「アルクノアの目的とジランドの行動はそぐわないものです」

「エレンピオスから軍を呼び寄せる必要なんかない。リーゼ・マクシア統一……？ オレ達は……そんな事望んじやいない」

槍を発動させ、敗れた断界殻から軍が来たのは、アルヴィンも知らなかつたようだ。

「ジランドは断界殻がある今の世界のあり方を、何かに利用しようとしているのかもしれないな」

ウインガルがそう言つと、沈黙が訪れる。その沈黙を破つたのはアルヴィンだつた。

「そうか、異界炉計画だ……」

ジユードとアグリアが聞き返すと、アルヴィンは皆に説明するようになり言ひ。

「通常 精靈燃料化計画。まだオレが向こうに居たガキの頃、従兄が話してたのを覚えてる。黒匣の燃料である精靈を捕まえるつて話があるってな」

「つまり、ジランドの狙いは精靈の囮い込みつてワケ?」「だけど……それおかしいよ。精靈だけなら、あんな嘘つく必要無い。ジランドは……」

ジユードが頭に指をついて考え込む。そして、何かを思いついて見回しながら口を開いた

「靈力野を持つ僕達も一緒に、リーゼ・マクシアに閉じ込めるつもりだよ」

「リーゼ・マクシアの民を資源にするつもりか……バカげた事を

声には出さないが、ガイアスは恐らく憤りを覚えているのだろう。拳が強く握りしめられた。

「多分、ジランードは海上にあるアルクノアの本拠地に戻ってる。エンピオス軍も来てるんだ。船で近くにも厳しいぜ」

ファイザバード沼野を攻撃してきた空を駆ける船。あれが何十隻もある状態では、ジランードのもとへと辿り着くのは難しいだらう。「では、カン・バルクに停泊している、連中の空を駆ける船を奪つのはどうかと」

ウインガルがそんな事をガイアスに進言していた。

「あの人、さらっと凄い事言つてない?
「ですが、それしか手は無いでしようね」

驚いていたレイアが小さい声で呟くと、ローベンがそう答えた。そうしていふと話しえはまとまつたのか、ガイアスが「明日決行する」と言いだした。そして、ガイアス達が去ろうとした。

「待つて! ガイアス! 一緒に戦ってくれるんでしょ?」

立ち止まるガイアス達に、ジュードは自分たちの目的は同じだと告げると、ガイアスはきつぱりと切り捨てた。

「マクスウェルが勝手に断界殻を作り出し、我らをこの世界に閉じ込めている事実……これも知った以上は捨て置けん。お前達とはまた争う事になるかもしだね」

「そんな人達とは必要以上に馴れ合えないわ」

「お前達は勝手にやるがいい。が、我らの邪魔はするな」

ガイアス達は、ミラ達と共に闘する気は無いらしく、もう話す事はないとも言うように去つていった。

「もー！ 何あれー！」

ガイアスと四象刃が去つたのを確認してから、レイアが怒つたよう教会の椅子を叩きながら言った。

「奴らも手が足りないのだろう。情報を共有させたのが何よりの証拠だ」

「ああ言いつつも、今は私達をアテにしているのでしょうかね」

レイアをなだめる為にか、ミラとローレンがそう言った。

「あの……わたし、話を聞いていて思つたんですけど……カイトが居た世界って、もしかしてエレンピオスじゃないですか？」

「それは無いな」

椅子に座っていたエリーゼが、携帯を握り締めて立ち上がると、皆にそう言つた。だが、それはアルヴィンがすぐに否定した。

「何で分かるんだよー！」

「オレが居た時も、カイトが言つてた国も都市も聞いた事がない」

ティポが怒ったように言つたが、アルヴィンの言葉には説得力があった。

「でも、アルヴィン君が居たのって一十年も前なんでしょう？ その後に出来たんじゃ？」

「それこそ有り得ない」

今度はレイアが言つた言葉をすぐさま否定した。

「カイトが持つていた『携帯電話』。あれは黒匣でもなければ精靈術も使つてない。そんな物が普及する国が一十年ちょっとで出来る筈がない」

「もし、出来ていたら……？」

「黒匣よりもヤバい物を使つてる。だから、カイトの世界はエレンピオスとは無縁だと思つ」

それならば、もう一つ世界があるということになる。

そう思つたジユードがミリに視線を移すが、ミリは首を横に振る事で答えた。

「とにかく、今は休もう。ガイアス達に全てを任せせる気は無いからな」

「そうだね……明日も、戦いになるだろ？」

「ハビジユードが言つて、この口は解散となつた。//

第34話 合流 空いた穴（後書き）

第三者視点つて難しい……。状況把握を文字だけでやるのって……難しいですね（汗）

次回は空中戦艦の奪取まで行きます。
それにも、あの戦艦の名前つて何でしょうね？ 多分作中に出て無かつたと思うんですけど……。

第35話 空中戦艦奪取（前書き）

エリーの視点が結構難しい……。

第35話 空中戦艦奪取

今日ははとりあえず解散と言つ事になつたけど、わたしは礼拝堂の椅子に1人で座つていました。

もう日は暮れて辺りは暗いけど、ティポを抱いていれば暗さなんか恐くはありません。

でも……こういう時にいつも近くに居てくれるカイトが居ないのは……暗い事よりも恐くて、不安でした。

きっと生きてる。そう信じてるけど……。

さつきジコードが四象刃フォーヴのアグリア、フレザの2人と話している声が聞こえました。

あの状況で残ったジャオさんは、生きてる筈がないと。なら、一緒に残ったカイトも……。

「カイト君……死んじやつたのかなー？」

「！？ そ、そんな事無いです！ どうしてそんな事言つの、ティ

ポ！」

「どうしてって……エリーが思つた事を言つてるだけだよー」

「わ、わたしは……そんな事……思つてません……」

少しでも思つてしまつと、ティポが口に出してしまつ。

信じたい。信じてゐるのに……どこかでわたしは、そんな事を考えてしまつてゐる。

「ちゃんと……これをカイトに返すんです……

ティポにも見せるよう、カイトから預かつた『ケータイ』と言ふ道具を取り出しました。

「そういえば『』、何に使うの？」

「遠くの人とお話したり、お手紙を出すつて、カイト言つてました」

「なら、カイト君と話せるんじやないのー？」

「ティポ、賢い！」

言われてみればそうです。これがあれば、遠く離れたカイトとお話が出来る筈です。

早速、折り畳まれたケー・タイを開いてみます。

「……どうやつて使うんでしょう？」

「さあ……？」

ケー・タイを開くと、薄暗い礼拝堂を小さく照らしました。
何で光が出るんだる？ カイトの持ち物はわたしにとっては不思議な物ばかりです。

とりあえず、丸い形をしたボタンを押してみます。そうしたら、映し出されていた映像が突然パツと変わりました。

「何コレー！」

「わ、分からぬですよー！」

壊しちゃつたのかな？ 分からずに適当にボタンを押していくと、また映像が変わつてティポが映し出されました。

「ティポが映りました！？」

「えー！」

「あつー！」

ティポが動いてケー・タイを覗いてくると、ケー・タイに映つていたティポが居なくなりました。

「ビ」ー?」

「今、ティポが居たんですね!」

本当に不思議な道具です。

そう思っていたら、いきなりケータイが強く震え出しました。
ビックリして、わたしはケータイを床に落としてしまいました。

「な、なんだか、これ……?」

床に落としても、ケータイの震えは止まりません。
とりあえず映像を見てみると、そこには数字がたくさん書かれて
いました。

「ビ、ビービービー?」

わたしがビービーとか分からずに慌てていると、ケータイの震
えが止まりました。

「いつたい……何だつたんでしょう?」

「わかんないー」

「ヒーヒー……ビ」ー?」

ティポと顔を合わせて首を傾げていると、レイアの声が聞こえて
きました。

「あ、ヒーヒー、こんな所に居たんだ」

「どうしたんですか?」

「またレイアのお節介ー?」

「ティポ!」

……ティポはたまに、わたしが思っていない事も言いますよね。

「あはは、そうだよ、お節介焼きにきたんだから。もう夜も遅いし、
エリーゼは寝なきゃダメだよ？」

「もうそんな時間ですか？」

ケータイをじぐるのに夢中になつていたんですね。

「夜更かししたら、大きくなれな」よー？
「それはレイアもだよね？」
「あ、あたしはそこそこだからいいのー」
「ミラ君の方が大きいもんねー」
「あたしはまだ成長期なのー！」

ティポの言葉にレイアが怒るよつて言いました。

「大丈夫です。レイアは大きくなりますよ
「エリーゼも成長期だから大きくなるんじゃないかなー？」 とにかく寝よ、エリーゼ？」

怒つたようでも、すぐに笑つてくれる優しいレイアも、わたしは大好きです。

「はい、もう寝ますね。おやすみなさい、レイア
「うん、おやすみ、エリーゼ」

レイアにおやすみを言つて、わたしはティポを抱いて部屋に戻りました。

きっとカイトは生きていると信じながら、わたしは眠りについた

のでした。

* * * * *

辺りが暗くなつて、俺達は仕方なくシャン・ドゥに降り立つてい
た。

「で、泊まる金が無いのか……」

「何故巫子である俺が野宿などせねばならんのだ！？」

「それはいつのセリフだ！？」

街中で叫び合つのはかなり迷惑だらつたので……仕方ないじゃない
か。野宿は嫌なんだから。

旅の間財布は持つてなかつたからなあ……いつもジユードが計画
的に使おうつて言ってたから。

つてかそもそも、すぐに日が暮れる事に気付けば良かつたんだ
……。

（）、「シャン・ドゥは、近くに雪原があるからなのか、日が落ち
た今はめちゃくちゃ寒い。こんな所で野宿なんかしたら、エリー達
に会つ前に死んでしまいかねない。」

「あれ……君は……カイトじゃないか？」
「え……？」

イバルと言い争いをしていると、背後から声を掛けられた。

振り返つてみると、そこに居たのは何と、コルゲンスさんとイスラさんが居た。

イスラさんは俺を見ると気まずそうに視線を逸らした。……この反応は、コルゲンスさんにはまだ話していないんだろうな。まあ、俺が気にする事じゃないんだけど。

「こんな所で何をしているんだ？ 君達は確か、イル・ファンに言つた筈じゃ……？」

「それがですね」

コルゲンスさんは信頼の出来る良い人だから、何があつたのかを簡単に説明した。

「なるほど……はぐれてしまつたミリさん達を捜していたのか」「はい。暗くなつてきたんで、それで宿泊まろつとしたら金が無い事が判明してですね……」

「貴様、ミリ様と旅をしておきながら金すら持つてないとはな！」

「お前だって巫子のくせに何で一ガルドも持つてないんだよ！？」

むしろその方が不思議でならない。

「もう言つ話なら、私が出そつ

「コルゲンス！？」

まさかのコルゲンスさんの言葉に、イスラさんが驚いていた。
と叫うか、俺達も驚きだよ……。

「いいんですか？」

「構わないよ。君達には、いろいろと世話をなつた事もある訳だか

「うわ

その件はワイルドでキャラになつたんじゃなかつたんですか？
それほどひからかと言つと、世話になつたのは俺達の方だよな……。
むしろ世話になり過ぎ、きに思つてしまつべらいに。

でも、今は背に腹は代えられない。喜んでこの好意を受け取ろう。

「ありがとうございます、ユルゲンスさん。じゃあ、俺達行くんで
「ああ、ミラさん達と会えるといいな」

金の入つた袋を受け取つて、俺はイバルを引きずつて宿屋へと駆けこんだ。

とりあえず、寝床は確保できたのだった。

* * * * *

翌朝。教会を出たミラ達はガイアス達と合流していた。
朝早くから、カン・バルクは吹雪いでいる。

「空中に停泊している艦へは、どのように攻め入るつもりなのです
か？」

開口一番、ローハンがそう問い合わせた。

「城に繋いであるワイヤーバーンを使つ」

その問いに、ワインガルが機械的に答えた。この質問は、予想されていたのだろう。

「城まではどうする?」

「俺の城に向かうのに策を弄するつもりはない」

「大通りから突破する」

つまりは強行突破。ガイアス達は真正面から戦いを挑む氣でいた。

「そんな! 無茶だよ!」

「そうです。せめて一手に分かれて……」

そんなガイアス達に、ジユードが言つと、ローエンも続けて言つ。が、途中で言葉を切り何かを考え始めた。

「てめえらの意見なんて求めてねーんだよ」

座り込んでいたアグリアが、拒絶するよつとそう言つた。
ガイアスは、ジユードを見据える。

「ジユード、お前のなすべき事、分かつているか?」

問い合わせに、ジユードは力強く頷く。

「ミリヤを勝たせる……それが僕のなすべき事」

その答えに、ガイアスは一瞬だけ微笑したかのように見えた。
そして、ガイアス達は街の方に向かって行った。

「教会の脇から市街に続いてる道があるわ」

フレザが立ち止りそう言ひて、最後にアルヴィンを一警してからガイアス達を追う。

「もー！ なんで仲よくしてくんないのー！」

4人が素っ気なさすぎる事に、エリーゼが肩を落とし、代わりにティボがそう怒っていた。

「うふふ、どうしましょつか？」

「そうだな……」

「教会の脇を抜けて、裏道から市街へ入り、そこからは屋根伝いで城を目指しましょう」

悩み始めたミラフ達に、ローホンがそう言つた。

「そして、空中戦艦奪取と共に城と兵達を奪い返すのです。彼らは陽動を買つて出てくれたんですよ」

とても回りくどいので分からなかつたが、ローホンに言われて気付くと、レイアが「素直じゃないなあ」ともらした。

「では、行こー！」

ミラフの掛け声で、ミラフ達も城に向かう事になつた。

無事に市街に入つてから順調に屋根伝いで進んでいくと、急にジードが皆に伏せるように言った。ジード達が居る屋根の下では、今まさにガイアス達がアルクノアの兵士と戦っている最中だったのだ。

「ガイアス、強いですね」

次々と敵をねじ伏せていくガイアスを見て、エリーゼがそう呟いた。それにジードは、「凄い人だよね」と答えるように言った。

「ジード！ 後ろだ！」

「え！？」

突然のミラの声に振り返りうつとすると、ジードの横を衝撃波が飛んでいき、ジードが振り返った時には兵士を吹き飛ばしていた。

「そ、オレ達もさっさと行こうぜ」

立ち止っていたジードにアルヴィンが促して、先を急ぐ。

「苦戦していますね」

城まで後少しと言つ所で、ローベンがガイアス達を見ながらそう言つた。

「助けた方がいいんじゃない？」

レイアの提案にジードは迷つが、「私達が向かえば、彼らの陽動が無駄になる。任せるとかない」とミラが言つ。

そして下では、市民やカン・バルクの兵士達がガイアスに加勢し

ていた。

「あんなに人望があるんだ」

「お前の役目は……ミラを勝たせる事なんだろ?」

迷いが消えたのか、ジユードは領いて先に進む。

屋根を降りて城の中に入り、ワイバーンで空中戦艦へと向かった。

空中戦艦に降り立つ。

「まずは船橋を掌握しましょ!」

「船尾のあれじゃないか?」

ローハンの言葉にアルヴィンが囁くと、皆がその方向へと視線を移した。

そうしてみると、ミラ達が侵入した事に兵士達が気付き、ミラ達の前に立ちはだかる。

「ここからは力押しだ!」

ミラの掛け声と共に戦闘が始まる。

始めこそは順調に敵を倒していくミラ達だが、多勢に無勢。兵士は次第に多くなっていく。

「ちよつとかよつと、さすがに多くない!?」

兵士を棍で叩き倒したレイアがそう呟く。

「一手上に分かれよう。一方が艦橋まで辿り着いて、この船を地上に

降ろすんだ」

「確かに。そうすりゃガイアス達の支援もある。ソリの敵もソリで
かなるな」

ジユードの提案に、アルヴィンが兵士を斬りながら同意した。

「問題は誰が行くかですね」

ローハンがソリの面元の近くに立つ兵士を殴り飛ばして言った。

「僕はソリに残るから、ソリが行って
「ジユード……」

ソリが領ソリとしたその時、何か魔物が鳴く声が聞こえてきた。

「はーっはーっはーー！ 僕の地獄耳で話は聞かせてもらひたぞー！
「ソリの声ついで……」

聞き覚えのある声なのか、ジユードが眩きながら空を仰ぐ。

ソリの場に居たアルクノアの兵士達も、突然の声に空を見上げてい
た。

ソリには1匹の動物らしきものが浮遊していたのが、肉眼で確認で
ある。

そして、ジユード達にはソリと、聞き覚えのある声を聞く事にな
る。

「みんな！ 避けろよッ！」

「え……？」

その浮遊している動物から、何かが飛び降りた。

「あの声……まさか……！」

「！？ みんな！ 私の近くに！」

エリーゼが空を仰いで目を見開いていると、ミラがそう叫んだ。レイアがエリーゼの手を引いて、皆がミラの周りに集まると、ミラが空に手をかざし大きなマナの障壁を作り出した。

次の瞬間、マナの矢が雨のように降り注いだ。突然の声に戸惑っていたアルクノアの兵士達は、防御も何も出来ずに攻撃を喰らつ。

「これは……カイトの技だ……」

矢が降り注ぐ技を見たアルヴィンが呟く。

そして、技を放った張本人がミラ達の目の前に降り立つた。

* * * * *

「よつ、久しぶり。間に合つたか？」

ワイバーンから飛び降りて飛行艇に着地。目の前に居るエリー達に向かつてそう言つた。

俺が放つた技はミラが全部防いだようで、みんな無傷だった。さすがミラだな。

と言つた、エリー固まつてんな。

「よつ、じゃないよ！ あたし達まで巻き込んで！」

「少し反応が遅かつたらオレ達まで喰らつてただろ？」「！」

「う……」「、『めんなさい』……」

めぢやくひや怒られた。

まあ……避けろとは言つたけど、こんな足場の狭い場所で避けるつて結構難しいよな。

「何にせよ、生きていてくれて嬉しいよ
「そうですね。あの状況で生きているとは、さすがカイトさんです」

ローハン……それは褒められているのか？

「それにしても、どうして空から？ それにさつき、イバルの声も聞こえたよね？」

「ああ、イバルのワイヤーバーンに乗せてもらつたんだ」

俺がそう言つた瞬間、後ろの方で何かがぶつかり落下した音がした。
後ろを振り返つてみると、兵士達が固まつてゐる。イバル……着地ミスつたのか？

「な、何だ貴様らは……！？」

突然現れた俺とイバルを交互に見ながら兵士が言つと、イバルが落ちた所がいきなり爆発した。

そして、イバルが俺達の前に姿を現した。……額にたんごぶ付けて。

「あいつ、生きてたのか」

アルヴィンが呟いたのが聞こえた。

「おい、偽者！ 貴様の出番など無いー。ここからは俺の独壇場だ！」

「イバル！ うん、お願ひ！」

格好付けて言うイバルに、ジユードが即答でイバルに任せた。
一方的にライバル視しているイバルにはそれが面白くないらしく、
地団駄を踏んでいた。

……地団駄つて、この世界にもあるんだな？

「どうして貴様は俺の活躍に嫉妬しない！」

「あ……なら、やっぱり僕が。イバルは見てていいから」「はっ！ お前に活躍の場などない！」

本当にイバルの扱い方が上手いな、ジユードは。
と言ふか、イバルも単純過ぎるよな。

とにかく、イバルはジユードに手柄を渡さない為にも、兵士を蹴
り飛ばしながら船橋に向かつた。……って、よじ登つたよー！？

……アグリアもだけど……変な動きする奴が多いよな。

「優等生、隨時とあいつの扱い上手くなつたんじゃね？」

「とつさに思い付いたんだよ。前にもカイトがやつてたし」「え、やつたつけ？」

そんなにイバルを上手く操つた事は無いけどな？

「でも、ミラの事言わないんだね」

「ジューードが気になるのだろう。それで力が發揮されれば問題ない」

「巫子とか連呼するくせに、いいのかそれは？」

「さて、私達はイバルが制圧するまで時間を稼ぐぞ！」

兵士はさつきの技である程度は倒せてはいたけど、まだ数は居る。

「か、カイト！」

「エリー、話は後だ。今はここをビリビリかしないと」

「そ、そり、ですね……」

ようやく硬直が解けたエリーだけど、後で落ち着いてから話せばいいだろ？。

俺は剣を握り直して兵士に向き直る。さて、遅刻した分、働くかいといけないな。

そう思つて人一倍頑張つて戦つていると、突然放送が入つた。イバルが船橋を制圧したらしい。

「イバル！ この船を地上に降ろして！」

「貴様に言われなくとも分かつてゐる！」

ジューードの言葉に反発するように言つたイバルだけど、何をどうすればいいのか分からぬと言つた感じが放送で筒抜けだった。

そして、イバルが何かのスイッチを押した。

その瞬間、甲板に設置されていた兵器が動き出した。

「ヤロー、何しやがつた！」

「あいつ……やっぱりバカだ……」

「仕方のない奴だ……」

みんながそれぞれ愚痴つてから、俺達は兵器と戦つ事になつた。

「三ツ星煌めけ！ デルタレイ！ 続け、フラッシュショティア！」

3つの光の弾を生み出し敵に飛ばす。そして、光の魔法陣を描き
閃光を放つた。
けど、全く壊れる気配は無い。

「うわ……意外に堅いな……」「
「カイト、わたしと一緒に！」
「よし、やつてみるか！」

エリーと共に鳴レングして、兵器を一気に叩く。

「ティポ頑張つて！」「
「ティポに力を！」
「ティポルネード！…」「

弓に変形させ、矢の代わりにティポを構える。エリーと俺のマナ
をティポに集中させ、ティポを兵器に向けて放つた。
回転しながら飛んでいくティポは、兵器を貫いた。

「ただいま～」「
「頑張りました！」

帰ってきたティポをエリーが撫でた。

「他も終わつたみたいだな」

見回してみると、他の兵器も破壊されていた。
ようやく終わりか……。

「！」までだー！の船は完全に我らが掌握した！」

ひと息ついていると、ガイアスと四象刃、そしてア・ジュールの兵士が甲板に上がっていた。

「ガイアス達だけで、何とかなったのかもね……」

ジユードはガイアス達を見て、安心したように床に座った。

「……っ」「
カイト！」

気が抜けたら片膝を着いてしまった。さすがに疲労が溜まっていたみたいだ。

エリーが泣きそうになりながら走ってきて、抱きついてきた。ティポも珍しくすり寄ってきた。

その勢いで尻餅を着く。

「どうしたんだよ、エリー……？」
「よ……良かつた……です……ホントに……ひつくな……カイト……良かつた……」

泣きながらそつそつヒューイーを撫でる。

「！」みんな、心配させて……」

それしか言えない。他にも言つ事だつてあると思つけど……。
そうしていると、いつの間にかガイアスが近付いて俺を見下ろして
いた。

見下ろされると、さらに威圧感が増していく、思わずエリーを抱き締める腕に力がこもってしまう。

「ジャオはどうした?」

「……多分、死んだ……」

威圧感に負けないよう、エリーの温もりを感じながらガイアスの目を見て言う。

「……助けられなかつた……逆に……ジャオに助けられた……『めん……』

「そりゃ」

「……責めないのか?」

助けるとか死なせないとか言ってたのに、結局何も出来なかつた俺を。

「血の信念を賣つてした者を責める事はすまい」

「……『めん……』

もう一度謝ると、ガイアスは静かに去つて行つた。

「カイト……ジャオさんは……」

「『めん』エリー……落ち着いたら話すよ」

俺はそつ吐いて、またエリーを抱き締める力を強めてしまった。

第35話 空中戦艦奪取（後書き）

やつといこの小説の書きたかった部分第2弾です。空中から矢の雨降らす為だけにカイトの武器を「」に変形できるようにしたと言つても過言では無いです（笑）

次回は休息な感じなので短めだと思います。

～今回の共鳴術技～

・ティポルネード

神射鶏 + ティポ戦吼

カイトとエリーゼの共鳴術技。

マナを溜めたティポを「」で発射させる。発射されたティポは回転しながら敵を貫く。

第36話 休息の中の不安

空中戦艦を奪取した後、俺達はカン・バルクの城で今後どうするのかを決めていた。

とは言え、ほとんどガイアスが決めてるようなもんだけどな。とりあえず、動くのは戦艦の機能を掌握した後らしく、それまで休む事になった。

けど、俺達には と言つたミラには やる事があつたらしい。それは、

「イバル……勝手にカギを持ち出した挙げ句、クルスニクの槍を発動させた言い訳を聞かせてもらおうか？」

そう、ファイザバード沼野でイバルが何でクルスニクの槍を発動させたのか、その理由を聞いていなかつた。
まあ……これはもう尋問に近いんだけど……。

「お、俺はただ……ミラ様の為にと……」

「私の為になる事が何故槍の発動に繋がる？」

「し……四大様を助ければ……ミラ様は本来のお力を……取り戻すかと……」

ミラの鬼の形相に、イバルは半泣き状態だつた。
他のみんなも、こればかりは口出しが出来ずにいる。
仕方ない……俺が割つて入るか。

「ミラ、そのへんにしてやれよ。一応反省はしてるんだからさ」「だからと言って、槍を発動させた事を簡単に許す訳にはいかない」「イバルはミラを助けたかつただけなんだ。その気持ちが先走つて

こんな結果になつただけだ

俺だつて、大切な者が　エリーが危険にさらされていて、それを助けられるのはクルスニークの槍のような強大な力を持つたモノだけ。なんて状況だったら、使つてはいるかも知れないからな。

「許せとは言わない。だけど、償わせるチャンスぐらこ『えてもいいと思うんだ』

「わ、わたしからもお願ひします」

エリーがミラに言つた。

すると、諦めたように小さく息を吐いた。

「仕方ない、カイトとエリーゼに免じて、チャンスをやつ。イバル

「は、はいっ！」

「これからアルクノアの本拠地へ乗り込む。その時に皆が認めるような動きを見せてみる」

「お、お任せを！」

返事だけは良いイバルだつた。

とりあえず、これでイバルの件はひと段落着いたな。

やる事も無く、とにかく休もつと床に座つて壁に背を預けていると、エリーが隣に座つてきた。

俺を見てくるエリーは、何かを聞きたそうにしていた。

「あの……カイト……」

「ん？ ああ……ジャオの事、だよな？」

言ひにこべやうこしていろエリーの代わつて言つと、俯いて小さく頷いた。

「じめん……結局……ジャオの事は助けられなかつた……」

「……はい……」

エリーはジャオにも生きていて欲しいって、そう思つていた筈なのにな……。

「あいつ……最初から死ぬつもりで1人で残つたみたいなんだ……。エリーに両親の事話したのも、最期だつて覚悟したからだと思つ」

いや、したんじゃなく、しなければならなかつたのかもしれない。

「けど……ジャオは自分から死ぬべきじゃなかつたと想つ……。確かにジャオのおかげでみんな逃げれた。ジャオがあの選択をしてたからこそ、みんな無事だつたんだ。その行動は誰にも真似出来ないし、尊敬も出来るかもしれない」

でもジャオは、1つだけ責任を投げたんだ。

「エリーを見守る事。それを投げちゃ駄目だろ……」

最期には俺に託し、俺を助けてくれたけど、それだけは言いたい事だった。

「カイトは……ジャオさんがどうしてわたしを心配してくれていたか……分かりますか？」

「本当の事は分からぬけど……ジャオはHリーの事を大切に思つていたからじやないかな？」

「Hリーのお父さんとお母さんを殺したのこー？」

ティポが言つと、Hリーの肩がピクリと震えた。

「本当の事は分からぬって言つたら？　でも、ジャオがエリーを見る時は、娘を見守るよつた、そんな眼差しだつたと思つんだ」

「娘…………ですか？」

「きっと、Hリーの両親との間に何かあつたんだと思つ。両親が死ぬ前に、ジャオと約束を交わしたとかな」

「どつ…………なんでしょ」「」

全部想像　妄想と言われても仕方ない事だ。Hリーも首を傾げて不思議そうにしてゐる。

「眞実は分からずじまい、だけど、ジャオはエリーを大切に思つていた。それだけは、何となく分かるよ」

俺が同じようにHリーを大事に思つてゐる立場だからなのか、自分自身そつあつてほしこと思つてゐるからかもしれない。

「いじめんな、ほんぞ想像ばっかりで」

「いいんです……ホントの事は、もつ……分かりませんから……」

最近謝つてばかりかも、俺。

謝つたつて何も帰つてはこないのにな……。

「カイト、一つお願ひしてもいいですか？」

「まあ、俺に出来る事ならいいけど……」

俺がそつ答えると、エリーがいきなり立ち上がった。

「少しでいいですか？」ギュッて、抱きしめてくれる。「…………へ？」

「ナ、ナンダッテ！？」

よく言葉が理解出来ず立ち上がったエリーを見上げる。顔を真っ赤に染めたエリーは俯いているけど、俺座ってるから俯いても意味無いよ？

「あ……っと、わ、ワンモア……」

「…………ブリーズ…………。」

「か、カイト、わたしこいつぱい心配かけました！　だ、だからその……バツです！」
「ダンザイされるーー！」

「うわあ…………何その可愛い理由…………。

と言ふかそんなに叫ばないで！？　今通つてつた兵士が明らかに不審そうな眼差しを向けてたから！？

「でもや、空中戦艦で抱きつこてきたけど、あれは…………？」「あれじゃ足りません！」

「何が！？　そしてそれが本音か！

「…………ダメ、ですか？」

肩を落として、エリーが呟いた。

そんなされたら……やらない訳にはいかないじゃないか……。

「じゃあ、ひょっとだけな」

そう答えると本当に嬉しそうな表情になつて微笑んだ。

ああ……ホント可愛いな……。

そう思いながらエリーを抱き寄せた。空中戦艦に居た時も抱きしめてたけど、人の温もりつてやっぱり大事なんだな。温かいし、何よりも独りじゃないと実感できる。

でも……城の中で何やつてんだる、俺……。まあ、一応は兄妹つて認識だから別にいいよな？

とか思つていたら、城の入口からジユードが入つて来て、バッヂリ田が合つてしまつた。

「よ、よつジユード……どこ行つてたんだ？」

予想外と言つた……とにかく身体が動かなかつたから、エリーを抱きしめたままジユードにそんな事を言つていた。

「ミラとちよつと話してたんだ。もうやれやれ出発するみたいだから戻つて来たんだけど、カイトとエリーゼは何してるの？」

「え、いや……これは……」

「兄妹のカンドーの再会だからねー」

俺が言葉を濁していたら、代わりにティポがそう答えていた。
ジユードもそれに納得したように笑つた。

「もうすぐで行くみたいだから、遅れないでね？」

「ああ、分かった」

ジューードが去つて行つてすぐには、エリーが俺から離れる。引いて行く温もりに寂しさを感じながらエリーを見ると、まだ顔を赤くしていた。

「大丈夫かエリー？ 顔真っ赤だけど……」
「カイトも赤いですよ？」

言われても全く実感がわかない。

「そうです、カイト、これ

と、手渡して来たのは、俺がエリーに預けていた携帯だった。

「ちゃんとお返ししますね」
「ああ、ありがとな、エリー」

受け取つてすぐに、エリーから貰つたガラス玉を付け直す。うん、やつぱりここに無いとしつくじこないな。

「いろいろいじつちゃいました」

「ふしきおもしろかつた」
「ははは、そりやよかつたよ」

いじつたつて言つても、字が読めない筈だから……なおさら危険だ！？

「それに、そのケータイ、いきなり震えだしたんですよ」
「変な数字がいっぱいだったよねー」
「数字……？ まさか……！？」

ポケットにしまおうとしていた携帯を慌てて取り出し、着信履歴を開いた。

確かに一番上の最新着信は、ついこの間のようだった。そして、その番号には見覚えがある。

急いで着信履歴から掛け直す事にする。

出るよ……頼むから出てくれよ……。

願いが通じたのか、ホール音が途切れ。

「もしもしー 華沙音ー 聞こえてるかー!?

見覚えのある番号。それは、俺が居た世界での俺の幼馴染
村華沙音の携帯電話の番号だった。
藤ふ

だけど、いくら呼びかけても一向に向こうからは何も音が聞こえない。そして、

ブツンツツーツー。

電話が切れた。

携帯の画面を見てみると、アンテナは相変わらずに立っていない。なら、今のは何だったんだ!?

「カイト……どうしたんですか?」

「!? あ、いや……何でもないよ

「む……」

心配そうにしていたエリーは故か不機嫌な表情になり、そして何故か、決意したようなそんな表情になつた。

「わたし、絶対にカイトに見合つ女性になりますね!」

「……はい？」

またもや唐突な発言に驚いていると、エリーはティポを連れて走つて行ってしまった。

考えていた頭が完全にフリーズした。何故このタイミングで？それに、逆に俺が見合つかが心配なんだよな……。エリー、大人になつたら絶対に綺麗になるだろうからな……。

「ま、元気だからいいか」

そう言つ事にしておこう。

考え方は……俺には分からぬからまた今度考えよう。

謁見の間の前に行くと、既にミラ以外のみんなが集まっていた。

「あれ、//リは？」

「ミコゼと話があるみたいだよ」

ジユードがそう答えて、俺は改めて首を傾げた。

……ここで聞くべき、だよな。何も知らずに戦うつてのも、何か気持ち悪いし。

「今さらだけども……//コゼって誰？あと、あの空中戦艦つて何

？」

「……かつて言えば、カイトには話してなかつたよね、いろいり

と言つ事で、俺が居ない間に話された事を説明してもらつた。

//コゼがミラの姉だと言つ事。このリーゼ・マクシアはマクスウ

エル ミラが創り出した事。その外の世界はエレンピオスと言い、アルクノアはそこから来た事。異界炉計画の事。ジランドがリーゼ・マクシアの人々を異界炉計画に利用しようとしている事。いつきに話されたからこんがらがつたけど、まあ理解は出来たと思う。

「何というか……途方のない話だな」

まさか、この世界が閉ざされた場所だとは思わなかつた。

「すまない、待たせたな」

話していると、ミラとユゼが合流する。
これで全員が揃つた。

「それじゃ、ガイアスの所に行こうぜ」

「お待ちください、陛下さん」

真剣な表情で、ローハンがみんなを呼び止める。

「この戦い、ガイアスさん達も本気のようです。準備だけは怠らな
いようにしましょう」

「みんな準備出来るか?」

ローハンが言つた事に、俺が続けてみんなに問い合わせた。
本気なのはガイアスだけじゃない。俺達だって本気だ。

「私はもちろん、出来ていますよ」

「あたしもだよ」

「オレはいつも行けるぜ」

「わたしも、大丈夫ですっ」

「かつとばすぞー！」

「僕も万全だよ」

「私は……わざわざ言う必要もないだろ？」

みんながそれぞれ答えた。

準備とやる気は万全。わざわざ聞く必要は無かつたな。

「カイトはどうなんですか？」

「俺か？　俺は　」

エリーに聞かれて、俺はみんなを見回す。

「もちろん、準備万端だ」

俺がそう言つと、みんなが頷いた。

「よし、行くぞ」

そして、ガイアスのもとへ向かい、アルクノアとの決戦へ行く為に空中戦艦に乗つた。

これが　最後の戦いになればいいと、そう思つた。

第36話 休憩の中の不安（後書き）

原作ではありませんでしたが、イバルを一応は責めてます。それでもカイトはお人好しといつか甘いですね……書いてて思いましたが（笑）

そしてオリジナルキャラが名前だけ出てきました。一応作中でも絡めますが……どうなる事やら。
次回はジルニアに向かいます。

第37話 敵の本拠地へ

出発準備が整い、戦艦に乗り込んだ俺達はそこで驚くべき光景を目撃した。

ア・ジユールの兵士が沢山居る。それはまあ数は驚くけど、ここはア・ジユールの首都カン・バルク。別段驚く事じやない。

それなら何に驚いたのかと言うと、ア・ジユールの兵士に混じつて、なんとラ・シユガルの兵士が居たからだ。

「ラ・シユガルの兵隊さん？」

「何でこんな所に？」

「私が召集したんですよ」

さすがローエン。国間のございやをものともしないで、両国の兵士を共闘させるなんてな。

「つて……兵士の中にイバルもいるみたいだぜ？」

「ちゃんと償つ為に参加したのだろう」

ここで頑張らないとだぞ、イバル。

「陛下、陛下に一言を」

俺達が話していると、兵士達が並んだ前で、ウインガルがガイアスにそう言った。

ガイアスは兵士達を見渡す。

「かつて俺達はリーゼ・マクシアの霸権を争い、互いに剣を向けた。だが、この戦いはこれまでとは一線を画するものだ」

「これから戦いがどれだけ激しくなるのか、ガイアスは何となく
だけど分かっているんだろうな。

俺も、これまでの戦いから想像するに、厳しい戦いになるんだろう
うと思つてゐる。

「敵の本拠地、ジル二トラの場所は既に分かっている。臆するな、
我が同胞よ！ 信頼せよ、昨日までの敵を！ 我らの尊厳を再びこの
手に！」

さすがガイアスだ。言つ事がいちいちカッコいいな。兵士達の士
氣は最高潮と言つていいだろ。

昨日の敵は今日の友と、この場はそう言つ事なんだ。

「船を出せ！」

「お、お待ちください！ リーゼ・マクシア全域に高出力魔法陣の
展開を感知！」

戦艦が動くと思った瞬間、そんな報告があつた。

そして、マナが吸われる感覺に襲われた。この場にいる全員から
いや、リーゼ・マクシアのあらゆる生命から、マナの吸収が始
まった。

「マナが……抜ける……」

「この感覺は……？」

「クルスニクの槍のマナ吸収機能を世界中に向けて使つたんだ！」

やつぱりか……ジランドの奴……異界炉計画つてのをマジでやる
つもりらしい。

「民を犠牲にはさせん……リーゼ・マクシアは俺が！　今すぐ船を出せ！」

マナを吸われながらガイアスが指示を出した。

そして、戦艦は発進して空高くに飛び上がった。雲の上まで出ると、よつやくマナ吸収の範囲から逃れる事が出来た。

「なかなか……マナ吸われるのって……嫌だな……」

何で言うか……生氣を吸われる感じだろうか？
とにかくいい気はしない。

ファイザバード沼野の時はそれ程気にしなかったのにな。
とりあえず、アルクノアの本拠地 ジルニトラに着くまで休んでようか。

エリーも具合が悪かつたらしく、レイアが医務室へ連れて行っていた。

「そりいやカイト、お前自分の世界に帰る方法、見つかったのか？」
「あ……」

休もうとしてこきなりアルヴィンに問い合わせられて、思わず固まつてしまつた。

いや……忘れていた訳じゃない。けど、今までほとんど探してる余裕と時間は無かつたからな……。

それに、一応少しあは時間自分で見つけて探した事はあった。けど、何一つとして使えそうな情報は無かつた。

「お前……忘れてたのか？」

「いやいや、そんな事はないからな！？」

「……ホントかよ……？」

呆れられてしまった。

まあ……そうだよな。普通なら自分の世界に帰る為にいろいろ動く筈なんだろう。けど俺は、この世界の生活に慣れてしまっている。帰つたつて俺にとつては冷たい世界だ。争いはあるけど温かいこの世界の方が、住みやすくなっている感じが生まれつづあった。

「ど、どりあえず……今はアルクノアを倒す事に集中したいんだ。中途半端には関わりたくないからな。やるなら最後まで行くよ、俺は」

帰る方法は後回しになつてゐるけど、一度関わつた事には最後まで関わり抜く。

そうじやないと、いろいろ氣にしてしまつて気持ち悪いんだよな。

「アルヴィンは……エレンピオスに帰りたいか？」

「……そりやな。今までずっとそうしてきただ」

一瞬表情が強張つたけど、すぐにアルヴィンは表情を元に戻して言つた。

そして氣まずやうにしてから背を向けた。

「俺はアルヴィンの手助けもしたいからな、力になれそうな事があれば言つてくれよ」

「お前は何でいつも……ツ！」

「え？」

「何でもない……何かあつたら、力借りるな」

アルヴィンの背中にそつとつと、最初は何を言つたか分からなかつたけど、そう呟いた言葉が聞こえた。

それから何も言わずに、アルヴィンが去つていった。

「どうしたんだ……アルヴィン？」

そう眩いた瞬間、突然戦艦が激しく揺れた。何が起きたのかを知ろうと辺りを見回すと、天高くに向かって光が放たれていたのが見えた。

「あれは……クルスニクの槍！？」

また発射されたのか！

俺は急いでみんなの所に戻る。

甲板にはみんなが集まつていて、光の柱の方を見ていた。

「なあ、あれって……」

「はい……クルスニクの槍みたいでした……」

俺が問い合わせるように言いつと、エリーがそう答える。

「光の発生源はジル二トラで間違いなさそうだ」

「あの光……また断界殻に穴が……？」

言われて空を仰いでみるけど、この前みたいに殻が割れるような音は無かつた。

「けど、前と違つて船が入つて来なかつたわね」

割れたようじゃなかつたのなら……もしかしてさつきのは……。

「マナを、エレンピオスに送つた？」

「そつみたいだな。戦艦が入って来なかつたのがその証拠だ」

アルヴィンが歯を食いしばりながら言ひ。

「アルヴィンの考えは正しかつたんだね」

「最悪な現実だけは、嘘にならないつてのが皮肉だよな」

ジユードが言ひと、アルヴィンが自嘲氣味に笑つた。

「アハハハハ！ 上等じゃない！」

アグリアの笑い声が聞こえて見てみると、小さく敵の戦艦が見えた。
もしかして……体当たりしていくる氣かよ！？

『「こちらに接近する敵の船がいるぞ！ 全員、衝撃に備えろー。』

イバルの声が聞こえると、こちらも戦艦が砲撃を開始する。敵の戦艦は俺達の上空を飛ぶようにして砲撃をしながら接近していく。と、急に降下し始め体当たりをしてきた。

「おつと、大丈夫か、エリー？」

「なんとか……です……」

「フラフラ～」

とりあえず大丈夫そうだ。

「早速お出ましか」

ミラが呟いたのが聞こえた。

そして、敵の戦艦から黒匣で武装した兵士が降りてきた。
こちらのア・ジユール、ラ・シユガルの混合軍の兵士が応戦する
けど、武装が違う過ぎるのか押され氣味だった。

「くつ……！ れやばくないか？」

「やうだね……まともに黒匣と戦つた事あるの、僕達だけだし……」

「！」

背中合わせにジユードと話していると、こちらに向かつてくる兵士が一人。攻撃を避けて弓で黒匣を射抜いて破壊した。

そして続けて、剣に戻して雷を纏わせ、敵の合間を縫いつぶしに走りながら黒匣を破壊していく。

「エリー、しんどくなつたら言えよ？」

「大丈夫ですから！ ブラッディハウリング！」

エリーが唱えると、闇のエネルギーが兵士達を巻き込んでいった。心配になつて声を掛けてみたんだけど……いつの間にこんな強力な攻撃術を？

けど、一向に敵の数は減らすに、むしろ増えてつてゐる氣がある。

「キリが無いよ、じいづら」

（ザマねえな。その程度かよ…）

ジユードの言つ通りなんだけど……ワインガルが何言つてるのかが全然分からん。応援してくれるとつておじう。うん、それが一番平和だ。

「ガイアス！」

ミラが叫ぶと、ガイアスが艦橋に向かつて叫んだ。

「IJのまま船をジルートラへ突つ込ませる。」

「マジかよ……！？」でも、状況が状況だ。一気に攻め入つて大将を討ち取る方が早いかもしない。このメンツだし。

そう思つていると、戦艦が急降下して行き一気に海へと着水した。衝撃が強いと思つたからエリーを抱いているけど……まさかここまで強いとはな。ほとんど不時着レベルだ。

海に着水するすぐに、巨大な船が見えた。

そして、上手い具合に隣接して俺達の戦艦が止まつた。すぐにジードとミラがジルートラに飛び移つてゐるのが見えた。

「エリー、掴まつてろよー」「はいっ！」

俺もエリーと一緒に飛び移ると、既に兵士が沢山いた。上空に居る敵の戦艦から大量に降つて來てゐるみたいだ。こちらの戦艦も断幕を張つて妨害をしてゐるみたいだけど、兵士が多くなる一方だ。これじゃ……ジランドの所に行くのにかなり時間が掛かつてしまふ。

「もう少い、『Jうちゅ』Jうちゅといつむせーつー！」

ミコゼが怒つたように上空に飛んで行き、敵の戦艦を何かの結界みたいなモノの中に閉じ込める。すると、戦艦の中心に重力が生まれたかのように、次々と丸まつて押し潰されていく。

「ミコゼ、凄い……」

「こんな力あるんだつたら、もつと早くに使つてくれよ……」

せつその戦いもやらずに済んだかもしれないっての」……。

「ジューードの使役のおかげ。力が戻ってきたよ！」
「それ程の力の持ち主だったのか」

ジューードの使役、ついミュゼが言つた瞬間、//の表情がピクリと動いたような気がしたけど、氣のせいだな。現にこいつやって普通に問い合わせている訳だし。

「セツサガ//の姉さん！」
「心強いです、//ゼ」

レイアとエリーもそう言つてこいた。

「私は//で皆様に力をお貸しします」
「どうこうつもりだ？」
「//を落とされたら作戦は終わりでしょう」

確かに……唯一の拠点として制圧出来たことを落とされれば、必然的に挟み撃ちに追い込まれてしまう可能性もあるからな。

「……任せていーんだな？」

渋々と//が//を聞いた時に微笑んで頷いた。

「ありがとう、//ゼ。気を付けてね」
「ジューード、//無事で」

2人のやり取りで、ミラが再び表情を強張らせたけど、ミュゼがミラを見るすぐに元に戻った。

「何だ、あれ？」

「ミラ、忘れないでね。あなたはマクスウェルなのよ」

「…………」

ミコゼが暗示でも掛けるようにミラに叫ぶと、一瞬だけ俺を見て笑った。それも、温かくなるような笑みではなく、冷たい氷のような感じだった。

俺がその意味を測りかねている間に、ミコゼは空へと昇つて行く。
……何だったんだ、今のは？

「時間はあまりありません。敵の増援を防いでいる間が好機です」

ローエンがそう言ったのに気付いて、俺は考えるのをやめた。
今は、ジランドを討つ事にだけ専念だ。

「なら、ここは一手に分かれた方がよさそうだな」

ミラはさつきのミコゼの言葉を気にしていたのか、少し聞をおいてそう言った。

その間に、ガイアス達は先に行こうとしていて、ジュードを一警する。

「分かつてると、ガイアス。僕のなすべき事を忘れるな、でしょ」

ジュードがそう答えると、ガイアスは俺達に背を向けた。

「ヤツらの企み。ここで必ず阻止するー。目標はジランド、並びに

クルスークの槍だ

そう言つてガイアス達が先に行こうとしたその時、空からイバルが降つて来た。

「俺にも手伝わせてください、ミラ様」

「カツ、ヒ笑うイバル。

「お前、まだ居たのかよ?」

「邪魔だからこいつちくんない」

ティボ……さりげなくひざいぞ?

「わ、分かっている。俺はガイアスにつけられん」

言葉を遮られて、いらないと言っていた。

「が、ガイアス……」いつ、何だかんだで使えると思つぜ?..

主に囮とかに……。

「それなら、ジャオの抜けた穴でも埋めてもらおうか
「余裕つ!」

ワインガルがそう言つと、イバルがそう即答していた。
と言づか……初めてアグリアとプレザがジト目してゐるのを見た気がする。なかなかリアだな。

しかしあま、ガイアス側の反応は冷たいものだ。

「よ、余裕だ！」

イバルも後ずさりながらももう一度言ひ辺りが、なんか凄いよ……。

認めたのかそうでないのか分からぬけど、ガイアスは先に進んでいく。

「ミリ様！ 汚名は必ず挽回しますからね！」

と言つて、イバルもガイアス達を追つて行つた。
……汚名は挽回するものじゃないぞー。

「アル……」

「何だよ？」

何か言いたそうな感じだけど、フレザは踵を返して「死なないで」とだけを言い残して先に行つた。

「私達も行くぞ！」

ミリのが促して、俺達もジランのあとへと急ぐのだった。

第37話 敵の本拠地へ（後書き）

いろいろと戦いのネタが残さきててもともとひびこのがせりひびきくなりつつあるこの現状です……。

とりあえず次回、あの2人との決戦です。

第38話 決着（前書き）

今回結構長くなりました。詰め込み過ぎたみたいですね（笑）。
それにしても戦闘が……。

第38話 決着

ガイアス達とは別の道を行く事になつた俺達は、扉を一つづぐると甲板に出た。

そこには、俺達を待ち伏せしていた兵士が居たけど、俺達は勢いそのままにそいつらを一瞬で倒した。

すると、兵士の一人が倒れた拍子に何かを落とした。

「何コレ?」

「これって……アーランシーバー?」

「アーラン……何?」

レイアが拾つた機械を見て咳くと、レイアが首を傾げた。

「あーえっと……通信機って言えば分かるか?」

「……?」

「連絡を取り合つのに使うんだ。貸してみ」

首を傾げるレイアから通信機を受け取つたアルヴィンが、通信機を受信に合わせる。

「カイトはこれを知つてたのか?」「..」

「まあ……俺の世界にあるからな」

実際に見た事はないけど。

アルヴィンが調整し終わると、通信機から音声が聞こえてきた。
兵士の話によると……イバルが捕まつたらしい。

「……助けに行くか?」

「いや、あれでもイバルは腕だけは確かだからな。心配はいらないだろ？」「う

これは、ミラは一応信頼してるのか？
話していると、また強い揺れが発生した。

「な、何だ？」

「精霊がまた大量に消滅した……」

「クルスニクの槍を使つたって事か」

と言つ事は、またリーゼ・マクシアで吸収されたマナが、エレンピオスに送られたのか。

時間が無い事を改めて思い知らされた俺達は、急いでジルニトラの中へと入つた。

入つた先は広い部屋で、天井には大きなシャンデリアのようなものがあった。

「す、」「い……」

「お城みたい！」

エリーとレイアがシャンデリアの下に駆け寄つて、そう騒いでいた。

「これで戦艦なの？」

「違うよ。このジルニトラは一十年前、エレンピオスの海を旅した旅客船だ」

疑問を口にしたジユードに、アルヴィンが即答していた。
まさかこの船が旅客船だとは……。

「一十年前に断界殻の一部が破られた時に、じつに来ちましたん

だ

「二十年前か…… Hレンピオスの軍勢に断界殻の一部が破られた時

だな」

「//」にも覚えがあつたのか、アルヴィンが言つた事に頷いていた。

「エレンピオスはクルスニクの槍もなく、どのようにして断界殻を
破つたのですか？」

「確かに……あんな物、そう簡単には造れないだろうしな」

「//」は分からぬといつよつと首を振つた。

「クルスニクの槍のオリジナルを、Hレンピオス軍が開発したんだ」
歩き出して話したアルヴィンに、俺達は付いて行きながら話を聞
く。

「//」が「知つてゐるのか」と問い合わせた。

「聞いた話だ。今あるクルスニクの槍は、それをマネして造つたも
んらしい」

「それって、精靈が欲しかつたからか？」

「エレンピオスは黒匣^{ジン}に支えられて発達した世界だ。黒匣と精靈は
文明の要なんだよ」

「どうして止めなかつたんですか？ 精靈を殺すなら、止めるべき
です」

エリーが思つた事を言つていた。

それで解決するような問題ならいいんだけどな。

「さつと、みんなアルヴィンと一緒に嘘つきで、野蛮なんだろー」「ティポ……野蛮は言い過ぎだぞ……」

嘘つきは自分で言つてたから、そこはフォローいらんだろつた。

「オレ、野蛮かー？ でもわ、黒匣が無けりや何も出来ないんだよ、オレ達は」

入つて来た扉から少しづつ向かい側まで来て、アルヴィンが足を止めた。

「オレ達に靈力野^{ゲート}とやらほねーのよ」

「えつ、そつなの？」

レイアがそう驚いていた。

口には出してないけど、俺も他のみんなも驚いていた。

「だから、精靈術は使えない。マナ操るなんてマネできねえんだ」「それで黒匣を使つていたのか」

「そゆこと。カイトは少し分かるんじやないか？」「ああ……分かるよ……」

マネ操る事が出来ない。それは俺も同じだった。

この世界に来た時は、精靈術なんか俺には使えないと思つていたんだから。

だつて、俺が居た世界じゃそんなのいらなかつたから。黒匣なんて物も無かつた。

もしかしたら、俺の居た世界とエレン・ピオスは、ひどく似ているのかもしない。

そう考へていると、アルヴィンが近くの扉に近づいていた。

「くそ、封鎖線を張りやがったな」

アルヴィンの皿の前には、薄い赤い線が張られていた。
それにティポが近付いたとすると、アルヴィンが手で止めた。

「なにこれー？」

「気を付けるよ。触つたら真っ一つだぞ」

「こわーー！」

ティポがいきなり頭に噛みついてきた。

あ……何か久しぶりの感覚。

「どうすれば……」

ティポを引き剥がすと、ジューードが悩んでいた。

その時、ミラが預かっていた通信機が何かを受信した。

通信によると、封鎖線は中央 つまりここだけしか張られていないらしく、これを発生させる為の機械以外の故障で、他の地区には封鎖線は無いらしい。

さらに、船の左右に封鎖線を発生させる発動機があるらしいと、通信してきた兵士が言っていた。

「どうやら、左右にある発動機を止めれば、封鎖線は消えるようですね」

「もひ、サクッと止めてこよひば」

「そんなに簡単に行かないと思つんだけど……」

そんな弱腰でどうするんだよ、ジューード。

じついう時こそ、こつものように正面衝突が一番だひつ。

「とにかく、左右の発動機を止めに行くぞ！」

エリックがそう言って、俺達は左右の発動機の場所に向かう事になつた。

* * * * *

「カイト、早く行きましょう！」

発動機がある部屋に向かう途中、襲いかかってきた敵と戦い終わるとエリーがそう言つてきた。

「元気なのはいいけど、もう少し慎重にな？　この戦には負けられないんだからさ」

「分かります。けど……」

俯いて言葉を濁したエリーの頭を撫でる。

「焦るなって。いつもの調子でやればいいんだ

「……はい」

「でも、いつもの調子だとカイト君はムチャするよなー？」

ティポの言葉に俺は苦笑した。

俺はそんなに無茶してるつもりはないなかつたんだけど、いつの間にか無茶しまくってるんだよな。ミラの無茶が移つたんだろうか。

「ま、そうだけじゃ。それが俺だから」「ふふつ、ですね。今さらでした」

笑いながら答えてくれたエリーにホッとした。
こうやってエリーが笑ってくれる。それだけで俺は頑張れる気がする。

大切な存在だから、絶対に守りきる。

「エリー、行こつか」「はい！」

エリーの手を引いて、みんなに追いつく為に走った。

* * * * *

右側の発動機を破壊して止めてから左側の発動機の所に行く途中、あたしはアルヴィン君の様子が少しおかしい事に気づいた。
おかしいと言うか……何て言うのかな、元気が無いかな?
いつも気配りしてるジユードも気付かないし、気のせいかな?

「レイア……そんなに見つめられると困るんだけど?」

「えっ、別に見つめてなんかないよ

アルヴィン君をずっと見ていたら、あたしの視線に気付いたアルヴィン君がそう聞いてきて、あたしは思わずそう返していた。

……確かに見つめてたのかもしれないけど、それは心配してたらだしなあ。ノーカンだよね。

「思いつきり拳動不審だぞ、お前?」

「あはは……氣のせいだよー」

ダメだ……思いつきり棒読みだ。

そんなあたしを見て、アルヴィン君が少し笑った。それを見ただけで、不安みたいな気持がスッと抜けて言った。

「よかつた、元気ないみたいに見えたけど、そんな事無かつたんだね」

「そう言つ心配はいらねえって。ほら、もっさと行かねえと置いてかかるぞ」

「分かつてゐる。行こ、アルヴィン君」

みんなに遅れないように、あたしはアルヴィン君の手を引っ張つて走り出した。

* * * * *

左右の発動機を破壊すると、中央の封鎖線が消えた。

そこから扉をくぐるとまた外に通じていて、そこを道なりに進むとまた扉があった。何となくで分かる。この先にジランドが居る。扉を開いて中に入ると、そこはかなり広い空間で、クルスニクの槍が置かれていた。その前にある階段に、ジランドが座っていた。

「」苦労なこつた。わざわざ……マクスウェルを連れて来てくれるなんてな

顔を上げたジランドがそいつに、アルヴィンに視線を移す。

「アルフレド・ヴィント・スヴェント。裏切った理由を聞かせてもうおつか?」

随分と長い名前だけど、それがアルヴィンの本名なんだろうな。

「簡単だよ。あんたが昔から大嫌いだつただけだ」

アルヴィンもジランドを睨みつけ、一步前に出ながらそう言った。すると、ジランドが立ち上がった。

「一生、リーゼ・マクシアで過ごす覚悟が出来たようだな」「……関係ねえだろ」

もうアルヴィンは、いつジランドを攻撃してもおかしくない状態だった。

ジランドはアルヴィンの言葉を聞いて笑うと手を振り切った。すると、いきなりジランドの周りに氷属性の魔法陣が無数に現れ、氷の槍が放たれた。

黒匣は見当たらない。なのに詠唱も何も無しの術に驚きながらも、みんなはかろうじて避けた。俺もエリーを抱えながら横に飛び退いて避ける事に成功する。

「なつ……どうやった！？」

「微精靈の消滅は感じていない！　どう言ひ事だ？」

避けたアルヴィンがそう言つと、黒匣の使用で無い事をミラが言った。

「ジランドオ！－！」

叫んだアルヴィンが銃弾を放つと、ジランドに当たる直前、魔法陣からセルシウスが現れ、ジランドの目の前に氷の壁を作った。銃弾は氷を貫げずに止まつた。

「また、あの精靈さんつ！」

「セルシウスか……！」

セルシウスは防御に使つた氷の壁を素手で殴りつけ、壊した。その破片がこちらに飛んでくるけど、ミラが障壁を作ってくれて、俺達は無傷で済んだ。

「あなたがマクスウェルとはな。隨分姿を変えたな」

セルシウスがミラの姿を見ながら言つと、ジランドがセルシウスの顔を殴つた。

「俺の許可なく、口を動かすな」

「はい、マスター」

殴られた所をさすりながら、セルシウスがそう答える。

「ひどい……どうしてそんな人に従つてるの？」

レイアがそうセルシウスに問い合わせると、ジランドがセルシウスの頭に手を乗せそれに答えた。

「道具は主人に仕えるのが当然だろ？」「

「精霊と人は一緒に生きてくものでしょ！ それを道具だなんて！」

「こいつは精霊だが、ただの精霊とは少々違う

レイアが怒りながら言つのに対して、ジランドは至つて普通だ。

「こいつは源靈匣オーリジンだ」

ジランドの言葉を、ジューードが復唱していた。

「増靈極オースターを使い、精霊の化石に眠つていたセルシウスを再現した。

「こいつは、精霊術自体が形を成した存在だ。」

精霊の化石つて……ミラが足に着けてる医療ジンテクスに使つて
る物か？

つまり……セルシウス自体はもう死んでいて、ジランドがそれを
蘇らせた？

「源靈匣のマナを、お前自身が術として使つてるのか！？」
「だから道具だつてんだ。納得したか？」
「出来る訳ないだろ！」

高笑いしながら言つジラソード、俺は叫んだ。

勝手に蘇らせて、それで道具のようご扱うなんて……倫理的にどうなんだ？

「あなた、最っ低ー！」

レイアも同じことを囁いていたりして、そう呟んでいた。

「それもこれも、やつのお嬢さんの増靈極のデータのおかげだ」

「なつー？」

「えつ……ー？」

ジラソードの言葉に、俺とヒローがほとんどの瞬間に声を上げていた。

「まさか……あの時……ティポのデータはロバーされていたー!?」「気付かなかつたか？ そうでなければわざわざ返す訳無いだろ？」「？」

確かに不自然だつたんだ……すんなり返してくれたあの時の事は、くそつー。どうして今になつて気付くんだよー。

「感謝してるぜ。源靈匣が生まれたのも、リーゼ・マクシアが燃料になつたのも、やつのデータのおかげなんだからよ

まるでヒローとティポの所為だとでも言つたが、言つて、ヒローは俯いた。

泣きそづなつてこるヒローの頭を撫でる。俺にはこれしか出来ないから。

「なんだ、嬉しくて泣きたうか？」

「あなたと言う人は！」

今にはローハンも怒ったよつで、ジランドに叫び。

「コンダクター指揮者。ジジイの出る幕はもつないぜ？ それとも、踊り足りないのか？」

「ええ。ジジイは、しぶといのが売りです。我が友を弄んだ事、決して許しません！」

剣を抜いて、ローハンがそう言った。

「僕達は負けない。絶対！」

ジユードが叫ぶと、ジランドは鼻で笑つた。

「何の力も野望も無いくせにのぼせ上がりてるてめえを見てると力ついてヘドが出るぜ！ 場違いなガキが！」

「あなたみたいな人が、力とか野望とか口にしないでよ！ 僕は、あなたが間違ってるのを知ってる！」

叫ぶジユードも武器を構えた。

「あなたの野望はここで終わるんだ。觀念しろよ、ジランド！」

俺も、武器を構えながらこう言つと、ジランドは俺を見ながらまた鼻で笑う。

「異世界から来たガキが。調子に乗るなよ」

「異世界からつてんならあんたらもだろ。ここはあんた達が踏み荒らしていい世界じゃないんだ。おとなしくしてろよ」

「こんなに綺麗な世界なんだ。こんな形で破壊されるのは嫌だ。

「もはやお前などと語る口は持つていないが……。最後に一つだけ問おう。お前とジューード達の違いが分かるか?」

「ハッ！ 知るかよ」

「どううな。だからお前は愚か者なのだ」

ミラリが剣を構えると、クルスニクの槍が起動し他たのか、音が出了た。

「そろそろ、マナの定期採取のお時間だ。マクスウェル、お前は生かしてやる。そして異世界のガキ。てめえにはいろいろ吐いてもらう事がある」

クルスニクの槍を一撃したジランドは、言ひながらミラリと俺を指差した。

吐いてもらいう事つて、また俺の世界の事かよ……。話せる事なんか何も無いってのにな。

「他のヤツらは皆殺しだ！」

銃に弾を込めて、俺達に向けた。

「リーゼ・マクシアの精靈と人は私が守るー。
「ジランド、僕はお前を許さない！
「片を付けてやるぜ、ガキどもー！」
「こつちもそのつもりだぜ、ジランドー！」

戦闘が始まつてすぐに、アルヴィンがジランドに向かつて突っ込

んでいた。そこに、セルシウスが横からジランドを守るために割つて入る。

「マスターはやらせません！ 氷転爪！」

「アルヴィン！」

セルシウスが両腕を振り払い、アルヴィンに当たる直前に俺はアルヴィンに体当たりで吹っ飛ばした。俺は剣でセルシウスの攻撃を防いで後ろに飛び退いた。

「一人で突っ走んなよ。仲間が居るんだから」

「ツ！？ ああ……悪い。そうだったな」

一瞬驚いた表情になつたけど、アルヴィンはそう言つて頷いた。

「いい的になつてるぜ！ スネアショット！」

ジランドが俺とアルヴィンに向かつて銃弾を放つ。俺達は互いに飛び退いて避けるけど、セルシウスが俺に追撃を加える為にスライディングで接近していた。

「氷槍撃！」

「くつ……魔皇刃！」

剣を思い切り床に叩きつけて衝撃波をセルシウスに喰らわせる。スライディングは止まつた。

「魔王雷撃波！」

さらに一回転しながら剣を振り抜き、広範囲に雷を発生させる。

「ぐあああー！」

「セルシウス！　お前は自由な筈だろー？　何であいつの言ひ事を聞くんだー？」

俺の攻撃に仰け反つたセルシウスに、そう問い合わせる。

「私を蘇させてくれたのはマスターだ。仕えるのは当然！　フリー
ズランサー！」

「それが道具としてでもか！　フォルスエッジ！」

無数に撃ち出される氷の槍を、俺は『』で矢を連射して撃ち落とす。

「やられません！　ブリッティハウリング！」

「くつー！」

槍を放っていたセルシウスが飛び退くと、闇の奔流から逃れた。
エリーが駆け寄つてくる。

「俺は、お前とは戦いたくない！　今ならまだ、俺達は分かりあえるだろー!?」

「そんなものは不要だ！　お前が戦わないのなら、今すぐ死ねッ！
サイカヒヨウロウ
彩華氷牢！」

足下から氷の槍が出てきた。俺はエリーと共に後ろに飛んで避けると、それが粉碎して氷の破片が飛んできた。

「うわあー！
「きやあー！」

攻撃を喰らつてしまい、床に倒れてしまつ。

「カイトさん！ ハリーゼさん！」

「ミラ！ 2人が！」

「余所見してゐる暇あんのかガキ！」

「わああつ！」

俺達を気にしたジユードが、攻撃を喰らつていた。

くそ……ジランドもセルシウスも、どちらも半端無いほど強い。

「アルヴィン君、行くよ！」

「ああ！」

「紅蓮爆発！ 炎塵爆破衝^{エンジンバッパショウ}！」」

アルヴィンが大きな火球を飛ばすと、レイアが空中から衝撃波を放ち大きく爆発した。

爆発を喰らつたセルシウスは、大きく吹き飛びが空中で体勢を立て直して着地していた。

「カイト！ 説得は無駄のようだ。覚悟を決めろ！」

立ち上るとミラに言われて、俺はセルシウスを見据えた。
やるしかない……でも、これはセルシウスを殺す為じゃない。俺は何が何でもあいつを助けるんだ。

「ジランド！ 絶対にセルシウスをお前から解放させるからな！ 文句言うなよ！」

「てめえみたいなガキに何が出来る！ セルシウス、来い！」

ジランドが叫ぶとセルシウスがジランドの背後に立つた。

「「死ねよ！ パーフェクトバニッシュュ！！」」

ジランドとセルシウスの2人が、それぞれが極太のレーザーを放ち周囲を掃射した。

威力は凄まじく、俺達は直撃こそは免れただけど、ダメージはひどい。

「エリー、大丈夫、か？」

「……だい、じょうぶ、です……」

なんとか大丈夫そうだけど、ダメージはかなりあるみたいだ。でも、なんとか立ち上がったエリーは、みんなを回復する治癒術を発動させた。

「くつ……ジランド！」

「まだ息があつたか？」

身体を起こすと、単身でジランドに突っ込むアルヴィンの姿が見えた。そして、それに続いてミラとレイアも突っ込んでいく。でも、セルシウスが割って入る。

俺も立ち上がって剣を握り直す。

「頼むよローエン！」

「分かりました！」

「碎ける闘氣！」

獅吼爆碎陣シコウバクザイジン！

ジユードとローエンの共鳴術リンクアーツ技が、ジランドとセルシウスに直撃していた。

「ちいっ！ セルシウス！」
「させないよ！ 兔迅衝！」

ジランドに近寄りうとしたセルシウスを、レイアが棍で鋭く突いて妨害していた。

「クラッグワルツ！」
「ぐ、あああああ！」

そこにローハンの精靈術が直撃する。セルシウスは大きく吹き飛ばされていた。

「カタラクトレイー！」
「ソウシヨウ
綜雨衝！」

ミラが光の剣をジランドに投げつけ、空中から追撃している間に、俺も無数の突きを放つ。

「ちいっ！ セルシウス！ 何をやっている…」
「あんたもこれで終わりだ！ ジュード！」
「行こう、アルヴィン！」
「リフレクトボミング…！」

ジュードが瞬時にジランドの背後に回り込むと、アルヴィンがジードに向けて火球を飛ばす。それを蹴り返したジュードは空に飛び、返された火球はさらにアルヴィンが斬り返し、最後にジュードが空中から火球をジランドに叩きつけた。

「ぐおおおお！」
「さらにつ！ 臥狼砲虎！」
ガロウボウコ

ジユードがサマーソルトからの落下して衝撃波をジランドに当たり、ジランドの身体は後ろに大きく吹き飛んだ。

「まだまだあつ！ 殺劇！」
サツゲキ

吹き飛ばしたジランドの先に回り込み、回し蹴りで受け止め怒涛の連撃を繰り出して、

「はああつ！ 舞荒拳！…」
ワガクエン

右手に力を溜めて踏み込み、一気に殴り飛ばした。

「がああああああ…」

ジランドは吹き飛び、また立ち上がりうとしたけど片膝を着いた。セルシウスもジランドに駆け寄るけど、戦う力は無いだらう。

「よつやく源靈匣を生み出せたってのに……くそ……」

悔しそうにジランドがそうもうした。

「あなたの目的はせいぜい、向こうのヤツらに恩売つて、のし上がるためだ。源靈匣とやらに何の意味があるって言つんだ」

「源靈匣は黒匣と違い、精霊を消費せずに強大な力を使役できる。だから、人と技術に溢れた、エレンピオスには必要なんだよ」

アルヴィンの問い掛けにジランドがそう答えた。

「どういう事……？」

ジランドは黒匣を取り出して話を続ける。

「エレンピオスは精霊が減少したいで……マナが枯渇し、消えゆく運命の世界だ」

「異界炉計画にそのような意味があつたとは……」

だから、マナや精霊があるここを燃料にしようとしたんだな。

「そんなの黒匣を使い続けたあなた達の自業自得じゃない……」

確かにレイアの言う通りだけど……俺の世界でも同じような事もあつたりするから……自分の事のように痛く聞こえた。

「源靈匣が広まれば、エレンピオス人もマナを得られる」

「今さら何を……一千年前、黒匣に頼る道を選んだのはお前達だ」

「俺じやねえ！」

昔の人気が楽な生活を追い求めた結果……その反動は現代人に襲つてくるんだ。

ジランドも……ただ悪い人間ではないのかもしない。そう思つていると、いきなりジランドが苦しみながら叫び出した。セルシウスも、身体が消えかかっている。

「おい、大丈夫か……？」

アルヴィンが駆け寄ろうとする所を、俺はすぐに駆け寄つて、ジランドと持っている黒匣に手をかざした。そして、マナを送る。

「何を……」

「俺はあんたも死なせないし、セルシウスも消させはしない！」

戦つた後でマナが足りるかは分からぬけど……絶対に生かす！
だけど、ジランドは俺を蹴り飛ばした。その拍子に俺は黒匣を手
に掴んだまま床に転んでしまった。

「ガキに助けられるぐらになら死んだ方がマシだ！」

立ち上がったジランドは、俺から距離を取った。

「俺が死んでもリーゼ・マクシアの運命は変わりはしねえ！ お、
俺達の計画は、断界殻ショルがある限り、続けられるぞ！ ザマアみやが
れ！」

そう言い残して、ジランドは床に倒れてしまった。
くそ……セルシウスだけでも助けるからな！

「死んじゃった……？」

「セルシウスを使った反動が出たのかもしれません」
「力を得るためとはいえ……高い代償だ」

みんなが呟く中、アルヴィンがジランドから何かを取っていた。
……あれば、拳銃？
そう思つていると、急に黒匣が光り始めた。

「な、何だ？」
「まさか、反動が？」
「カイト、それを手放して！」

いろいろ叫ばれるけど、俺はとつさの事に身動きが出来ずにして、

そして光がさらに強くなつて目が開けられなくなつた。

光が弱まつて目を開けると、そこにはセルシウスが立つていた。

「セルシウス……？」

「このマナは……まさかあなたは……」

「え……？」

何故か知らないけど、セルシウスが俺を見ながら驚いていた。
まあ、いいか……。

「……これでお前は自由だよ。どこにでも行くといい

マナを使いすぎたからか足がふらついて、床にへたり込んで言つ
と、セルシウスは首を横に振つた。

「私はあなたに付いて行きます」

「……は？」

「あなたのマナで、私は大精靈と等しい存在になりました。その恩
をお返ししたいのです」

「いや……別に気にしないでくれていいいんだけど……」

それに、どうせ付いてくなら精靈の主である//リ//に付いて行けば
いいのに……。

そう思つて//リ//に視線を移すと、「いいのではないか」と言われ
た。

「……分かった。とりあえずようしきくな

「はい、マスター」

「マスターって……俺はそんな柄じゃないんだけどな。

少し呆れていると、入口が開いてガイアス達が入つて来た。もちろん、イバルは捕まつたからここには居ない。

「既に決していたか

ガイアスが倒れているジランドを見ながらそう言った。

「一足先にな

「でも何だか、これじゃ……」

ジユードには何か引っかかる所があるのでどう。俺も同じだけど、もうひどいようもない。

「リーゼ・マクシアの為にも、アルクノアの野望は挫かねばならない」

そう言つたミラは、部屋の中央に歩いていつて何かの装置を操作した。すると、槍に吸収されていたマナだろうか。それが解放される。

ミラはそれから、以前見た四大精霊を召喚する為の魔法陣を描いた。そして、ミラの周囲に地水火風の大精霊が姿を現した。あれが……四大精霊か……。

「お前達、無事で嬉しいぞ」

無事を確認したミラは、クルスークの槍に向かつて歩き出した。それをガイアスが呼び止める。

「こればかりはお前でも邪魔はさせない。破壊する」

有無も言わせない口調でリラが指示すると、四大がクルス二クの槍を取り囲む。

そして、槍を壊そうとした瞬間に、突然船が強く揺れ、とてつもない重圧が俺達を襲う。

「な、何だよ……これ……」

「お、押し潰されちゃこます……！」

エリーが心配だけど、ヤバいなこれ……身体が動かない。

「セルシウス……エリーを頼めるか？」
「わかりました……」

さすが精霊だ。この重圧の中でも、苦しそうではあるけど動く事は出来るみたいだ。

「ここの程度の術……破つてみせる！」

規格外な能力のガイアスでも、この重圧は苦しいようだった。
床に倒れてないのはさすがだと思つけど。

「そうだ、クルス二クの槍を使つんだよ。あれは術を打ち消す装置なんだ！」

確かに……断界殻は精霊術で作られているんだから、それを打ち消すつて事は精霊術を消せるという事だ。

「だけど……、

「マナ……足りるのか？」

「残つてなかつたらどうするの？」

「……………」面元の全員がマナを振り絞つて槍に注ぎ込めば、あることは……

命懸け、か……。

確かにここで倒れる全員のマナを合わせれば、槍を起動させるだけのマナは十分過ぎる程あると思つ。

だけど、それでこの重圧が消えるかは分からぬ。もし消えなかつたら、それで終わりだ。

「はあああつ……」

そんな事を考えていたら、ミラがこの重圧の中で立ち上がつていった。クルスニクの槍へと、一步、また一步と歩いて行く。

そうか……クルスニクの槍のマナ吸収機能。それはだれかがその操作をやらないといけない。それをミラがやってくれるのか。

「マクスウホル……槍を起動させろ！」

ガイアスがそう叫う声が聞こえる。

そうして、ミラはクルスニクの槍のもとで辿り着いた。

「わざわざ命が死ぬ危険を冒す必要はない」

みんなに聞こえるように、ミラがそんな事を言つていた。
何だよそれ…………まさか……一人で槍にマナを注ぐ気なのか！？

「ダメだ……ダメだよミラ！」

重圧に耐えられなくなつたのか、床に亀裂が入つた。

「何故だ。あんたはその手で世界を……人々を守るんじゃないのか？　まだなすべき事が残ってるだろ！？」

「断界殻が消えれば……アルクノアの計画は完全に潰れる。そうだろ？」「

アルヴィンの言葉に、ミラがそんな事を言った。

やつぱり……1人だけでやるつもりだ。

1人でやれば……確実に死んでしまう。そんな事……させるかよ！

「僕は……ミラが勝つても……居なくなっちゃうんじゃ……」

「やめる……」

俺よりも先に動き出しあとしたジユードの腕を、アルヴィンが掴んでいた。

「何言つてんだよ、アルヴィン！　離してよ……本当にミラが死んじやう…」

ジユードは行けそうにないか……なら、俺が1人でもミラに加勢するしかないだろ！

「い、の……っ…」

両手両足に力を入れて、何とか立つ事に成功した。人間、やれば出来るもんだな。

足を引きずりながら、俺はクルスニクの槍に近付いて行く。

「カイト！　何する気ですか！」

「カイト君、ダメー！」

後ろでエリーとティポが叫んでるけど、振り返る余裕は無い。

一步進むだけでも、かなり辛い。でも、確実に槍に近付いている。そして、ようやくミラの所に着いた。ミラは今にもクルスニクの槍にマナを注ぐとしていた。

「カイト！？ 何故来た！」

「言わなかつたか？ 死なせないって……」

結果だけで言つと、助けられなかつた人の方が多いけど、それで も……。

「いいのか？ 死ぬかもしないんだぞ？」

「それでも……人が……仲間が死ぬのは見たくない」

「そうか……君も……」

ミラが何か確信したように呟いた。

「カイト！ ダメ……です！」

背後でエリーが叫ぶのが分かつて、俺は一度だけ振り返る。セルシウスに支えられながら、エリーが俺を見ていた。覚悟は決まってる。

「やだ、ミラ……カイト君……」

「ミラさん……カイトさん……」

エリーに続いて、みんなが叫ぶのが聞こえた。

「ミラが居なくなつたら……僕は……」

「そんな顔をするな……」

ミラがジュークを見ながら微笑んだ。この状況でそんな事が出来るんだ。本当にミラは凄いよ。

「カイトッ……」

もう一度、エリーが俺を呼ぶ声が聞こえた。俺も……ミラのようには笑えたら良かったんだけどな……。

「「はああああっ……」「

2人でマナを槍に注いでいく。

だけど、始めてからすぐに、俺は膝を着いてしまう。
この時点では気づいた。戦闘、セルシウスへマナを渡す、この2つで、俺のマナはもう限界が近付いていたらしい。
すると、近くにセルシウスの気配を感じた。

「このマナはあなたのモノ。一時的にあなたに返します
「サンキュー、セルシウス！」

セルシウスから mana を一時的に返還されて、もう一度槍に注ぎ込もうとしたその時、

「ツー？ ミラー！」

俺は火の大精霊 イフリートに捕まられて、槍から遠ざけられていた。

「済まないな、カイト」

「な……ミラー？」

槍にマナを注ぎながら、ミラは俺を見た。

「君が人の 仲間の死を見たくないのと同じよう、私も仲間を死なせたくないんだ」

「何だよそれ！ ふざけんなよつ！ 2人でやれば

「カイトのマナはもう死きてる。無理だ」

首を振ったミラがそう言つ。

そして俺は、イフリートに投げられて、重圧で床に叩きつけられた。

「//ハツー！」

叫んだ瞬間、クルスニクの槍が発動した。のしかかっていた重圧が消える。

「消えた……？ ミラー？」

槍の前に立っていたミラが、横に倒れそうになり、俺は急いで滑り込んで受け止める。

今にも消えただけど、マナを注げばまだ大丈夫かもしれない。

そう思った時、ミラを中心に魔法陣が展開される。

「なん……だ……これ……」

展開されると、急に力が抜けていく。この感覚は……マナをいや、生命力そのものを吸われているような感じだ。しかもそれはクルスニクの槍ではない。ミラにだ。やがて視界がブラックアウトして、何も見えなくなつた。

何だよ……これ……何で//ここ……?
だけど、すぐに吸われる感覚は無くなり、吸っていたのもが中
に流れ込んできた。

(これは……お前のものだらうへ)

マナに乗せられて、//リラの言葉が聞こえてきた。

(君まで……マクスウェルに踊らされる事はない)

何言つてんだよ? マクスウェルは……お前じゃないか……。

(カイア……君は生きるんだ)

その言葉を最後に、俺の意識は暗闇に落ちた。
//リラの言葉の意味を、理解する事もなく。

第38話 決着（後書き）

主人公……人助けられ無さ過ぎじゃないかなあ……もう少し上手い具合に書ければいいんですね。

結局ミラは死んじやうし変な謎も残つたままとなります。ちなみに、セルシウスを生かしたという事は、他のあの精霊とかも出ちゃうかもしれないです。

とりあえず、次回もお楽しみに。

第39話 気付くコト

「…………ミラッ！？…………あれ…………！」

気が付けば、俺はベッドの上に居た。辺りを見回すと、ヒリーが俺の寝ていたベッドに顔をうずめて寝ていた。

何だ……あれからどうなったんだ……？ みんなは無事なのか…？ 混乱した頭で状況を把握しようとしていると、扉が開いてローハンが入って来た。

「カイトさん。目が覚めたんですね」

「ローハン…………あれからどうなったんだ…？ 」「…………どこ

だよ？ みんなは？」

「落ち着いてください。順を追つて説明しますから」

俺が一気に問い合わせると、ローハンが俺を宥めるように囁いてきた。

「まあ…………何から話しましょうか…………」

「…………？」

話すべき内容が多いのか、ローハンが髪を触りながら悩んでいるのを見て、俺は真っ先に知りたいミラの事を聞いていた。

「…………ミラさんは…………」

「…………死ん、だ……のか……？」

ローハンは何も言わないけど、それこそが答えになっていた。頭のどこかでは分かっていたんだ。ミラが死んでしまったという

事は……。結局俺はまた……ミラを助ける事が出来なかつた……。
力になるつて……死なせないつて決めていたのに……。

「…………ミラさんが死んでしまつても……断界殻^{シェル}は消えませんでした

……」

「なつ…………？」

ロー・エンが言つた言葉が、信じられなかつた。

ミラが……マクスウェルが死んだら消えるんじやなかつたのかよ……。断界殻を消すために、みんなを守る為に敢えて自ら死を選んだのに……。

いつたい……何が起こつてゐるんだ?

「…………ジユード達は…………？」

「ジユードさんは、ニ・アケリアへ1人で向かつてしまつました」

「ニ・アケリアに……何で?」

しかも何で1人で?

「ニ・アケリアなら……ミラさんが居た場所でなら、何か分かるかもしぬないと思つたのではないか」

何かつて……何を……? ミラが死を選んだ理由?

「レイアさんもおそらくジユードさんを追いかけたのでしょうか……
2人から連絡はありません」

「…………アルヴィンは?」

「アルヴィンさんも……お独りでどこかに……」

と言う事は、残されたのは俺達3人か……。

みんな……バラバラになつたんだな。

「それで……ここはどこなんだ？」

「サマンガン海停の宿屋です。一度、カラハ・シャールへ戻るうと思いまして」

どうして？　問い合わせようとしたら、エリーが目を覚ました。

「カイト、よかつたです……」

「ああ、心配かけてばっかでごめんな……」

言いながら頭を撫でるけど、表情は悲しそうな感じだ。

ミラが死んでしまった事で……みんなバラバラになつたんだな……。

……俺は、ミラの力になりたいって……なのに、また……。

「俺……また助けられなかつた……。ナハティガルの時も……今回も……肝心な時に俺は無力だつた……。これじゃ……何の為に強くなろうとしたんだか……分かんないな……」

俺は　俺達は……ミラに頼り過ぎていたのかもしれない……。

「カイトは、無力なんかじゃないですよ……」

「無力だよ……俺は何も出来なかつたんだから」

俺を元気付けようとしているのかエリーが言つけど、俺は否定する。

だつてそうだろ？　力があつたなら、ナハティガルも、ジランドも、ミラだつて助けられた筈なんだから。

「違います！」

だけど、俺の否定をエリーは否定した。

「カイトはいつも、みんなを助けるのに全力で……例え自分が死にそうでも、人を助けてます！」

「けど！ 結果は誰も助けられてないじゃないか！ みんな……死んでるだろ！ 結局俺は誰も助けられないんだよ！」

「嘘ではありません！」

エリーに向かつて叫ぶと、何故かローエンからそんな声が飛んできた。

「カイトさん……あなたは私の主 クレイン様を助けてくれたじやありませんか」

「だけど……助けられたのはクレインだけだ……」

「それでも、人の命を助けたのには変わらないです……カイトは無力なんかじや……」

言いながら、エリーは泣いてしまった。

ああ……何やつてんだろ、俺……エリーまで泣かしてさ……。

2人は俺がこれまでしてきた事を、ちゃんと証明してくれてるのに……。俺を信じてくれてるのに……。

「自暴自棄になつてはいけませんよ、カイトさん」

「うん……」じめんな、ローエン……エリー……

「分かつてくださればいいんですよ」

そう言つてくれると助かるな……。

俺はエリーの頭を撫でながらもう一度謝る。

バラバラなんかじゃない。みんなを信じるんだ。

ローハンの言つ通り、ここで血暴自棄になつたや駄目だ。ミラが居ない今、俺は俺のやるべき事をしよう。

と、ここで、ミラが最期に言つていた言葉を想い出した。

『君までマクスウェルに踊らされる必要は無い』って、そつ言つていた。

どういう意味なんだ？ ミラがマクスウェルなんじゃないのか？いや……何かがおかしい。そもそも、ミラは自分が死んだら断界殻が消えると分かっているのに、何でわざわざ自ら危険を冒して戦ってきたんだ？ この旅でも、死んでしまうかもしない事は多かつた。マクスウェルの使命と矛盾しているんじゃないのか？

ミラの最期の言葉は、まるで自分がマクスウェルで無いと、そう言つていてもう思えてる。もしかしたら……マクスウェルは別にいる！？

「カイト、どうしたんですか？」

「俺……俺も、ニ・アケリアに行つてくれる」

ベッドから立ち上がりつて、俺はそう言つた。

こつものよつと、考えてちゃ分かんないからとにかく行動あるみだ。

「わ、わたしも行きます」

「いや……悪いけど、俺一人で行く

「どうしてですか？」

当然ながら聞いてくるヒリーの頭を撫でる。

「頼めるか、ローハン？」

「理由は話されないのでですか？」

「『Jめん……頭の中整理したいから……1人になりたいんだ……』

それは建前で、本当は理由なんか無かつた。ただの我が儘だつた。

「すぐに俺もカラハ・シャールに向かうからさ。な、エリー？」

「……分かり、ました」

納得はしていないだろけど、エリーは一応頷いてくれた。
そして俺は、1人でニ・アケリアに向かう事になった。

* * * * *

サマンガン海停からイラート海停に向かい、そこからハ・ミル経由でニ・アケリアに向かおうとすると、海停の出入口で見知った後ろ姿を見つけた。

そいつはすぐに海停を出たから、俺は走つて追いかけた。

「アルヴィン！」

その背中　　アルヴィンに声を掛けたのは、間道に出てすぐの所
だつた。

だけど、アルヴィンはこっちを向かなかつた。

「1人でどつか行つたつて聞いたんだけど、やつぱりアルヴィンも

ジユードを追ひて一・アケリアに行くとじだつたのか?「

そう問い合わせると、アルヴィンはよつやく振り返った。

いつも持つっていた銃を俺に向けて。

「お、おー……アルヴィン?」

「ハコゼと取引したんだ……お前達を殺せば、レンピオスに帰してもらえる」

その言葉に、俺は目を見開いた。

「冗談……だろ……?」

問い合わせても何も答えない。ただ、銃口を俺に向けるだけだ。アルヴィンの目を見て、俺は剣を鞘ごと放り投げて両腕を広げた。

「何の……つもりだ……?」

「撃ちたきや撃てよ、アルヴィン」

俺が言つと、今度はアルヴィンが目を見開いていた。

「お前、正気か!?」

「俺は正気だよ。仲間だし、信じてるし。アルヴィンじゃ、本氣で俺を 僕達を殺すつもりか?」

日に見えて、銃を持つ手が震えているのが分かつた。アルヴィンもきっと迷つてゐるんだ。殺したくなんか無いと思つてゐる筈だ。

「お前は……いつもそうやって! オレを信じるとか言いやがって

！ 何でオレなんかを信じようとするんだ！ 疑ってくれれば……

罪悪感なんか感じなかつた！」

「人を 仲間を信じるのに理由はいらないだろ？」

「ツー！」

アルヴィンが銃で俺を殴ってきた。

「ツー……アルヴィン！」

次は銃を持つていない右手で殴られ、さらに蹴り飛ばされて地面に転がつた。

そして、アルヴィンは俺の両足に向けて銃弾を3発ずつ撃ち込んだ。

「があツー！」

「…………これでじばりく動けねえだり…………お前は最後に殺してやるよ…………ヒリーゼと一緒にな…………」

「アル、ヴィン……！」

立ち上がるううとしても足に力が入らない。

俺は歩いていくアルヴィンをただ眺める事しか出来なかつた。

第39話 気付くモノ（後書き）

少しばかり不安定な感じでしたけど、次回に続きます。

第40話 気付かされたコト

「……お前達を殺せば、エレンピオスに帰してもうかる……//コゼ
と取引した」

アルヴィンが僕に銃を向けている。

「……//コゼ」

「//コゼ……//リのお姉さん……。

思い出されるのは……ニ・アケリアで彼女と会った時の事だ……。

//コゼは、ニ・アケリアの人達を殺していた。

//コゼは……僕達を……。

『だつて私は断界殻シェルを知つてしまつた人を、殺すのが使命なんです
もの』

僕達を殺すつもりだつた。

「いいよ……もう、好きにしてよ……」

//リも居ないんだ……。

そう答えると、アルヴィンは僕の胸倉を掴んで額に銃口を押しつけた。

「何でも受け入れて……そういうのがムカつくんだよー。」

押しつけてくる銃を持つ手が震えている。

撃つなら早くして欲しい……額の痛みが嫌だ……。

「ダメー！」

横からレイアがアルヴィンに掴みかかって、銃口を僕から離した。

「いのつー。」

アルヴィンは銃を撃ちながら、レイアを振り飛ばす。

レイアが床に倒れている間に、アルヴィンは銃に弾を入れようとしていた。けど、再びレイアに体当たりされて銃を床に転がした。

「来てー！」

放つておいてほしいのに、レイアは僕の手を掴んで小屋の外に連れ出した。アルヴィンの怒声が聞こえる。

外に出るけど、僕は足に力が入らずに地面に倒れ込んだ。

「ジューードー 逃げなきゃー！」

レイアが駆け寄つて来て、僕の身体を揺さぶる。

「何の為にミラガ命を懸けて使命を果たそうとしたのか、思い出してー！」

そうして起き上がりされて、レイアに走るように言われる。

「//リカ……使命……」

『//リカが……命を懸けたもの……。

リーゼ・マクシアの人々……精靈達……僕達……。ミラの使命は……みんなを……守る事……。

『うふふー、彼女の使命？　おかしいつ』

『ロゼの笑い声を思い出した。

『彼女はジランドみたいな連中をおびき出す為に用意された、エサ。使命感や正義感なんて、ミラには全く無意味なの。それなのにがんばってやがって』

……//リカの使命は無意味……。

「//リカー。」

レイアに手を引かれて、ナップルの木の上に登る。ほとんび、レイアに引っ張られて移動しているようなものだつた。少し歩くと、柵が撃ち抜かれた。破片が飛び散る。

「見つけたぞ」

アルヴィンが追いついたみたいだ。

「ジューードは殺させない！ あたしが守るのー。」

「逃がさない！ もう無駄だ！」

「そんな事無い！ もう目を覚ましてよー。アルヴィンだつて……」

「何もかも無駄な事だつたんだよー。」

視界の端で、2人が武器を出したのが見えた。
走る音がして……金属音が聞こえた気がした……。

「無駄……」

無駄なんかじゃない……。

僕は……ミラと出会つて……旅して……考えて……色々な事を教
えてもらつた……。
けど……。

『断界殻が消えて無い……何でだよ……』

アルヴィンが、空を仰いで語つ。

『いつまで経つても空は赤いままだ……エレンピオスも見えない』

失笑をもらしながら、アルヴィンが僕を見る。

『これじゃオレ……何の為にミラを見殺しにしたんだ……？ 無駄
死にだ……』

「ミリは……無駄死に……？」

「そんな事無い！」

肩を押されて、レイアが後ずさつてきた。アルヴィンからの攻撃を防いでいる。

「だつて！ まだみんな生きてる！ ハリー、ゼだつてローエンだつてカイトだつて！ ガイアス達だつてきっと……あたし達も生きてるじゃない！」

ガチッ！ 弾かれて、レイアが樹に背を着ける。

「……そんで、どうすんだ？ あいつはもう居ないんだぜ？」

レイアが武器を弾かれてアルヴィンに殴られると、床に倒れ込んだ。

「何でレイアは……こんなに必死に僕を守りうとするんだろう？ 放してくれればいいのに……」

アルヴィンがまた僕に銃を向ける。

「ダメえつー！」

レイアが撃たせまいとまたアルヴィンにしがみつく。けど、すぐに地面に倒れ込んだ。アルヴィンは倒れたレイアに向けて撃つ。とつさに避けたレイアだけど、床に大きく空いた穴で、僕達は地面に落ちて行つた。

「オレ達はただの人間だ。あいつのよつには出来ない」

みんな……ミラが居るから頑張れた……ミラが居るから進めた……。

でも……みんなミラみたいには……。

『ジューーは気付いていました?』

再び、ミロゼの声がフラッシュバックする。

『ミラが断界殻を守るという使命と、死へ向かう行動の矛盾に悩んでいたのを』

……ミロ。

『つふつ、答えが出なくて当然ですよね。存在も使命も、与えられた嘘なんですから』

……ミラは、人間や精霊を大事に思つて……平氣で自分の心配なんか忘れちゃって……。

僕はそんなミラが……！

『生きていくだけの価値を『えられたよつで幸せでしたか?』

……違つ……。

『これまで一緒に居た時間も、すべて無駄。あなたのその思いもも

う終わりなのです』

……終わり……？ 僕の気持ちが……？

「ジユードー 早くー！」

田を覚ますと同時に、レイアが僕の手を掴んで立ち上がりせようとしていた。

「//に助けてもらつた命でしょ！ 大切にしなきやー！」

「//にもらつた……命……ー」

そうだ……ミラガ……残していくてくれたものは……ここにあるんだ……！

「……ありがと、レイア」

そう、お礼を言った瞬間 銃声とともに血が飛び散った。レイアが僕の方に倒れてきて、胸の上辺りが赤く染まっていたのが見えた。そして、僕の横に力無く倒れた。

「 レイアー！」

向こうを見てみると、銃を向けたアルヴィンが覚束ない足取りでこちらに向かっていた。

「い、今のは……」
「アルヴィンー！」

とにかく、レイアを撃つたのが許せなかつたのか、僕は走り出した。

僕がもつとしつかりしていれば……もつと早く大事な事に気付いていれば、こんな事にはならなかつたのかもしれない。

「ジユード、お前がつ！」

アルヴィンも走つて来て、僕達は互いに顔面を殴つた。

「何で……何でなんだ！　アルヴィン！」

「何を今さら！　オレはこいつ奴だろ？　がー！」

「分からぬよー！」

アルヴィンが振つてきた剣を後ろに跳んで避けて背後に回り込む。そこから攻撃に繋げよつとするけど、アルヴィンの反応は早くて攻撃に移れない。

「分かれよ！　お前が目障りだつたんだよ！　ずっと！　頼むから消えてくれよ優等生！　いつもみたいに受け入れろー！」

「消えられる訳ないだろ！　こんな事でー！」

下段回し蹴りでアルヴィンの体勢を崩して、連続で殴りかかる。

「臥狼砲虎！」
ガロウボウコ

「ぐつ！　ちくしょうがああツーー！」

「ツー？」

僕が攻撃している最中に、アルヴィンが無理な姿勢から、炎に包まれた剣を振り上げて攻撃をしてきた。

「もう何もかも無駄なんだ！ 諦めろよジユードツ……」

「うわああああああつー？」

アルヴィンの最大の奥義をまともに喰らってしまい、僕は地面上に倒れ込んだ。

起き上ると、アルヴィンが銃を頭に向けている。

「オレは……エレンピオスに帰る」

「…………」

僕が黙っていると、アルヴィンが思い切り蹴り飛ばしてきた。

「お前のそう言う所が……ガキのくせに諦めのいい所が！ 気に食わないんだよ！」

「しようがないじゃないか！ ミラ、居ないんだ！ もうどうしていいか……僕……」

何をすればいいのか、分からんのだ……。

「お前だけだと思つてんのかよ！」

アルヴィンが、僕の前にしゃがんだ。

「あいつを犠牲にしてまで生き延びたってのに……」

アルヴィンも……同じ様に悩んでいたのかもしれない……。

「//こもりつた命……僕達がしなきやいけないのはこなんじやなこのに……」

「じゃあ……何すりゃいいんだよー。」

僕の眩きにアルヴィンが怒鳴りつける。

「オレには……使命なんて無い。あいつみたいには生きられねえよ……！」

「//ヲはもう居ないんだ……！　僕達が考えなきや」

「どうやって！」

「誰も決めてくれないんだってー。」

胸倉を掴んでくるアルヴィンを押し返す。

「誰も……もう僕達のやる事に責任なんてとってくれないんだ。//ヲは……偽物の使命に生きたとしても……それでも……自分の命を賭けて責任をとったんだよ。出来る出来ないじゃない……やるかやらないかだよ。」

だから僕達も……手探りでも前に進まなきゃいけないんだ……。

「お前に……何で、お前が……そうやって先に行くんだけー。」

手放していた銃を拾つて、アルヴィンがまた僕に銃を向ける。けど、銃を持った手は震えていて、まともに僕を撃てる様子じゃ無かつた。

僕がまっすぐアルヴィンを見ると、アルヴィンは苦しそうに、銃の引き金を引いた。

* * * * *

俺が着ているこの制服……素材はいったい何なんだらうか？ 撃たれた足は激痛が走るけど、血は出でていない。何故なら、この制服は何と防弾仕様だったからだ。なんて「都合なんだよ……とか思わないでもないけど、今はそれに感謝だ。

そうして痛む足を引きずりながらようやくハ・ミルに着いたと思つたら、村全体に響き渡るような銃声が聞こえた。

「今の……まさかアルヴィンが！？」

違うよな……お前は、仲間を殺そつとなんて、しないよな？

一抹の不安を抱きながら、俺は急いで銃声の聞こえた所に行く。そこには、地面に座り込んだジユードと、血まみれのレイアが倒れていた。辺りを見回してみても、アルヴィンの姿は見当たらない。いつたい……なにがあつたんだ？ や、今するべき事はそれを考える事じやない。レイアを助けないとだ。

「ジユードー 何ぼさつとしてんだよー」

俺はとにかく、傷口に手をかざしてマナを送り込む。前とは違つてマナは万全だから、傷口は見る見るうちに塞がつっていく。そんな俺を見ながら、ジユードが驚いていた。

「え……か、カイト！？ ビツヒト……」

「んな事はいいから、レイアの手当てだ！ 早くしなこと手遅れになるぞ！」

「…? うん、分かつた!」

ある程度傷口が塞がつて出血もしなくなつたのをジユードが確認してから、俺達はレイアを前にエリーが居た小屋に運んでベッドに寝かせる。

俺がしたのはあくまで応急手当で。ちゃんとした治療はジユードに任せることにした。とりあえず、命に別状はないから、俺はホッと胸を撫で下ろした。

「それで……何があつたんだよ?」

俺も足を怪我している事に気付いたジユードに治療してもらひながら、よつやく本題を口にした。

「……アルヴィンが、来たんだ……僕達を殺せばレンピオスに帰してくれるって……ミュゼと取引したんだって」

「……そりが……」

それで……レイアを撃つたのか? 信じたくないな。

「でも……レイアを撃つた時……アルヴィンすぐく惑つてた

「……本心から俺達を殺すつもりは無いんだろうな」

そうじゃなあや、俺もジユードも、レイアだつて死んでる筈だ。

「やつだ、ジユード。ニ・アケリアに行つて何か分かつたのか?」

問い合わせると、ジユードは俯いた。

「//コゼが居たんだ……」

「……ミコゼか……」

「//ラの姉とか言ってたけど、アルヴィンに俺達を殺せとか言うのは理解出来ない。

「断界殻を知った人を殺すのが使命だつて言つて……ニ・アケリアの人達を殺してた……」

「なつ……！？」

俺はジユードの言葉に絶句していた。

ニ・アケリアの人達を……殺していたのか、ミコゼは。断界殻の存在を知った人を殺すつて事は、俺達も危ないのかもしれない。

「それと……//ラは、ジランドのような人達をおびき出す為の、Hサだつたんだつて……」

「エサ？ どういう事だ？」

「分からぬ。けど、//ラの存在と使命は、『『えられた嘘』』つて言つてたんだ」

『『えられた』』と書つ事はつまり、誰かが//ラにそう指示したつて事だ。

「やつぱり……//ラとは別に、他のマクスウェルが居るのか？」
「カイトもやつぱり？」

ジユードはその可能性に既に気が付いていたみたいだ。

「ん……」

話してみると、ベッドから小さく声が聞こえた。
ジユードが立ち上がりてレイアの顔を見る。

「……良かった」

「……ジユード、怪我しない?」

「大丈夫だから、今は自分の心配して」

「……うん」

自分よりもジユードの心配をする辺り、何ともレイアらしいな。

「……アルヴィンは?」

「分からぬ。姿を消しちやつた」

ジユードが答えると、レイアはひどく悲しそうな表情をした。

「レイア、ありがとう」

「え……どうしたの?」

突然の礼に、レイアが驚いていた。
……と言づか、この空氣でこんな事思つのはなんだけど……俺す
げーアウホーな……。

「ずっと見ててくれて、ありがと」

「ジユード、何かあつたの?」

違和感を感じたのか、レイアが身を起こして尋ねた。
すると、ジユードは立ち上がりてテーブルの方に向かい、レイア
の食事を用意していた。

「気付いたんだ。ううん、気付かせてもうつたんだ。ありがとう、

レイア」

「ジューード……」「……」

「あのー、俺の存在、忘れてません?」

「わっ! カイト君居たんだ?」

「うわあー……完璧に空氣扱いだったよ、俺。

「カイトが傷口を塞いでくれたんだよ」

「そうだったんだ……ありがとね」

「それは別に気にしてないでいいけどな」

アウルの空氣には堪えられんですよ。

「それでし、僕、マクスウェルを捜すよ」

「でも、//リは……」「……」

ジューードの言葉に、レイアが俯きながら呟いた。

「マクスウェルは他にいる筈なんだ」

「え……」

信じられないこと、レイアが顔を上げる。

そりゃそうだよな。//リがマクスウェルだって俺だって思つてた
んだから。

「//リゼが言った、//リは断界殻を守るために工サだつて言つ葉

……それって、誰か別の存在が//リを自分の身代わりにしたって事
だと思うんだ

言いながら、ジユードは料理をベッド近くの机に置いて座る。

「ミラがじゃないの？」

「違う。俺達の前に姿を現したんだ。身代わりを作る意味が無いだろ？」

「それで、ジユードとカイト君は別にその……本物のマクスウェルが居ると思ったの？」

レイアが俯いて聞いた事に、俺とジユードは頷いた。

俺の場合はそれ以外にも、ミラの言葉のおかげで気付けたんだけどな。

「『』めんね。レイアは何度も作ってくれたのに、僕はひどい事した

ジユードが料理を見ながらいつと、「ホントだよね！」と怒った
みうに言つ。

何したのか分からぬから、口を止める。

「で、いつ出発するの……？」

「レイアが元気になつたら、すぐに発つつもり

「あ、あたしなら、大丈夫だよ。ジョーブが取り柄なんだから」

そう答えるレイアを、ジユードは心配そうに見ていた。
レイアの強がりに、何か思つ所があるらしい。

「ちょっと外の空氣吸つてへる

俺が居たら話しつく話かもしないから、俺はそつて残して
小屋の外に出る。

「幼馴染、か……」

あの2人を見て、華紗音の事を思い出した。

結局帰る術は見つかっていない。一生このリーゼ・マクシアで過ごす事になるのかもしれない。

正直それは不満じゃないんだけど……一度。一度だけでもいいから華紗音と話がしたかった。

マクスウェルに会えれば……何か分かる気がする。何故かは分からぬけど、そんな事が漠然とだけど分かる。そうしていると、小屋からジユードが出てきた。

「話、もういいのか？」

「うん。『めんね……気を遣わせちゃったみたいで』

「そんな事、今さら気にすんなよ」

「ここに来てから、ずっと一緒に旅して来たんだから。あ……ずっとじゃないか。1ヶ月程は別行動だつたか。

「とりあえず、レイアが治るまでは休む事にしたから。いろいろあつたし」

「だな。焦つても仕方ないし、俺も足痛いし……」

とりあえず、しばらくなハ・ミルで休むことになりそうだった。

第41話 希望を求めて（前書き）

「…」
「…」
「…」

第41話 希望を求めて

「大丈夫?」「うん! カンペキ!」

レイアがベッドから立ち上がり、仁王立ちで答えた。
数日休んだだけで治るつてのも、かなり凄い事だよな。

「それじゃあ、まずはどこに行く?」

「そうだな……」

『マクスウェルに会うのであれば、ニ・アケリアへ行けばいいと思
います、マスター』

『そつか……ニ・アケリアか……つて、居たのかセルシウス!…?』

『私は常に、マスターのお側にいますよ』

いきなり話に割って入ってきたから、かなり驚いた。
てか……すぐ近くに居たんだな、お前。

「カイト……一人で何やつてんの?」

1人漫才に見えたのか、ジユードがジト目で俺を見てきた。

「……セルシウスがマクスウェルに会うならニ・アケリアって言つ
てるけど?」

「セルシウスがここに居るの!…?」

ジランドと戦っていた時の事を思い出したレイアが、驚きながら
そう言うと、セルシウスが姿を現した。そしてすぐに姿を消す。
何だ今のは?

「とりあえず……頼もしい仲間が居る訳だ。で、ニ・アケリアに行つてみるか?」

「そうだね。そこならイバルも居るかもしぬないし」「え、何でイバル?」

レイアが首を傾げて尋ねた。

「本当はミコゼに話を聞く方が一番なんだけど、太刀打ち出来そうにないからね。マクスウェルの巫子なら、いろいろ知つてると思うんだ」

……イバルだから……結構微妙な気がしないでもないけど……確かに他に手はないかもしねりない。

ニ・アケリアに行つてすぐに本物のマクスウェルと会えるとは思えないし。

「でも……無事かな?」

「何、だかんだで無事だと思つよ、あいつは」「……だね」

俺が言つと2人は笑いながら頷いた。

* * * * *

ニ・アケリアへ行こうとハ・ミルを発つ直前、

「カイト君〜！」

「へ……？」

声が聞こえた方を向くと、一瞬だけエリーが見えた気がしたけど、視界が真っ暗になつた。

えつ……何これ？ 何のドッキリ！？

「ティポ！ 会えて嬉しいよ」

ジユードのそんな声が聞こえて、なるほど……今俺はティポに囁まれているのか。

引っ越しすると、エリーがレイアに抱きついていた。

「わざわざ来てくれたの？」

レイアが驚いたように言いつと、エリーがニコッと微笑んだ。

「でも……どうしてここに？ カラハ・シャールに戻ったんじゃなかつたのか？」

「ミュゼさんが各地で敗走しているアルクノアやエレンピオス兵を襲っていると、カラハ・シャールに戻る前に噂で聞き及んだので、心配で来たんですよ」

そうか……ジユードも言つてたつけ。

ミュゼが断^{シル}界殻の存在を知つた人を殺していたって。

なら、それはエレンピオスから来た奴らにも当てはまるし、俺達も結構ヤバい状態じゃないか？

「2人は大丈夫だった？」

「幸い、一度も見つかる事なく逃げれています。ジユードさん達は？」

ローベンが尋ねると、ジユードは俯いて口を開いた。

「アルヴィンが……来たんだ……」

「アルヴィンに会えたんだねー」

「うん、そうなんだけど……」

言葉を濁すジユードを不思議に思ったのか、エリーが首を傾げた。
そして、これまでの出来事をジユードが話した。

「そうでしたか……アルヴィンさんが

考えるようにローベンが頷く。

「それで、ジユードさん達はこれからどうするのですか？」

「マクスウェルを捜すよ

「ミラに会えるんですか！？」

驚いたように、そして嬉しそうにエリーが言つて、レイアが首を横に振る。

「ジユードとカイト君が言つては、本物のマクスウェルが居る筈だつて

「本物ー？」

意味が分からないと呟つ風にティポが囁き、エリーが首を傾げた。

「なるほど……それは考えませんでした。ですが、色々と説明が付きますね」

「有り得ない事でも、他に可能性が無いなら、眞実になり得るからね」

出た。何とかの卵理論。

……何て言つたつけ？

ジユードの答えに、ローハンは嬉しそうに笑つた。

「いつの間にか頼もしくなりましたね、ジユードさん」

一度にいろいろ乗り越えた。いや　乗り越えようと決意したからだらうな。

「でね、まずはイバルを捜そつて事でニ・アケリアに行く話になつてたんだ。ミュゼに会つのは怖いし……」

俯くレイアだけど……ニ・アケリアに行けば会つ可能性があるんだよな……。それは言わないでおこうか。レイア自身も気付いてるかもしれないし。

「ジユードさん、ガイアスさんの話を聞きましたか？」

腕を組んでいたローハンが、ジユードにそつ問い合わせる。

「ガイアス？　ううん、知らない」

「何か言つてるのか？」

「理由は分かりませんが、イル・ファンで大規模な動きを始めたらしこのです。その為、何度もミュゼさんに襲われているそうですが、

「退けていいとか」

あの空中戦艦を一人で壊せるような力を持った精霊とやり合つて
退けるなんて……もうさすがとしか言いようが無いな。

「どうするジユード？」

「うん。 レイア、 危険だけど大丈夫？」

わざわざ聞くまでもなかつたみたいだ。 ジュードがレイアに問い合わせると、「もちろん」と頼もしい一言。

「エリーは？」

「わたしも行きます！」

「うちも聞くまでもなかつたようだ。

ローベンも頷く。

「2人とも……いいの？」

「ミラ君が嘘なのか、 ちゃんと知りたいもんねー」

「はい、 友達ですから」

「私も……ガイアスさんに会う理由がありますから」

ジュードが短く礼を言つて、 僕達はイル・ファンに向かう事になつた。

「カイト、 セルシウスって居るんですか？」

イル・ファンに向かう途中の船で、 エリーがそう聞いてきた。

「ああ、居「お呼びですか?」るよ……つて早いなお前!？」

まるで待つてましたと言わんばかりの早さで出てきたな、おい。
まあ、別にいいんだけどぞ。

「私に何かご用ですか?」

「ああ、エリーが用あるみたいなんだ」

そう言つと、セルシウスがエリーに視線を動かした。

「ホントにいたー！」

「……何ですか、この面妖で可愛らしき物体は?」

「可愛らしき!?」

「ティポの可愛らしさが分かるんですか!?」
「もちろんです、お嬢様」
「お嬢様!?」

どうしようつ……セルシウスのキャラが分からなくなつてきた……。
最初ジランドと居た時のあのクールさは束縛されていたからなのか……。いやまあ、今もクールですけどね……。

「マスターの大切な方は、私にとつてもお守りすべき大切な方です
「そ……そつか……」

それはありがたいんだけど……何故だらう、腑に落ちないこの感

じ……。

「セルシウス……」これからよろしくお願ひしますね!」

「私の方こそ、よろしくお願ひします。お嬢様、ティポ様」

うん……ツツコむのに疲れたよ。

上機嫌のまま、ヒリーとティポは去つて行つた。

「そういうお前、体調は大丈夫なのか?」

「精靈に体調と言う概念はありませんよ、マスター」

「そうかもしないけど、お前を解放した時はマナが不安定だった気がするからわ……」

それに、マナを一度俺に返してきた訳だから、途中で消えたりしないか不安だ。

「」心配ありません。あれから少しづつ大気中のマナを取り込んでいるので、力は戻りつつあります」

「そつか……それ聞いて安心したよ」

胸を撫で下ろそうとした所に、セルシウスは「ですが」と続ける。

「一度大量に氷のマナを取り込まなければ、大精靈としての力は戻らないでしよう」

「つまり……？」

「現状では大精靈には遠く及びません」

「マジか。

正直、ミコゼと戦つ事になつた時にセルシウスの力を当てにしてたんだけど……そう簡単にはいかないらしい。

「結局は自分らの力で何とかするしかないって事か」

「すみません……」

「お前が悪い訳じゃないだろ。気にすんな」

むしろ、他力本願になつていて自分が悪い。
まあ、もちろん頼りにはしてるんだけどさ……。

「カイトー、もつすぐで着くから降りる準備して」

次第に辺りが暗くなつてきたのに気付いたのと同時に、ジユード
のそんな声が聞こえてきた。

もうイル・ファンに着くんだな……。

* * * * *

船を降りて広場に行くと、何やら騒がしくなつていた。
街の人々が逃げるようになんて走つて行つた。

「何?」

「誰か軍を! エレンピオス兵よ!」

「エレンピオス兵! ?」

誰かの叫び声が聞こえて、レイアが見回している。

「今や珍しくもないよつです。兵は各地に出没しています」

「ジランドが居なくなつた所為なの?」

「それもあるみたいだけど……一番の要因はミユゼだな」

広場で暴れている兵士に視線を移して、俺は言った。

「そつみたいだね……」

「あの人たち、めちゃひどいめにあつてるみたいだよー」

ジユードの話を聞く限りでもひどいだもんな。断界殻を知っただけで殺されるんだから。

「とにかく、止めないと

ジユードが言つ直前、俺は剣を抜いて弓に変形させ、矢を兵士の両腕に装着されている黒匣^{シジン}に向けて放つ。

矢は黒匣を貫通し、破壊した。

「な、なんだこれは!?」

「とりあえずおとなしくしてろよー」

こきなり黒匣が壊れた事に驚愕している兵士を、鞘で殴つて気絶かせる。

これで無力化は出来たと思つ。

「いきなり矢を撃つからびっくりしたよ……」

「仕方ないだろ。あの距離だつたんだから」

そう話していると、違う兵士が2人走つて来た。ラ・シュガルと

ア・ジユールの兵士だ。

「お前達動くな！」

これはもしゃ……俺達も拘束されるパターンか？

みんなで顔を見合わせていると、聞き覚えのある声が聞こえた。

「無事だつたようだな」

「ガイアス！」

「この者を牢へ運べ」

氣絶した兵士に視線を移してガイアスが言つ。

「！」の者達はいい

次に俺達を見ながらさう言つて、さつき殴った兵士が何か叫んでいた。
無力化したと思ったんだけど……やっぱり甘かったか？

「貴様、口を閉じろ！」

「このままだとエレンペオスが死んじまつ。何が悪いんだ……俺達は……！」

ジランドと同じ事を言いながら、兵士は連行されていった。

「ガイアス、凄い！ ラ・シュガル兵に命令出来ちゃうんだ
「ラ・シュガルの民も、軍も、ナハティガル不在によつて混乱して
いた。俺はそれを導いたに過ぎない」「
「それがすごいんじゃないのー！」

レイアとティポの言う通り、言うのは簡単だけど、それを実際に使うとなるとかなり難しいだろうけど、ガイアスはそれを成し遂げられるんだ。

凄いって言わてもいいと思つ。

「ガイアスさん。イル・ファンで一体何をされているのですか?」

「ラ・シュガル軍と共に、海中に沈んだクルスニクの槍の引き上げ作戦を行つてゐる」

「今さらクルスニクの槍で何するつもりだよ?」

あれは攻撃には使えない。精靈術を無効化するだけだ。今さら使い道なんか無い筈だ。

そもそも……あんな事があってまだ壊れてなかつたのかよ……。

「俺は異界炉計画を止める。アルクノアは消えたが、計画そのものが無くなつたとは思えない」

ジランドも最期に言つてたな……断界殻がある限り、異界炉計画は潰えない。

「お前にどうした?」

ガイアスが問い合わせると、ジュードが前に出る。

「僕達、ミュゼに会いたいんだ」

「ミュゼだと?」

訝しむように聞き返すガイアスに、レイアが頷いた。

「ガイアスがミュゼと戦つたって聞いたから、会いにきたの

腕を組んだガイアスは何か考え始めたけど、兵士が1人、出航の時間だと黙りてきた。

「ジユード、海停に来い」

「でも、僕は……」

「俺と来い。ミコゼに会えるかもしけんぞ」

ジユードの言葉を最後まで聞かずに、一方的にガイアスが話を終わらせて去つて行つた。

「チャンスみたいだな。行こうぜ、ジユード」

「うん」

ミコゼに会えるかは分からぬけど、俺達はガイアスを追つて海停に向かつた。

「ア・ジユール兵にもラ・シユガル兵にも命令しちゃうガイアス、かつこよかつたね！」

海停に向かつ途中、レイアがそんな事を言つていた。

「確かにかつこよかつたけど、レイア、馴れ馴れしく話しそぎだよ」

「正直、ハラハラしました」

「あはは、思わずテンション上がっちゃつて……ガイアス、怒ったかな？」

「いつも無表情だから分かんないな……」

もし怒つてたら、問答無用で太刀抜いてそつだけどな。

「2大国をまとめる程の方です。大丈夫でしょうか?……多分」

「だよねー!」

レイアはあんまり反省していなかつた。

「だからって、調子に乗らない方がいいと思う」

「だろうな……問答無用で打ち首とか洒落にならないよ?」

「……はい。以後、気を付けます」

* * * * *

海停に行くと、ワインガルの姿があつた。

「陛下は既に乗船された。まもなく出航だ」

「あ、あの……」

乗り込もうとした時、ヒリーが前に出てワインガルに声を掛ける。

「……ジャオの事を聞きたいのか?」

「は、はい……」

ジャオの事、か……。

あの時に話したのはほとんどが俺の想像だからな。身近なワインガルに聞くのはいいかもしない。

「ジャオさんがどうしてあの時、わたしを助けたのか分かりますか？」

「過去に犯した過ちへのけじめだつたのだろう」

「けじめ……ですか？」

過ち……Hリーの両親を殺してしまった事だろうか。

「人は生きていなければ意味がないという者も居るが、それは個人の観点に過ぎない。人は社会の中でしか生きられない」

確かに……死んだら全てが終わりって、そう思つてしまふ。でも……死んでしまつても残るものはある。

「その中では、死んでもなお、つけなければならぬいけじめもある」

ワインガルはジユードを見ながら言った。

「……よく、分かりません」

視線で俺に聞いてくるけど……俺は正解を言えるか自信が無いな。

「たからこそ今は、子どもらしく過ごせばいい」

「子どもらしく？」

「ジャオがあ前に望んだのは、子どもらしい幸せだった。それは間違いない」

人並みの幸せを願っていた。そういう事が。

「子どもらしく、ですね。考えてみます」

「それでジャオも浮かばれる」

エリーが考えながら俺の隣に来た。何も言えない代わりに頭を撫でる。

「ワインガルさん……」

「随分質問攻めだな」

エリーの質問が終わると、次はローベン。ワインガルはローベンが何を聞きたいのか分かっていたのか、ガイアスの事かと聞き返す。

「ガイアスさんは、リーゼ・マクシアをどうされるつもりですか？」「陛下はいずれ、このリーゼ・マクシアを統一なさるだろう。あなたの聞きたい事は、これで十分な筈だ」

エリーには結構話してくれたけど、ローベンには冷たいな。話は終わつたといつように、ワインガルは船に向かつた。

「……ありがとうございます」

短く礼を言つと、ローベンは髪を触りながら考え始めた。

「ローベン？」

「いえ、行きましょ」

何か引っかかった事があつたみたいだけど、それは話さないで船に乗るように促した。

ここでそれを気にしていても仕方ない。

船に乗る事にした。

ミコゼは来るんだろうか。来たひ……やつぱり戦つんだろうな…

…。

第41話 希望を求めて（後書き）

はい、謎がまた増えただけでした。明かされるのはもう少し後と
言ひ事で……。

それにしても、Hリーとの絡みがほほ無しつてのは考えものです
ね……。どこかで絡ませるか（笑）

第42話 真実の欠片（前書き）

ミユゼガ……何か怖いわあ

第42話 真実の欠片

船に乗つて海に出ると、ガイアスにこれまでの事を話しておく事にした。とは言えアルヴィンの事は話す必要は多分無いので、ジユードがニ・アケリアでミュゼに聞かされた事を話している。

「そうか……エサとはな」

呟くガイアスに、ジユードが頷く。

「だから、本物のマクスウェルに会つて、僕は真実を知りたい」「マクスウェルの居場所……考えられるとしたら精霊界か」「精霊界……そんなものがあるのか……？」

人が住む世界があるなら、精霊が居る世界もあつてもいいかもしれないけど……。

「その場所を見た者はおりません」

「確かに伝説に等しい存在だ。だが、精霊達は存在している。ならば精霊界は存在し、そこに繋がる道があると考えるべきだらう」

そうかもしけないけど……その道を探すのにどれだけの時間が必要になるんだ？ まるで雲を掴むような話だ。

「ニ・アケリアはー？ 精霊の里つて言つんじょー」

「うむ。あの地には靈山があつたな。何があつてもおかしくはない」「だからか、セルシウスがニ・アケリアに行けつて言つたのは」

どの道、ミュゼに会つたら行こうとしていたんだし、ちゅうひよ

かつたな。

「じゃあ、すぐにニ・アケリアだね！」

「待て。船は槍の引き上げ場へ行くまで引き返せないぞ」

気合入った様子でレイアが言つけど、すぐにウインガルにそう言われた。

「えー、がっかり……クルスニクの槍なんてどうでもいいのに」「仕方ないだろ。こつちは情報貰つたんだから。ちゃんと付き合わないと」

「分かってるよ~」

肩を落としたレイアは、既に結構いい加減になっていた。

「ガイアスさん。先ほどの異界炉計画を止めるという話。クルスニクの槍を使いエレンピオスへ侵攻するおつもりなのでは？」

微笑ましくレイアを見ていたと思つたら、ローエンがいきなりそんな事を問い合わせていた。

「全ではリーゼ・マクシアの為だ」

「待つて。槍を使うには沢山のマナが必要だよ」

「そうだな。断界殻シェルみたいな巨大な精霊術を消すとなると、膨大量のマナが必要になる。ガイアスだつて分かってるだろ？」

それこそ、もういちどファイザーバード沼野の時と同じ人数が必要になるだろう。

「無論、人と精霊が犠牲になる事は本意ではない」

「迷つてゐるんですか？ なら……」

「だが、誰かがやらねばならないのも事実だ」

確かに……犠牲を出さないようになつてはいたが、いざれば異界炉計画が発動してしまつ。とは言え、こちらが動いてもこの世界に被害は必ず出るんだ。

誰かがやらないといけない事を、ガイアスはやつとしてくれている。

「ガイアスも……想いを守るうとしてくれてるの？」

「そうかもしない……いや、そうなのだろう。俺の中でも、あれだけ大きな存在となつた女は初めてだからな」

今まで自分と真つ向から対峙する人つてのは居なかつた。そういう事だらうか？

「だつたら、Hレンピオスの事も考へるべきだよ！」

「Hレンピオスの心配だと？」

ジユードの言葉に、ウインガルが明らかに不満を含んだ声を上げた。

「リーゼ・マクシアの人と精靈が犠牲になるやもしれぬ今この現実と現に！」

「どつちかが犠牲になるとか……そりじゃないと思つんだ……」

田を閉じたジユードは、「あつと……そう言つよ」と呟いた。
本当に……ミラならうそつつかかもしれないな。

「断界殻を無くしてみんな助ける。僕はそつしたい」

「お前……」

ガイアスの目を真っ直ぐ見ながら、ジユードが決心したよつて言った。

「俺もそつだな

「カイト？」

ジユードの言葉に乗せられて、みたいな言い方になるかもしけないけど、この際どうでもいいか。

「言葉被るけど、リーゼ・マクシアもエレンピオスも、俺はどっちも助けたい。そう思つよ」

俺もガイアスの目を見ながら言つ。不思議と怖さは無かつた。

「報いたいのか？ 命を投げ捨てて、お前達を守つたあいつに

ガイアスの言葉に、俺とジユードは同時に頷いた。

「変わつたな」

「ジユードが、な」

俺はもともと、誰も犠牲にはしたくなかったんだ。助けられた人は少ないけどや……。

「ジユード、カイト、お前達は俺のもとで……」

「陛下。まもなく到着します。」準備を

ガイアスが何かを言い掛けた所で、ウインガルがそう言つた。ガ

イアスは小さく頷くと、俺とジユードを一瞥してから去つて行つた。何を言おうとしたんだろうか……？ 考えても、その答えが出てくる事は無かつた。

船が止まつて、クルスニークの槍を引き揚げる作業が始まつた。俺達は特にやる事も無い訳だから、ゆつくりと休息をとつていた。あれから……ミラの言葉を何度も思い出すけど……全く理解が出来ていない。

本物のマクスウェルが居ると遠まわしに言つているのか？ とも思つたけど、それなら『踊らされた』と言ひ言葉はいらない筈だ。それに……ミラは『君も』と言つた。なら、他にも本物のマクスウェルに踊らされた人物が居るつて事だらう。あの状況で言つたんだ。まさか……それって……。

「カイト！ 話聞いてますか？」

いきなり近くで叫ばれて、声のした方を見てみると、エリーが怒つていた。

「え？ あ、ごめん。ボーッとしてた……
「ずっと上の空でしたよ」
「ああ、ホントごめん」

謝つていると、いきなり爆発音が聞こえた。

慌てて海を見てみると、何隻があつた船の内、一隻が球体の魔法陣に閉じ込められて、重力に押し潰されたようになつて爆発していく。

「何事ですか！？」

「あれつて……まさか……」

「南東の空だ！ 来たぞ」

兵士が叫ぶのが聞こえて空を仰べと、//コゼガとんでもない早さでこけらに向かつて来ていた。

その間にも、船は押し潰されてこく。

「//コゼ、やめろー」

空に面む//コゼジコードが叫ぶと、//コゼは急降下して近付いてきた。

俺達は武器を構えて、//コゼと戦う事になった。

「見苦しく逃げだした//コゼを掃除しなきや！」

「簡単にはやられないとよー//散華！」

「ずいぶん強気ね？ 賴りにしていたエサは居ないのよー！」

ジューードの三連撃は、//コゼの髪で全部防がれてしまつ。

「そうさ、こいつなつた理由を知りたいんだ！」

「お前こそずいぶん強気だな。大精靈だからって人間なめんなよー！」

「役立たずのクセに、偉そうなこと言わないでー！」

役立たず？

確かに俺に向かつてそう言つた//コゼは、正面に鋭く変化した髪を打ち付けてきた。

「自分の使命すらまつとつ出来ないあなたは、エサ以下よー・グラヴィティー！」

「何の事だよ、//コゼー。」

俺は自分に放たれた精霊術を避けながら聞き返す。

「カイトは役立たずなんかじゃありません！」

「役立たずよ。何も知らない愚かなねー。」

ヒリーが叫んでくれたけど、//コゼーは俺を役立たず呼ぼわりを続ける。

「どうこう意味か、話してもいいやー。」

「腕すべても教えてもらひつよ、全部ー。」

「つぶふつ、できるものなひやつてみなわー。」

笑いながら、//コゼーは竜巻を起こす精霊術を発動させる。俺達は一回距離をとつて回避した。

「あははーー逃げても無駄よー。」

「つわーー。」

だけど、//コゼーは瞬間移動で一瞬で俺の目の前に現れて、突進攻撃をしてきた。

あいつ……距離関係無いのかよ……。

「ジューー、行っちゃつて！ シャープネスー。」

「ありがと、レイア！ 獅子戦吼シシセイコウー。」

レイアの術で強化されたジューードの獅子戦吼は、さすがの//コゼーも防ぎきる事は出来ずに、体勢を崩した。

「隙は『えせませんよ』。『ティフュージョナルドライブ!』

『コゼの足下に水流が渦巻き、巻き上がりで攻撃する。

「くつ……調子に乗らない事ね！ フィアフルストーム！」

ローハンの術から逃れた『コゼ』が、闇の竜巻を発生させる。

「貫け、紫電の槍！ ヴォルトアロー！ そして、サンダーブレード！」

竜巻を避けてから、俺はすぐに詠唱する。『コゼ』の周りに3つの雷球を生み出し、空から雷を降らせる。そして、強い雷を纏う剣を降らせ、放電させる。

これでどうだ？

「役立たずのクセに……早く死になさい！」
「カイト！」

『コゼ』が怒り出して俺に鋭い髪で突いてきたけど、ジューードが横から割り込んできて受け流す。

俺はその隙に、『コゼ』の背後に回り込んで斬りつけた。

「離れなさいッ！」
「ぐあっ！」
「うわっ！」

鋭くした髪を、今度は広範囲に広げて俺とジューードを吹き飛ばした。

「大丈夫ですか？ ナース！」

エリーが全員を回復させる治癒術を発動させる。

一撃のダメージが高い攻撃だから、エリーの回復は心強い。

「もつ……猶予は与えない……ヒレメンタルムジーク！」

四方に地水火風の球体が飛ばされ、みんなはそれを避けようとするけど、何と球体は追尾した。

逃げきれずに、球体は俺以外のみんなに当たってしまう。

「これで終わりよ。全てを飲み込み、渴きの地へ誘え！」

ミコゼの指先から、豆粒程の黒い球体が現れ、それは一気に巨大化する。

「虚数の牢獄！」

徐々に膨張していく黒球体。

まさか……あれが破裂するのか！？ そんな事されたら、船が沈みかねない！

……一か八か、やつてみるか！ 間に合えよ！

「イベントホライズン！！」

そして、巨大化した球体が大爆発を引き起こした。

「ふふふ……死んだわね」

「まだだよ！」

「！？ 何故……今まで死んでないの！？ 船だつて……どうして

！？」「

俺達がまだ生きている事に、ミコゼは驚愕していた。

俺達と船が何で無事なのか、それはセルシウスの氷の力。爆発を喰らう所を、即興で分厚い氷で「一ティングした。そして、俺達の目の前には氷の壁を作っていた。

正直言つてかなり危険な賭けだつたけど、何とか防げたみたいだ。

「行くよ、カイト！」

「任せろー！」

驚いている隙に、俺はジユードの掛け声に合わせる。

「『翻弄する流舞！ 霧影幻龍舞！』！」

ミコゼの背後に回つた俺は、ジユードと挟み撃ちでミコゼに連撃を叩き込み、最後に交差して攻撃をした。

「くうっ……！？」

ミコゼが床に倒れ込み、船に乗つていた兵士が走つてきてミコゼを取り押された。

「な……何とか……勝つたか……」

「あたし達だけじゃなくてよかつたね」

「ミコゼ……君はどうして？」

取り押さえられたミコゼにジユードが問い合わせる。

「……私は……私は……リーゼ・マクシアを守つていいだけよ……

！」

思いがけない言葉が出てきたな。

「君の……リーゼ・マクシアを守るつて何なの？」
「知るわけないでしょー！」

知らないって……訳も分からずアルクノアやエレンシオオス兵、ニ・
アケリアの人々を殺したってのかよ！？

「命じた者がいるな」

ガイアスが言いながら近づいてきた。

「ミコゼ、教えて。マクスウェルはどうしているの？」

ジューードの間に、ミコゼが田を見開き兵士達を吹き飛ばした。
まだこんな力があったのか……さすが大精靈だな。

「マクスウェル様を庇うしようついのー！」
「本当に別のマクスウェルが居たのか」

ミコゼのその一言は、俺達の仮定を補強する所か、確信へと変え
た。

「ミコゼー、マクスウェルはこんな事をホントに望んでいるの？」
「当たり前よ！」

力強く断言したミコゼは、両腕を空にかかげた。

「これをお望んでおられたのですよね！？ さあ、マクスウェル様！
この者達を裁く命を！」

空に向かつて、ミコゼはマクスウェルに語りかけているんだ
うつねど、そう叫んだ。

俺達は反射的に身構える。

だけど……こゝへ待つても何も起こりず、ミコゼの表情が歪んだ。

「どうなつてゐるんですか……」

「分かりません」

「ミコゼ……何をしようつと……」

そうしてみると、いきなりミコゼが空に飛んだ。

「ワインガル！ 出るべー！」

そう叫んだガイアスが、いきなり船の外に飛んだ。そして、どこからか飛んできたワイヤーバーンに乗ると、ミコゼを追いかけて行った。でも俺は、ミコゼに聞くべき事をまだ聞いていない。

「待て、ミコゼ！ 俺が役立たずつてどうこう事だー？ ミコゼッ
！」

もう聞こえていないのか、ミコゼは止まらずに空の彼方に消えて行つた。

ミコゼが消えた方を睨んでいると、ワインガルがガイアスを追えとしつ指示が聞こえてきた。

ミコゼが最期に言つた事と……関係があるのか？ 俺が……役立たずだつてのは……。

第42話 真実の欠片（後書き）

セルシウスの力が未だにどう書けばいいか分からんんですが……
…とりあえずこんな感じでどうでしょうか？ 船凍つたんじゃね？
…というツッコミはスルーでござります。
次回はあのうるさい人が再登場！？

第43話 巫子との決別

「コゼが俺に言った言葉は気になるけど、今やるべき事は別にある。

ガイアスを追つて辿り着いたのは、イリート海停。おそらく、コゼは二・アケリアに向かつたんだろ？。何となく、そう思つ。

「ガイアスとコゼはどう？」

「ここで間違いないんだよね、ワインガル？」

海停に着いてすぐ、ジユードがワインガルに問い合わせると、振り返つたワインガルの後ろから兵士が武器を持って走つて来た。
何か様子がおかしい。そう思つた時には、俺達はア・ジユール兵に取り囲まれていた。

「なつ！？」

「どうして……？」

「何の真似だよ……ワインガル？」

身構えるけどあくまで武器は抜かない。ワインガルの真意を確かめるまでは。

「なんのつもりだー！ 黒ずくめー！」

黒ずくめつて……まあ確かにそうだけど……ジユードも黒いぞ？

「ちゃんと理由、聞かせてくれるんだよね？」
「危険だからだ」

即答だつたけど……意味は全く「云わぬ」。

「危険……僕達が？」

ジューードの問いに、ワインガルは首を振った。

「違つ、ジューード、カイト。お前達だ」

なおさら訳が分からなくなつてきた。

「ジューードさんとカイトさんをマクスウェルに会わせたくない。そうなのですね？」

ワインガルは何も答えなこまま、踵を返した。

「僕達がガイアスの邪魔になるからっ。」

「絶対に逃がすな」

ジューードを無視して、近付いた兵士にしき指示して去つて行った。

そして、俺達は兵士に拘束された。いや、正確にはされる途中だ。

小さな所で素直に捕まつてやるかよ。

「えいやーつー。」

そう思つていたら、ローエンが兵士を殴つて氣絶させていた。
さりと、Hリーもティポで兵士を倒し、

「ティボ！」

「へーばリーつぐー！ むにー！」

いつも俺にやるやつに兵士の顔に噛みつき、一時的に息をさせないようにして氣絶させていた。

あれ……耐性無い人にはキツいよなあ……。

と、俺も便乗しよう。

「よつー… つと」

俺も剣を鞘に入れたまま兵士をぶん殴る。イル・ファンでやつた時は氣絶させられなかつたか、今回は思い切り殴つてみた。多分死にはしないだろ。兜あるし。

「えいつー！」

レイアも兵士の脳天を棍でぶつ叩いて氣絶させ、俺達を囲んでいた兵士は全員地面に倒れた。

「エリーゼ、レイアーー？」

ジユードだけが驚いた様子で俺達を見回す。

「さあ、ガイアスさんを追いますよ

しつとした様子でローヘンが言つ。

「でも、どこ行つたのかな？」

「十中八九、ニ・アケリアだろ？」「

「靈山ですね！」

「はい、賭けるしかあつません」

「みんな……」

俺達を見ながら、ジューードが少し呆れていた。

「やるならタマニング合わせよ! よ……」「

だけどうさんなジューードを、俺達は呆れたように見やる。

「僕が悪いの……?」

ジューードの驚きぶりで、俺達は思わず腹を抱えて笑ってしまった。

「さ、とにかく・アケリアに行け! せ、ジューードの

「せ、だね……せはは……」

微妙な笑みを浮かべたジューード。

とつあえず、俺達は一・アケリアに向かう事になった。

「なあ…………ひびき、//コゼはあんな事言つたとゆつへ。」

船で言われた事が気になり過ぎて、思わずジューードにさう聞いていた。

「役立たずつて事?」

「ああ。使命を果たせなかつたからつて。でも、//コゼは役立たずつて言われるよつな使命、俺には無い筈なんだ」

そもそも、あいつと居た時間なんかかなり少ない筈だ。それなのに何あんな事を言われないといけないんだ?

「僕は、カイトが役立たずだなんて思わないけど。むしろカイトが居るから助かってるよ」

「そうです! ミコゼ、間違っています!」

ジユードに賛成するように、エリーも話に加わってきた。

「せうだよ。カイト君は頼りになるんだから」

「ええ。私も世話にならっぱなしですよ」

みんなに言われると……すこし恥ずかしいな……。

「ありがとな、みんな。俺、ちゃんとやれてるんだな」

「うん、だから、あんまり気にしないでね。ミコゼの言つた事」

「ああ、分かつてるよ」

励ましてくれて、支えてくれる仲間が居るのって、嬉しいもんだな。

俺もみんなの力になれるのが、さらに嬉しい事だ。
けど……ミコゼの言葉の真意は必ず確かめる。絶対に。

* * * * *

ミハが祀られていた社に着くと、社の前にイバルが腕を組んで立っていた。

あの状況でも、やっぱり生きてたんだな。

「あー、ひるせいヤツだー！」

ティポ……ってかエリー……一応こいつはいい奴だぞ？

「イバルさん。ガイアスさんとミュゼさんがこちらに来ませんでしたか？」

ローベンがそう問い合わせても、イバルは動かない。
そう言えれば変だ。いつもならジユードを見ればすぐ『魔獣を出さず』に。

「2人だけじゃない。ウインガルも靈山へ向かつた」

やつと話しあしたけど、やっぱいつもと違つ『氣』がある。

「奴はいつも言つたが。ジユードが来るかもしけないが、好きにして構わないとな」

それは……どういう意味だ？

「同じ黒ずくめ同士、大目に見てやるつもりだったのに。ゆるせないぞー」

「ティポ……」

緊張感無を過ぎただ……。

「ガイアスに見放されたか、ええ？」

いつもと違う。けど、ジユードへの敵対心は変わらずあるみたいだ。

「イバル、分かつてほしいとは言わない。けど、今は君と争ってる時じゃないんだ」

「黙れ！」

取り付く島もない。ジユードの言葉をイバルは一蹴した。

「ジユードは……彼女の想いを遂げる為にここに来たんだよー。」

名前は出さなかつたけど、明らかにレイアはリリの事を言つていた。

「そんな事、どうだつていい！」

「何言つてんだよ……お前？」

ミラの事が……どうだつていい？

巫子に誇りを持っていたお前が、何を……。

「ジユード、どうしてお前が！　お前ばかりが！」

敵対心を剥き出しにしたイバルは、両手に剣を握つて構えた。

「みんな、先に……」

「仕方ないな……」

ジューードは俺達を先に行かせるつもりだらうけど、俺達はジューードを残して先になんて行く筈が無い。

「みんな……」

俺達を見回したジューードが、安心したよつて呟く。

「ハツ！ サシの勝負も受けられないのか！ 腰抜け！」

そんなジューードを嘲笑うイバルに、さすがにカチンと来た。

「さつあ、ジューードが言いました。今は争ってる時じゃないって」「さつよい。ジューードには、あたし達にはやる事があるのー。」「先に進まないといけないんだ！ こんな所で止まつてられない！ 分かれよ！」

「それを邪魔するよつでしたら……私達がお相手するのは当然、でしょつ？」

俺達が武器を出して構えながら、ジューードが一步前に出て構える。

「通してもらひよー。イバル！」

「上等だ！」

イバルが俺達に走つてみると同時に、上空からワイヤーバーンが降りてきた。

「決着を着けてやるぞ、ジューード！」

「僕は偽物でいいよ！ だからそこを退いてー！」

「本物か偽物か、もうそんな事は関係無い！ 僕はお前に勝てれば

それでいいのだ！

ジユードに向けて斬り込みながら、イバルが叫んだ。

巫子は関係無い。ただ単にジユードを打ち負かしたいだけだってのか？

「本気で言つてるの、イバル！？」

「ああ、これ以上ない程にな！ レッシンザン烈震斬！」

空中に跳んでから地面に双剣を叩きつけ、前方に衝撃波を飛ばしてきた。

「うわあっ！？」

「もうったあ！」

「させないんだから！」

一撃を直撃してしまったジユードに、イバルが斬りかかる。

俺は助けに行こうと思ったのに、ワイヤーバーンの妨害で動けなかつた。代わりに、レイアがイバルの攻撃を防いでいたのが見えた。

「このつ……！ 引つこんでろー！」

剣に氷を纏わせて横薙ぎを2回繰り返す。そこからすぐに弓に変えてワイヤーバーンの下から氷の矢を無数に放つ。

ダメージはあるんだろうけど、まったく堪えない様子で尻尾を振られて吹き飛ばされる。

「ぐつ……あんまし、聞いて無いのか？」

「それなら……」

「術で勝負しましょうか！」

ローハンとエリーが共鳴して、詠唱を始める。

「渦巻け深淵！」

「水靈を受継ぐ！」

「「メールシュトローム！！」」

۱۷۰-۱۷۱

地中から水流が湧き出しワイバーンを飲み込んだ。いや、偶然にも近くに居たイバルも巻き込まれていて。なんて幸運だ。俺はこの隙に、剣に雷を纏わせ、走った。

「はあっ！ 魔皇刃！」
からなのつ、魔王雷撃波！

水流に巻き込まれてゐるワイバー^ンに向けて剣を振り下ろして衝撃波を喰らわせ、さらに回転しながら雷撃を放つた。

「ジューード！ 例のヤツ！」

「分かつ

「「閃破封翼弾！！」」

「ぐわつ！」

レイアがワイヤーバーンとイバルを同時に打ち上げると、ジューードは空中から叩き落とすように火球をワイヤーバーンとイバルに叩き付けた。地面に着弾すると爆発する。

ワイヤーバーンの方はなんとか倒せたみたいだけど、地面に倒れたイ
バルは、それでもまだ立ち上がった。

「もうやめろイバル！」

「黙れ！俺は負ける訳にはいかないんだよおツー！」

ドガツ！！ 片方の剣を地面に思いきり突き刺すと、辺りに衝撃波が走り、衝撃波は魔法陣を描いていた。そしてイバルは、空高く跳んだ。

「見せてやる！ 双剣に木靈せし万靈の咆哮！ ソウガコウレンジン 双牙煌裂陣！！」

剣を構えながら落下したイバルが、魔法陣の中心に剣を突きさした。すると、魔法陣には亀裂が入り、爆発する。吹き飛ばされた俺達は、地面に倒れ込む。

「どうだジユード！ これが俺の力だ！ これでお前も……」

「うん……確かに凄いよ……でも、僕はこんな所で止まれないんだ！」

受け身をとつていたのか、ジユードは倒れてもなおすぐに立ち上がりっていた。

「何故だ……何故倒れない！？」

立ち上がったジユードに驚愕しているイバルは、行動が遅れていった。

素早くイバルの懷に入ったジユードは、イバルの双剣を吹き飛ばしてからイバルの身体に強い一撃を喰らわせた。

「がはあっ！」

イバルが地面に伏せつて、決着はついたようだ。

「どうして……どうして俺は勝てないんだ！ クソ――！」

立ち上がりながらイバルが呻いた。相當悔しいのか、地面を叩く音が聞こえる。

掛けた言葉も見当たらず、みんなと同じようにイバルの横を通り過ぎる。

「俺はミラ様を守る使命を持った巫子！　俺は特別だ！　特別なんだ！」

同じ様に横を通り過ぎたジュードに向かって、イバルがそう叫んだ。

「お前…………ミラの事どうだっていってそつて言つてたじゃないか。

「……イバルも僕も、まだ特別な存在じゃない」

「なに！」

「僕はどうやつたら2人のように、特別になれるのか知りたい」

2人つてのは…………やっぱミラとガイアスだよな。

「貴様などになれるか！　ミラ様を見殺しにしたお前が！」

それは違う。そう言おうとした時、ジュードが俺を止めていた。

「あの時、僕が特別な人間だったら、助けられたかもしない…………ごめん、イバル」

俺も…………あの時一番近くに居ながら、何も出来なかつた。それどころか、ミラに助けられた。

見殺しにしたのは、俺も同じなんだ……。

イバルはジユードを睨みつけながら立ち上がるけど、表情が一瞬だけ和らいだ気がした。

「……靈山は、社の先だ」

俯いてからそう呟いた。

「イバル？」

「さつさと行け！ 僕の前から消えろ！」

こつものよつよつよびながら、自分から走り去って行った。

「自分から消えたー！」

「……そこはシッコんでやるな……」

でも、教えてくれたって事は、少しあはジユードの事を認めたんじやないか。

「イバル、よっぽど悔しかったんだね」

「彼にとつて、いい薬となつたでしょ？」

2人とも……あんまりイバルに優しくない？

「次に会う時、どんな反応するか楽しみだね」

「イバル……もう来ないんじゃないかな。行こう」

何を思つてそう言つたのか分からぬけど、ジユードはそれ以上は触れないで先に進もうと言つた。

「え？ 待つて、ねえ、どうして？」

レイアはその意味が分からずにジユードに問い合わせる。けど、ジユードは答える事はしなかった。

俺は一度だけイバルが去った方向を見て、「またな」と呟いてから、みんなを追つた。

第43話 巫子との決別（後書き）

イバルはバカでムカつくけどそこまで嫌いじゃないキャラです。
以後ももしかしたら思い付きで登場させるかもしれません。……
多分。

第44話 四象刃との別れ（前書き）

別れとは言うものの、ワインガルあんまり関係ないです

第44話 四象刃との別れ

社の中を調べると、隠し扉を見つけた。そこを通ると、靈山への道が見つかった。

「雨が降ってきたよ……」のまま登るの?」

靈山を登り始めてすぐ、「レイアが不安そうにしゃべった。

「ここまで来たんだ。行くしかないだろ」

「……うん。危険だけど進もう」

山道で雨とか最悪だけどな……」で止まるのは、イバルにも悪い気がする。

「足場が不安みたいだけど……大丈夫か?」「はい、だいじょう きやつ!？」

エリーが答えた瞬間、突然強い揺れが襲う。まるで山全体が揺れたようだった。

バランスを崩したエリーを支えて道の先を見ると、太刀を構えたガイアスの姿が見えた。

「みんな、隠れよう」

とりあえず隠れて様子見する事にする。

ガイアスはミュゼと対峙していったようだ。

「私がこんなに苦しんでいるのに……どうして、応えてくれないのよ！　ずっと！　ずっと！　ずっと！　マクスウェル様……！？」

ミュゼはガイアスを見ていなくて、ずっと空に向かつて叫んでいた。マクスウェルに話しているようだけど……マクスウェルが何も反応していないのか？

「精霊でありながら、なすべき事を自ら見いだせんのか」「マクスウェル様のところには行かせない！　それが今の私のすべて！」

目を見開いたミュゼが、ガイアスに向かつて重力の球体を数発飛ばす。だけど、狙いが定まっていないのか一撃も当たらない。

「愚か……いや、哀れだな」

ガイアスの言葉に、ミュゼは頭を抱え込んで飛んで逃げた。ガイアスはそれを追う。

余裕があれば出て行つてミュゼに聞きたかったんだけど……ミュゼが不安定過ぎて、見るに耐えないな……。

「あの2人が戦う音だったのー！」

隠れていた岩場から出て、2人が戦っていた所を見ながらティボが呟いた。

「かつて見たガイアスさんの力は、ごく僅かだったようですね」

確かに……山の形変わりそうだもんな……。

「//ゴザモ、やつぱりビー」か……

「普通じゃなかつたな……」

レイアに同意するよひと言ひ。

マクスウェルから何も声が聞こえてないんだべつ。ナビ……それだけであんな不安定になるんだろうか？

「ですが、ここで考へても何も分かりません。今は先を急ぎましゅう」

「マクスウェル、この辺に居るみたいでしたしね

「うん。間違いなさそうだね」

とりあえず、今はガイアスと//ゴザモは置いておいて、俺達は先に急ぐ事にした。

「リリが山頂みたいだけど……」

ガイアス達を田撃してからまたわびて山を登つて、ようやく山頂に着いた。

けど……何だろう……変な……いや、言葉に表せないけど……とにかく何かを感じる。

「なんだろ」「——、すん」「——、びんびん感じる——」

「ティボ……つか、エリーも何か感じるのか？」

「……分かりません」

首を傾げるエリーは、戸惑つたように呟いた。

「あつち……誰かいるみたいだよ」

レイアが言つて指差した方には、確かに人影が見えた。
俺達がそこへ行くと、四象刃フォーヴのアグリアとプレザ、そして

「ウソ……」

アルヴィンが居た。

「お前達……だつたのか……」

何でアルヴィンが……四象刃と一緒に居るんだ？

「アルヴィン！ どうして……
「ジユード……」

いつもの様子は無く、アルヴィンの表情は暗く落ち込んでいた。
レイアも、アルヴィンの姿を見てから黙り込んでいた。

「お一人まで……」

「また敵同士になれるなんて、喜んでいいのかしら？」
「アハハ！ またあんた達をいたぶれるなんてサイコー！」

俺達が驚いていると、アグリアとプレザがそう叫んでいた。

「おいブス！ あんたこの男に撃たれたんだって？」

アグリアがアルヴィンを指差しながら言つ。撃たれた時の事を思い出したのか、レイアは黙つて俯いた。

「やめろ、アグリア」

その時の事はアルヴィンにとつても辛いんだりつ。アグリアを止めるように言つナビ、アグリアは高笑いを続ける。

「悪いけど、今度こそ死んでもらうわ」

「そうはいきません。私は、ジュークさんとカイトさんをマクスウエルに会わせなければならぬ」

ローエンは決意したように言つた。

「あなたがガイアスさん達を特別と感じたのは……あの2人が真に大人たる生き方をしているからです」

「アハハ！ ジイさんはしてねーけどな！」

「ローエンだつて、ちゃんとしてるよー！」

俺が反論するナビ、ローエンは首を振る。

「お恥ずかしい話。そのなのでしょう。そして、アルヴィンさん、あなたも」

「オレが……」

アルヴィンが俯く中、アグリアが武器を出した。

「『』話はもういいよ、ジジイ！ あんたは先にヘヴンリーしな」

そして、詠唱を始めた！？

あいつ戦う気満々だな！？ 話し合ひ気ゼロかよ……。

だけどアルヴィンがアグリアの前に立つた。

「アル……」

「いや、オレはただ……」

フレザが視線を向けると、アルヴィンは気まずそうに俯いた。今俺達を守る立派してくれたのは、もしかして反射的にだったのか？

「おい、ニイちゃん！ どけ！」

アグリアの術が発動して、アルヴィンに直撃した。レイアが駆け寄ると、アグリアに視線を移した。

「アグリア！ どうしてあなたは！」

「うるせえ！ あたしはな、陛下を裏切る訳にはいかないんだよ。ババア！ あんたも同じだろ！ あたし達の居場所はここだ」

アグリア……何を焦ってるんだ？

フレザに同意を求めるべく、俯きながら「そうね」と答えた。

「陛下は私達のようなゴミとされた人間まで傍においてくれた」「フレザ……」

辛そうにしゃがんでいたアルヴィンがフレザに視線を移す。

「『めん、アル……あなたはやっぱり私の敵つ！』

「『ここので役に立てなきや、お払い箱なんだよ！』」

2人が詠唱を始めた。

お払い箱つて……ガイアスみたいな人がそんな事をするとは思えない。

でも……2人の不安は本物のようで……今のその場所に必死にしがみついているようだった。

「全てを満たせ」

「灼熱の炎霧！」

「レイジングミスト……」「

空からは巨大な火球。足下からは強烈な水流。その2つを衝突させる精靈術は、俺達全員を巻き込むような広範囲の術だ。

俺はエリーを抱えて飛び退いて避ける。着地してからみんなを見ると、ちゃんとみんな避けられたようだ。武器を構えている。

足場が思ったよりも悪くて、気をつけておかないと滑って落ちるかもしれない。それに、ただでさえ地盤が脆いんだ。こんな所で戦つて、もし足場が崩れたら……確実に死んでしまう。

「アル……私の手で殺してあげるわ！」

「悪いけど……オレは死ねないんだ……！」

大剣で攻撃を防ぎながら言うアルヴィンだけど、ブレザに反撃をする気配は無い。

少しでも助けようと俺とジュークが割って入るけど、アルヴィンの動きが予想よりも悪くて防戦一方になってしまふ。

「お前らに選択の余地は無いんだよ！」「勝手に決め付けないでよ！」

回転する特異な剣を、レイアが棍で何とか防いでいる。ローエンとエリーが加勢しているけど、どちらも後衛向きだから、接近戦では手にいなかった。

「相変わらずクセ^ヒ台詞を吐きやがる！」

「無駄話はここまでよ！　ここから先へは行かせない！」

「分かつてん！　ババアこそ遅れんなよ！」

防戦一方だった俺達から、アグリアとプレザが退いて詠唱を始めた。

またあの広範囲術か……！？　間に合えよー。

「ヴォルテックヒート！」

ほとんど無詠唱に近い速さで精霊術を発動させると、2人の近くに激しい熱風が吹き荒れた。

「きやあ！？」

「！」のつ……ふざけやがつて！

熱風で体勢を崩した2人は、詠唱を止めて体勢を整えさせる。何とか詠唱は止められたけど、改めて戦つてみると四象刃の強さは半端無いな。サシで戦つても勝てるか分からない。数はこっちが勝つて入るけど、こんな足場の悪い場所じや数も活かしきれない。

俺達だつてここで負ける訳にはいかないんだ。

「アルヴィン、何悩んでるかは俺には分かんねーけど、覚悟決めろ

よ

「なつ……ー？」

「悩んでぢや何も出来ない。俺、前にアルヴィンにそう言われたんだけど？」

アルヴィンが目を見開いていた。

これを言われたのはいつだつたかな？ もう覚えてないけど……
言葉は覚えていた。

「つははは……まさか、おたくに諭されるとほねえ……」

薄く笑つたアルヴィンが大剣に銃を取り付ける。

「覚悟は……決まつた……！」

剣を握り直したアルヴィンがそう言った。
ならもう、アルヴィンは大丈夫だな。

「余所見してんじやねえよクソガキがああつーー！
「つつ……ー？」

気付けば、いつの間にかアグリアが業火を纏つ剣を構えて近くに居た。

避けようと跳ぼうとしたら、岩のぬかるみで転んでしまう。回転する突きはそれで避けられたけど、今度は俺の頭をめがけて剣を地面に突き刺そうと振りかぶつていた。

「カイトさん！ フリーズランサー！」
「邪魔はさせないわよ！ アクアバインド！」
「なんですとつ！？」

ローエンが放つ氷の槍が、水の膜のようなものに行く手を阻まれ

てしまっていた。

「くつ……間に合えよー。」

「させないって言つてるでしょー。アル！」

「がはつー！」

俺の方に来ようとしたアルヴィンに向かつて、フレザが水球で吹き飛ばしていた。

「ゲームオーバーだ！ 死ねえツーーー！」

「カイトーーー！」

「ぐほうーーー！ なんだこりやあーーー？」

「カイト君から離れてーーー！」

今まさに振り下ろされそうだった所で、ティポがアグリアの顔にへばりついていた。突然の事に慌て出したアグリアを、レイアが棍で横に薙いで吹き飛ばした。

「あ、ありがと、ヒリー、レイア、ティポ……」

今のはマジで死ぬかと思った。

「早く立つて、カイト君ーーー！」

「ブス！ よくもやりやがったなあーーー！ フレアブレイヴーーー！」

キレたアグリアが、剣に炎を纏わせながら回転させ、さらに回転の速度を速めて行き、俺とレイアに向かつて巨大な炎の旋風を巻き起こした。

「こんなもん……どうやって避けろつて……いや、手はあった！

「炎を凍らせるー セルシウスー！」

叫んだ刹那、俺達の目の前にセルシウスが現れて、迫りくる炎の旋風を文字通り凍らせた。

「な……なんだよ……これ……ー？」

炎を纏っていた剣すらも凍らして、アグリアは動けなくなついた。

「はあっー！」

その隙に、レイアがアグリアの懷に入り連撃を喰らわせる。

「ぐあああ！」

「エリーゼ、お願ひー！」

「了解ですー！」

連撃を喰らわせたにもかかわらず立ち上がるアグリアに、エリーとレイアの共鳴術技が炸裂した。

「かいな
腕よ掴め！」

「終わらせるんだがー！」

「闇旋月輪！ー！」

闇の力がアグリアを拘束して、レイアが連續で回転してアグリアを叩きのめした。

「がああああっー？」

「アグリアー……ツー？」

アグリアが倒れた事に反応したプレザだけど、瞬時にアルヴィンが近付いていた。

「悪い……プレザ……！　剛^{ゴウ}・紅蓮劍^{グレンケン}！」

「きやああああー？」

炎を纏わせた剣を地面に叩き付けて爆発を起こした。プレザの身体がアグリアのと事まで吹き飛んだ。2人は傷つきながらもまだ立ち上がるうとするけど、地面に膝を着いて立ち上がれなかつた。

「アル……」

岩場に手を着いたプレザが呟いた。

「たつた数日間だったけど……あなたといられて幸せだった……」「プレザ、オレは……」

言葉が見つからないのか、アルヴィンはそこから言葉を失つてしまう。

「よかつた……アルヴィン。居場所……あなたにもあるの……気づいて」

散々アルヴィンの事をひどく言つていたけど……心の底から心配していたんだな……。

その時だ。激しい揺れが俺達を襲つたのは。そして、プレザとアグリアの居る足場に、亀裂が入つた。

プレザの居る足場が先に崩れる。その直前、アルヴィンが走り出

してフレザに手を伸ばした。

だけど、一瞬間遅かつたからか、手は届かなかつた。フレザが落

下し始める。

「アルヴィンー！」

「え……なつ……ー？」

「カイト！？」

俺はアルヴィンの名を叫ぶと、迷わずに頭から崖から飛び降りる。後ろから驚いたアルヴィンとヒューの声を聞きながら、落下していくフレザの手を掴んだ。

その瞬間、俺の落下は止まる。

「アル……」

フレザが呟いた。アルヴィンが俺の足を掴んでくれたんだろう。俺達の横では、崖に落ちそうなアグリアの手をレイアが掴んでいた。

「アグ、リア！ 今、助けるー！」

横目で確認すると、アグリアが口を見開いていた。

「おい、ブス！ てめーがいくら頑張つても、ビリにもならない事つてのがあんだけ！」

叫んだアグリアは、レイアの手を自ら振り解いた。

「アハハハハ！ 絶望しろ！」

「セルシウスッ！ 何が何でもアグリアを助けるおおッ！！」

「お任せをー！」

現れたセルシウスが空中に氷を張り、アグリアを受け止めてから崖の上に戻った。

よかつた……けど……そのままじゃ頭に血が……いやいや、この手は死んでも離さん！

「カイトー！ 今から引き上げるからねー！」

「頼んだーー！」

ジユードの声がしてからすぐに、引き上げが始まった。数分かけて、俺とフレザは崖の上に戻る事が出来た。

「お前！ 何考えてんだ！ 死ぬ気かよー！？」

戻つてすぐに、アルヴィンのそんな怒声が待っていた。

「死ぬ気なんかなかつたよ。俺はただアルヴィンを信じただけ」「オレが掴まなかつたらどうするつもりだつたんだー！」
「でも、掴んでくれただろ。と言つた、今は俺は置いとけよアルヴィン」

俺がフレザに視線を移しながらそう答えると、アルヴィンは怒りながらも呆れたようになり、一度大きく息を吐いた。
アルヴィンも、フレザといろいろ話をしないといけないと思つからな。

「何で……助けてくれの？」「
身体が勝手に動いた」

実際は、死なせたくなかつたんだけど、面と向かつて言つのは何だかなあ……。

「おいたメヘ！ 何であたしまで助けやがつた！？」

「何で助けられたのに怒るんだよー！」

「あたしは助けてとか言つてねーだろー！」

叫ぶアグリアにティポが怯えて下がつた。そんななるなら何も言わなきやいいのこ……。

「別に、そんな具体的な理由なんかないよ。でも、強いて言つならレイアが助けようとしたから」

「え……？」

驚いた様子で俺を見てくるレイア。

「レイアが助けようとしたのに、わざわざひどい事言つて死のうとしたお前に腹が立つた。それが理由かな」

「な……こ……？」

アグリアも俺の言葉に耳を見開いていた。そして、怒りでなのが身体を震わせていた。

「アグリア、行くわよ」

そんな中フレザが近付いてきてそう言つた。

「ババアが指図すんな！ あたしは……！」

食いかかるアグリアだけじ、フレザは罵で首を振つた。

納得しないアグリアは、俺達から離れて行つた。

「アルヴィンと話はいいのか？」

「ええ、最後に話せてよかつたわ」

「最後？」

「聞こいつと思つたけど、フレザはレイアに向き直る。

「無理かもしれないけど、アルの事……許してあげて」「うん……分かってるよ……」

頷いたレイアに微笑んで、フレザは去つて行つた。
今この2人には、言葉以上に何かが交わされていた。そんな気がする。

「ジユードが……イバルともう会えない気がするつて言つた事……何となく、分かっちゃつた」「え……？」

それはもう……フレザやアグリアとは会つ事が無いと、そういう事なんだろうか。

「ほり、カイト君。あたしよりアルヴィンの心配してよ、ね？」「あ、ああ……」

レイアに背中を押されるように、俺はアルヴィンの所に向かつた。田に涙が見えた気がしたけど……俺は触れないでおこう。

アルヴィンの所に行くと、ジューードが隣に居た。

「アルヴィン……行くところあるの？」

「聞こえてどうすんだよ……」

「僕達と行こう。」

怒り気分のアリエルヴィンは、ジューードが言った。

「ガキに氣遣わせたか……」

少し間があって、

「正直言つと……やう。 レイアの事もあるから」

「……レイアには謝るよ」

「やうして……」

2人とも、消え入りそつた声で言葉を交わすと、ジューードが離れた。

「カイト君、ぼくはアルヴィンやだよー！ また裏切られるーー！」

そんな事俺に言われてもなあ。

どう答えていいか分からずに、俺はエリーの頭を撫でた。

「エリーは正直だな」

さつきの言葉が聞こえていたんだな。アルヴィンが言った。

「エリーは素直で正直な子だからねー」

ティポの言葉を聞くと、アルヴィンは去つて行つたジユードを見る。

「あいつ……あんな大人みたいなマネするよつになつたんだな……本氣で俺を嫌つてるんだろうな」

「そんな事」

「ううですよ。わたしもキライですー。」

俺の言葉を遮つて、エリーがそんな事を言つていた。表情を見るからに、本当に怒つてゐみたいだ。

「エリー……」
「何ですか?」
「お前はうやつやつて文句言つてくれ。そういう本音、案外嬉しいんだ」

そう言いながらアルヴィンがエリーを撫でようとして、やめた。代わりに額にトンと指で突いた。

「ヘンタイさんも嫌いです! 行こ、ティポ!」

頬を膨らませて、エリーもジユード達の方に行つた。

「お前も嫌つてくれていいんだぜ?」

うう言われたけど、俺は首を振る。

「俺はアルヴィンを信頼してゐよ。頼まれたつて嫌つてやらない」「……サンキューな」

俯いていたアルヴィンがジユード達を見る。

「ローハンの言ひ通り……このままじや……」

その呟きは、自分で言ひ聞かせてくるようだつた。

第44話 四象刃との戻れ（後書き）

とにかくアグリアとフレザは死なせない事に。とは言え締めくくり方が何だかなー……。

もう少し上手く書ければいいんですけどね……今後もしかしたら出てくるかも？

次回は爺さんが出て来るんじゃないかなと思います。

第45話 精霊の主 語られる眞実

「よおー！ 元氣か、レイア？ また、よろしく頼むわ

とにかくレイアに謝ろうと、不自然にならないようにいつものオレを意識して声を掛けたら、上擦った声が出た。

あれ、オレってどんな感じだったっけか？ と悩む隙も無く、レイアに訝しむような眼差しで見られた。

「……何ぞの声？」

やつぱり声が変だつたか……。いや、変なのは声だけじゃないが……。

「……意識すると、いつものオレの調子って、難しいんだな」

「普通の神経なら当然だよ」

「そりなんだろ？ な」

あんな事があつて……あんな事をしてしまつたんだ。

『いつもの調子』で話せる方がおかしいんだ。

「でも、意識はしてくれるんだ？」

「一応……な。オレが撃つた傷、大丈夫か？」

「大丈夫だよ……一応……カイト君が傷塞いでくれたみたいだし」

あいつが……そう言えば、クレインの時もナハティガルの時も、あまつさえジラングの時も、あいつは傷を治そうとしてたな……。あいつのおかげ……か……。

「……すまなかつた」

「も、いいよ」

「本当にいいのか？」

これ以上話すつもりがない。そんな感じで言われたからなのか、オレはさらに問い合わせ掛けてしまつていた。

「全部いいわけじゃないけど」

「やうやうだよな……」

人撃つて、「めんなさいで許される程、世界は甘くない。それはリーゼ・マクシアでもエレン・ピオスでも変わらない。表情を曇らせるつもりはなかつたのに……オレが口を開く度に曇らせてしまつ。

「信頼してゐるって……言つてくれたのにな……。」「でも……」とレイアが続けて、オレは顔を上げる。

「アルヴィン……前にあたしの事……」

「え？」

最後の方は声が小さくなつて聞き取れなかつた。だから、思わず聞き返してしまつ。

「……何でもない！」

レイアが首を強く振つて、怒つたように去つて行つた。

「……また、曇らせつけまつたな……」

いつも話さない方が、あいつは笑顔でいられるのかもしれない。

いや、『かも』じゃなくて断定か……。

「……どれだけ嫌われても……な……」

もつ……オレには何もないんだから……。

* * * * *

レイアとアルヴィンが話し終わって、俺達は奇妙な靈勢の前に立つていた。
その靈勢は、おそらくマクスウェルの居る場所に繋がっているんだろう。

「こ……恐いほど、精霊の力を感じます……
「マナが溢れ出てるみたい」

その靈勢を見て、ヒリーが俺の服を掴んだ。いつもなら頭でも撫でてやるんだけど……この靈勢は俺には何故かキツい……。

「奇跡的な靈勢ですね。僅かな変化で入り口が消えてしまいそうですね。様々な偶然が、この場所を作り出したのでしょうか」

「なら……今がチャンスだな……」

もしかしたら、最期の……。

「精靈術を使う時の魔法陣に似てる」

「あ、言われてみれば」

ジユードの言葉に、レイアが気付いたように呟いた。
言われてみれば、確かに似ているかもしれない。

「んな事より、ガイアスとミコゼの戦いで消えちまう前に行った方がいいかもな」

少し離れた所に居たアルヴィンが近寄りながらそう呟つ。あの2人の戦いは靈勢さえも変化しそうだもんな。もたもたしてたら消えるかもしれない。

「オレから行くよ」

「あ、いこよいこよ。ソソコソのはあたしの役目だし」

氣を遣つてといふか……これまでの事があるからアルヴィンはそう言つたんだろうけど、レイアも氣を遣つて歩いて行つた。ヒリーはアルヴィンにあかんべー。不謹慎にも可愛いなあ、とか思つてしまつた。

と詰づか……この世界にもあかんべーあるのな？

「アルヴィン、行こうぜ」

「……ああ、分かつてゐるさ」

俯いて意氣消沈していたアルヴィンが、小さく頷いた。

「つし、俺一番な！」

「ええつ！？」

ジユードが呆れていたのが見えて、俺は靈勢の中に飛び込んだ。

* * * * *

靈勢の中に飛び込んで、すぐに足場を感じた。

「うーん……」

何故だろ？……懐かしい。いや、違う。けど……俺はこの場所を
知っている？

「勝手に先に行かないでよ？」

ぼーっとしていたら、背後からジユードの声が聞こえた。
振り返ると、みんなが道を通って来ていた。辺りは真っ暗なのに、
ジユード達の姿だけははっきりと確認出来た。

「この先に、マクスウェルが居るのかな？」
「分からぬ。けど、行こう！」

視界がはつきりしない道を行くのは不安だけど、俺達は前に進む
しかないんだ。

「エリー、俺から離れるなよ?」「わ、分かつてます……」

離れるなどか言いつつ、俺はエリーの手をぎゅっと握る。この場所が……何だか恐い……。そんな思いがエリーに伝わってしまったのか、エリーも手をぎゅっと握り返してきた。

……これで安心できるなんて……俺つて結構単純なのかもな……。

道なりに進んで行くと、奇妙な空間に出た。

辺りは鏡のような水面が広がっていて、水面には歯車のような輪が埋まっていた。水面に映っているのは星空のようなのに、空を仰ぐと早朝のような空だった。

「変な場所ですね……?」

見回しながらエリーが呟く。

「誰……?」

レイアが反応したその先には、変な台座に乗った1人の老人。

「私がつくり出した人間界と精霊界を繋ぐ唯一の途、世精ノ途」
ウルスカーラ

この場所の名称を囁う老人に、ジューードが近付く。

「あなたが……マクスウェル?」

「いかにも。私が精霊の主マクスウェル。ここまで来る人間が居る

とは……」

老人 マクスウェルが俺達を見回した。

「いや……1人人間ではなかつたか……」「それつて、どういづ……？」

レイアが問い合わせるけど、マクスウェルは答えなかつた。仕方なく、ジューードがここに来た目的を告げる。

「あなたに聞きたい事があるんだ。ミラの事……教えて欲しいんです」
「む……」

ジューードの言葉に、マクスウェルが訝しむような表情になる。

「ミラはあなたの身代わりにされたつて聞きました」「その理由を聞かせてもらえませんか？」
「なるほど、お前達がミラに供した者達か」

一瞬、マクスウェルが俺を見た。

「コロゼと聞こ……俺が何だつて言つんだ？」

「……僕はミラと出会いつて旅して……そして色々考えた……力の事、なすべき事……」

自分で整理した事を、ジューードは静かに語り出した。

「そしてミラが……ミラが死んで……僕はようやく氣付けた。僕が本当にやりたい事……やらなきゃいけない事に！」

「……なんだそれは？」

「断界殻を無くして、リーゼ・マクシアもレンピオスを助ける」

特に動搖もせず、マクスウェルはジューードを軽蔑するように見た。

「なんと愚かな！ 外には黒匣ジンがあふれている。リーゼ・マクシアを滅ぼすつもりか！」

「そんな事はさせない！」

リーゼ・マクシアも、レンピオスも、どちらも助かる方法がきっとある筈だ。

それを伝えたかったのに、マクスウェルは自分で何かの結論を出していた。

「やつらか。あやつの死の意図を読めずにおつたが……今確信した……ミラが使命を忘れ、あのよくな真似をし、保険さえも機能せなくしたのは、すべてお前達の所為だったのだな！」

な、何言つてんだあの爺さん！？

ミラが使命を忘れたとか……保険つていつたい……？

「そして此度……お前達は断界殻を消し去り、世界を滅ぼそうとしている」

「マクスウェル！ 話を……」

「この破壊者どもめ！ 我が世界より消えよー！」

「うちらの話を聞く気はなく、仕方なく俺達は武器を構えた。いきなり戦いつて……精霊の主としてどうなんだよー！」

「天照らせ日輪！ 今こそ消滅の時！ レイジングサン！」

巨大な火球が空から落ちてきて、地面を焼いた。

「くつ……虎牙破斬！ 猛虎豪破斬！」

精靈術に耐えてから、俺はマクスウェルに斬り上げ斬り下ろしから、連續斬りを繰り出した。

「レインバレット！」

「ディフュージョナルドライブ！」

上からは銃弾の雨。下からは激しい水流がマクスウェルを襲う。

「ウインドスニーケーク！」

だけどマクスウェルは、自分に風を纏わせて瞬間移動をしたように移動した。

「トリー・ティ・チエイサー！」

そして、風の塊を3つ俺達に飛ばしてくる。

「避ける、レイア！」

「くつ！？」

飛び退いた筈なのに、風の塊はレイアを追尾していた。

「レイア！ ぐあっ！」

「アルヴィン！？」

避けきれないと判断したアルヴィンがレイアを突き飛ばして庇つ。アルヴィンは大剣で攻撃を避けるつもりだったんだろうけど、予想以上に威力が高くアルヴィンは吹き飛ばされた。

「回復します！」

「させんぞ！ 始まりと終わりを知らず、時の狭間で遊べー。」

「ナース！」 「ストップフロウー！」

エリーの治癒術とマクスウェルの精霊術が発動したのはほぼ同時。治癒術でみんなの傷が癒えたその刹那、身体が動かなくなつた。

「レイジングサンー！」

再び火球が俺達を襲い、膝を地面に着いてしまつ。

「分かつていいのか！ お前達のやうとしている事の意味が！」

マクスウェルの問いに、立ち上がりながら答える。

「分かつてありますとも。だからです！」

「だから、あなたにミラの事を聞いたかったのー！」

「リーゼ・マクシアの真実や、どうしてミラがエサと言われたのかをな」

「聞いてどうする？ それで何がが変わるといつのか？」

俺達を嘲笑いつよひ言つてきた。

「そんなの分かるかよー。」

「でも、知らないままじゃ何も変わらないのは分かるー。」

マクスウェルが目を伏せ、眞実を語り出した。

「一千年前、この世に黒匣が登場した。精靈が死に、自然が絶え、人間も消え行く運命^{さだめ}の道へと進み始めたのだ」

当時から分かつてたのか……黒匣が危険な物だつてのは。

「そこで黒匣から離れる為に、救えるだけの精靈、動物……マナを生み出せる人間達を連れ、私はリーゼ・マクシアを創り、筆もつた。この世界はエレンピオスが滅びるまで、降りる事の許されない箱舟だ」

エレンピオスが滅びるまで……マクスウェルは何もしないつもりなのか！？

「で、エレンピオスが滅びるのを待つて……か？」

「それがわたし達と精靈さんわ救う唯一の方法……なんですか？」

「そういう事だ」

他に手は無いんだろうか？

「けど、このままじゃ、エレンピオスの人は……」

「あなたは何もしなかつたのか？」

「私は、黒匣がやがて滅亡をもたらすと、同胞であつた人間に伝えさせた」

マクスウェルも……ちゃんと他の手を考えていたのか。

「だが、人間は黒匣を捨てなかつた。それだけではない。奴ら、精

靈が絶滅しかかっている事を知ると、このリーゼ・マクシアを襲つた

「ひょっとして、二十年前の？」

「……断界殻にどでかい穴が開けられたんだな」

マクスウェルが頷く。

アルクノアが来た時の事か……。

「そこでここを離れられぬ私の代わりにミコゼを生み出し、敵殲滅の役目を与えた」

「だが、不運にもその時リーゼ・マクシアに入り込んでしまった奴らがいた……」

「……アルクノアか」

もう一度、マクスウェルが頷いた。

「彼の者達は巧みに私の追跡を逃れ、潜伏した。それ故、私は一計を案じた。彼の者達は私の命が消えれば、断界殻も消えると知っている。ならば、その命をエサとすれば潜んだ獲物を釣り上げる事が出来る、とな」

「命をエサ……ですと」

「それで……まさか……」

「ふざけんなよ……」

人の命を何だと思つてゐるんだ……こいつは……！

「その命を獲物にさりじ、立ち回る存在を生み出したのだ。それこそが……」

「……ミラ」

「そんな……」

ミラの真実は、俺達に驚愕を『覚える』には十分過ぎた。

「けど……あいつ、自分が偽物だなんて知つてたのか?」

「抜かりはない。私の言葉を植え付け、己がマクスウェルだと信じ込むように育てさせた」

徹底して、ミラを『マクスウェルと思い込ませる』事をしたって事か……。

「だが、私とて万一を想定しなかつた訳ではない」

「万一……?」

言葉の意味が分からなかつた。

「万が一、ミラが死する程の致命傷を負つた時、もしくは再起不能に陥つた時、それを治す役割を課した存在」

最初に言つていたな。でも……それは機能しなかつたって言つた。

「お前だ、西風海斗　いや、身代わりよ」
「え……」

何を言われたのか分からずに、だけどそれが衝撃的過ぎて、俺は目を見開いて言葉を失つた。

第45話 精靈の主 話られる真実（後書き）

今やらですが自分の中ではアルヴィンとレイアくつ付いちやいな
よ。な考えですよ（笑）

そしてマクスウェルに明かされる真実。

……もづちよつと上手く書ければと毎度の事を思いながら、次回
へ続きます。

第46話 造られた存在

「俺が……//リラを……？」

「やつは、出來た言葉は、そんなものだった。

「気付いてない」ようなら教えてやろう

耳を塞ぎたかったのに、言つ事を聞かない。

「//リラを生み出して3年、私はある次元を発見した。そこは精霊も黒匣^{ジン}も無い世界だった。だが、それらを使わざともその世界は繁栄していた」

「それって……カイトが言つてた……」

「……二ホン?」

マクスウェルが頷く。

「私はその世界がリーゼ・マクシアに害をなすのか、それを見定めねばならなかつた。そこで私は、我が使命の為の歯車をもう一つ造り出し、その世界に送ることにした」

「それが……俺だつて言つのかー?」

マクスウェルがもう一度頷いた。

「そんな……嘘だろ……俺が……マクスウェルに作り出されたなんて……。」

「何故、靈力野^{ゲート}があるのか、不思議に思わなかつた訳ではあるまい」

確かにそうだ……俺が居た世界ならば、靈力野なんかある筈が無いんだ。でも、俺はあるつて事は……そう言ひ事なのか!?

「本当に……俺はあんたに、作られたのか……」

「その通りだ。お前は私の使命の歯車」

「でも俺にはちゃんと!両親の記憶が!」

「そんなもの、いくらでも植えつけられる

そんな……じゃあ俺の……父さんと母さんは……最初から居なかつた……!?

「ひどい! そんなの!」

「カイトも……そんな……」

レイアとエリーの声が聞こえた。

「西風海斗も私が与えた名。お前の真の名はフュイト

「違う……俺は……」

「万一一に残したお前までもが謀反を起こすとは……やはり、お前の役目は既に無い。消えよ」

「……ッ!?

ガクンと膝を折って、俺は地面に倒れた。

まだだ。またあの……力を吸い取られる感覚だ……。

「どうか……ミラはあの時、俺がマクスウェルを作られたことを知っていたのか。そしてミュゼも、俺がそう言う存在だと知っていたから、俺の事を『役立たず』と呼んだんだ。

「どうか……辻褄は合つなんだな……。

「俺……このまま死ぬのか……?」

そう思つた瞬間、フツと身体が軽くなつた気がした。

「何！？」

「え……？」

吸い取られる感覚が無くなつて、俺が立ち上^じがると、そこにほセルシウスが居た。

「セルシウスだと……！？ バカな！ お前は二千年以上も前に死んだハズ……！？」

「私はこの方の優しさで、もう一度蘇つたのです。マクスウェル、あなたが生み出した存在に」

セルシウスも、もしかしたら氣付いていたのかもしれない。

「カイト、大丈夫ですか？」

「ああ……」

でも……空っぽに感じた……。今までの俺が、全部作りものだつたような気がして……。

「カイト……独りじゃないですよ？」

俺に腕を回しながら、まるでなだめるように、エリーが言った。その言葉にハツとして、俺は回りを見た。

ジユードが居て、レイアが居て、アルヴィンが居て、ローインが居て、エリーが居て、ミラだつてきつと、今までの俺を これか らの俺を認めてくれているんだ。

空っぽなんかじゃない。作りものなんかじゃない。

俺が俺である為のモノは、全部みんなが証明してくれる。

「サンキューな…… Hリー、みんな……」

Hリーの頭を撫でてから、俺はマクスウェルを睨んだ。

「あんたには礼を言わなきやな……生み出してくれてありがとよ……
だけどな、俺はあんたの使命の歯車になんかなつてやらない！
この意志は俺のものだ！ あんたの思惑通りには動かない！」

俺は俺だから。俺の意志は俺のものだ。

「あんたは絶対にぶん殴る！ 分かつたかクソジジイ！…!
「なつ……ー?」

俺の言葉に、マクスウェルだけじゃなくてエリー達も驚いていた。

「カイト君……相当キレてるね……」「…
「気持ちは分からぬでもないですがね……」

レイアとローハンのそんな弦きが聞こえた。

「やはり変わらぬ。眞実を知った所でお前達はいつも、感情にまかせて理解できないものを消し去ろうとするのだ！ 大局を見ようと思ふか者どもが！」

もう一度武器を構えて、マクスウェルと対峙する。

「愚かなのはあなただ！」
「精霊の主たる私が愚かだと！？」
「あなたは人の……//ラやカイトの心が分からぬ愚か者だ！」

ジユード……ありがとな……。

心の中でそう感謝して、俺はマクスウェルに斬りかかる。堅いバリアみたいなもので防がれるけど、そんなもの気にしないで斬り続ける。

「ウインドスニーケ！」

「くつ……！」

旋風に吹き飛ばされるけど、体勢を立て直して地面に着地する。

「ヒテンシヨウク
飛天翔駆！」

「チエイスキヤノン！」

ジユードが空中からの飛び蹴り。アルヴィンは追尾する闇の銃弾を放つ。だけどそれも、マクスウェルの前の障壁で防がれてしまう。

「何なあの壁！」

「堅すぎです……」

何度も攻撃をしていたレイアとエリーもそう呟いた。

くそ……このままじゃ、あのジジイを殴るにも殴れないな……。

「何をやっても無駄だ。人間の力は儘く脆い。精霊の主に刃向かうと言つ事がいかに愚かな事か……身を持つて知るといい！」

叫ぶマクスウェルのマナが、一気に膨れ上がる。

「巡り踊れ地水火風、深奥に集いて我が鉄槌となせ！」

そして、マクスウェルの背後に巨大な魔法陣が描かれ、その中に

も地水火風の4属性の魔法陣が展開された。

「Hレメンタルメテオ！！」

4つの魔法陣から、隕石を思わせるようなマナの塊が降り注いだ。吹き飛ばされた俺達は、地面上に倒れ込む。

「分からんな。何故歯車をこのような者どもに狂わされたのだ」

倒れた俺達を見ながら、今にも頭を抱えそうな感じでそう言った。

「何言つてんのー？」

「//リ君はずっと変わらなかつたよーー」

片膝をついてようやく立ち上がりとした所で、レイアとティポが叫ぶと、マクスウェルは馬鹿など一蹴する。

「分からないんですか！？」

「そうだ！ あなたは間違つているー」

「何ー？」

今度はHリーとジゴードの言葉に目を見開いた。

「本当に何も知らないんだな
「おたくさ、本当に//リの親？ 一応カイトもだけど
「そうですね。//リさんに限つてそのような事……」
「なんだお前達ー！」

俺達の言つている意味が分からないマクスウェルは、さつきからそう叫ぶだけだ。

「ミラが使命を見誤るなんて、みんな、無いつて知ってるんだ！」

足に入れて立ち上がる。

「では、あやつの行動は何だというのだ。断界殻を消すなど使命ではない！」

「ミラは、みんなを助ける為に命を懸けたんだ。自分の心に従って、懸命に生きたんだよ！ あなたの為なんかじゃない！」

「お前はどうなのだ！ 何故術が発動しなかった！」

マクスウェルが俺を見ながら言つ。
術つて……あの時の魔法陣か！？

「発動したよ。でもな、ミラは俺に生きりつて言つたんだ。『君が踊らされる必要は無い』ってな。ミラはあなたの事、気付いてたんだよ！」

「馬鹿な……気付いていたと……！？」

俺の言葉に、マクスウェルは驚愕していた。

「でもな、ミラだってあんたに踊らされていた訳じやない。だってミラには、あいつには『みんなを守る』って使命があつたんだからな！」

「ふんっ！ 戯言を！ 我が奥義をもつて滅してくれる！」

そう叫ぶと、マクスウェルの乗る機械のよつな物の色が赤から水色に変化した。

「無慈悲なる白銀の抱擁！ アブソリュート！」

俺達の周りに冷気が集まる。結晶化する直前に俺達は飛び退いた。けど、次の瞬間に割れた氷の破片が、俺達に向かってきた。エリーを守りながら、俺は破片を斬り落としていく。

「消えないよ……僕は……最期まで自分の意志に従つて戦う！」

攻撃を避けたジューードが呟くように言つた。

「集え！ 四大精靈！」

「ミラのように！」

マクスウェルに迷づ事無く拳を振るつジューード。その気迫に押されたのか、一瞬だけ障壁が傷ついたように見えた。

「ちいっ……！ 属性変化！」
属性メントチエンジ

再度機体の色が変化した。今度は青。

「昇掃撃！」
ショウソウゲキ
「
閃空裂破！」
センクラッパ

アルヴィンとレイアが同時に上昇しながらマクスウェルに攻撃を仕掛ける。だけど、

「身の程を知れ！」

「ぐつ、あ……！？」

「何、これ……！？」

機械のアームが動くと、2人から何かを吸い取った。

「アルヴィン！ レイア！」

今、あいつ何をした？

2人は力を失ったように地面に倒れ込んでいる。

とにかく、倒れている2人からマクスウェルを離さないといけない。そう思つてマクスウェルに向かつて走り出すと、いつの間にかマクスウェルの姿が見当たらなくなつていた。

「カイトさん！ 後ろです！」

「なつ……！」

ローハンの声に慌てて前方に跳び退きながら振り返る。そこにはマクスウェルが居て、アルヴィン達と同じように俺から何かを吸い取ろうとしていた。

「遅いッ！」

すぐに飛び退いたからだろうか、少し吸われたようだけど、戦えない程では無い。

マクスウェルが吸い取つていたのは、マナだ。俺達からマナを吸い取つて、何をしようと言つんだ？

「魔神剣！ 双牙！」

2発の衝撃波を放つが瞬間移動で、避けられる。攻撃に備えようと振り返つても、マクスウェルの姿は見当たらない。

「きやあ！？」
「なにすんだよ……」

悲鳴が聞こえてその方向を見ると、エリーのマナが吸収された。ティポが力無く横たわる。エリーも地面に倒れ込んだ。

「この状況はヤバイ……！ みんなのマナが吸収されたら、後は何も出来ずに殺されるだけなんじやないか？」

「！」、「おッ！」

マクスウェルに向かつて雷の矢を放つ。だけど、まるで初めからそこには何も無かつたかのように、マクスウェルは姿を消した。次はどこに行つた！？ 見回してみると、ジユードのすぐ背後に居た。

「ジユード！」
「ツ！？」^{テンボウ}「転泡！」

瞬時に反応したジユードが全方位攻撃の回し蹴りを繰り出しが、これもまた避けられる。

「ぐう……！」

低い悲鳴が聞こえた。ローベンのマナまでもが吸収された。

「残りは……お前達だけだ！」
「……ツ！ 行くぞジユードー！」
「分かつてん！」^{ムカイゲンリュウブ}
「無影幻竜舞！！」「

2人で共鳴術技を放つ。^{リンクアーツ}

「無駄だ！ クールアブソプト！」

刹那 僕とジードからもマナが吸収されたのが分かった。

「う……は……」

「く……そ……」

力が入らずに地面に倒れ込んだ。

「これで消し去ってくれよ……」

マクスウェルがマナを集中させた。俺達から吸収した……マナだつた。

「世を形成せし八大元素よ！ 今こそ集い彼の者を達に鉄槌を！」

マクスウェルの背後に、先程とは比べ物にならないほどの大魔陣が描かれる。その中に、火・水・風・地の4属性に加え、雷・氷・光・闇の4属性の魔陣も描かれていた。

「エレメンタルメテオ！！」

さつきの術と同じ名称。だけど……威力はきっと桁違いだろう。

降り注ぐ隕石のようなマナの塊を一瞬間だけ眺め、俺は 俺達はなす術も無く攻撃に直撃して吹き飛ばされた。

第46話 造られた存在（後書き）

ついに主人公の秘密が明らかに！

もう少し自分に文章力があつたらよかつたんですがね……

そして戦いは次回に続きます。まさかの3話構成です。ただ単に

尺をミスつただけですが（笑）

とりあえず、主人公についてのまとめはいつかやります。……多

分。

第47話 歪む運命（前書き）

尺マスツタマクスウェル戦、クライマックスです！

第47話 歪む運命

身体が痛い。

少しも身体が動かせない。

負けたのか……？

きつとなんだろう。身体が動かないのがその証拠だ。
みんなは、どうなったんだ？ エリーは……？

「何度も同じ事よー！」

立つた？

マクスウェルの声に、俺はハツとした。

俺は今、剣を支えにして立ち上がっていた。無意識に。

辺りを見回すと、横でジユードが立ち上がっていた。他のみんなは、地面に倒れていた。

けどちゃんと生きている。

俺達はまだ負けちゃいなかつた。

「お前達の命運は死きた！ もう終わつたのだ！」

立ち上がつた俺達に向けて、またマクスウェルの背後に魔法陣が出現した。

俺達から吸収したマナはわざと使い果たしたのか、今は4つしか魔法陣はない。

「終わったとか、勝手に決めつけんな！」「

「そうだ！ あなたが決める事じゃない！」「

そう叫びながら、俺達は構える。

「馬鹿者め！ 今のお前達は立っているのがやつと。もつ私に抗う力など無いではないか！」

隕石が降り注ぐ。

確かに立っているのがやつと。戦う力も今の俺達には無いのかもしない。

でも 戦うだけの想はあるんだ。

「……あるよ。僕は知ってる」

「それを教えてくれたのは……//ラだ

「なんだと？」

隣に居るジユードと視線を交わす。

それだけで、意思は伝わった。ジユードの気持ちも。
だから俺達は、互いに一步踏み出した。
ゆづくじと……マクスウヘルに近付いていく。

「理解出来ん……いやつら……あ、消えよ！」

マクスウヘルの攻撃がさらに速度を増した。

だけど、俺達は前に進む事を止めない。

時折当たりそうになるけど、紙一重で避ける。そして俺達も、歩きから走りに返る。

「うおおおおおおおおシッ……」「…」

マクスウヘルの表情が引きつったのが分かった。

だけど、そんな事は構いなしに俺は剣を右手に持ち替えて左腕を、ジユードは右腕を大きく引いて思い切り、高く跳躍した。

諦めない。ミラに教わった事だつた。

俺とジユードが落下しながら拳を前に突き出す。

バゴンッ！ マクスウェルの前の障壁に拳を打ち付ける。
正直言つて痛い。ジユードみたくグローブをしてる訳じゃないから、俺の手は素手だ。

出血しただらうし、多分骨も折れた。だけど、俺はさらに拳を強く握り締めた。

障壁に弾き飛ばされないように、さらに力を込めた。

刹那 ヒュンッ！ 一閃が駆け抜ける。同時に障壁が砕かれて、

俺とジユードはマクスウェルの顔面を殴り飛ばした。

宣言通り、ぶん殴つてやつた。

だけど俺はそのまま地面に激突した。バランスがとれなくて落下したようだ。横ではジユードが上手く着地していた。

さつきの一閃……あればまさか……！

そう思つて感覚の無い手を着いて必死に身体を起こす。立ち上がつたジユードは田を見開いていた。その視線を追うと、そこに居たのは

「…………」

呴いた言葉を理解するのに数秒掛かった。

何でここに……いや、嘘……だろ？

信じられないけど、田の前に居るのは紛れもなくミラだ。幻でも何でもない。

「…………なのか」

アルヴィンが確かるように呴く。

「…………」

エリーとライポが嬉しそうに名前を呼んだ。

「まさか……ミラさん」

ローベンが信じられないといつもいつの弦く。

「ミラ……ミラー。」

レイアが嬉しそうに叫んだ。

ミラは少し離れたエリー達を一瞥してから、立ち上がったジュードに近付いた。ミラの名前を呼ばうとしたジュードの脣を、ミラが指で押さえると優しく微笑んだ。

そしてミラは、マクスウェルを睨みつけながら口を開いた。

「すべてのものの未来を守るのが、マクスウェルの使命ではないのか？」

「何故……こんな事が……四大が謀ったといつのか……」

「迷つたな。それでは本来の力が出ないぞ。」

突然のミラの登場は、完全にマクスウェルの予想の範疇を超えているのだろう。

戸惑うマクスウェルに、ミラが力強く言った。

そう話していると、空に4つの光が見えた。それは俺達全員の周りを飛び回り、魔法陣を描く。

それは俺達を包み癒やす治癒術の魔法陣。怪我が全部治つていく。折れて血まみれだった左手も、支障はない。

4つの光はミラに近づくと、それぞれが形を成していった。それらの光は四大だったんだ。

「いいのか？　お前達」

確認するよついに問い合わせる//ラ。四大がなんと答えたのかは分からぬけど、あつと俺達に力を貸してくれるんだろう。

「き、貴様！」

叫ぶマクスウェルに、//ラが剣を向けた。

「さあ、ジユード、カイト。行くぞ！」

「うんー。//ラー。」

「ああー。」

武器を構え直すと、//リーダが走ってきて武器を構えた。今なら負ける気はしない。心の底からそう断言出来る。

「恐れるものは何もない！　たとえ相手がマクスウェルであるひとつもー。」

「//リ……//リこんな事が……」

//ラがいくつもの火球を作り出し破裂させ爆発を起し出す。マクスウェルも同様に火球を爆発させて防いでいた。

だけど、未だ驚愕を隠せないマクスウェルが僅かに力負けしていった。

た。

「僕にも信じられない……けど、それをやつちゅうのが//ラなんだ！」

「あんたみたいに隠れないで、いつも正面突破だからなー。」

俺とジユードも続けて攻撃する。先ほどまでは違つて、あの堅かつた障壁は無い。

簡単に攻撃が通つた。

「ぐうつ！？ 滅びよ！ レイジングサン！」

「何度も同じ手を喰らうかっ！ セルシウス！」

巨大な火球を作り出して放たれるその直前、俺はセルシウスを呼び出してその火球を凍らせた。

アグリアの時にもやつたけど……これも正直言えば賭けだつた。

「何ツ！？」

「がら空きだぜ？」
マジウバケエンザン
魔銃爆炎斬！」

「ぐおおツ！？」

隙の出来たマクスウェルに、アルヴィンが少し飛び上がり巨大な火球を放ち、真つ二つに斬つて爆破させた。

マクスウェルが吹き飛ぶ。

「続けて、
ヒソンショウゼン
飛燕翔旋！
トジンショウウ
兎迅翔！」

吹き飛んだマクスウェルを叩き起こしたレイアが、鋭い突きを放つ。

「ぐううツ……！？ 調子に乗りおつて！ 聖なる光よ！ 霊とな
りて降り注げ！ ホーリィレイン！」

詠唱がされると、空の彼方から光の雨が降り注いだ。

「やらせません！ 黒き超重力の深淵！」

「丸呑みー！」

「ブラックホール！」

そして、エリーが発動した精霊術が、その光を跡形もなく呑み込んだ。

同時に、マクスウェルさえも呑み込もうとする。

「噛み砕け！ 大地の顎あき！ レ・ディスラプションー！」

引き込まれようとしていたマクスウェルに、ローエンが精霊術が発動した。

脇の大地が隆起し、マクスウェルを押し潰す。

「やるぞ、ジユード！」

「うん！」

「貫け閃光！ 天翔裂駆槍テンショウレックソウ！！」

ジユードとミラがリンクし、サマーソルトで飛び上がったジユードの前に、ミラが魔法陣を描く。そしてジユードは魔法陣の力を乗せてマクスウェルを貫いた。

マクスウェルの乗っていた機械の一部が碎ける。

「おのれえ……！！ これで消え去るがいい！！ 結晶せよ！ 根源たる元素！」

マクスウェルが飛び上がり、再び背後に巨大な魔法陣が描かれた。だけど、さつきまでとは違つて今回のは地水火風の属性は感じなかつた。

それでもその術の威力は知つている。みんなに緊張が走つたのが分かつた。

けど ミラだけは違つていた。

「私の後ろに！ はあつ！…」

「メテオスウォーム！！」

言われるがまま、俺達がミラの後ろに行くと同時に、マクスウェルの術が完成し、隕石が降り注ぐ。けど、ミラは同時に巨大な障壁を作つて俺達を攻撃から防いでいた。

「す、すげーな……」

思わず呟いた。

あれだけ俺達を苦しめていた、強力な精霊術の嵐。それをミラは1人で真正面から防いでいるんだから。

「くつ……何故だ！？」

「だから言つたろう？ 迷つた状態では本来の力は出せんとな！」

全ての攻撃を防ぐと、ミラは剣を構えながら叫んだ。

ミラ……何だか強くなつてないか？ 今までも強かつたけど、な
おそれ。

「合わせろ、カイト！」

「了解！」

戸惑つているマクスウェル。

決着をつける為にミラは俺と共鳴した。リンク

「「受けろ！ 豪炎の翼！ 翔鳳烈火！！」

ショウオウレック

弓に変形しながらマクスウェルを斬り上げ、強力な炎を撃ち放つ。

「ぐおおおおシッ！？」

吹き飛んだマクスウェルは機械から落ちて、地面に倒れ込んだ。
とりあえず、一件落着つて所か。

卷之三

シナリオ

互いに名前を呼び合い見つめ合つた。

だかに驚きを隠せないのはジニーだ。

三三には安心した様子がなかった

そうしていると、レイアが後ろから、エリーが前から//に抱きついた。ついでにティポも。

「エリーゼ、レイア」

「このかんしょく、本物だ！」

感触分かるのかよティポ！？

「これほど嬉しい事にまた出会えないとせ。長生きしてみるものです

ね

「信じられない……けど、現実なんだよな」

ミラがローレンとアルヴィンに向き直って言う。

「良かつたよ……また会えて」

「私もだ、カイト」

改めて何を言えばいいのか分からなかつたから、素直な感想を言うと、ミラは優しく答えた。

「おかえり、ミラ」

「……ただいま」

喜びを噛み締めるように2人が言つて、どこかで何か音がした気が……。

そう思つて見回すと、倒れていたマクスウェルが空中に浮かび上がりつた。

まだやるのか？

身構えるけど、戦意は無いように見えた。

「ま、まだやるかー、相手になつてやるぞ、！」の一・

言葉とは裏腹に、何か腰が引けてる感じだ。無意識に安心させるよつてヒリーの頭を撫でた。

「分からん……何故だ……四大……どつこいつもりだ」

誰に言つてもない咳きのように思えたけど、マクスウェルの前に四大精霊が姿を現した。

……つて、何気にセルシウスまで居るし！？

「すまぬ。俺はもう我慢が出来なかつた」

「うん。だから僕達ミラを助けちゃつた。精霊界に連れて行つてね」

セルシウスがそうだから、つてのであんまりシッコまないけど……他の精靈が喋るとちとビックリだな。

マクスウェルはイフリーとシルフの言葉を聞いて、「やのような指示、出してはおらぬ」と呟く。

「盟主。私達に心があるよつて、誰しもそれを持つています」

「道具扱いするのはダメでし。それが世界の為でも」

「私のマスターも同様です」

ウンディーネ、ノーム、セルシウスに言われて、マクスウェルが押し黙つた。

ミラが一步前に出る。

「マクスウェル、私の使命はあなたのものだったが、同時に私ものでもあつた」

ミラが言つ。

同じ作られた者なり、俺も前に出て何かを言つ事は出来るだろつ。

「俺はあんたからの使命なんか知らないけど、自分の心に従つたつもりだよ

押し黙つていたマクスウェルが俺とミラを見た。

「自らの意思……お前達の心が決めた答えだといふのか

「うむ」

「ああ

同時に頷く。

「あなたの言つ世界は、ただ存在する為だけの世界に感じた。でも、それは生きるとは言わないんじゃないかな」

俺達に並んだジューードがマクスウェルに言つ。

「僕は……僕達は生きたいんだ」

ジューードの言葉にミリカが一瞬驚いていたけど、すぐに微笑む。

「それもお前の行動を解せぬ原因か。人の心は時として難解よ……」

今まで固かつた表情が和らいだ気がした。

「それをないがしろにした結果、途を誤つたという事が

俺達の言葉に納得したかのように呟くと、

「……断界殻を解こう」

衝撃的な事を言つた。

「本気なのか？」

それに一番驚いたのはアルヴィンだった。

そりやそうだ。今まで苦労してきたのに、あっから解こうとい出したのだから。

「断界殻を解けば、断界殻を形成していた膨大なマナを世界中に供給する事が出来る。さればしばらくの間、世界中の精霊を守る事が出来るだろう。数年……いや、長ければ数十年の猶予は稼げる」

それはつまり……リーゼ・マクシアとエレンピオス。2つの世界を救う術を探す時間が確保されると言つ事だ。

「そしてフロイト　いや、カイトよ。お前に掛けた術も解こう」「術？」

俺があからさまに嫌な表情をしたからか、マクスウェルは俺の名前を言い直してそんな事を言つてきた。

「ミラが瀕死の時に、強制的にマナを送るつてやつか
「そうだ。ミラにマナを送る為、必要最低限のマナは使われる事の無いよう、枷をつけていたのだ。それを外そう

枷つて事は……俺は今までマナを抑えられていたのか？

「必要最低限つて……どのくらいだ？」「
「クルスニクの槍1発分、と言えば分かるか」

思わず返しに、質問したアルヴィンはもううん、俺も含め全員が驚いていた。

クルスニクの槍1発分つて事は……断界殻を一度消せる程のマナ。つまり　ファイザバード沼野で吸収された量と同等。
…………ははは……実感わかねー……。

「そ、そ、う言え、俺のマナは何で治癒術と同じ効果があるんだ？」
「私がマナ自体に治癒術を刻み込んだからだ」

ああ、なるほど……かなり簡単で分かりやすい回答が返ってきた。

「じゃあもう一つ。何で俺はリーゼ・マクシアに飛ばされたんだ?」「ミラの死の可能性が高まつたからだ」

そう言われて考えてみる。

俺がミラと最初に会つたのは、ミラがイル・ファンから逃げる時だつた。多分その時には、既に四大の力は無かつた。なるほどな……四大が居れば万が一にも死ぬ可能性なんかありはしないだろう。

だから俺は……リーゼ・マクシアに呼ばれたんだな……。

「それでは、枷を外そう」

マクスウェルが言つと、パキンと音がした気がした。

刹那　急にマナが溢れ出してくる感覚に襲われ、片膝を着いた。分かりやすい感覚を言つながらば、気持ち悪くなつたみたいな感じだ。

「ど、どうしたんですか?」

「なにしたんだー」

「急激なマナの増加に、身体が付いていかないのだろう。すぐに慣れる」

そりや慣れるだらうけど……これはちとキツいぞ……。
でもまあ……礼は一応言つとくか。

「ありがとな、じいさん……」

それを言つだけで、何となく楽になつた気がした。

「断界殻の事もありがとう」

俺を気にしていたジユードがマクスウェルを見ながら言った。

「考えるから！ ハレンピオスも、リーゼ・マクシアも、みんな一緒に生きられる方法を！」

数十年なんかあつといつ間かもしれない。けど、やらなきゃならない。

これで全部が一件落着。誰もがそう思った所に、あいつが現れた。

「この世界の神に等しい座を降りるというのか。マクスウェル」「ガイアス！」

そう。声の主はガイアスだった。

ガイアスはミラを一瞥すると、マクスウェルを睨んだ。

「答える、マクスウェル」

「人の心に振り回されるのに、いい加減疲れたのだ」

本当に疲れたようになつたよな……本当に年寄りくさいぞ。

「お前がリーゼ・マクシアの神の座を降りるのであれば、俺がそこに座る」

ガイアス……お前何を企んでるんだよ？

「ただの人間がマクスウェルになると？ 笑い話よ。貴様など資格をもたず」

「資格の有無ではない。覚悟をもつたものだけが認められる話だ。お前がやらないのであれば、俺がやる」

マクスウェルになる資格つてのもどりつかと思うナビ……ガイアスの言葉も頷けない。

「その話、私も認める訳にはいかないな」

「悪いけど、俺も賛成は出来ねーぜ?」

「お前達に認められる必要などない」

取り付く島もないな……。

ガイアスが何か合図を出すと、ピシッと空間に亀裂が入った。

「ここの力……まさか」

そして割れた空間から出てきたのは、なんとクルスニクの槍だった。

「クルスニクの槍!-?」

「何でこんなトコに!-?」

みんなが驚愕していた。

確かにガイアスは槍を引き上げていたけど……なんたってこんな所に……。

「仕方なかつたのです……だつて……あなたは私を導いてくれませんもの……」

「ミユゼ、気は確かか!」

そう。クルスニクの槍の上に、ミユゼが不敵な笑みを浮かべていた。

ミコゼはクルスニクの槍から浮く。その瞬間、嫌な予感がした。

「断界殻を消すなんてヒドイ！」

「マクスウェル、貴様は世界の礎となれ」

刹那、マクスウェルの意表を突いたミコゼが、マクスウェルを魔法陣で縛り、槍の照射口に貼り付けた。

「私には断界殻を守る役目が大事……大事、大事なの！」

やつぱり、ミコゼはどこか壊れたようだった。

「放せ、これは命令だ」

「あなたは全て……遅すぎるー。」

そして、クルスニクの槍が開いた。

「へい」おおおおああああー！？

マクスウェルのマナが、槍に吸収されていく。
その間に、ガイアスがミコゼを呼びつけていた。

「よいな？」

「あなた様の御心のままに」

言つと、ミコゼの胸元に空間が開いた。ガイアスは手を入れると、異様なまでの力を発する太刀を抜き出した。

魔剣 そう称してもいいぐらいだろう。

「やめ……る……解放する……気が……」

マクスウェルが途切れ途切れに言つたが、ガイアス達は聞く耳をもたない。

「これじゃ、ミコゼの持つ力、時空を斬り裂く剣だ」

剣を向けながら言うガイアスに、俺達は身構える。
時空を斬り裂くって？ マジで魔剣、じゃねえかよ！

「一度と会う事はないでしょう。さよなら、ミラ。そして役立たず、あなたはいつか殺してあげるわ。大事なモノも一緒に！」
「ミコゼ、お前！」
「どういう意味だ！」

問い合わせるけど、ミコゼは黙つて微笑んだ。
大事なモノ……？ 一番最初に出てきたのはエリーだ。無意識にミコゼからエリーを庇うような位置に移動する。

「どうして僕達が！ ガイアス！」

「俺は死んでいった者の為にも、エレンピオスへ行く！ お前達はリーゼ・マクシアで大人しくしていろ！！」

ガイアスの一閃。それは俺達から逸れたと思ったら、俺達の背後の空間を斬り裂いた。

「空間を斬りやがった！」

斬り裂かれた空間が、俺達を引きずり込もうとし始める。

「あ……あ……、だ、だめ……引つ張られる……」

「が、がんばれエリー！」

ティポが叫んだ瞬間、エリーの身体が浮き上がる。俺はとっさに手を伸ばし、エリーの手を掴んで引っ張った。しっかりと抱きしめる。

「大丈夫か、エリー」

「あ、ありがとう……です……」

とは言え、このままじゃいすれはあの穴に引きずり込まれるのは目に見えている。

「マクスウェル！」

ミラが名を叫んだ瞬間、別の場所に穴が開いた。

「何、どうなってるの！？」

「こっちにもかよ！」

「行け！ この者にマクスウェルの名を『覚えてはならん！』

「マクスウェル！」

どうやらマクスウェルがあの穴を開けたらしい。

その証拠に、ガイアスがマクスウェルを睨みつけている。

「ジユード、みんな！」

マクスウェルの言葉通り、あの穴にミラが飛び込もうとした時だつた。

バチバチバチイツ！

ガイアスが斬り裂いた空間。

マクスウェルが開いた空間。

その2つの穴の間に、何かのエネルギーが流れ始めた。

「こ、今度はなにー！」

「いつたい何が！？」

レイア、ローエンが咳いた瞬間、3つ目の穴が開いた。しかも、俺のすぐ横に。

「うわあああああああツツー！？」

「きやあああああつつー！」

何の抵抗も出来ずに、俺とエリーはその穴に吸い込まれた。

* * * * *

「カイト！ エリーゼ！」

2人が吸い込まれた穴に向かつて、ミラが叫んだ。

「その空間は……まさか！」

マクスウェルだけはどこに通じているのか分かつていいようだつ

たが、今のミラ達にはそれを問い合わせる余裕はない。

「ミラ！ 行こう！」

ジユードの叫びに、ミラは頷いた。

「みんな！ 2人の後を追ついで！」

ミラは叫んで穴に飛び込む。ジユードも後に続いた。

「レイアさん！ アルヴィンさん！ 行きますよ！」

「分かってる！ 行くぞレイア！」

「う、うん！ 分かってるよ！」

そして、ローヘン、アルヴィン、レイアも穴に飛び込むと、その穴は最初から存在しなかったかのように消えた。

第47話 歪む運命（後書き）

人一人を完全に治す程のマナはやっぱリクルスニアの槍と同等か
と。

次回はついにエレンピオスへ？　いいえ、ここでまさかのオリジ
ナル編です（笑）
ただの思い付きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0784x/>

テイルズオブエクシリア ~異端の迷い人~

2011年11月23日19時55分発行